

毛沢東における人間学

鹿島宗二郎 著

経済往来社

序文

毛沢東については世界各国でそれぞれ多くの伝記が出版されている。日本もその例外ではない。翻訳

ものをいれればすでに十指にあまるが、その多くはいわゆる英雄ものがたりである。そこにえがかれてゐるかれは、多少ともあれ少年時代から、常人にかけはなれた特異な人物で、やがて中国共産党主席となる素質を多分にしめしている。

たとえば富農の家になれながら、貧農の境涯に同情し、父の横暴とたたかかったというような。

英雄を普通の人間とはまったく違った存在のようにかんがえる英雄伝は、我々が小学生時代によんだ「立川文庫」のように、思想年齢が十二歳をこえ

る頃には自然によまれなくなるものだ。我國にも大人むきの毛沢東伝がそろそろでてよい時期だと思つている。本書はそういうものとして、つまり一人の人間毛沢東が、時勢の作用をうけていかに精神生活の内容を豊富にしていたか、そしてまた、その時勢に反応していかなる反作用をおよぼしたかを忠実に記録したものである。

だれでも知っているように、どんな偉大な人間でも四六時中偉大なことばかりしているわけではない。ときには鼻くそをほじくったり、煙草のけむりがうまく空中で輪になるかどうかをためしたり、会議中葉巻の火でテーブルかけをやきそうにしてあわててもみけしたりすることもある。ゲーテが「神の神秘にみちた仕事場」とよんでいる歴史の場面でもつねに偉大なことが行われているわけではない。歴史のほんとは偉大で崇高な瞬間というものはごく稀にしかないものだ。その瞬間にあたって無数の人間

のなかの一人が、もっとも適切な処置を見出し、それを大衆につたえ、大衆がそれについてきたとき、そこにはじめて英雄が生まれる。英雄とはそのような能力をもち、そのような運命に遭遇した普通人の一人なのだ。本書においては中国の運命をかえる歴史の決定的瞬間において、毛沢東がどういう態度をとったか、それを決定させた彼自身の精神形式はどのようにしてできたかが、内外の文献によって克明に検討されている。

毛沢東はかれ自身のべているように、少年時代から康有為にひどく心酔していた。康有為は清朝皇帝のもとで、明治維新のような立憲君主制をたてることを政治目標にしていた。かれは、これこそ儒教のユートピア「大同の世界」を実現する第一歩だと考えていたのだ。この立場が革命派から頑固な忠君愛國主義者と批判されたのは当然のことである。毛沢東はこのような「右翼愛國主義者」の一人として、

思想生活の第一歩をふみだした。そのかれが、中国をとりまく世界の情勢を知り、とくにソ連の共産主義革命とその理論を知るにおよんで、かれの思想のなかにあったふるいものと新しいものがはげしく闘争し、かれのもっていた伝統的文化体系は大きく動揺した。思想体系のたて直しは、かれにとってはそれ自体苦悶にみちた過程だった。中国の海岸地方に生まれ、はやくから西欧的な教育を受けた人々にとっては、思想の転換は比較的たやすいことだが、湖南人はむかしから「ろば」のような頑固さをもってしられている人種である。そのうえかれの思想構成における儒教的影響は、かれ自身気づいているよりもはるかに大きなものだった。かれはマルクシズムを消化するために、他の人よりもはるかにながい時間と努力をかけて咀嚼しなくてはならなかった。この精神の内面闘争を通じて、かれはかれと同じように保守的で、本質的に西欧文化に民族的反ば

つを感ずる中国農民に、新しい救国の教義をうけいれさせる術を身につけた。かれは革命運動のどんな権威からの命令でも、自分がなっとくし同時に農民を納得させることのできる教義でなければうけつけなかった。そしてかれの周囲にかれの教義をうけいれ、かれと個人的にむすびつきをもつ指導者と大衆の一群を集めて、コミンテルン製の党中央委とは別に、自分自身の毛沢東共産党をつくりあげたのである。これが現在の北京政權なのである。

昭和四十年四月

杉並の偶居にて

鹿島 宗二郎

目次

序文

第一章 毛沢東の少年時代—その思想成長過程

- 一 毛沢東青年の履歴書……………一四
- 二 はじめての「階級闘争」……………一九
- 三 康有為の思想的影響……………二三
- 四 康有為から孫文へ……………三三
- 五 新民学会—学生運動へのスタート……………三五
- 六 北京への旅……………三六
- 七 湖南学生運動のキャップ……………四三

第二章 毛沢東と国共合作

- 一 中国共産党創立大会…………… 四
- 二 国共合作…………… 四
- 三 毛沢東と労働組合運動…………… 五
- 四 国共合作をめぐる論争…………… 五
- 五 国共合作とコミンテルン…………… 六
- 六 毛沢東とコミンテルンの対立…………… 六

第三章 毛沢東と農民革命

- 一 エリート意識と使命観…………… 六
- 二 中国革命の原動力はなにか…………… 七
- 三 かれと農民運動…………… 七
- 四 湖南農民運動考察報告…………… 九
- 五 毛沢東と陳独秀の相違…………… 八

第四章 毛沢東とソ連首脳部の見解の相違

- 一 農民問題にたいする国民党及び共産党の態度…………… 二九
- 二 共産党は農民問題であやまりをおかした…………… 三〇
- 三 中国革命にたいするトロツキーの見解…………… 三九
- 四 スターリンの見解…………… 四〇
- 五 スターリンの「二重帳簿」…………… 四七

第五章 毛沢東と党中央委員会の抗争

- 一 毛沢東体制とコミンテルン体制…………… 二二
- 二 瞿秋白と毛沢東の関係…………… 二六
- 三 都市重視主義にたいする抵抗…………… 三〇
- 四 中央委員会の圧迫…………… 三四
- 五 大衆路線への信頼…………… 三七
- 六 ソ連の毛沢東にたいする不満…………… 三九

七 李立三主義……………一三

第六章 江西ソヴィエート都会との訣別

一 匪賊の理論……………一六
二 スターリン中国革命論の破産……………一四
三 白色テロ……………一八
四 農民革命の構想……………一五
五 農民共産党への指向……………一四

第七章 労働者のいないプロレタリア政党

一 江西における指導権あらそい……………一六
二 「日本の侵略」をめぐる党内闘争……………一三
三 毛沢東は抗日統一戦線を考えていたか……………一七
四 江西ソヴィエートの危機……………一六
五 江西ソヴィエートの「富農主義」……………一七

第八章 長征―毛沢東共産党の確立

- 一 江西ソウィエート失陥の責任者はだれか……………二七
- 二 二万八千里の長征……………二八一
- 三 長征と農民革命……………二八五
- 四 遵義會議―毛沢東体制の確立……………二八八
- 五 民族統一戦線の構想……………二九〇
- 六 毛児蓋會議―張国燾との対決……………二九五

第九章 延安時代―抗日統一戦線をめぐるかけひき

- 一 民族統一戦線のよびかけ……………三〇〇
- 二 国共合作の交渉……………三〇三
- 三 中国人は中国人を打たず……………三〇五
- 四 西安事変―中共はどこまで関係したか……………三二〇
- 五 蔣介石の「集中統一」と毛沢東の「民主統一」……………三二六
- 六 持久戦論……………三二九

第十章 彼の結婚生活と毛沢東思想の体系

- 一 毛沢東の結婚生活……………二四〇
- 二 延安時代における彼の著述……………二二九

第十一章 世紀の農民戦争

- 一 抗日戦争から農民戦争への転化……………二四〇
- 二 戦争の数学……………二四四
- 三 中国人はなぜ共産党を支持したか……………二四七
- 四 中華人民共和国の生誕と性格……………二五〇

儒教の毛沢東における影響

- 一 共産主義と儒教……………二五八
- 二 「先王の道」……………二五九
- 三 官僚学としての孔子学……………二六三

四	革命の原理としての儒教	二六五
五	改革のごととしての儒教	二六七
六	毛沢東と儒教	二七一
七	中国共産主義政権の性格	二七三
八	中共政権と人民	二七八

	孫子の毛沢東における影響	二八一
--	--------------	-----

	著者註	二九七
--	-----	-----

第一章 毛沢東の少年時代―その思想成長過程

一 毛沢東青年の履歴書

毛沢東のこれまでの生涯は、大きく三つの段階にわけられる。第一はかれの生いたちから共産主義者となるまで、第二はかれが中国共産党の創立に参加し党の実権をにぎるまで、第三は政権をとって今日にいたる段階である。このなかで第二段階以降は多くの伝記作家が口をそろえてのべているように、もはやかれ個人の伝記ではない。それ自身中国共産党史であり、そのなかから、かれだけの活動をとりだして記述することはむずかしくもあり、また適切でもない。この間の伝記はかれを中心とする中共党史である。したがってかれの伝記作家がとくに力をいれているのは第一段階、すなわち湖南の富農のせがれとして生まれた田舎者の毛沢東がいかなる思想経歴をへて中国共産党の創設者になったかという点で

ある。この間の事情についてもっとも信用のできる文献といえ、一九三七年十月にその初版をだしたエドガー・スノーの「中国の赤い星」であろう。この著者スノーは一九三六年の夏、陝西省保安で毛沢東と会見し、かれのくちづたえにその波瀾にみちた半生記をききだす機会をもった。スノーが筆記した原稿は英語から「中国語に翻訳され、毛はこれを訂正した」というから、この伝記は毛の自叙伝ということもできる。それ以来毛は自伝らしいものは発表していない。その後にてた毛の伝記、たとえばロバート・ペインの「中国の支配者、毛沢東」はかれの思想的成長をつたえうるうえに独自の境地を開いているが、そのデータはスノーの記述から借りたものがおおい。ペインがたよったもうひとつの知識源は毛沢東の青年時代の友人蕭三(蕭子璋)⁽¹⁾である。かれは毛沢東との交友の思い出を「青年毛沢東伝」にまづめていゝ。ペインは張家口にかれをたずねて、若き

ころの毛沢東についてたずねている。そのほかスノーの妻ニム・ウェルス、アグネス・スメッドレー等々、いずれも毛の伝記にふれているが、大体はスノーが紹介したものにつきていっている感じがした。

一九五九年、蕭三の兄、蕭瑜の書いた「毛沢東と私は乞食だった」(邦訳は一九六二年上記の題で成文堂から出版されている)が現われた。かれは毛よりも三つ年長であり、毛と思想的傾向をことにしているもので、その観察には蕭三のそれとはまったく違ったものがある。かれは毛沢東とともに新民学会創立者の一人であるが、ついに共産主義にはしらなかった。

毛沢東は、かれにはあまりよい印象をもっていなかったらしく、その自叙伝のなかでも「蕭瑜は後に北京故宫博物院の職に任じ……博物院の一番貴重な宝物を売り、一九三四年金をもって行方不明になりました」といっている。両者の立場が反対なだけに

この蕭瑜の本は青年毛沢東を客観的に観察するにはかくべからざる資料である。日本人の書いたものは貝塚茂樹著岩波版「毛沢東伝」が傑出している。そのほかに岩村三千夫著「毛沢東」(日本書房)、

福本和夫著「人間毛沢東」(出版協同)等があるが、いずれもピオニール向き修身教科書で毛沢東の客観的な人間像はえがかれていない。これらの本のデータも主としてスノーの本からとられている。

毛沢東の生誕から中国共産党を創設するまでの履歴書は、貝塚氏によると次のようになる。

一八九三年 一月十九日 湖南省湘潭県韶山村に生まる

一九〇〇 七歳 小学校入学

一九〇八 一五歳 湘郷県の高等小学校入学

一九一一 一八歳 長沙の中学校入学、革命軍に入隊

一九一三 二〇歳 湖南第一師範に入学

一九一三 二〇歳 湖南第一師範に入学

一九一七 二四歳 新民学会を組織

一九一八 二五歳 第一師範卒業、北京で北

京大学図書館につとめる

一九一九 二六歳 長沙に帰り学生運動を組

織「湘江評論」を編集

一九二〇 二七歳 再度北京に上京、マルク

ス主義者となる。楊開輝

と結婚

一九二一 二八歳 上海の中国共産党創立大

会に出席

かれが生まれた月日は十一月十九日になっているが、これは陰暦と陽暦のまちがいで、実際は十二月二十六日である。スノーの本では毛が湘郷の高等小学に入学したのは「私が十六歳のときです」となっているが、これはかぞえ年で貝塚氏はすべて満でかぞえている。この履歴書では毛沢東の十八歳から二十歳までの二年間の動きがはっきりしない。この時

期はだれでも知っているように人間成長においてもっとも重大な時期である。人々がしばしば人生の岐路にたつ煩悶の多い時期であり、毛沢東の場合にもこの時代はかれの人生のわかれみちだった。かれはこのときはじめて長沙という大都会にでて時代の激動にふれたのだ。かれはそれについてこうかたっている。

「長沙でわたしははじめて新聞をよみました。

それは民力報とよび、民族革命派の新聞で、清朝にたいする広州暴動、黄興という湖南人指導下の七十二烈士の死を報道していました。私はこの話に非常に感動し、民力報は感動的な資料で紙面があふれていることを発見しました。」

こうしてかれはいてもたってもいられないような衝動をうけ、せっかく入学した中学校を六カ月でやめて、革命軍に身を投じた。だが革命戦争がいちお

うおさまると、すぐに兵隊をやめてふたたび学生生活にもどろうとした。かれは自分の将来の設計について警察学校、石鹼製造学校、法律学校、商業学校と志望校をかえ、まよいにまよったあげく、長沙第一中学に入學したのである。つまり長沙では短期間に二度中学校にはいったわけである。はじめが湘郷中学、それから兵隊、ついで省立第一中学である。しかしすでに社会の激動を身をもって体験している毛沢東は、世界の情勢についてなにひとつ説明してくれない中学校の教育に満足できなかった。そのためせつかくはいったこの中学校も六カ月でやめて、それから毎日図書館がよいをはじめた。かれの社会学科の基礎はこの図書館がよいでできたといっている。かれはそれについてこういっている。

「私は第一中学を好みませんでした。その課目はかぎられ、規則は気にいりませんでした。御批通鑑をよんだあとでは、私はまたひとりて読書し

たり、勉強したほうがよいという結論に達しました。六カ月のうち私は学校をやめ、自分の教育予定表をつくりましたが、それは毎日省立図書館で読書することでした。私は非常に規則たたく予定に忠実で、こうしてすごした半年は私にとり非常に貴重だったと考えます。私は朝、図書館が開かれるとそこにゆきました。昼になると、私は毎日の昼飯である二つの餅を買ってたべるだけの時間しか休みませんでした。私は図書館がおしまいになるまで読書しました。

この独学期間の間に私は多くの本を読み、世界地理と世界歴史を学びました。そこではじめて私は、非常な興味をもって世界地図を見て勉強しました。私はアダム・スミスの『国富論』、ダーウインの『種の起源』、ジョン・スチュアート・ミルの倫理に関する本を読みました。私はルソーの著作、スペンサーの論理学、モンテスキューの書い

た法に関する書物を読みました。私は詩とロマン
スをいっしょによみ、古代ギリシヤの説話をよ
み、またロシア、アメリカ、イギリス、フランス
その他の諸国の歴史と地理を一生懸命に勉強しま
した。」⁽³⁾

このような説書は、かれが長沙にでて、はじめて
民力報をよんだときから彼の心のなかにおこったか
ずかずの疑問に刺戟されたものであろう。こうして
自分自身で開拓した知識は、民力報のあたえたもの
よりもはるかに次元のたかいものであった。そこ
はマルクシズムへの指向を直接しめすものこそない
が、スマイスの国富論といい、ダーウインの種の起
源、ルソーの著作といい、かれをマルクス主義者
につくりあげる基礎となったことはいうまでもない。
それゆえ彼の青年時代と少年時代を劃する「劃時
代」的事項は長沙に出て革命戦争に参加したとい

ことであつて、湘郷中学に入学したことではない。
貝塚氏は「十八歳の毛沢東が湘郷中学に入学したと
きをもつてかれの青年時代をはじめたいと思う」と
いつているが、毛沢東にとつては、かれ自身もいつ
ているように中学入学などは大した意味はないので
ある。

つぎにかれの思想生活における青年期と壮年期を
どこでわけるかという問題がある。これは毛沢東二
十七歳、かれがふたたび北京にでてマルクス主義者
となった時としたい。それまでの毛は思想的に暗中
摸索の状態に低迷していたが、ひとたびマルクス主
義を知るようになる、ひたむきにそれにはしり、
爾来たじろぐことはなかった。これをかれ自身の言
葉にきこう。

「一九二〇年の冬に私ははじめて政治的に労働者
を組織し、この運動においてマルクス主義理論と
ロシア革命史の影響によってみちびかれるように

なりました。二度目に北京に行ったとき、私はロシアの諸事件についてたくさんの本を読み、また当時ごくわずかしか華文では手に入らなかった共産主義文献を熱心にさがし求めました。とくに三冊の本が私の心に深くやきつき、マルクス主義にたいする私の信念をかためました。歴史の正しい解釈としてマルクス主義を採り入れて以来、私はその後それについて逡巡したことはありませんでした。三冊の本というのは華文で出た最初のマルクス主義文献たる陳望道翻譯の『共産党宣言』カウツキーの『階級闘争』およびカーカップの『社会主義史』であります。一九二〇年の夏には私は理論的にもまたある程度実践的にもマルクス主義者になり、このときくらい私は自分をマルクス主義者だと考えてきました。おなじ年に私は楊開輝と結婚しました。(スノー邦訳一一〇頁)

孔子は「三十にして立つ」といっているが毛沢東もかぞえ年二十八歳にして一生の方向がさだまり、生涯の軌道の上ののったのである。

二 はじめての「階級闘争」

毛沢東がその生涯のなかではじめて経験した階級闘争は少年時代における「父と子」の闘争であった。これは毛沢東少年にかぎらず、すべて活発で自由な精神をもつ少年の多くが経験する宿命的なものである。父親はその豊かな人生経験から社会と妥協することの利益をよく知っているので、子供の自由なるふるまいと純粋さから来る無鉄砲な勇気が、彼の人生におよぼすであろう損害をかながえて、子供に自分とおなじようないき方をさせようとする。しかし社会のこわさをしらない子供はそのような妥協を

蔑視し、父親のあたえようとすする人生構想をこぼ

み、自分自身のえがいた道を行こうとする。このよ
うな父と子の争いはどの時代にもくりかえされてい
るが、十九世紀後半のそれにはツルゲネーフの「父
と子」にえがかれているような特徴的なものがあっ
た。それは一般的に言って家庭のなかにのこってい
る封建的、家父長的權威と新興ブルジョアジーの自
由な精神との衝突である。彼の父親は非常に短気な
おとこで、子供たちをひどくあつかっていた。毛は
この父をにくみ、憎悪の感情さえもっていたよう
だ。かれはしばしば父とあらそい、結局家をとびだ
してしまったのであるから、この父との不和は、か
れを社会運動にむすびつけるうえに重要な役割をし
ている。かれがもし円満な家庭にそだっていたのな
ら、かれはその父親のあとをついで船山村の旦那衆
のひとりとなり、共産革命によりあるいは清算され
てしまっていたかもしれない。彼は自分の父につい

てこうかたっている。

「父は短気で、よく私と弟をなぐりました。私た
ちにすこしもお金をくれず、とてもみじめな食事
しかくれませんでした。毎月十五日には父は自分
の労働者（註　かれの父は一人の臨時雇いをやと
っていた）に譲歩して米と卵をやりましたが、肉
はすこしもやりませんでした。私には卵も肉もく
れませんでした。……私の不満はかさなりまし
た。私の家庭の弁証法的闘争はたえず発展しまし
た。一つの事件を私はとくにおぼえています。私
が十三ぐらいの時、父は家に多くのお客を招きま
したが、お客がいるうちに私たち二人の間に口論
が起りました。私の父は人前で私を怠け者でやく
さだと叫んでけなしました。これは私を憤慨さ
せ、私はかれを罵って家出しました。母は私のあ
とを追ってきて家にかえるようにくどきました。
父も家に帰るように命ずると同時にののしりなが

ら私を追ってきました。私はある池のほとりに行って、父が近づけばとびこむとおどかしました。一
(ヌノ一邦訳九〇頁)

このような慈愛にかけている家庭環境のなかでは性格のよわい子供は非行少年になりがちである。が、毛沢東は父に屈することなく、これと戦って家庭環境を自分の思う方向に改造してしまった。

「これを回想しますと、結局父の厳格さがかれを失敗させたと思います。私は父を憎むことをおぼえ、私達は父にたいするほんとうの連合戦線をつくりました。同時にそれは私に利益を与えたのです。そのために私は自分の仕事に非常に勤勉となり、また帳簿を注意深くつけるようになったので、彼が私をとやかくいう口実がなくなりました。」

これまでのところではかれのみせているすぐれた

点といえば、この性格のつよさぐらいのものである。だが毛沢東が政権をとるとともに、彼の伝記を「神話化」しようとする試みがおこっており、かれらは毛沢東と父の争いのなかに毛沢東少年の社会主義的正義感の萌芽を見いだそうとしている。たとえば筆者の手許にある「工人識字課本」(一九四九年十二月、北京工人出版発行)の第十九課「不願意発財」(「儲けたくない」)は上述の毛沢東と父の闘争をこうえがいている。

「毛主席の父親はむかしは貧農でありましたが、地主に金を払うことができないので、やむをえず一年間兵隊になりました。のちに大いに節約にとめ、かたわら小商売をはじめ、次第にくらしをよくしてゆきました。」

しかしくらしがよくなってからは、さらに金をもうけようという考えをおこし、貧農から中農に、中農から富農になろうとしました。かれの殖

財の方法のひとつは、貧農から穀物を買ひ、これを町に売って中間利益をとることでした。毛主席はちいさいときからほかの人を搾取して金をもうけるのはいけないと感じていました。それが貧民にとつて害のあることをよく知っていたのです。かれはほんとうに聡明な子供でした。かれの父もまたかれを重くみておりましたが、ただかれが金をもうけたがらないので、あまりかれを可愛がらず、かれをやくざものだと思っておりました。」

これによると毛沢東はこんな小さいときからすでに貧農階級意識にめざめており、そのために父に反対したことになる。どんな時代にも権力者があらわれると、多くの「ごますり」どもがよつてたかつて神秘的な人間にしたてあげようとする。毛沢東の場合可愛そうなのはその都度ひきあいだされる平凡人の父親である。かれが貧農から中農に、中

農から富農にのしあがろうとしたのは勤勉な中国の農民としては当然なことで、とくにいわれるほど悪いことはない。いな、ほめられてよい人物なのだ。

毛沢東は、そのころ中国の多くの少年がそうさせられていたように、村の小学校で四書五経をよまされた。これらの経書はすべての少年がそう感じたように、毛少年にとつて難しすぎたばかりでなく、ひどくつまらないものにみえた。毛少年が興味をもつてよんだ本は日本のかつての立川文庫のような、英雄豪傑ばかりがでてくる中国の伝記小説である。

「私が好んだものは古い中国の伝奇小説、とくに謀叛の故事でした。私は岳飛伝（精忠伝）、水滸伝、隋唐演義、三国志、西遊記と、まだずっと少年のときに、これを邪悪だといってよむことをきらった老先生の眼を盗んでは読みました。私はいつもこういう本を学校でよみ、先生がそばを通るときには経書を上にのせてかくしました。多くの

私の同級生も同じようにやったのです。私たちは多くの話をほとんどそらでおぼえ、何度もなんどもそれを論じあいました。……私は感じやすい年頃によんだこういう本によって多くの影響を受けたと信じます。」(スノー前掲書九〇頁)

これでわかるように当時の毛沢東は自ら小説中の人物になりきってさまざまのロマンスを頭にえがきながら、読書に夢中になっている、世界中どここの国にも見いだされる平凡な少年のひとりだったのだ。もしそこに強いて彼の今日への指向をみつけようとするれば、それはこういうことであろう。

「たまたまある日、私はこういう小説には一つの独特なことがある、土地を耕やす農民がいらないことに気がつきました。いっさいの人物は、戦士、官吏または文人で、農民の英雄は一人もありませんでした。私は二年間このことをあやしみ、それ

から小説の内容を分析しました。私はかれらはすべてかがやかしい軍人、人民の支配者で、かれらは土地をもち支配しており、明らかに農民を自分たちのために土地で働かせたので、自分で働く必要がなかったことを発見しました。」⁽⁴⁾

農村にあって小さいときから畑仕事を手つだっていた毛沢東が、このような疑問をもったのは、おそらく少年のヒューマニズムからで、それをただちに農民解放運動とか階級意識などとむすびつけることは危険である。或る種の「ごますり」伝記作家は、これを「毛沢東の大発見」とし、そこに「すばらしい独創的思索力をもった毛少年」をみいだして「太平天国の洪秀全にしても、決して少年毛沢東のような発見から出発したわけではなかった。いわんや、国民党の創設者で三民主義の提唱者たる孫文においておやである」という断定をくだしている。こうい

う毛沢東神話が、日本ばかりでなく中国にも非常におおく、毛沢東の人間像を正確にとらえることがむずかしくなったことについて、ロバート・ペインはすでにこういつている。

「毛沢東の少年時代については、既に多くの敬虔なる伝記が現われている。その物語は、中国の著述家によってくり返し語られているが、かれらにはもはや毛沢東を正確にながめることが不可能であると思われる。それらの著述においては、黒髪を乱し、青いリンネルのズボンをはいただけのこと——つまり湖南の、どの少年とも変る処のない少年毛沢東の姿は後に引込み、代って将来の主権者の幽霊めいた影が現われる。毛自身はこれらの伝説を出来るだけ打消してきたが、時にはつけ加えもしたのである。」(ペイン二七頁)

ペインが毛自身、ときには自分の伝記に神話めい

たことをつけ加えたといっているのは、かれの父がある日、道で一匹の虎とであい、その難を奇蹟的にのがれてから仏教に敬意を表するようになったとかたっていることを指す。ペインは「これは興味深い話であるが残念なことには当時湖南には虎はおらず、満洲と江西山嶽地帯にいただけである」といい、この話は中国の英雄ものがたりによくあるように毛沢東が自分のはなしにちよっぴり味をつけたものだとかんがえている。しかし江西省に虎がいるならば湖南にそれがまぎれこまないともかぎらないし、またかれの父がなにかほかの動物を虎とみまちがえてそつ話したのかもしれない。ともかくこの話をもって、毛沢東が自分の伝記を神話化しようとしたとみるのは、すこし酷に失するようだ。スノーによると毛沢東はかれにたいする「個人崇拜」をきらっていたというが、政権をとってからのかれは、かならずしもそうとはいいきれない。かれにたいする讚美、それ

も「毛沢東はわれらの太陽」というような半神的個人崇拜を平気でうけるようになったのを見ると、ベインのいうこともいちがいに否定できない。

三 康有為の思想的影響

かれが少年時代によんだ経書以外の書物は雑然としているが、かれ自身くりかえし非常に感銘をうけたといっている本は、康有為、梁啓超の変法自彊派のひとり、鄭観応の書いた「盛世危言」であった。かれはいう。

「私はいつも夜おそく私の部屋の窓をおおって、父に燈が見えないようにしました。こうして私は大好きな『盛世危言』という本を読みました。著者たちは一群のふるい改良主義の学者たちで、かれらは中国の弱点は西洋の機械——鉄道、電話、電信、汽船——がないことにあり、それらを輸入

したいと希望しました。……

盛世危言は私に勉強をふたたびはじめる欲望を刺戟しました。私はまた野良の労働がいやになりはじめました。父は当然これに反対しました。私たちはこのことで喧嘩し、とうとう私は家出しました。私は失業中の法律学生の家に行き、そこで半年のあいだ勉強しました。そのご、私は年寄りの学者のもとで経書をもっとまなび、また多くの時論と数冊の本を読みました。」

ここにはっきり現われているのは、かれのものごとくに熱中する性格である。かれはひとたび盛世危言の思想に共鳴すると、われを忘れてそれに没頭し、家をとびだしてまで読書三昧の生活にひたりきったのである。青年時代の毛の勉強ぶりをしている蕭三も「かれは集中主義で、読書計画をたてて、問題となつてゐる本を中心とし、それにかじりついて、

読みやぶるまで他の書物を全然かえりみないというやりかただ。」⁽⁶⁾といっている。

毛自身は康有為、梁啓超派とその運動を「改良主義」とよんでいるが、その実体は十九世紀後半全世界に澎湃としておこったナショナリズムの中国版である。かれらは日本の明治維新に刺戟されて、清朝をたおすことなしに、これを立憲王政に改革することによってこの国に「明治維新」をもたらすことができるかと考えた中国の「忠君愛国」主義者たちだった。

毛沢東が十三歳のとき、すなわち一九〇六年、清朝のありかたについて彼に若干疑問をいだかせるような事件がつけさまにおこった。湖南省は大饑饉に見まわれ、省城長沙では餓えた民衆が暴動をおこし省長を追いはらってしまった。清朝政府は内務部の大官を特派し、人民をなだめることに成功した。暴動がしずまると間もなくやってきた新任の省長は

暴民の首領をとらえて首をきり、みせしめとしてさらし首にした。またかれの生まれた韶山村では中国の旧い秘密結社哥老会の会員たちと地主の間に、裁判沙汰がおこり、それにやぶれた哥老会派は判決に服さず、瀏山という山にたてこもって軍隊とたたかったが、結局指導者は捕えられて首をさられた。その翌年また饑饉がおこり貧民達はたちあがって金持ちからお助け米を強要する運動（中国語で「喫大戸」直訳は「金持ちの米をくう」）をおこした。毛の父の米も運搬の途中かれらにうばわれてしまった。これらの事件はわかい毛沢東にかなりつよいショックをあたえたい。かれ自身こうかたっている。

「時を接しておこったこれらの事件は、すでに反逆的な私の若い精神に永続的な印象を与えました。この頃また私はとくに中国の解体を警告したパンフレットをよんだのちに、ある程度の政治的意識をもつようになりました。私は今でもこのパ

ソフレットが「嗚呼、中国はまさに亡びんとしている」という一句ではじまるのをおぼえています。それは日本の朝鮮と台湾の占領、インドシナ、ビルマその他の宗主権の喪失をつけていました。これを読んだあとで私は祖国の将来を思つて暗澹となり、国を救うのを助けるのは全人民の義務であることを理解しはじめました。」(スノー邦訳、九三頁)

しかしこれらの事件が毛沢東の「若い精神に与えた永続的な印象」も、かれのいつているほど深刻なものではなかったらしい。かれ自身もみとめていのように、それによって彼の清朝皇帝にたいする忠誠心はすこしもゆるがなかったからである。いな、毛は清朝が立憲君主制でないことが、すべての悪の原因だとかんがえるようになり、かえつてますます康有為派にひきつけられていった。毛沢東が少年時代

から、貧農の味方であったことを強調したがっているかれの讚美者たちにとって、お気の毒なことながら、当時の毛沢東は貧農の立場に同情したといつても、その同情はよく少年にみるヒューマニズムの程度をでなかつたのだ。かれは米をうばわれた父にも同情しなかつたかわりに、「同時に私は村民のやり方もわるいと思ひました」と率直に告白している。要するにこれらの事件は毛沢東自身がいうほど彼の全生涯に深刻な影響をあたえたとは考えられない。

毛は十六のとき家から二十五キロはなれた隣県湘郷の興城の東山小学に入学した。十六歳で十二、三歳の子供にまじつて小学校に入学するということはみえぼうの多い中国人にはめずらしいことである。かれはこの学校には半カ年しかいなかったが、この間に蕭三という二つ年下の友人とあだ名を「仮洋鬼子」(にせ毛唐)とよぶ日本留学生あがりの教師を識った。しかしこの小学校でかちえたもつとも大き

な収獲は従兄弟から送られた康有為の本と梁啓超の編集する新民叢報を直接よむ機会をもったことであらう。

「私は暗誦できるまでそれらを何度も読みました。私は康有為と梁啓超を崇拜し、私の従兄弟に非常に感謝しました。」

康有為らによる孔子哲学の新しい解釈は、かれの時世にたいする眼をひらくとともに、かれがそれまできらっていた経書その他の古典の価値を再認識させるうえに役立ったにちがいない。毛はそれ以来、中国の古典にひどく興味をもった様子である。

「私はじっさいに反君主主義者ではありませんでした。私は皇帝も大部分の官吏も正直で善良で賢い人たちだと考えていました。かれらはただ康有為の改革の援助を必要としていたのだと思います。私は古代中国の支配者、堯舜、秦始皇帝、漢

武帝の話に夢中になり、かれらについて多くの本を読みました。」

康有為は孔子を進歩的な社会改革者と直覚した最初の人である。かれは孔子が礼記に展開している「大同の世」は中国人ばかりでなく、全世界の人類が到達すべき理想世界であり、現在の混乱と無秩序の時代はそれにいたる過渡期であるとかんがえたのである。「大同の世」とは後述するように、原始共產社会の観念的反映であって、そこでは人々は財産を平等にわけてもらい、かんか寡こど寡ど孤ど独どは社会保障によって生活が保証されているから、ひとのものをぬすむものがないので、夜は戸をあけたままでねられるという平和の世界である。康有為は礼記は孔子の書いたものだと考えているが、いまでは孔子の言葉を編さんしたものではなく、戦国時代の儒者がつくったものだといわれている。しかし孔子自身も堯舜と

いう伝説の聖王の治世、所謂「先王の道」をこのよ
うな理想郷としてえがきだし、道義の非常にみだれ
た春秋時代をただす基準としようとしたことはたし
かである。中国の読書階級はこれにならってこの儒
教的理想世界を時代改革の基準として、また読書階
級出身の革命家は王朝顛覆のごとしてこれを利用
してきた。康有為もこの伝統にしたがって清朝を立
憲君主制にして、西洋文化を採用することが「大同
の世」にいたるみちであることを主張し、これに反
対するものは孔子の教にそむくもののように思いこ
ませたのである。ペインの表現をかりれば「とにかく
康有為こそ、この孔子の言葉が中国革命に際し
て、どのような装いをとり得るかを誰よりも早く気
づいた人であった」のだ。

時勢の力はともかくとして、毛沢東を康有為にひ
きよせたものは、やはり彼における儒教の影響であ
ろう。この観点からみれば、かれが村の小学校でい

いやながら読まされた四書五経の力を過少評価す
ることはできない。ペインはこういつている。

「これらの驚嘆すべき書物は細心なヒューマニズ
ムによってかかれており、毛自身が認めているよ
りもはるかに深刻な影響をかれに与えたのであつ
た。かれが孔子の孝の概念を非難したのには、も
っともな理由があつたとしても、孔子の言葉のな
かにあるものや、孔子独特の方法は後々まで彼の
心にのこつた……」

このような読書から毛の心には、さまざまな政
治権力に関する孔子の概念『大同』の観念、それ
に孔子の語つた多くの格言が残つた。それらの格
言を毛は今と同様、驚くべき機智と正確さをもつ
て日常に応用したのである。⁽⁸⁾

マルクス主義のチャンピオン毛沢東が、儒教の影
響をつよくうけていることをみとめたがらない毛の

伝記作家たちは、この関係をまったく無視しているか、またはひどく軽視している。だが毛沢東主義がフルシチョフのコミニズムとちがう点を理解するかぎはこの関係にあるのだ。

一九一八年二十五歳の毛沢東は、北京にでて陳独秀に会い、その儒教反対運動に拍手をおくったり、またバクーニンの本をよんで、無政府主義に傾倒したりしているが、それは決して彼と儒教との完全な訣別を意味するものではなかった。かれはその翌年のはじめ、南京への旅行の途中曲阜の孔子廟にまいったり、顔回の住んでいた淮河のほとりにたたずんでその音をしのんだり、孟子の生家を訪れたりしている。ペインは毛のこの儒教的「聖蹟巡礼」は「漠然たる頌徳行為以上の意味」をもっていったといっている。

「毛は漂泊をつづけて曲阜にある、孔子の墓におもむき、そこから中国で最も高く神聖な山である

泰山へ登りにでかけた。……このような行動は無政府主義者であることを告白し儒教との闘いを誓った人間としては奇妙なことである。だが事実、毛はまだ一度も儒教から完全に離れ切ったことはなかったのであつて、儒教の核は心のなかに固く残っていた。論敵は君子の演ずべき役割についてかれほど学識をもたなかったし、また意識してもいなかったからよく悩まされたものである。かつて漢の高祖劉邦が孔子の墓前で献祭を行なつたのは有名な話である。劉邦はもと一牧夫であつたが、反抗の旗をかかげて立ちあがり一帝国を建設し、延安の南の西安にその首都を置いたのだ。今、毛のなかにあらゆる過去がよみがえり、また、その旅程はかつて司馬遷が行なつたものに細部にいたるまで従つていた。あたかもこの歴史家の眼を通じてこの国の過去の偉大と現在の頹廢を眺めようとしていたかのように思われる。」

孔子が提唱する聖王堯舜は原始共産社会の氏族長を模写したものだといわれている。氏族長は一族の生産消費を指導し、族人のひとりでも餓えしめないように家父長的顧慮をもって一族にのぞむが、儒教の原理によれば、中国の皇帝たるものはみな堯舜のような家父長的心がまえをもって、人民の幸福をはかる「民の父母」でなければならぬとされている。孟子は「堯の民を治むる所以をもって民を治めざるは其の民を賊するものなり」といい、その条件をみたさない君主は「民を暴すること甚しければ身弑せられ、国亡ぶ」として君主たることを否定した。それ故、中国で専制君主が是認されるのは、君主が「民の父母」として民生を顧慮するという条件の下においてである。この条件がみたされなければ、つまり人民の多数が生活にこまれば、人民は暴動をおこす。そのさわざが大きくなれば、これはこの王朝か

ら天命が去った証拠と認められる。だれがそう認めるかが問題で、多くの場合、それは人民の暴動を利用して天下をとろうとする読書階級の野心家だ。孟子は殷の湯王を助けて夏王桀を倒した伊尹の言葉に托して、この革命の原理をつぎのようにのべている。

「天の此民を生ずるや、先知をして後知を覚おぼさしめ、先覚をして後覚を覚おぼさしむるなり。予は將まさかに斯この道を以て斯この民を覚おぼさんとするなり。予之を覚おぼすに非ずして誰ぞやと。天下の民、匹夫匹婦も堯舜の沢を被らざるもの有れば、己推おたして之を溝中に内いるが若ごとしと思えり、其の自ら任ずるに天下の重おもきを以てなすこと此かくの如し。故に湯に就き之を説くに夏を伐ち民を救うを以てす。」〔万章上〕

儒教では人民が意志を結集して、人民自らが政治をおこなう原理はなく、政治をとるものも、また政治をくつがえすものもつねにエリート（君子）であ

り庶民はあずかり知らないのだ。これは中国の古い読書階級の考え方で、孫文のような近代的革命家も、この考え方からのがれることはできなかった。

彼は国民を「先知先覚」「後知後覚」「不知不覚」とわけているが、「不知不覚」などというものはありえないから、実際には彼も孔子のように「上智と下愚は移らず」という考え方から国民（「下愚」）はつねにエリート（「上智」）に導かれ救われるべきものとかんがえていた。毛沢東においてもこの儒教的伝統の影響は多分にみられる。かれは人民の下からのイニシアチブによる政治を信じていない。このことは人口七億の中国の政治が、人民代表大会によって決定されるのではなく、中国共産党、いなそのなかのひとにぎりの集団中央政治局に、いかなれば毛沢東の意向によって決定されている事実を知るものには取えて多くをいう必要はあるまい。

四 康有為から孫文へ

毛沢東における儒教の影響のもうひとつの顕著な痕跡は、かれの禁慾主義、ピューリタンの生活態度にのこっている。孔子は「士道に志ざして悪衣悪食を恥ずるものは未だともに譲るに足らざるなり」といい、君子にたいしてつねに「道を憂えて貧を憂えず」とか「食飽くことを求むることなく居安きを求むることなし」という態度を要請しているが、毛沢東の青年時代を知っている人は、みなかれの質実な生活と苦行僧的求道態度に驚嘆している。ペインはかれの小学校時代の生活をこう書いている。

「かれは夜、他の学生たちが眠っている間に、本の下にかくして置いた古蠟燭を溶かして新しいのを造り、烈しく勉強した結果、たちまち首席になった。……韶山にいた頃はかれは古典を半ば嫌っ

ていた。だが湘郷に来ると教師の一人が毛の文章を読み、その韓愈ばりの文体と題目の若々しいロマンチズムに感嘆してしきりにすすめたものだから、今や時間の大部分を四書の研究に捧げた。同時に改革運動についても前よりよく知るようになり、康有為を讚美していた。」

しかし毛沢東は、この時代に中国の古典ばかりよんでいたのではない。康有為の刺戟によって、かれは中国のおかれてある世界の情況を知るためにひろく世界に知識をもとめた。それには蕭三を友人にもったことが非常に役だった。外国語はからきしだめな毛沢東が、このときに獲得した外国の知識の大部分はかれから得たものだといわれている。とくにかれは蕭三から教わった「世界の大英雄」という本に異常な興味をおぼえた。この本にはピーター大帝、ウエリントン、リンカーン、ルソー、モンテスキュー

ー、カテリーナ女帝、グラッドストーン、ナポレオンなどの生涯を扱ったものだが、毛の心を燃えたさせたものはワシントンであった。蕭三によれば毛はその読後感をこうかたったという。

「われわれはこのような大人物が必要なのだ。われわれはかれらに学び、いかにして中国を富強になし得るかを見出さなければならぬ。そして安南、朝鮮、印度の運命を追うことをさげなければならぬ。古諺にも『前車の覆えるは後車の戒め』とあるではないか。中国は実に弱い。多くの年月を経てやっと強く豊かになり自立するであろう。しかし重要なのはわれわれが、これらのことを学ばねばならぬということだ。それは不可能ではない。ワシントンは六年間の苦しい戦いの後、イギリスの人たちを破りアメリカを建設しはじめたのだ。」

こういったときの毛沢東の様子は、蕭三による

と、「それは実に奇妙でしたよ、わたしはかれの様子も、かれが『われわれにはこのような大人物が必要なのだ』といったときの声の調子もはつきりおもいだすことが出来ます。わたしには毛が心を決したのだという気がしました。』⁽¹⁰⁾

このとき毛が「心を決した」としても、それは社会主義の道をゆく決心ではない。蕭三はそのときの彼が、ツルゲネーフの「父と子」の主人公バザロフに似ているといつてそれを暗示しようとしているが、おそらく康有為のように清朝皇帝のために立ちあがる決意だったろう。当時毛沢東はまだ「忠君愛国」の思想段階があがりたりおりたりしていたのだ。

日清戦争以後中国の革新運動の潮流には、大きな変化がおこった。清朝に「明治維新」の中国版をつくろうとする康有為ら革新派の勢力は急速におとろえ、清朝になんの幻想をいだかず、これをたおして

そのあとに共和政体をつくろうとする、孫文らの革命派が抬頭してきた。清朝は義和団を利用し、国民の不満を帝国主義に向けることによって崩壊からまぬがれようとしたが、結果はかえって事態を悪化させた。かれらは自国が列強の利権分割競争の犠牲となるのをただ見まもるだけだった。上海、広東のブルジョア・インテリゲンチヤは革新派に背を向けて革命派の孫文のもとに結集しはじめた。このような時代のうつりかわりは、湖南の田舎では敏感に感ぜられなかった。だが、毛沢東が笈を負うて長沙に出るとたちまちこの渦中にまきこまれた。とはいえ、かれの思想はまだ革新派と革命派の区別さえはっきりしないほど幼稚にかつ混乱したものだ。それは毛沢東の康有為にたいする心酔が、あまりにも深かったためといえるかもしれない。このことは毛自身も認めている。

「私はまだ康有為と梁啓超を讚美するのをやめま

せんでした。私には両者の分別がはっきりわかりませんでした。私の論文で私は、孫逸仙は新政府の大統領となるために日本から呼びもとさねばならず、康有為は國務総理に、梁啓超は外交部長に任命さるべきだと主張しました。」

この年に辛亥革命がおこり、毛は革命軍に参加したのであるから、時代の潮流におしながされるままに革命に参加した阿Qを必ずしも笑えないのである。かれがこのように思想的におくれているのは、それまで保守的傾向のつよい湖南の田舎に成長してきたということが大きな理由であろう。中国は大きく海岸諸省と内陸諸省にわけられる。天津、上海、広東等の海港をもつ海岸諸省は比較的是やくから外国文化に接しており、いわゆる「開明紳士」がおおい、かれらは頭のはたらきがはやく、多少軽薄なところがあるかわりに融通もきく。これに反し内陸諸省

の人々は、鈍重で保守的傾向がつよく、海岸諸省から文化をとりいれることが自分たちの経済―農村の封建的搾取―の基盤をくずすことをおそれて、意識的にこぼもうとする傾向がある。かれらの頭の回転は比較的緩慢であるが、そのかわり一度きめたらあくまでそれに固執する性格をもっている。この性格の相違は、湖南生れの毛沢東と浙江省紹興生れの周恩来に顕著に見わけられる。毛が孫文ら革命派の思想をうけいれるのに時間のかかったのは、このような性格にも関係があるようだ。同じ内陸人でも湖南人はとくに自己に固執する性格がつよく、湖南人自らこの性格を「驢子」(註 ろば、ろばはいうことをきかなくなると、てこでも動かぬ)とか「逆毛」(註 つむじまがり)とかよんでいるくらいだ。

毛沢東は革命軍に参加して毎月七元の給料をもらったが、かれはこの金で革命派の湘江日報を購読し、そこではじめて「社会主義」という言葉をしっ

た。社会主義といっても社会改良主義のことである。毛沢東はそれに興味をもち、社会主義の原理について書いた江亢虎のパンフレットをよんだ。間もなく袁世凱と孫文派が和議をむすぶと、かれはもう革命はおわったものと思い、再び学生生活にかえろうとしたのであるから、当時のかれの革命についての理解が、あまり底のふかいものでなかったことがわかる。

五 新民学会——学生運動へのスタート

そのとき毛沢東は、年齢からいっても自分の将来のことを真剣に考えなければならなかった。かれはすでにのべたように、省立図書館にこもって自分の好きな本を自分できめた予定表にしたがってかたっぱしから読破していたが、ただ本を読むだけでは知識はみだされるが飯桶はみだされぬ。

そこで考えのおちつくところは読書と生活がいちばんよく結びつく職業——教師となる事であった。もつともそれにはどこか学校にはいらなければ家から金がもらえないという事情もあった。かれはこういっている。

「私の家族は学校にはいらなければ補助をくれなかつたので、私は当時金をもたず会館にすめなくなりました。……そうこうするうちに私は自分の生涯をまじめに考えはじめました。そして私は教職にいちばん適していると決めこもうとしました。私はまた広告をよみはじめました。湖南師範学校の魅力的な発表が私の注意をひき、私は興味をもってその長所をよみました。それは授業は無料、寄宿料は安かったのです。……私は家族に自分の意図を手紙でつたえその同意をえました。」

それからの五年間、かれはこの師範学校で、家から

の仕送りをうけながら比較的安定した学生生活をおくったのである。この学校で、かれがいちばんつよい影響をうけた教師は、楊昌濟（懐中）というイギリス帰りの留學生であった。毛とともにこの学校に学んだ蕭瑜によると、この「楊先生は大変な博學で人格者、志操堅固な人だった。その行ないには一点の非の打ちどころもなく、孔子に精通していたので、先生の友人や学生達は『孔子』と崇めていた」という。毛沢東はこの先生にかわいがられ、結局その娘むこととなったのである。毛は学校の成績もよく学生の間でも人気者で、いつの間にかかれの周囲には一群の優秀な学生たちが結集した。これがやがて「新民学会」として発展したのだ。

「だんだん私は一群の学生を自分の周囲につくりました。そして中核がつくられ、それはのちに中国の問題と運命に広汎な影響を与えることとなった新民学会となりました。それは真面目な小さな

グループであり、かれらはつまらぬことを議論する暇は持ちませんでした。彼らが行なったり、いったことはすべて目的を持たねばなりませんでした。かれらには恋愛とか『ロマンス』の暇もなく時局はきわめて重大で、知識の必要は女とか個人的なことを論ずるにはあまりに緊急であると考えました。……通常この年頃の若い者の生活で、重要な役割を演ずる女性の魅力の議論は申すに及ばず、私の仲間が日常生活のあたりまえのことを話すのも拒否しました。

私の友人と私は大きな問題——人間の性質、人間社会の本質、中国の性格、世界、宇宙をまず論じました。」（スノー 一〇三頁）

ここにのべられているかぎりでは、新民学会は革命団体というよりも「道を変えて貧を愛えざる」君子たちの求道団体という方がふさわしい。「新民」

という名称そのものも「大学の道は民を新たにするにあり」という「大学」の句からとったものである。新民学会々員は単に学問だけではなく、心身鍛練のために盛んに山野をかけめぐった。このように新民学会は決して共産主義への傾斜をもつ団体ではなかったのだ。それが湖南における共産党の中核となつたことについてはこの間における世界情勢の変化を考えなければならぬ。毛沢東が第一師範に入學した翌年、すなわち一九一四年には第一次世界大戦がおこり、新民学会のできた一九一七年には世界におけるはじめての共産主義革命が、ロシアで成功している。この革命の影響は電撃のように中国にわたつた。もともと新民学会に結集したエネルギーは中国の現状に不満であり、現政権に反抗的なものであつたから、その思想的影響をうけて急速に左傾化していった。

六 北京への旅

第一次世界大戦がおつた一九一八年に第一師範を卒業した毛沢東はそのとし故郷で母が亡くなつたので、そのまま北京に出ることにした。母のいない故郷は彼にとっておよそ無意味なものだったからである。そのころ歐洲大戦のため、フランスでは労働者が不足していたので、中国人を労働力として輸入しようとしていた。これにこたえて中国側でもフランス行きアルバイト学生団を組織する運動（勤工儉学運動）が起つていた。北京には北京大学総長蔡元培を会長とする華法教育会というのがあつて、こういう学生にフランス語を教える企てがあつた。

新民学会の会員にも、フランス行きを希望するものが多かつたので、毛沢東はかれらと一緒に北京にのぼることになった。しかし毛沢東は自伝では「自

分はヨーロッパに行きたいとは思いませんでした。自分の困についてまだ十分に知っていないし、中国でくらす方がいっそう有益だと感じたのです」といっている。それならばなぜかれはアルバイト学生運動の組織を援助したのか、それは自分のためではなく、ただ「世のため、人のため」に友人達にフランス留学を勧誘しただけだというのだろうか。この点がどうも納得できない。この間の事情は、当時新民学会の幹部役をしていた蕭瑜によると、はなしがたいぶちがってくる。かれは、毛沢東は最初みんなと一緒にフランス留学を考えてその気でかきまわっていたという。毛沢東は北京行きの旅費をかれから出してもらっているが、もしも毛がフランスに行く気がなくただそれを口実に北京に行くために旅費を出してもらったとすれば、かれはけちなペテンである。毛はそんな人物ではない。かれが中国にとどまる希望を表明したのは北京にいつてからのことで、

そうきまったのは蕭瑜らと相談の上である。蕭瑜はその事情をこう説明している

「それには四つのわけがある。まず第一に旅費の問題。かれはほとんど無一文に近く、往復二百元の割引運賃でも大変な負担だった。またこれといって金を借りられるあてもなかった。第二に、彼は語学が苦手だった。第三に、北京にいれば学問を続けて行くことができるし、新民学会の会員をふやすこともできる。私たちフランスに行くものにとっても北京に信用のおける連絡担当者がいてくれる方が都合がよかった。第四にかれはかつて長沙の天心閣で友人の譚悟変からきいた言葉を、片時も忘れていなかった。あのとき譚はこういった。政治で成功を収めるには学問そのものよりも政党を組織し、同志を糾合する才能の方が大切だと。毛沢東は行動の人で、学究肌ではなかった。つまり彼は学問するだけなら、なにも外国に留学

する必要はないと思つてゐるのである。彼にとつて、学問は目的のための一つの手段に過ぎなかつた。彼は北京にふみとどまる理由をこんなふうに語つてくれた。蔡和森と私はそれなら毛に北京に残つてもらつて、私たちはフランスで、毛は北京で「勤工儉学運動」(アルバイト留学運動)を推進しよう、かれの決意に同意した。^(M)

この説明は毛沢東自身の言葉よりも信頼がおける。西洋の諺に、理由はAからZまであげることができるが、大ていの場合最大理由はM(MONEY)だというのがあつたが、毛沢東の場合も、どうも蕭瑜のいう方に部がありそうである。毛沢東が外国にいかなくつたことはかれの人生コースに大きな影響をあたえてゐる。だがそれがために彼の今日があるように考へることもまちがいである。そのときのフランス留学生からも周恩来、陳毅、李富春、その

他がでているのだ。

蕭瑜の説明によると、毛沢東の北京駐在は湖南フランス留学々生団の北京駐在連絡員という形であるから、毛の北京の生活についても、かれらが世話することになつたのだという。

「それにしても毛が北京にのこる以上、北京での生活のめどを立てなければならぬ。私たち三人はそのことでもいろいろ話し合つたが、ちょうど北京大学で、新民学会の新会員を募集しようとしていたところだったので、北京大学に職を求めたら一挙兩得ではないかということになつた。そこで私たちの頭に浮んだのは教室の掃除番である。これなら仕事は簡単だし、講義をきくこともできる。当時北京大学では講義のあと黒板を消したり、教室を掃除したりする小使を雇つていたが、これならば仕事は楽だし、教授や学生達とも始終接触してゐられる。理想的じゃないか。三人(註

蕭、毛、蔡和森)ともそう思った。……そこで私たちは、これまで、いろいろ世話になった蔡元培総長に頼むしかないと思い、担当の教授に掃除番を雇うように話してもらえまいかと手紙を書いた。蔡総長は早速返事をくれた。しかし掃除番などより図書館の仕事はどうかというのである。そして総長は大学の図書館長李大剣に『毛沢東という青年が大学内で職を求めているのだが、図書館の仕事をやらせてやって欲しい』と紹介状を書いてくれた。おかげで毛沢東は、李館長から図書(15)の整理係の職をうることができた。」

毛沢東によると楊昌済にたのんで、かれから李大剣に紹介してもらったことになっているが、フランス留学生運動の前後の関係からみて、これも蕭の記述の方に軍配があがる。ともかく、こうしてかれの北京での生活問題は一応解決した。北京は中国の文

化の中心であり、ここには天下の秀才があつまってきている。毛はここで「南陳北李」といわれた陳独秀、李大剣、文芸復興運動の著名な指導者傅斯年、羅家倫、後に共産主義者となった張国燾、譚平山、陳公博等々に会った。しかしかれらはこの田舎ものの図書館小使を相手にしなかったらしい。毛沢東はこうぼやいている。

「私はそれらの人達と政治や文化の問題について話をしようと試みましたが、かれらはじつに忙しい人たちでした。かれらは南方の方言をしゃべる図書館助理員に耳をかす余裕などは持っていませんでした。」

当時李や陳、張国燾などの間では共産主義グループの組織運動が行われていたが、毛はそれから除外されていたらしい。だが毛沢東はかれらとの接触到よって次第に政治にたいする関心が強まってゆき、

「私の気持はますます急進的になっていきました」といっている。が、その直後すでにのべたように無政府主義のパンフレットから大きな影響をうけたり、儒教の聖跡旅行をやったりしているから急進的に変わってきたという程度も察しがつく。

七 湖南学生運動のキャップ

北京では新民学会の会員募集の仕事もはかばかしくなかったの、かれは一九一九年のはじめ長沙にひきあげ、新民学会を中心とする学生運動に専念した。蕭瑜によると、この頃毛は「百人あまり会員をふやした」といっているから、かれの組織力は相当なものだったことがわかる。かれは北京における経験からこういう運動には機関誌が絶対に必要なことを知っていたので「新民学会通訊」を発行することにした。もっともこれは三号でつぶれてしまった

が、その後「湘江評論」という週刊新聞を発行した。これはもっぱら、湖南省の独裁的な省長張敬堯打倒運動——この運動の首謀者は第一師範時代の毛の先生易培基——に学生を動員するためのアジプロ新聞であった。この新聞は非常に急進的で、学生連のあいだで評判がよく、学生たちは自らすすんで湘江評論を街頭で売りあつた。毛が新民学会の女性会員陶斯詠とともに新思想の本ばかり売る書店「文化書局」をひらいたのもこの頃である。陶斯詠は毛と同郷同学の才媛で毛の初恋の人だといわれる。短期間ではあるがかれらの間には恋愛関係があつたようだ。毛が共産主義にかたむくにつれて二人の思想のひらきが大きくなり結局かれらはむすばれずに終わった。

この年、毛は再び新民学会代表として上京し、さらに上海にでて陳独秀に会っている。このときの毛はもはや以前の毛沢東ではない。湖南の学生運動を

通じてかれの名もとおっており、思想的にはマルクス主義への脱皮寸前だった。したがって陳独秀のかれにたいする態度も、毛が彼からうけた印象も、以前とはちがっている。毛自身はそれをこう語っている。

「そこで（上海）私はふたたび陳独秀に会いました。最初は北京で、私が国立北京大学にいたとき彼に会ったのですが、かれはおそろしくほかの誰よりも私に大きな影響を与えました。……上海では湖南改造運動連盟の計画について陳独秀と論じあいました。それから私は長沙にかえってその組織にとりかかりました。私は新民学会での活動をつづけながら一方長沙で教員の地位を獲得しました。」（スノー 一〇九頁）

かれが長沙で獲得した教員の地位というのは、母校第一師範付属小学校の校長であった。これは長沙の学生運動の成功によって省長張敬鵬が逃亡し、そ

の運動の首謀者易培基が省政府官房長兼第一師範校長になっていたからである。すでに北京でマルクス主義の洗礼をうけている毛沢東は、かれがはじめてすわることのできた、あたたかい椅子にすわるひまはなかった。彼は新民学会の学生ばかりでなく、ひろく労働者を組織する運動にのりだしたのである。

このころかれは理論的にも実践的にもマルクス主義者に成長していた。時に年二十七歳、毛沢東の思想的成熟はけっしてはやい方ではない。こんなに時間がかかったのは、おそらく彼の思想のなかにあった儒教的伝統とマルクス主義のあいだにはげしい闘争があったためであろう。それだけにかれはマルクスズムを、翻訳調ではなく、中国の農民に理解できる言葉で、平明にかたることができたのである。このことが農民——中国における革命エネルギーの巨大な貯水池——とかれとを結びつけるのにどれだけ役だったかわからない。

第二章 毛沢東と国共合作

一 中国共産党創立大会

一九二一年七月、毛沢東は長沙共産主義者グループ代表として、上海フランス租界蒲柏路博文小学でひらかれた、中国共産党創立大会に出席した。この大会がすなわち中国共産党一全大会である。この会議は途中会場がフランス租界警察に搜索されたため、場所を嘉興の南湖にうつしてやっと完了することができた。会議出席者は十二人または十三人といわれ、ほんとうのところはよくわかっていない。当時各地におこった共産主義者グループの代表としては、次の十二名があげられている。長沙代表——毛沢東・何叔衡、武漢代表——董必武・陳潭秋、上海代表——李達・李漢俊、広東代表——陳公博、北京代表——張国燾・劉仁静、濟南代表——王尽美・鄧恩銘、日本留学生代表——周仏海。かれらのすべて

が参加したのではない。毛沢東は参加者十二名といっているが、名をあげているのは張国燾、包惠僧、周仏海の三人で、陳独秀と李大劉が組織的な役割りを演じているとはいっているが、参加したとはいっていない。ペインは、確実なものはつぎの十二名だといっている。すなわち陳独秀、李大劉、張国燾、周仏海、陳公博、施存統、戴季陶、包惠僧、李漢俊、李達、邵力子、毛沢東である。しかし陳独秀は当時広東にいたっていたので、一全大会には出席しなかったというのが事実のようだ。

これら代表者の多くは、大学出身のインテリで、実践活動の経歴をつんだものはずくなかった。この点毛沢東は名こそしられていなかったが、実際の組織工作や政治工作では、かなり豊富な経験をもっていった。かれはそれまでに長沙の新民学会々員の大多数を、党の前身たる社会主義青年団にいれることに成功していたのだ。毛沢東が長沙でこのような活動

ができた理由のひとつは、当時湖南省の政治環境がかれにとつて非常につごうよく展開していたからである。すでにのべたように、長沙では毛の指導する新民学会が主体となつている反軍閥運動が成功し、湖南省督軍の張敬堯は省議会議長の譚延闓と学生や労働者、農民を背景とする教育家易培基（長沙第一師範における毛の国語の先生）の連合勢力によつて打倒された。これは統一戦線の勝利であるから、その推進力となつた湖南省の学生、青年の意気はすこぶるあがつていた。かれらは中国の現状を破壊することにについてはだれも意見が一致していたが、その後にくるものについてはこれというビジョンをもたなかつた。そこにロシア革命の成功がつかえられたのであるから、一も二もなくこれこそ中国のとるべき道だと考えるようになったのだ。このときの長沙の情況については新民学会々員の一人陳昌が、当時たまたま長沙にかえつていた蕭瑜に次のようにかた

つている。

「みんな青年共産党にはいつてしまつたし、これから元にもどそうとしてもむりだらうね。新民学会の中国革命に関する考え方は抽象的だつたらう。特定の政治的見解があるわけではないし、具體的な計画も、つくらなかつたしね。いまじゃみんな實際的成果をあげるには、ソ連にならう以外に道はないとおもっているんだ。それにソ連につけば経済その他の面でいろいろ援助があるだらうしね。それからもうひとつ、地下運動の魅力っていうことも無視できないとおもうんだ。……」

蕭瑜がこの話を毛沢東にしたところ、毛沢東はこういったという。

「そう。現状に満足していないものはたくさんいる。しかし改革を実施するには、革命をおこななければだめだし、革命を成功させるには、ソ連に

学ぶのが一番なんだ。ぼくたちがすすむべき道はこれ一筋しかない。……」(蕭瑜著 前掲書二四五頁)

このとおりの会話がおこなわれたかどうかは保証のかぎりではないが、それが新民学会員の思想の転換事情を雄弁にかたっていることは否定できない。

当時長沙の新民学会員はほぼ百名であったから、その大多数が毛沢東について青共にはいったとすれば、毛沢東の周辺に緊密に結集した、かなり強固な党組織ができていたことはたしかであろう。毛はそれを代表して、上海の中共一全大会に出席したのだ。中共一全大会にあつまった全国十二の党代表が代表する全党員数は約五十名と公表されているからこのなかで毛の代表する湖南の党員は非常に大きな比率をしめている。それにもかかわらず、毛沢東はこの大会ではめだつた存在としてみとめられた形跡

はない。毛沢東の方でも党を支配するインテリ幹部にたいして、なにかもの足りないものを感じたらしい。蕭瑜は当時、毛が陳独秀について「かれはあまりにも学者的で、みかけもブルジョアの的だ。李大釗の方が指導者として適当だとおもうが、なにしろソ連が陳独秀を推しているから……」とつたえている。陳独秀が毛のマルクス主義への開眼にあづかつて力あつたことは毛自身のみとめるところであるが、かれの身につけている都会インテリの空気にたいしてなんとなく反ばつを感じたことは十分かんがえられる。またその他の代表や会議のようすについて、毛は蕭瑜に次のようにかたっていたという。

「集まつたのはみな相当の連中なんだ。高等教育をうけて日本語や英語のわかる人もおおい。みんな中国を改造するにはまず自分達がその中心にならなければならないと考えている。その考えを具体化したものがつまり中国共産党なんだ。こまか

い宣伝方式や活動はこれから決めることになったけど、大筋としてはまず労働階級や学生間に共產主義をひろめることが第一、第二は党の財政的な基礎を固めることで、そのために第三インターナショナル（コミンテルン）に入ることになった。
「……」

二 国共合作

この大会は党章討論にさいしてかなり議論が沸騰したらしい。一方には、現状では共産党の工作を理論宣伝だけにとどめ、党拡大のための秘密組織工作はするなという合法主義の主張（李漢俊）があり、また他方には、党はプロレタリア独裁を直接目標とし、ブルジョアジーと合作することも、ブルジョア分子が党に参加することも拒絶せよという極左的な主張（劉仁静）があった。だが会議の主流はこの双

方をおさえて中国革命の目標はブルジョア民主主義革命であって、社会主義革命ではないという見解をとり、したがって孫文の国民党とは直接合体せず、党外合作の形式で合作することに決定した。胡華の「中国新民主主義革命史」はこのような正確な主張は毛沢東らが卒先して提出したとして、その理由を下記のようにつべている。

「左右両傾向の機會主義にたいする闘争中、毛沢東らは正確な主張を提出した。なぜならば中国共産党がようやく成立しかかっていた時期において、毛沢東はそのときすでに湖南に党の基礎をおろしており、マルクス主義理論の宣伝によって、プロレタリア組織運動を行なっていた。かれはその他の大衆と連絡のある諸代表とともに、ソ連共産党をモデルとして党をつくることを主張し、同時に現段階の中国革命は、ブルジョア階級の民主革命であって、社会主義革命ではないことを認識

していた。かれらの正確な意見が大会で勝利をえ、かくして中国共産党の正確な組織原則がきまったのである。」

毛は党の正式成立以前に長沙に共青組織をつくり、それを中心として、軍閥に反対する各階級の統一戦線を組織して成功をおさめていたのであるからこの経験からいってもかれが中国革命の目標を直接プロレタリア革命としたり、ブルジョア分子（いわゆるインテリ分子をふくむ）の党への参加を拒絶したり、ブルジョアジーとの合作を拒否したりすることはありえない。これは非常に大切なことで、毛沢東の国共合作における地位を考へるときには、つねに彼の長沙における統一戦線の経験を頭におかなければならない。

三 毛沢東と労働組合運動

一 全大会で中国共産党が成立したといっても、最初の黨員約五十人の大部分は学生や大学教授などのインテリで、プロレタリア出身の黨員はほとんどいなかった。それ故党は成立とともにプロレタリア運動と密接に連絡し、そのなからプロレタリア出身の黨員を多くとりいれようとした。大会の終了後、ただちに公開的にプロレタリア組織運動を行なう「中国労働組合書記部」が上海（のちに北京にうつる）につくられた。主任は鄧中夏、各地方にもそれぞれその分部ができ、湖南分部主任毛沢東、武漢分部主任林育南、濟南分部主任王燾美らが任命された。當時は第一次大戦後のデモクラシーと自由の空氣が、全中国に急速につたわり、この国のプロレタリアートの間にも自覚がたかまり、各地にストライ

キの波がおこってきた。そのなかでとくに大きなのは香港の海員ストライキである。この争議の連鎖反応で、全中国のプロレタリアの間に同情ストライキの大波がおこった。このような現象は勿論自然発生的ではない。「中国労働組合」の活動が大いにあずかっている。

毛沢東は一全大会後ただちに長沙にかえり、正式に党湖南支部をつくり、湘区党委書記（一九二一—一九二三年）の地位についた。湘区というのは、湖南省ばかりでなく江西省安源地区までもふくまれている。一九二二年の下半年はストライキの高潮をむかえて、この地区にも多くのストライキがおこった。そのなかで大きいものは江西省安源炭鉱と水口山鉛礦の鉞夫ストライキ、長沙市の土建労働者のストライキである。この長沙のストライキでは毛沢東自身労働者代表をつれて省公署と交渉している。一九二二年湖南全省工団連合会——共産党指導下の湖

南労働組合連合会で毛沢東がその総幹事——の下には十いくつの組合しかなかったが、翌二十三年には二、三十にふえており、この年のメーデーには全省ストライキさえおこっている。これら労働組合の積極分子と毛沢東の結びつきは、毛沢東の大きな政治的資産で、かれらの多くはのちに毛沢東にしたがって井崗山にのぼり、紅軍の中堅分子となった。かれが劉少奇と知るようになったのもこのときである。毛沢東はこの政治的資産を非常にたかく評価し、湖南における活動を党中央における活動よりも重視したようにみえる。

一九二二年七月（公認党史、胡喬木著「中国共産党的三十年」には五月になっており、毛自身は、自伝でこの年の冬といっている）党中央は杭州の西湖に、二全大会を召集した。毛沢東はそのとき上海に来ていたにもかかわらず、これに参加していない。毛沢東はそれについて、「わたしは開催される場所の

名前を忘れてしまい、同志達にもあえなかつたので出席できませんでした。わたしは湖南省にもどり労働組合のしごとを精力的に進めました」といっている。上海にいながら「同志たちにも会えなかつた」ということはちょっと考えられないことである。それでは上海にいったのは私用だったのかといいたくなる。この年の五月に広東でも「第一回全中国労働会議」「第一回中国社会主義青年同盟」が開催されているが、毛はどちらにも出席していない。湖南のメーデーの方が忙しかつたからであろう。このころの毛の説明のつかない動きについてペインはこうかたっている。

「毛は自分の進路を未だ手さぐりしていた。陳独秀と別れたこと、湖南にとどまろうという決心、メーデーのゼネラル・ストライキの大きな成功――すべてこうしたことは、かれを純粹に地方的な指導者とする傾向があつた。そのつぎの年もまた

かれは上海を短期間訪れた以外は湖南にとどまっていた。中国共産党三全大会は六月広東で開かれたが、かれはくわわらなかつたとはいへ、その準備のいくつかの仕事は、かれが上海でした仕事なのである。上海でかれは党中央委員会の一員であり、『湖南代表』の肩書をもっていたが、かれの影響力は未だ周辺的なものであつた。⁽²⁾」

なにかかれをこのように湖南に固着させたのであろうか。ここにふたたびかんがえられることは、かれが党中央のおえらがたが身につけている、都会インテリのアトモスフェアにたいして、はじめからなにかそりの合わないものを感じ、かれらの指導にたよっていたのでは、中国革命はできそうもないとかんがえたのではなからうかということである。ともかくあらゆる徴候は、毛沢東が当時上海や広東でおこなわれていた、あわたたしい党中央の政治活動を

横目でみながら、湖南の地味な活動を、これこそ中国革命のほんとの軌道だとかんがえていたことをしめしている。

四 国共合作をめぐる論争

このとき広東や上海では、ソ連と国民党と共産党を一つの線につらねようとする運動がひそかにおこなわれていた。ソ連は陳独秀や李大釗をたすけて、中国共産党を成立させたものの、この国のプロレタリア階級の未成熟さ（一九二二年の全中国のプロレタリア人口は約二〇〇万）を反映するその貧弱な組織状態と、すでに辛亥革命を成功させたこの国の民族ブルジョアジーの政党国民党とを、つねににらみあわせて、かれの立場からの使用価値をはかりにかけていた。国民党の右翼は、辛亥革命のうちに軍閥と妥協することによって急速に腐敗しはじめたが、

孫文を中心とするその左翼は、ひきつづき反軍閥闘争を展開していた。その方法は、小さな軍閥と妥協することによって大きな軍閥をたおすという姑息なものではあったが、そのなかに民族解放の精神が生きていたことは否定できない。レーニンはコミンテルン第二回大会で、³⁾帝国主義時代においては植民地的、半植民地的諸国における民族解放運動は、国際プロレタリア革命運動の主流と合流するようにみちびかなければいけないといっている。そしてかかる国家においては党と民族運動との合作はのぞましく、かつ必要であるが、しかしその場合プロレタリア組織の独立性は、「たとえそれが胎児的形態であっても」保持されなければならないことをとくに注意している。中国に派遣されたコミンテルン代表マリンは、ただちに中国共産党にたいして国民党との合作を提案している。この提案にたいして中共側には大きな反対はなかった。ただ問題は、どういう形

で合併するかということ（国民党内における合作か、党外における合作か）である。一全大会ではい
ちおう「党外合作」ということにきまつたが、この
問題が真剣に討論されたのは、毛沢東が欠席した二
全大会であった。このときすでに孫文にあつて、党
内合作ならやってもよいという意向のあることを知
っていたマリンは、この大会の直後杭州でおこなわ
れた中共中央委員会に、はじめて党内合作による国
共合作を提案したのだ。マリンによると、杭州会議
で彼の提案に反対したものは張国燾だけで、その他
のメンバーはみな賛成したという。

だがこれには多くの疑問がある。それは陳独秀自
身のちにこの提案にたいして「中央執行委員中の五
名李守常、張特立、蔡和森、高君宇、それに私は断然
一致して反対した」と書いているからだ。また杭州
の中央委員会の宣言は「ただプロレタリア的革命勢
力と民主々義的革命勢力との合作運動のみが、真の

民主々義革命をして非常に迅速に成功させる事がで
きる」といい、その翌八月に発表された「第一次対
時局的主張」では、統一戦線について国民党その他
の社会主義各団体共産党があつまって連席会議をひ
らき、そこで民族解放の諸原則（内乱の消滅、軍閥
打倒、国際帝国主義の圧迫排除、言論出版、集會結
社、ストライキの絶対自由等々）にもとづいて一つ
の民主主義の連合戦線をつくることを提案してい
る。それゆえ中共は、すくなくとも三全大会までは
国民党との党外合作を提唱していたといえる。しか
し国民党の方では終始党外合作をみとめず、共産党
員が個人の資格で国民党に参加するならばゆるすと
いうつよい態度をとっていた。それゆえ国共合作を
どうしても実現しようとするならば、中共の方が党
内合作に同意するか、又は国民党に党外から援助を
おくるというだけの関係に満足せざるをえなかった
のだ。したがってその翌一九二三年六月広州で開か

れた三全大会では、この問題について激烈な論争がおこった。胡華の「中国新民主主義革命史」によると、この会議で陳独秀は、共産党の一切の活動を国民党の動きに順応させること、「一切工作帰国民党」を主張し、これにたいし張国燾は、国民党との合作に反対する立場をとった。この左右両極端にたいし毛沢東は、瞿秋白らとともに、国民党と「党内合作」するとともに、共産党独自の組織活動を活発におこない、国民党の革命運動に動員された大衆を共産党側に獲得することを主張したという。だが毛沢東自身その自伝のなかで、二全大会にも三全大会にも欠席したといっているのであるから、もちろんその席上で陳独秀、張国燾の左右両路線とたたかっていたというようなことはありえない。とすれば自分の主張をなんらかの形で同志につたえ、その同志をしてかれらに反対させたものであろう。それにしても党中央における毛沢東の存在はそれほど顕著なも

のではなかったし、まして本人が会議に欠席しているのであるから、この会議の議決に毛沢東の力が大きな影響を及ぼしたとはかんがえられない。だが、かれは湖南で軍閥とたたかうために統一戦線を組織した経験があり、このような統一戦線は、さいごの目的達成まで、徹底的に戦う意欲をもった中核体を必要とすることを痛感していたことは事実である。それ故かれは、国共合作に賛成したが「一切の工作を国民党に帰すること」に賛成しなかったことは十分かんがえられる。かれは共産党独自の活動が国共関係を阻害し、国民党が革命からはなれてもしかなければならぬと考えていたにちがいない（ただしかれのこのかんがえが、三全大会に大きな作用をおよぼしたとはかんがえられないが）。このことはかれのその後の言動によっても十分に立証されている。中共公認党史胡喬木の「中国共産党的三十年」は三

全大会の様子をつぎのようにのべている。これにはおそらく毛沢東の当時のかんがえかたが多分に反映されているであろう。

「一九二三年六月に召集された中国共産党第三次代表大会は、孫中山の帝國主義及び封建軍閥的民主主義反対の立場と、国民党をして労働者、農民、小資産階級、民族資本階級の革命連盟たらしめる可能性を正確に評価した。第三次代表大会（註 三中全会）はまた党内の二つの主要なあやまった傾向を批判した。一つの傾向は、陳独秀を代表する投降主義の傾向である。彼らはブルジョア民主革命は資産階級によって指導されなければならぬとし、『一切の工作は国民党に帰す』『民主主義革命が成功しても、プロレタリア階級は若干の自由と権利をえられるにすぎない』といていた。かれらはプロレタリア階級と共産党がこの革命を指導し、この革命を成功させて、はじめてプロレタ

リアに有利な条件が生まれ、それによってプロレタリアが中堅となって政権を掌握し、この政権によって国家がその後社会主義の道にすすむことが保証されるということをまったく考えていなかった。かれらは、第一次革命はブルジョア階級をしてブルジョア共和国を建国させなければならぬ。プロレタリアはただブルジョア共和国内で若干の『自由と権利』を得ることができただけで、その他のことはなにも期待できない、とかんがえた。それゆえかれらは、ブルジョア民主主義革命のなかでは、プロレタリアはただ消極的な補助的地位にたつだけで、指導的地位に立つことはできないとした。プロレタリアはブルジョア共和国が成立し、資本主義経済がさらに発展したのちに、ふたたびブルジョア階級の共和国をくつがえしてプロレタリア専制をたてる、そのときにはじめて社会主義を実現することができるとかんがえた。

これが第二次革命である。それ故かれらの主張は『二次革命論』（註 日本のおわゆる「二段革命論」といわれていた。もう一つの傾向は張国燾を代表とする閥門主義的傾向である。かれらは共産党は国民党と合作すべきではない、プロレタリア階級のみがよく革命することができ、国民党は民主主義革命を推進させないとかんがえ、共産党及び労働者、農民が国民党に加入することに反対した。大会は右傾的誤謬意見と、左傾的誤謬意見の採用を拒絶し、国民党との合作を決定し、共産党員は国民党に加入し、国民党を民主革命連盟に改組し、同時に共産党の組織及び政治上の独立を保持した。しかし第三次大会は、農民問題と革命軍隊の問題にたいしては当然おこなうべき注意をくわえなかった。」（胡喬木著、前掲書一一頁）

公認党史はこうはいつているが、実際にはこの大

会で陳独秀のいわゆる「投降主義」がこのように批判された形跡はまったくない。三全大会の宣言は、国民党は国民革命の中心勢力であり、そして指導的立場にたたなければならぬということであった。これだけでは国共合作が党内合作か、党外合作かがはっきりしないようだが、「国民党を国民革命の中心」と規定し、その国民党が国共合作は党内合作でなければ許さないという立場をとっている以上、この宣言は中共が党内合作形式に完全に同意したことを意味するものであろう。宣言の文面だけからみれば、なお若干疑問の点があっても、党中央のその後の動きが国民党との無条件合作の方向をたどったことは否定できない。そして毛沢東が党中央のこのような傾向にあきたらなかつたこともたしかであらう。

五 国共合作とコミンテルン

結成まもない中国共産党を国民党にこのようにむすびつけたのはコミンテルンのロシア代表マリンである。孫文はマリンにたいして党外合作はゆるさないが、党内合作ならゆるすということをいった。孫文によって代表される国民党は、この問題については、一つには中国の労働者、農民の力を革命に利用するために、また一つには、ソ連から十分な軍事援助をうけるために、共産党員を党内にいれることを得策とかがえた。だが国民党内にははじめから共産党にたいしてつよい警戒心をもつグループがあった。一九二二年上海で孫文とあって「党内合作」の意向をきいたマリンは、それをコミンテルンに報告した。当時コミンテルンは中国革命の担当者として

中共よりも国民党の方を重要視していたようである。一九二三年一月十二日のコミンテルン執行委員会の決議はこういつている。

「この国の独立したプロレタリア運動が弱いかぎり、中国の当面する中心的任務が帝国主義者とその国内の封建的代理人にたいする国民革命をおこなうことにあるかぎり、そして労働者階級がこの国の国民革命問題の解決に直接利害をもつがしかし絶対に独立した勢力としてまだ十分に傑出していないかぎりコミンテルン執行委員会は国民党と共産党の活動を協調させることが必要だと思う。」

国民党と共産党の活動を協調させることはよいが、その場合共産党は自分の旗の下で活動するのではない。すべて国民党の旗の下に活動するのである。こういう政策をつづけているかぎり、共産党の拡大はのそまれず、その活動は国民党の拡大をたす

けることになる。国民党が民族革命のために活動しているかぎり、それもよいが、もしも国民党内のブルジョアジーが、革命情勢の昂揚におどろいて、拡大されたその力を利用して反革命にはしろうとするとき、それをおさえるだけの力の結集はどこにも見いだせないことになる。それ故この決議は言葉の上では「独立したプロレタリア運動」の必要をみとめているが、実際にはブルジョア民族運動と協力する場合、「プロレタリア組織の独立性は、それがたとえ『胎児的形態』であつても保持されなければならぬ」というレーニンの注意をわすれ、プロレタリア組織の独立性をふくめてその「すべての活動を国民党に帰す」という結果になったのだ。

ハロルド・アイザックスはコミンテルンがこのよきな政策をとつたのは、スターリンを中心とするソ連の官僚主義者が一国社会主義建設の立場から、世界革命の約束を放棄してソ連の民族的利益を主とす

る政策をとるようになったためであると断じ、スターリンにおいては「国際資本主義の打倒のために最大の犠牲をはらうこと」は問題ではなく、ロシアの民族的社会主義の維持のためには最大の国際的犠牲をはらわせることだけが問題となつたといっている。

当時ソ連がどんな形でもいいから、その東境に友邦をもちたがっていたことは、新軍閥の呉佩孚さえも対象としたという事実によって明らかだ。一九二〇年彼が北京の政権をとつたとき「イズベスチャ」はかれに拍手をおくり、「呉佩孚は彼の旗を中国でおこりつつある諸事件の上にひるがえした。この旗のもとにできた新しい中国内閣はソ連に有利な方向をとるであろう、といっている。⁵⁾ 呉佩孚がソ連の期待をうらざり、英国帝国主義の代理人の方向に走ってしまうと、ソ連は新しい対象として国民党の孫文をえらんだのである。アイザックスによれば、これ

もスターリンの一国社会主義への政策転換の一つの現われで、スターリンはアジア諸国におけるプロレタリアの力を確信せず、ブルジョア民族主義者に同盟者を見つけようとしていたので、その結果「ブルジョア革命におけるブルジョアジーの指導的役割にこだわって、労働者の利益を即座にブルジョアジーのそれに従属させようとしていたのだ」という。この説明はたしかに当時の諸事態の核心をつくものである。国民党が民族革命の中心勢力としてその地位を確立するにつれて、ソ連の政策はますます顕著となった。一九二六年一月ソ連の第十四回党大会は、国民党の第二回大会につきのような祝賀電報をおくっている。

「われわれわれの党には、世界最初の勝利をおさめたプロレタリア革命の指導的役割りと名誉がかかっている。……もしも国民党が現在の闘争における労働者階級と農民の同盟を強化し、これら革

命の基礎的勢力の利益によって指導されるならば……われわれは国民党が東洋において同じ役割をはたすことに成功し、アジアにおける帝国主義支配の基礎を破壊することを確信する」

これをみればわかるように、ソ連は国民党をブルジョアジーの民族主義政党というよりもむしろ労働者、農民同盟の政治的表現とみていたようである。だが国民党の内部ではこの当時すでに大ブルジョアジーを代表する反共派が着々とそのヘゲモニーをにぎりつつあったのだ。

ソ連から上述の祝電をうけた国民党第二回大会（この大会では共産党員が半数以上をしめていた）から二カ月後（三月二十日）には中山艦事件がおこった。⁽⁶⁾これをきっかけに蒋介石は左派及び共産党にたいするクーデターをおこし、共産党員を党内の重要ポストからしめだす「党務整理」案を認めさせ、

党をかれの指導下においてしまった。それにもかかわらずソ連およびコミンテルンはいぜんとして国民党を、労働者、農民、知識階級、「都会民主主義」（すなわちブルジョアジー）の連合体と認め、共産党員およびプロレタリア農民分子に無条件に国民党を支持するように指令していた。ソ連の国民党にたいするこのような認識の混乱をもっと明確に示している事例もある。この年廖仲愷暗殺事件の黒幕で右派の代表胡漢民が、広東を追われてソ連にはいったが、かれはモスコイに着くと、ちまち農民インターナショナル（クレステンテルン）の主席団のなかに祭りあげられ、中国の農民代表として拍手の大波をもって迎えられたのだ。

六 毛沢東とコミンテルンの対立

ソ連の国民党の性格にたいする過信は、翌二十七

年四月十二日蔣介石による共産党弾圧、いわゆる「四・一二惨案」がおこる瞬間まで改まらなかつた。蔣介石が大規模な反共クーデターを計画している徴候は前からあったのであるが、ソ連はそれを帝国主義者のデマとして黙殺していた。四・一二惨案がおこった後でさえ、国民党の左派汪精衛一派の力を過信し、左派と共産党の連合勢力によって蔣介石を抑圧しうるものと確信し、ますます国共合作を強調し、共産党独自の働きを封じた。そのために農民運動の激化をおさえようとさえしている。そんな関係で、中共は労働者や農民に蔣介石のうごきに十分な注意をあたえることをおこたり、最後の瞬間までかれらに事態の切迫をしらせなかつた。そのために労働組合、農民組合の多数の幹部は、自分達が進路を切りひらき、その行進を歓呼の声でむかえた北伐軍のために捕えられ、殺戮されるといふ中国革命の悲劇を生んだのである。一番貧乏くじをひいたのは

陳独秀で、こういうコミンテルンの失敗の責任までも負わされて党を追われてしまったのである。

毛沢東が陳独秀「コミンテルンラインの国共合作に、はじめから批判的態度をとっていたことはたしかである。彼はおそらく一国社会主義建設のために、中国革命、いな世界革命の利益を犠牲とするソ連の傾向を見抜き、それから深刻な印象をうけたことであろう。最近フルシチョフとの論争において、彼がもっともつよくついているのもこの観点である。ながい時間の経過はあるが、そこにはなにかのつながりがあるようにみえる。ともかくかれがその当時ソ連の指導というものにある不信の念をいだいていたことは、いろいろな点にあらわれている。その思想経歴において、かつては「忠君愛国主義者」つまり右翼民族主義者であった毛沢東が、国共合作とともに広東に流れこんできた得たいの知れないソ連人たちが、よく知りもしない中国革命について、中

国人に指示をあたえるなどは、おこがましいという反発を全く感じていなかったとは考えられない。ペインもまたそれについてこうのべている。

「その年（註 一九二三年）の末にはコミンテルンは支配権をにぎったポロディンによって国民党の政策を支配できる位置にあった。広東は外国の国際的山師どもにみたされはじめた。中国についてほとんど知るところもなく、中国人に忠実でもない山師どもは、自分たち仲間て議論し、議決し、国際共産主義の名をかりて、中国歴史の幅広い流れについての権威であると自認していた。かれらが中国革命に役に立ったことを暗示するような証拠はありはしないし、外国語をよくしらず、大体外国人をひどく軽蔑している毛は、かれらに言及することはまれで、しかも、それは軽蔑的であつた。」

毛沢東がコミンテルンの指令にたいして、他の中共指導者のように盲従的でなく、ときには意識的に反対したことはたしかで、当時のコミンテルン代表 N・M・ロイのごときは毛沢東を、「一九二六年、二七年のすべての革命計画を故意にかつ執拗に妨害した人間の一人」と批判しているくらいである。

第三章 毛沢東と農民革命

一 エリート意識と使命感

論語に「子曰く、君子は器ならず」（『為政篇』）

という言葉がある。器とは「うつわ」であり、一芸一能に秀いでた人物のこと。君子はただ一芸一能に秀いでた人物ではない。君子は徳をもってすべての人の才能を生かしてゆくことのできる人物でなければならぬ。器は人に使われるものであるが、君子は器材を使うものである。かように中国では古典時代から知識階級は専門の才能をもって君主につかえるものでなく、君主とともに「国を治め民を濟う」もの、すなわち「分身の君」⁽¹⁾であるというエリート意識を植えつけられてきた。それだけに彼らは自分らこそ民の上にたち、民を指導して理想国家をつくるべく生れてきたという一種の使命感をもっていた。

「君子は器ならず」という言葉は、あらゆる点で

毛沢東にあてはまる。毛沢東は決して才能の人ではない。かれとともに第一師範に学んだ蕭瑜は毛沢東について、勉強家ではあったが学課の成績はあまりよくなかったと次のようにのべている。

「課目のなかで人にひけをとらないのは作文だけだった。英語や数学はさっぱりだし、図画にいたっては丸ぐらいしか描けなかった。これらの学課ではビリから数えた方が早かったろう。」⁽²⁾

しかし毛沢東がすべての人の才能を生かしてゆく特殊の才能をもっていたことについては多くをのべる必要はあるまい。蕭瑜は毛と共通の友何叔衡が彼にむかって、「きみがいなければ、みな潤之（註毛沢東の名）⁽³⁾のいうことをきくだらうね。ぼくにしたらってそうだ」といったことをつたえているが、湖南の有能な青年たちの人望が、かれにあつまっていたことはこれをもってしてもしるることができる。毛

沢東も自分が人を指導する特質をもっていることを自覚していたらしい。彼が国民党の宣伝部長代理をやっていたころ、同室の沈雁氷(茅盾)、蕭楚女、易礼容の三人と忌憚のない性格批評をやりあったが、そのとき、毛沢東はかれらを批評して、楚女は大衆を煽動することはできるが、教育することはできない。雁氷は大衆を教育することはできるが、組織することはできない。礼容は大衆を組織することはできるが、領導する才能が欠けているといい、そして最後に、しかし自分は大衆を組織したうえ、それを領導することもできると涼しい顔でいったという。⁽⁴⁾

毛沢東はたしかに人の上にたち、人をよくつかう「君子」であった。それと同時に彼が君子の教養からくるエリート意識と使命感を多分にもちあわせていたこともみとめられなければならないまい。

青年時代の毛沢東は蕭瑜らとともによく第一師範の校舎の近くをながれる湘江の川岸を散歩した。

そしてその中流にある「橘子洲」をながめながら、中国史のなかにでてくる人物批評などをやったらしい。蕭はそんなときに毛沢東と後漢光武帝と嚴光のことを討論したことをつたえている。光武が帝位についてから、その旧友の学者嚴光に宰相の地位をあたえようとしたところ、嚴光はそれをことわり、浙江省の富春に隠棲して釣三昧に余生をおくったという話である。それについて毛沢東は「嚴光は張良がその友漢の高祖をたすけて宰相になったように宰相を受諾すべきだった」と主張したという。その討論の内容には多少のちがいがあろうが、このような雰囲気は当時の毛沢東とかれの周辺にあったであろうことは、毛沢東が一九二五年に長沙でうたった「沁園春」のつぎの詩詞によく現われている。

独立寒秋

寒秋にひとり立てば

湘江北流

湘江は北のかたを流る

橘子州頭

橘子州のほとり

看万山紅遍

層林尽染

漫江碧透

百舸争流

鷹擊长空

魚翔浅底

——万類霜天競自由

張寥閣

問蒼然大地

誰主沈浮？

携來百侶重遊

憶往昔嶸歲月稠

恰同學少年

風華正茂

書生意氣

揮斥芳猷

指点江山

看よ、万山紅くわんざいあまねく

層林ことごとく染むるを

漫江碧透まんきやうひくとおり

百舸流れを争う

鷹は長空を撃ち

魚は浅底を翔く

——万類は霜天に自由を競う

張寥閣よ

蒼然たる大地に問え

誰か浮沈つちかきを主とする？

百侶を携えて重遊し

往昔嶸嶸の歲月しげきを憶おもう

あたかも同学の少年

風華正茂し

書生の意気は

芳猷ほういをふるい斥はきく

江山を指点し

激揚文字

糞土当年万户侯

曾記否？

到中流急水

浪過飛舟

文字を激揚し

当年の万户侯を糞土とす

曾つて記するや否や

中流急水に到つて

浪は飛舟をすぐるを。

この詩のなかに毛沢東の「乃公いはずんば」というエリート意識と、自分の天職にたいする使命感をみないものはまた何をかいわんやだ。明治維新の志士達をうごかしたものが儒教で養われたエリートの使命感と、祖国の危機感であったことは私達はよく知っている。毛沢東ももし当時の日本に生れていたとすれば、彼の身につけた教養や家庭環境（富農の息子）からみて、当然志士達の道をたどるはずの男であった。

しかしながら毛沢東が当面した祖国の危機は、日本のそれとはちがってはるかに深刻かつ複雑なもの

だった。おくれた国家を近代化し、民族統一国家をつくって、西欧帝国主義の侵入を排除するためには、国民のエネルギーをその方向にむかって結合しなければならぬことはよくわかる。それ故その運動の旗じるしとして、日本でも中国でも、エリートたちになじみ深い「忠君愛国」が登場したのは当然のなりゆきだ。ただし中国の日本とちがう点は、民族統一の精神的中核となるべき清朝が異民族出身であって、民族国家形成時代のシンボルとしての使用価値が限定されていたことである。その結果、民族国家形成時代のチャンピオンたるブルジョアジーの意見が清朝擁護と清朝打倒にわかれ、のちに後者の潮流が発展し、結局清朝を清算してしまった。だが問題はそれからで、清朝なきあとだれがこの広大な中国を統一し、国民のエネルギーを結集し、諸外国の侵略をふせぐかということになった。ヨーロッパで国家の近代化を担当したのはブルジョアジーだが、そ

れは帝国主義時代においてはではない。かれらは多くのばあい国民を代表して近代化の障害となっていた国内の封建主義とだけ戦えばよかったのである。だが中国の場合にはちがう。この国では、国内の封建主義が強大な帝国主義と緊密に結びついて、近代化をはばんでいた。同時にまたブルジョアジーの内部にも、これら帝国主義や封建主義と結びつくものがあった。そのうえブルジョアジーの新しい青年たち自身ブルジョア革命よりもプロレタリア革命に、より多くの興味をもつような時代になっており、地つづきのロシアではすでに彼らの夢が現実になっていたのである。このような環境のなかではブルジョアジーのなかからソ連に援助をもとめるものもでるし、ブルジョアによる中国近代化に絶望して、プロレタリアートによるそれを考えるものもでてくるのは当然だ。前者のよい例は孫文であり、後者のそれは陳独秀である。毛沢東の場合は、はじめは明治維新の

志士と同じように「清朝維新」を考え、つぎに、すでにのべた当然のなりゆきにしたがって孫文の革命派にはしり、三転して陳独秀の共産党に走ったのである。孫文にしり、陳独秀にしり、また毛沢東にしり、かれらの経歴と行動のしめしているあらゆる特徴からみて、その動機の根底にあるものは儒教的教養からくるエリート意識と、その使命感であったことはあきらかである。それは同時代に生まれ、同じ東洋に生をうけたわれわれが皮膚感をもってしても知ることができるような気がする。

二 中国革命の原動力はなにか

陳独秀や毛沢東が中国共産党を組織した当時は、中国における近代的工業プロレタリアートの数は約二百万（一九二二年の調べ）といわれていた。中国の工業は歐洲戦争のおかげで急速に発展したもので、

で、まず中国工業界の花形紡績工場の数は一九一六年わずか四二であったが、一九二三年には一二〇になり、紡錘数は一、一四五、〇〇〇から三、五五〇、〇〇〇、すなわち三倍以上にはねあがっている。製絲工場は一九一五年には五六にすぎなかったが、一九二七年には九三に、煙草工場は一九一五年の四しかなかったが二七年には一八二に飛躍している。一九一三年の指数を一〇〇とすると、一九二三年にはつぎのような数字が現われている。石炭生産一八二・五、鉄鉱生産一八〇・六、絹輸出額一五二・三、豆油輸出額四三二・五、紡錘数四〇三・九。

このような工業発展のおかげで、中国にもプロレタリアートが階級として出現し、歐洲戦争直後にはすでに百五十万に達していた。中国には昔から手工業が発達していたので、この外に約一千万人以上の手工業労働者がいたからそれを加えればかなりの数になる。面白いことに、一九〇五年革命当時のロシ

アのプロレタリア人口は丁度百五十万であり、都会及び村落におけるその他の労働者の人口は一千万であつたから、兩者の数字はほぼ同じくらいであつた。だが当時のロシア人口は、中国のそののほぼ四分の一であつたからプロレタリアの全人口にたいする比率は中国よりもはるかにたかい。中国のプロレタリアートはこの国の近代工業が上海、天津、青島、漢口など外国租界のある大都市に発達した関係上、これらの地区に集中してゐた。かれらは日常生活において列強帝国主義の圧力を体験してゐたの

で、第一次大戦直後ヨーロッパにおこつた民主主義、共産主義の潮流には目ざましい反応をしめした。かれらがはじめて近代的意味における労働組合をつくつたのは一九一八年であるが、それから一カ年後には五・四運動の政治的示威運動に参加し、さらに六年後には、帝国主義反対の全国ストライキをおこすまでに成長してゐた。しかし四億の人口（その

九十パーセント以上が農民）にたいする二百万という数はいかにもすくない。しかしかれらをもし農民を革命に動員することができれば、その成功はうたがいない。ところがプロレタリアートの大都会集中は農民との結びつきという点ではかなりマイナス面をもつてゐる。これら大都会と内陸諸省との間では思想的文化的ギャップが大きく、そのために農民運動が労働運動にたちおくれ、後者だけが独走する傾向があらわれてゐた。

中国ではじめて農民協会ができた省は広東省だが、その広東省でも一九二五年に農民協会ができた県は、全省九十六県のうちわずか二十二県にすぎなかつた。一九二五年五月一日広東で第一次全国労働大会（委員長林偉民、副委員長劉少奇）がひらかれたとき、同時に第一回広東省農民協会連合会もひらかれたが、前者には全国主要都市の組織労働者五十七万人を代表する二百三十人の代表が参加したが、後

者は農民協会員十八万人を代表する百十一人の代表が参加したにすぎない。この動員数の相違は全国における労働者、農民それぞれの人口を考慮にいれたときにはじめてその大きさに驚かされる。

労働者と農民の結びつきがうまくいかないもう一つの理由は、中国における都会と農村の伝統的な関係のなかにある。周知のようにヨーロッパの封建貴族の城は、かれらとその臣下だけの住居であつて、商工業者の住む都会はその外部に発達した。これに反し中国では、封建貴族のすむ城壁のなかに商工業が発達し、城がそのまま都会として発達した。それが中国語では小都会のことを城市といい。大都会を都城といっている。このことから両者のあいだには次のような相違が生れてきた。ヨーロッパでは商工業者が封建貴族から財力で自由を買いとり、またときには武力で対抗して貴族の領域内に治外法権の都会をつくつていった。そして都会には市民的自由が

発達し、封建的貴族の束縛を嫌う農民達は自由をもとめて都会にのがれ、都会の勢力を拡大してゆくとともに、市民的自由の幅をひろげていった。これが封建制度を崩壊する原因となつたのである。

中国では商工業が封建貴族の城壁のなかに発達した関係上、商工業者と封建貴族との間には対立関係よりも協力関係が発達した。商工業者は貴族から土地と官位を買つて貴族に列したり、租税徴収を請負つて中間利益をとつたり、後者の保護のもとに農民にたいする高利貸を兼業したりしている。こうして封建貴族、地主、商工業資本の「三位一体」の牙城たる都会は、全体として農村の上に君臨していた。それ故革命の場合には、農村におこつた暴動がひろい面積にひろがり、都会という点をとりかこむ形になつた。そして革命が不成功におわれれば、暴動の主謀者の首が城門にさらしものになるのがつねだ。中国においては都会と農村がかやうに対立しているから

農民は都会を敵視し、そこからくるもの（徴税人、高利貸の手代、官僚の命令通達者など）をおそれていた。それ故毛沢東は矛盾論のなかでこういつている。

「都市と農村との経済的矛盾は資本主義社会においては（そこではブルジョア階級の支配している都市が農村を残酷に略奪している）また中国の国民党が支配している地域においては（そこでは外国帝国主義と自国の買弁的大ブルジョア階級が支配している都市が、農村をきわめて野蛮な方法で略奪している）きわめて敵対的な矛盾である⁽⁶⁾」

以上のことからもうひとつ言えることは、中国の革命の原動力は、過去においても農民のなかにあり、国民党の時代においてもそうであったということである。中国歴史の発展には一定の周期があることはよく知られている。一つの王朝がその最盛期を

おわると、官僚の腐敗、国費の乱費がはじまり、それがあまりひどくなると、負担にたえかねた農民がたちあがって暴動をおこす。しかし農民は視野がせまく、自分の直接の圧迫者たる地方の権力者と戦うことはできるが、自分達を圧迫する全国的機構（王朝）をたおす決意をもつにいたらない。農民のこの欠点はしばしば他の階級出身者——その多くは読書階級のいわゆる「先知先覚」——によって利用される。彼らは農民暴動の指導権をとり、旧王朝を倒すとともにかれら自らの新王朝をたてる。そしてしばらくの間は農民の要求をうけいれた新政治をおこなひ、平和な日がつづく。その間にいつのまにか伝統的な官僚の腐敗がはじまり、農民の負担は増大してゆく。

その結果ふたたび農民が武器をとって立ちあがり、その王朝を倒すようになる。中国の歴史はこういう悪循環のくりかえしによって発展し、そしてそ

れにはつねに農民が原動力になり、その血によって推進されていったのである。

この悪循環の最後のケースは太平天国の農民暴動であった。このときは洪秀全という読書階級出身の野心家に動員された農民が、清朝を殆んど顛覆させるところだった。だが農民戦争が成功するチャンスのある時代はすでに去った。清朝を保存し、その腐敗を利用することにより多くの利益を見こした帝国主義がこの闘争に介入することによって、農民から永久にそのチャンスをうばってしまった。これは儒教の伝統的な革命理論の破産を意味する。中国革命はこれまでのように国内的規模においてもはや解決できない時代に突入していた。中国革命を成功させるためには、国内の封建主義とむすびつく帝国主義を、国内から一掃しなければならなかった。この革命理論は、伝統的な革命理論のらち外であるから、この国の「先知先覚」は自分自身で、あらゆる方法

を模索した。康有為は清朝の光緒帝を明治天皇のよ
うな立憲君主に仕たてあげることによって、この国
を近代化し、それによって帝国主義を一掃しようと
考えた。孫文は同じ目標を民族ブルジョアジーを
中心とする共和制の樹立によって達成しようとし
た。これらはいずれも支配階級だけをおきかえる政
治革命である。しかし陳独秀、毛沢東らは、そのよ
うな姑息な方法では中国革命は不可能だと考え、国
際帝国主義を国内から一掃するためには、帝国主義
打倒の理論マルクス・レーニン主義とともに、国際
プロレタリアートの力をかりなければならぬという
結論に到達した。それはかならずしもかれらがマル
クス主義の研究によって、プロレタリアートの階級
意識をもつようになったから、そういう考えかたに
なったのではない。彼らは懸命に中国の当面してい
る危機を解決する方策を模索しつつ、それをさがし
あてたのである。いうなれば、自分らがこの国を救

わずして誰が救えよう、というエリート意識（予ハ得サニ斯ノ道ヲ以テ斯ノ民ヲ覺サントスルナリ、予之ヲ覺スニ非ズシテ誰ゾヤ）孟子、万章上）が決意の根底にあり、マルクス主義やプロレタリア階級意識は、ただこの決意に具体的な方向と方法を教示したにすぎない。もちろん、それは彼らの決意を具体化し、実践にかりたてる重要な要因の一つではあるが、さりとて彼らはマルクス主義者になる以前に、すでに先知先覚として現場の打破——それは当時の情勢としては、結局において革命につながる——を志していた。あとのすべてはその延長なのである。いふなればかれらはマルクス主義者たる以前に革命家だったのだ。とくに毛沢東の場合は、かれが近代のプロレタリア階級がどういうものかをほんとうに理解していたかどうかさえ疑わしい。かれが少年時代をおくった湖南省湘潭県には、もちろん近代的プロレタリアートはいなかった。湖南省城の長沙に

も、近代的な産業でなく、近代的プロレタリアートもいなかった。かれはマルクス主義の書物によってプロレタリアートがすばらしい歴史的使命を託されていることを知ったが、それを実感としてとらえることはむずかしかったであろう。こう考えてくると、かれが共産党にはいったのはプロレタリア階級意識をもったが故でないことがわかる。かれは前章でみたように、長沙で労働組合運動でも活動してかなりの成功をおさめているが、それについての著書は一つもない。またその期間もみじかく、間もなく農民問題の方に熱中してしまった。慧眼なベインは毛沢東のプロレタリアにたいする奇妙な冷淡さについてこうのべている。

「マルクス主義理論は『革命の前衛』が『目覚めたるプロレタリアート』でなければならぬと要求する。そして今ではじめてかれは湖南の小工業都市を知るようになった。農民のことは一時放棄され

ていた。それはかれがもはや農民に興味をいだかなくなつたからではなくて——かれらがマルクス主義理論のなかにその場所をもたなかつたためである」

農民は「マルクス主義理論の中にその場所をもたなかつた」かもしれないが、中国の伝統的的革命理論においては革命の原動力であり、歴史の推進力であった。そしてこの分野はかれの生活やかれが学んだ中国史、少年時代によんだ稗史のなかでもなじみぶかく、かれの皮膚感をもつて感じていたものである。

三 かれと農民運動

毛沢東が農民の組織に従事するようになったのは一九二四年終りからである。自伝によると、かれは

一九二四年の春広東にゆき、国民党の全国大会に出席し、三月には上海の国民党執行委員と共産党執行委員会の仕事を兼任したというから、広東にはちょっと行つただけで、すぐ上海にもどつたようだ。その年の終りに上海で病気にかかり、休養のために湖南にもどつた。しかし湖南はかれの地盤であるから暢気に休養などはとつてはいられなかつた。当時湖南の農民のあいだには、大革命の刺戟によつて革命気運が盛りあがつていたので、毛はただちに農民の組織工作にのりだしたのだ。ペインは毛が病気で故郷にひきこもつたことが、かれにとつて非常なプラスだつたところ書いている。

「この引籠りがひじょうな結果を生むこととなつた。陳独秀の率いる中国共産党は、レーニンの提出した方法によつて現存政府の打倒に没頭してゐた。革命の前衛としてのプロレタリアートが、その選出した代表によつて政府の機能をひきつぐで

あろう。これが古典的に理解されている古典的テーゼであった。毛は自分の村で寝台に横たわりながら、そのときはじめて、この共産党テーゼのもつ妥当性に疑問をいだきはじめてのた。かれが共産党と国民党とを結合する自分の仕事で妥協に馴れていたのも、中国共産党の進展は妥協の時期を通じてのみ到来するのではないかと考え始めた。プロレタリアートの叛乱という理論は疑わしいものであった。また中国の力は農民の中にある。革命の種子は広東や上海にあるのではなく、韶山の⁽⁸⁾ような無数の小さな村々にあるのではないかと

では毛自身はどういっているか。

「私は上海で病気になるていたのですが、湖南に
いるあいだにそこの大農民運動の中核を組織しま
した。それまで私は農民のあいだの階級闘争の運

動を十分に理解していなかったのですが、五・三
〇事件（一九二五年）以後またそれにつづく政治
活動の大波がつづくあいだに、湖南の農民はひじ
ょうに戦闘的になってきました。私は自分の休養
していた家をさって、農村の組織工作をはじめま
した。わずか数カ月の間に、われわれは二十以上
の農民組合を作りあげ、地主のふんげきを買い、
地主連は私の逮捕を要求しました。趙恒は私のあ
とを追って軍隊をさしむけ、私は広州（註 広東）
にげました」⁽⁹⁾

湖南におけるこの経験がものをいって、広東に行
くとかれはすぐに、国民党政治部の機関誌「政治週
報」の編輯人に任せられ、同時に農民運動の組織者
を訓練する責任を負わされた。かれのひらいた講座
には二十一の地方の代表が出席した。まもなく国民
党宣伝部長（と自分では言っているが、部長は汪精

衛、毛はその代理)となり、また中央委員候補になつた。

陳独秀はじめ党指導者の大部分が上海のフランス租界にいたので、毛は国共合作の現場広東における党のスポークスマンのような役割りもしていた。

ペインはこの当時のかれを評して、国民党への「協力行動の象徴的人物」だったといっている。かれはなぜ国民党との合作にかように熱心だったのか。それは国民党が孫文の「耕者有其田」をまじめに実行するかぎり中国革命にとって役立つ存在だとかんがえていたからである。農民の援助なくしては北伐軍の進軍がむずかしいことがわかつていたので、国民党は耕作農民に土地をあたえるため大地主から土地をとりあげることがを討論していた。毛沢東は国民党の圧力によって農民運動を展開し、農民を革命に動員することによって中国革命を完成しようとかんがえた。いふなれば毛沢東は伝統的的革命様式をマルク

ス・レーニン主義理論によつて説明して、この時代に適用させようとしたのである。そのためにはこの時代における各階級の勢力関係を分析し、プロレタリアートがすでに階級として出現していても、中国の現状では革命の原動力がまだ農民にあるということを証明し、主張しなければならなかった。毛沢東がこの当時に書いた二つの論文「中国社会各階級の分析」(一九二六年三月)、「湖南農民運動考察報告」(一九二七年三月)はこの目的のためにものされたものである。この二つを比べると前者においてはかれの立場はまだはっきりあらわれていないが、後者においては非常な確信をもってかたられ、かれの前に立ちはだかるものをすべてはじきとばすような勢をもっている。この相違はこの二つの論文の間にある一カ年という時日に重要な意味がある。そのあいだの一日一日は中国革命の運命を決定する時間であった。このあいだかれ自らが湖南の農民大暴動を指

導し、中国共産党の事実上の指導者陳独秀（およびその背景となっていたスターリン路線）と戦って、毛沢東路線を主張するまでに成長していたからである。それ故この著書をみれば毛沢東路線の概要を知ることができる。

四 湖南農民運動考察報告

この著書は一九二六年のはじめかれが広東農民運動視察員として湖南へ派遣されたときの視察報告である。当時湖南の農民運動は最高潮に達しており、広東、上海には「農民の暴状」についてひどい噂さがひろがっていた。⁽¹⁰⁾北伐軍のなかには地主出身の軍官が多く、国民党のなかには農民をこのまま放置することはできないという声があつた。共産党内でも陳独秀を先頭とする主流派は、農民運動の現状は国共合作に害あり、これを緩和しなければ

ば国民党をして革命から逸脱させるおそれがあると考へていた。それ故党が毛沢東を湖南に派遣したことは、農民運動にたいする新方針をたてるための調査のためであつた。ところがそれにあつた毛沢東の解答は一言にしていえば「農民の暴状がはげしければはげしい程よろしい」ということであつたこれを毛沢東自身の言葉にきくことにしよう。

「私は今回湖南にかえり、湘潭、湘郷、衡山、醴陵、長沙五県の状況を実地に視察しました。一月四日から二月五日までの三十二日、農村や、県城に経験ある農民と農民運動工作の同志を召集して調査会をひらき、詳細にかねらの報告をききその結果かなりのデータをあつめました。多くの農民運動のすじ道は、漢口や長沙の紳士階級からきくことのできたすじ道とはまったくちがつておりません。農民運動に関するところでもないことは実際にみないことを見、きかないことを聞いているもの

であります。私はこういふことは多くの地方のどこにもあることだと思ひます。農民運動に反対する各種の議論はすべてすみやかに矯正されなければなりません。革命当局の農民運動にたいする各種のあやまった処置は、かならずすみやかに改められなければなりません。かくしてのみ革命の前途に利益があります。なんとすれば現在農民運動のもえあがりはきわめて重大な問題で、非常にみじかい時間に幾千万という農民が中国の中部、南部、北部の各省でたちあがり、その勢力は暴風、驟雨のごとく、そのはやさ、そのはげしさは、どんな大きな力もおさえることができないほどだからであります。農民は彼らを束縛する一切の網の目をつきやぶり、解放の路上にむかつて舞進しています。あらゆる帝国主義、軍閥、貪官汚吏、土豪劣紳らは、ことごとくかれらの墓地に葬られようとしています。あらゆる革命党派、革命同志

は、かれらの面前で試験をうけ、かれらによってその取捨を決定されようとしています。かれらの先頭にたつて、かれらを指導するか、それともかれらの後ろから、かれらを指さして批評するか、それともかれらの正面に立つて反対するか、中国人はすべてこの三つを選択する自由をもっています。時局は諸君らがすみやかにそのいずれかをえらぶことをせまっています」(毛沢東選集原文第一巻一三頁より摘訳)

こういつてかれは開口一番、農民問題が革命にとつていかに重大なものであるかをのべ、農民問題にたいする態度いかんが革命側と、反動側とを区別する基準であるとさえいつている。このような観方はプロレタリアを主役とする革命論をとっている陳独秀らと正面から対立するものである。そこでかれは陳独秀の「農民はやりすぎる」という観方が、結局

においては反革命の考え方とむすびつくことを次のように強調している。

「農民が田舎でおこした謀叛は、紳士達のあまい夢をみだしました。田舎の消息が都会につたわると、都会の紳士はただちに大さわぎをしてのしりはじめました。私をはじめて長沙にいったとき、各方面の人に会い、多くのうわさ話をききました。が、中層以上の社会人から、国民党右派までは、一言でいえば『とてもにががしいことだ』^{（「糟得很」）}といっています。革命派の人さえもこの『にががしい』一派のわめきたてる町中いっぱいのうわさ話の圧迫をうけ、眼をつぶって農村のありさまを頭にえがこうとすると、すっかり気おちがしてしまい、もうこの『にががしい』という一字を否認できなくなります。非常に進歩的な人でさえ『これはにががしいことかもしれないが革命の過程のなかでは当然おこること

だ』というにすぎません。要するにどんな人でもこのにががしい（「糟」）という文字を完全に否定する方法がないのです。ところが実際はどうでしょう。前にいったように広大な農民大衆が、これらの歴史的使命を完成するためにたちあがっただけです。農村の民主勢力が農村の封建的勢力をくつがえすためにたちあがったのです。宗法封建性（註 大家族主義の封建性ともいうべきか）の土豪劣紳、横暴な地主階級は、幾千年にわたる専制政治の基礎であり、帝国主義、軍閥、貪官汚吏の障壁でありました。この封建勢力をくつがえすことはすなわち国民革命の真の目標であります。孫中山先生は国民革命に努力することおよそ四十年でありましたが、その間になすべくして、なしおおせていかなかったことを、農民はこの数カ月間になしとげたのであります。これは四十年、いな数千間にこれまで成就したことのないことなかつたら

しい功績です。とてもよいことです。『にがにがしい』なにもものもないのです。『にがにがしい』とは明らかに地主の利益の側にたつて、農民に打撃をあたえる理論であります。明らかに地主階級が封建旧秩序を保存し、民主的新秩序を建設阻止する理論であり、明らかに反革命の理論であります。革命の同志はすべて農民についてたためをいってはいけません。あなたがもししっかりした革命的観点をもっている人ならば、農村をひとまわり見てくればこれまでに未だかつて感じなかつた痛快さをおぼえるにちがいありません。そこでは何万という奴隷——農民がかれらの食人的な仇敵をひっくりかえしたのです。農民の行動は完全に正しかったのです。かれらの行動はともよかつたのです。『とてもよい』というのが農民やその他の革命派の理論です。すべて革命の同志は、国民革命には農村の一大変動が必要だということ

を知らなければなりません。辛亥革命はこの変動がなかったので失敗しました。今この変動があるということはまったく重要なことです。すべての革命同志は、この変動を擁護しなければなりません。さもないとその人は反革命の立場にたつことになるでしょう。」（選集第一巻七頁）

毛沢東は冷静に論理をつみかさねて結論をだすというタイプではない。かれは論理をつみかさねるかわりに、誰もがよく知っている事例をあげて、その事例にむすびつく共通の階級的情感にうったえて結論を承認させる。これはデマゴグのよくやる手であるが、かれの場合には、読者に論理の飛躍を感じさせない。もっと証明の必要があると思われるところを、かれは論理を展開するかわりに、だれもが知っている、きわめて明快な実例をあげて、それにあとの説明をまかせる。たとえば農村の一大変動が必要

だということをお説くために、かれはただ一言「辛亥革命はこの変動がなかったので失敗しました」というだけで済ませている。これは中国革命にたずさわっていたすべての人々が痛感していた事実であるから、これ以上の説明の必要はないのだ。つづいて彼は農民運動反対派の主張を一つ一つ撃破してゆく。

「一般の人は『農民協会はやってもよいが、今の農民協会の行動はあまりやりすぎる』とっています。これは中立派の意見であります。実際にはどうでしょうか。農会の権力は絶対であり、地主に話さえさせず、地主の威風をすっかり地におとしてしまいました。……かれらは土豪劣紳に罰金を課し強制寄付を命じ地主の轡なまを打ちこわしました。農会に反対した土豪劣紳の家には一群が乱入し、豚をころし、穀物を出させます。土豪劣紳の娘や若奥さんの象牙をちりばめた床も、その上をあるきまわってめっちゃめっちゃにします。ややもす

れば人をとらえて、紙でつくった高帽子をかぶせてひきまわし、『劣紳め、今日こそ思いしつたか』とやりたいほうだいのことをしていきます。これらすべては今までにないことで、農村には一種の恐怖状態が作りだされました。これこそ若干の人々が『やりすぎる』とか『やりすぎをなおせ』とか、『お話にならない』とか言っているものであります。』

毛沢東は紳士の目からみて、農民がこのように「やりすぎる」ことはむしろ当然のことで、それあるがゆえに革命なのだという。そこで有名な彼のつぎの言葉が生まれた。

「革命は、お客をよんで御馳走したり、文章をつくったり、画をかいたり、刺繍したりするような雅致のあるものでもなく、また、おだやかにゆずりあうような、礼儀正しいものでもありません。

革命は暴動であり、一つの階級が他の階級をおし
たおす階級的暴力行動であります。農村革命は封
建地主階級の権力をおしおす革命であります。
農民がもしも巨大な力を發揮しなければ、幾千年
も根ぶかくかたまっている地主の権力をたおすこ
とは絶対に不可能です。」

当時農民協会の幹部のなかには貧農ばかりでな
く、農村に土地をもたない「痞子」がまじっていた。

そして彼らが農民暴動のさわぎのなかで悪事をはた
らいた事実もあった。そこで国民党の右翼は、この
ことを利用して、農民運動がすべてごろつきによっ
て指導されているかのようにいい、「農民運動は痞
子運動だ、現在の幹部をかえなければいけない」と
いう声をあげていた。毛沢東は彼らのいわゆる「痞
子」というのは、紳士連自身が泥沼のなかにつきお
とした農村社会で地位のないものの総称であり、そ

れが現在頭をあげ、農民協会を牛耳り、紳士連をな
ぐりつけているのであるから、こういう声が紳士連
の間からおこるのは当然のことであるという。

「痞子」こそわれわれのいう「革命の先鋒」なの
だと、農村現状を弁護し、進んで革命の敵と味方を
区別するために、農村社会の階級分析を行ない、貧
農こそ革命の主要力量であると結論する。

「農村人口中、貧農は百分の七十、中農は百分の
二十、地主及び富農は百分の十を占めており……
この百分の七十が農民協会の中堅であり、打倒封
建勢力の先鋒であり、これまで多年の間成功しな
かった革命の大業を成功させた元勳であります。
貧農階級（紳士連の話のような「痞子」はいませ
ん）がなければ、現在のような農村の革命状態を
つくりだすことはむずかしく、土豪劣紳を打倒
し、民主革命を完成することは絶対に不可能でし
た。」

そこで彼は農民運動と、中国の民主革命がいかなる関係にあるかを、農民の身近かにある色々な実例をあげて説明する。

「中国の男は普通次の三つの系統をもつ権力の支配をうけなければなりません。即ち、

1 一國、一省、一県から一郷にいたる国家系統
(政権)

2 一族の社、その支社から家長にいたる家族系統
(権族)

3 閻魔王、城隍廟王から土地の菩薩にいたる冥府系統、および玉皇、上帝から、やおよろずの神仙にいたる神仙系統——これを総称して鬼神系統——(神権)

女にいたってはその上に男の支配(夫権)をうけます。この四種の権力——政権、族権、神権、夫権——はすべて封建族長支配の思想と制度を代

表します。それは中国人民、とくに農民を束縛する四つの極めて大きな縄ひもであります。農民が農村でいかに地主政権をおしたおしたかは、すでにのべたとおりであります。地主政権は、あらゆる権力の基礎であります。この政権がおしたおされたならば族権、神権、夫権もそれともなつて動揺しはじめます。(それ故)農会の勢力が盛んな地方では、一族の長や祠堂、資金の管理人はもう一族の子孫の人々に圧迫を加えようとしません。——祠堂で行われた『尻打ち』や『溺殺』『活き埋め』などの残酷な刑や、死刑を二度ともしだすことはないようになりました。」

もちろん夫が妻にひどい仕うちをすれば、妻は農会に訴えるから、夫権の圧迫もなくなる。農民運動がおこると、婦女も「農村女界連合会」を組織したところが多い。こうして「あらゆる封建、宗法(一

族のおきてによる支配)的思想と制度は、農民権力の上昇とともに動揺する」こととなった。

五 毛沢東と陳独秀の相違

毛沢東のこの報告の論旨のすすめ方は、中国共産党の中央委員会を構成していた知識階級からは、卑俗にすぎるとかデマゴグ的とかみられたかも知れない。だが農民運動の渦中にあつた農民達やかれらとともに働いている革命者工作者達は、そのなかに農村の実情に即した道理と、毛沢東の農民にたいする愛情をみいだしたのである。かれらの一人であり、後に毛沢東の思想上のアドバイザーとなった陳伯達は、その著「湖南農民運動考察報告を読んで」というパンフレットの冒頭でこういつている。

「この文章のなかには、事実がなんと生き生きと反映していることか、熱情がなんとあふれるばか

りに表現されていることか。一つの句、一つの文字にまで革命と労働人民の無限の歓喜と、反革命と食人的搾取者にたいする、和解することのできない仇恨がしみとおっている。」

毛沢東がここにいわれているように、農民のそれと全く共通する歓喜と仇恨の感情をつよくもつようになったのは、かれがマルクスシズムの書物をよんでプロレタリアイデオロギーをもったからであろうか。それとも彼が湖南の農村に育ち、早くから農民のみじめな生活を知り、その上に中国の古典をよみ、農民を革命の動力として、国をたち直すことが先知先覚の天職であるという使命感をもっていたからであろうか。この二つのものはもちろん相互にかさなり合つて、同じ方向にかれを推進させてはいるが、決定的な要因は後者であつて前者でないことはすでにのべた通りである。これこそ毛沢東をして陳

独秀と袂をわかつたしめた要因なのである。陳伯達は同じ本の中で、毛沢東と陳独秀の相違についてのべているが、それは毛沢東と党中央との闘争の性格を知るうえに重要であるから、少しながいがここに引用しよう。

「一九二四〜二七年の革命時代、毛沢東の代表するこのようなボルシェビキ的革命方法論にたいして、もう一つの方論があった。これが陳独秀を代表するメンシェビキ的方法で、この種の人は毛沢東同志がつねに『本本主義』(本を本とする主義)といっている人々である。かれらは口ではいつも『革命』という言葉をかたっていた。とくに大衆がまだ大発動しないときには、自らを大へんな『革命家』か『英雄』のように描きだすことができた。だがかれらは書齋のなかで『革命』計画をつくり革命のブループリントをえがきだし、大衆を叱咤してかれらの計画又はブループリント

に従わせようとするだけであつた。もしも大衆の闘争が若干ちがつてきて、かれらの計画やブループリントから走りだそうとするとき、とくに大衆が大暴動をおこし、自分らの意志によって『かれらを束縛する一切の網の目をつきやぶろう』とするがいなや、これら『本本主義』の人はおどろいて叫び出す、『いや…諸君、とうとうほんとにやりはじめたな、まあちょつとまちたまえ、僕にはまだ妙計がある！ まず僕をして敵と談判させたまえ、諸君はしばらくひと息いれていたまえ』それにつづいておこりだす『えーい、諸君、なんてこつた、諸君、なんの知識もないくせに、なぜ僕の命令をきかないのか。』最後に頭をふりながら、なげかわしげにのしる、『社会はひどく変わったものだ。なにもかもでたら目で、めちゃくちゃでもうどうにもならない、どうにもならない、諸君勝手にするがいいさ。』もしも大衆が失敗でもす

れば、かれらの言い分は一層多くなり、いぼりかえる。『当然の結果だ、僕はずつと前からこうなるだろうと感っていた。僕の話をかかないから、こんな結果になるのは当然さ』毛沢東同志は『中国革命戦争の戦略問題』のなかで、『革命戦争は民衆の仕事である。つねに先きによく学んでから実行するのではなく、実行しながら学ぶこと、実行すなわち学習である』といている。もちろん単に革命戦争がかくのごとくであるばかりでなく、各種の大衆革命活動はみなつねにこうなのだ。しかしこのような真理は『本本主義』の人とは全く相容れない。……

農民運動が発動しはじめたとき陳独秀が書いた第三回中央拡大執行委員会決議案（一九二六年九月）は、すなわち農民運動に限界を劃定しようとしたものである。かれはそこでこう言っている。『農民運動は各地において均しく左傾的弊害をお

こしている。あるいはスローガンが高すぎたり、往々にして敵を打たないうちに味方の方がすでに非常に大きな損失をうけてしまったたりしている』と。大衆がたちあがつたばかりのとき、陳独秀自身もそのとき敵をまだ打倒していないことを認めていながら、かれはもうすっかりわずらわしさに耐えなくなり、大声で『これは過激すぎる』とわめていた。大衆運動が活発になり、有利に展開し、反革命があらゆる方法で抵抗しつつあるとき、陳独秀はかえって『味方はすでにひじょうな損失をうけた』といて、農民運動を制限する口実にした。陳独秀はまたそこで『地主と貧農が衝突したとき、なんとかして旧農会（革命以前土豪劣紳が操縦していた合法機関）をして調停の地位にたたしめるようにすべきである』といている。陳独秀は農村問題の解決にあたって、農民大衆の闘争において決定するのではなく、旧『農

会』の調停できめようとする。調停——これが陳
 獨秀の根本觀念だ。かれのこの根本觀念はすなわ
 ち大衆を輕視し、大衆を制限し、大衆を否認する
 觀念、すなわちメンシェヴィキの方法論である。
 革命の一つの新しい事物が、大衆のなから発現
 しはじめたとき、陳獨秀はこれを輕視し、衷心か
 ら歡迎しないばかりかあえて正視しようとせず、
 それにわずらわしささえ表示する。陳獨秀のこの
 態度と、毛沢東同志の態度を比較してみたまえ、
 メンシェヴィキとボルシェヴィキの相違が一目瞭
 然であらう。⁽¹¹⁾

ここに指摘されているように、中国革命における
 毛沢東路線の正しさは、歴史の進行によって十分証
 明されている。そして陳獨秀は失敗の責めをおわさ
 れて、中国共産党から追われることになった。しか
 し陳獨秀は、これまで基本的な点ではコミンテルン

に、すなわちスターリンの指令に忠実にしたがって
 きたのだ。それ故その失敗にはスターリンも十分責
 任がある。ということは、毛沢東とスターリンは中
 国革命についての見解が根本的にちがっていたこと
 を意味する。次章ではこの点を、当時の文献にもと
 づき、具体的に証明してゆこう。

第四章 毛沢東とソ連首脳部の見解の相違

一 農民問題にたいする国民党及び

共産党の態度

毛沢東を知るために「湖南農民運動考察報告」に表現されている毛沢東の態度と、当時の国民党及び共産党首脳部の農民運動にたいするそれがどんなにちがっているかをまず知る必要がある。

一九二六年十月国民党は主として革命に農民大衆を動員する必要上地租を二五パーセントに、高利貸の利子を年二〇パーセントに制限することを約束した。が、実際にはほとんどなにもしないうちに農民自身がさき立ちあがって直接土地の没収を行なうようになつてしまつたのだ。事態の急転にあつた国民党は一九二七年三月その対策について討議したが、結局貧農問題の解決策として「貧農の資本の欠乏を解決するために」農業銀行を建て、年利五パーセントの貸款をおこなうという提案をしたにすぎな

かつた。同時にこの會議は農民の土地問題を再検討するためにあらたに土地委員会を設けることにした。翌四月二十七日にひらかれた會議では、農民が土地の主人となることには異論はでなかつた。だが誰の土地でも没収できるかという問題になると議論が沸騰した。「耕者有其田」の原則の正しい解釈は小作農はその耕地をもらえらるということである。

と、すれば中小地主の土地でも「善良な田紳」の土地でも、小作地は没収されることになる。だが汪精衛はいつた。「小農は国民党の味方である。国民党は小農の土地を保護する義務をもっている。小地主の土地は没収できない。」つづいて唐生智がいつた。

「革命軍の士官にぞくする土地もつてはいけな。そんなことをすれば士官は革命のために戦わなくなる。湖南の農民は現在では士官やその親戚の土地までも没収している。これは革命の進行を非常にさまたげている。」それならば大地主の土地は没収し

てよいか。大地主でもその子やその親戚の子が国民党軍の士官になっている場合はその土地の没収はやはり「革命の進行をさまたげる」ことになる。そこで唐生智はいった。「われわれは国民党軍の士官に属する土地を保証する具体的方法を考えなければならぬ。」それにたいして徐謙と譚延闓が提案した。

「とくに革命に悪意のある地主と実業家の土地は没収してもよいではないかと。」だが、悪意のある地主とはだれかが、それを決定するものはだれか。そこで共産党代表の譚平山はおそるおそる提案した。反革命の地主の土地は没収してよいではないか「汪精衛はこれに答えて決定的にこういった。「それは政治的没収だ……政治的没収には基準はない。農民の力がつよければ直ちに経済的没収を行なうであらうし、かれらの力がよわいところでは……まず小地主におそいかかるだろう。そうなれば小地主がだれよりもくるしい目にあうことになる。われわれは小地

主をわれわれの味方につけておかなければならぬ。この一言で共産党はその提案をひっこめ会議もここで停頓してしまつた。⁽¹⁾

それから三週間後、現在はまだ戦争中であるから土地問題のようなものの解決は、軍事の終局的勝利と国家の統一をかちとるまでまたなければならぬということになつた。そしてただ原則的に大地主の土地を没収することは決議されたが、しばらくの間は地租はなるべく収穫物の四〇パーセントをこえてはならないということになり、事実上地租を二五パーセントに制限する要求はひっこめられてしまつた。以上が農民問題にたいする国民党左派及び共産党「上層階級」の空気だったのである。

二 共産党は農民問題であやまりを
おかした

国民党はともあれ、共産党が土地問題というよう

な重要な問題で、なぜこのような譲歩をおこなったのであろうか。その責任はだれにあったのか。それについて、今では共産党中央委員会が国民党左派をして革命から脱離——蔣介石がやったように——させまいとして自ら農民運動をおさえようとした多くの証拠があげられる。そのなかでもおそらく一番有力で公平な証明書は、当時コミンテルンから中国革命の視察に派遣されていた三人の代表（ナツソフ、フォキン、アルブレヒト）が一九二七年三月十七日上海からモスコーにおくった報告書であろう。この報告書はかなりながいものであるが、そのなかの農民運動に関する部分をとりに取りあげてみよう。

「農民問題は一九二六年十月まで……コミンテルン執行委代表者によっても中共中央委によっても、多少とも真険な形で提起されたことは、例の完全に農民闘争を黙殺し、『良い田紳』との団結

を訴えた中共中央委六月総会の決議をのぞいてはこれまでいちどもなかった。十月に農民要求綱領なるものが作製されたが、E C C I（コミンテルン執行委）も党の指導者たちも、それはただ党大会に提出するための綱領にすぎないと考えていた。三カ月ないし四カ月の間というもの、この綱領は中央委員会の四つの壁から一步もそとにでず、一月になってはじめて地方組織に送付された。だが今日にいたるも農民問題に関する党の戦術は本質的にはちっとも変化していない。農村の闘争を抑圧し、全体としての農民闘争にブレーキをかけるという旧い方針は今日もなお支配している。……いままでも党内には農民運動にたいする恐怖が存在したし、現にいまでも存在している。農民の土地所有の実現（つまり農民による土地占拠）は中央委員会によって危険な左翼小児病といわれている。中央委員会はいまでも『悪辣な田

紳』や無頼漢にたいする『良い田紳』と中小地主の共同戦線をかたっている（十二月三十日の湖南からの報告）。『良い田紳』という文字は今日にいたるまであらゆる党の文書や指導的同志たちの論文のなかにみいだされる。このように社会的範疇を道徳的範疇とすりかえることは本質的には農村における革命運動の中止である。

中央委員会の十二月総会ではECCI（コミンテルン執行委員会）代表者の参加のもとに農民問題に関する決議が採決された。この決議のなかには農業綱領や農民の闘争に関する言葉はただのひとことも見出されない。決議は当面最も焦眉の問題にたいしてただの一つも解答をあたえていない。農民の権力の問題には否定的な解答があたえられ、それはブチブルジョアをおどろかせ、脱落させるおそれがあるから提起してはならぬと決議はいつている。この農民革命の軽視から指導的党

機関による農民武装の中止が生れている。⁽²⁾

この報告書がモスコウについた頃、この都ではスターリンとトロツキーの間で中国革命について火の着くような激論がくりかえされていた。この報告の筆者たちは勿論スターリン派（でなければ中国に派遣されるはずはない）であったから、報告のなかには、革命の背反者蔣介石が「トロツキーとは協働する用意がある」といったというようなこともかいてある。だが、それにもかかわらず、そこにある事実のほとんどすべては、スターリンにとってはなはだ都合のわるいものであった。スターリンによれば万事がうまくいつているはずの中国共産党は、この報告書によると次ぎにのべられるようなひどさだった。

「党指導中核の觀念によると、労働者や農民は無自覚で、不活発で、愚鈍で、鈍重大衆で、共産党はかれらに相談などせずに自分達で輪郭をきめ

た道にそつて指導しなければならぬと考へてい
る。たとえば党幹部は、農民は土地を欲してい
ない、そればかりか、もしも共産党がそうするよ
うに煽動してやらなければ農民は地代の引きさげさ
えも要求しないだらうと言明している。

それ故スターリンはこの貴重な報告書の公表を許
さなかつた（この報告書はのちにトロツキーによつ
て発表されている）。

中国共産党が、なぜこのように労働者や農民の独
自の運動を無視しようとしたか。これについて同報
告書はこう指摘している。

「党の指導的中核の考へは、だいたい中国はいま
帝国主義と封建的軍閥にむけられた民族革命を経
験しつつある。この革命にはすべて階級が参加し
ている。そのなかには民族ブルジョアジーも富裕
な紳士や地主も加わっている。だからこそ革命の

勝利のための保証として階級的平和が維持されな
ければならぬといふのである。われわれの考へ
が実際にはいかに悪質な日和見主義に転化された
かといふ例を一つだけあげよう。一九二六年十二
月十三日の中央委員会総会におけるその報告に関
する決議は、民族革命運動における危険な傾向に
ついて論じ、つぎのように断言している。

『最も大きな危険は大衆運動は左に向つて發展
しつつあるのに軍政当局は大衆運動の迅速な發展
を見て周章狼狽し、右に傾きはじめているといふ
ことである。これらの極端な傾向が将来も發展し
つつけるならば大衆と政府との間の亀裂は深化
し、結局、赤色統一戦線は崩壊し、民族運動全体
が危険にさらされるであらう。』

これから次のような結論が自然にみちびきださ
れる。大衆運動は制限されねばならない。基本的
力をもつて高まりつつある労働者と農民の運動の

波は挫かなければならぬと。『われわれは』と決議はすすんで断言する。『労働者と農民の実際の闘争において、左翼小児病を根絶するためにイル—ジョン——職人や労働者の法外な要求、労働者自衛団の政務への参加、農民による土地没収など——をさげなければならぬ』

建党間もない中共指導部をここにいたらしめた責任者はコミンテルン代表者ではなかったらうか。この点について報告書ははっきりと「党の指導部内には決定的に党を右に解党の道におしつめつつあるグループがある。そしてこのグループと彼らの政策はECCI（コミンテルン執行委）の代表によって支持されている」と批判している。だがコミンテルン執行委がこのような指導を行なったのはスターリンが国民党は「四階級のブロック」であるから階級的平和を維持しなければならぬと主張していたからで、

コミンテルン執行委も中共指導部もこの至上命令に最後まで服従しなければならなかったのだ。それは、その「最後」は間もなくやってきた。

例の報告書の日付けは一九二七年三月十七日になつてゐるが、その頃すでに蔣介石の北伐軍の先鋒は上海の郊外に到着していた。上海の労働者は共産党の「国共合作」政策によって「歓迎蔣介石將軍」のピラを街頭にまいて上海占領の準備をしていた。そのためにもまだ上海にのこつていた軍閥孫伝芳軍にとらえられて統殺されたりとらえられたりしたものも多い。しかし彼らは間もなく蔣介石軍が入城してきて、かれらを救ってくれるものと確信していた。蔣介石軍は三月二十六日に上海に入城した。労働者や市民はこぞつてこの革命軍をかんげいした。このとき蔣介石が上海市から共産党系の労働団体を一掃しようと考えているといううわさはかなりとんでいたが、コミンテルンや中共は、それは例によって例の

ごときデマであると頭から否定していた。ところが四月十二日の未明、蔣介石の意をうけた暴力団「青幫」^{（青幫）}の武装部隊が労働団体の本拠を急襲し、幹部を殺戮し、全市的な共産党狩りが展開されたのである。これが所謂「四・一二」惨案である。こうしてトロツキーがそれまでしばしば警告してきた蔣介石の背反が事実となつてしまつたのである。

三 中国革命にたいするトロツキー

の見解

トロツキーは国民党が「四階級のプロック」だというスターリンのテーゼにははじめから反対で、毛沢東と同様、ブルジョアジーを革命にひきずつて行くためには階級闘争の緩和ではなく、この激化でなければならぬといつていた。

「帝国主義が中国のすべての階級を外部から機械

的にむすびつけると考えるのは甚だしい謬見である。それは中国のカデット戴季陶の立場であつて、断じてわれわれの立場ではない。反帝国主義の革命的闘争は、階級の政治的分化を弱めないで反対にこれを強化する。

帝国主義は中国の内的関係における非常に絶大な力である。この力の主要な源泉は、揚子江に浮ぶ軍艦ではなくて——それは単なる補助物に過ぎない——外国資本と民族ブルジョアジーとの間の紐帯である。帝国主義にたいする闘争のためには、まさにその経済力及び武力のゆえに、中国民族のどん底から強大な力を奮起させる必要がある。

実際労働者と農民を帝国主義に対して奮起させることは、彼らの基本的な、最も深刻な生活上の利害を国家の解放の大目的と結びつけることによつてのみ可能である。大小の労働争議、農民の反

乱、高利貸、官僚および地方軍閥にたいする都市及び農村の被圧層の蜂起、その他大衆を騒起せしめ、彼らを一体に結びあわせ、教育し、鍛え上げるすべてのものは中国民族の革命的社会的解放への真実の一步である。……ブルジョアジーと、労働者農民大衆との間の階級闘争は帝国主義的抑圧によって弱められないで、反対にあらゆる重大な衝突において流血の内乱にいたるまで尖鋭化するのである。中国のブルジョアジーはつねに背後に帝国主義の鞏固な後衛をもっている。それはつねに労働者と農民にたいして、貨幣、商品および弾丸をもって彼らを援助する。大衆の神妙さにたいする帝国主義の賜物として、中国のために自由を獲得しようとする内望んでいる慨嘆すべき俗物や阿諛者のみが、中国の民族的解放は階級闘争の緩和、労働争議及び農民反乱の抑圧、大衆の武装放棄等々によってじょうじゅしえられると信ずることが

できる。(5)「」

トロツキーは「中国のブルジョアジーはつねに背後に帝国主義の鞏固な後衛をもっている」という表現にもあらわれているように、中国民族ブルジョアジーは一面に反帝国主義的性格のあることを無視しており、この点が毛沢東とはちがっている。毛沢東は、中国民族ブルジョアジーに反帝国主義性格があることを重視し、一定の条件のもとにおいては、そのエネルギーを革命に利用できると信じていた。その条件とは「反帝国主義の革命闘争は階級の政治的分化を弱めないで、むしろその反対にこれを強化する政策がとられなければならない」ということであり、この点ではトロツキーと毛沢東の考え方は全くおなじである。

トロツキーもまたいわゆる「民衆のゆきすぎ」を

たかく評価している。かれはいう。

「われわれは党会議において、そのやりすぎによつて蒋介石を挑発したといつて『極左的』上海人および一般中国労働者が、いよいよ激しく批難攻撃されるのを聞く。しかし幾百万の人間を渦中にまきこむ真実の民衆の革命でいゆる『やりすぎ』なしに進むものは一つとしてありえない。まさに目覚めつつある大衆のために、ブルジョアの『秩序』を乱さない進行方針を規定しようとする政策なるものは、⁶⁰⁾ 濟度しがたい俗物の政策である。」

毛沢東の「湖南農民運動考察報告」をよんだものはこのトロツキーの表現が、そのなかの一章「いわゆる『やり過ぎ』の問題」の文章とあまりにもよく似ていることにおどろかされる。

四 スターリンの見解

国共合作について、毛沢東とトロツキーの考え方はちがつてはいるが、その相違は毛沢東とスターリンのそれよりもはるかに距離のちかいものである。スターリンは国民党を中国革命の主体とし、中国共産党をその補助者の地位におこうとした。したがつて共産党の独自の活動と大衆の暴走をおさえて一切を国民党の「革命秩序」にしたがわせようとした。それは中国革命に関するかぎりトロツキーのいっているように解党派「メンシエヴィキー」の政策にはかならない。陳独秀によると、かれはコミンテルンに国共の「党外合作」を提案し、また一九二六年七月中共中央委員会もそれを決定したのであるが、コミンテルンからひどく批判されたあげく拒否されてしまったという。そしてそのときのコミンテルン代

表ポロージンから「現在の時期は共産党が国民党のために苦力の仕事をしなければならぬ時期である」といわれたという（陳独秀、「同志に与えるの書」）。ポロージンはこのとき、当時のスターリンの方針をいったまでなのだ。

北伐軍が湖南省境にせまり、それに呼応して農民運動が激化してくると——湖南農民協会の正式会員は一九二六年十一月末には一、〇七一、一三七人に達していたが、翌二七年一月には二百万人を突破した——国民党及び北伐軍の將軍たちは口をそろえて「農民運動の行きすぎ」を批判しはじめた。スターリンもまた農民運動が北伐の速度をおくらせることをおそれて中共指導部に農民運動を抑止させるために電報（一九二六年十月）を打っている。スターリンはのちにその事実をトロツキーに問いつめられ、その演説（一九二七年八月一日の演説）で、たしかにそういう電報はうったが、ただちにその誤謬に気

づき数週間後にキャンセルしたと苦しい弁解をしている。そしてその反省が一九二六年十一月に開かれたコミンテルン第七回執行委第七回総会の決議、所謂「十二月決議」である。それに「中国革命の任務を推進するためには農業革命の問題がその中心問題としてとりあげられなければならない」という言葉があることはたしかだ。この字句だけからみればスターリンの考えは毛沢東のそれと非常に近づいたかのように見える。この十二月決議の存在をしりながら、翌二七年五月の中共五全大会は、なぜ毛沢東の農民問題にたいする意見書を討論にさえかけようとしなかったのか。毛沢東はそのことを自伝のなかでいきどおりをもってこうのべている。

「私が武漢についた翌年（二七年）の早春に各省農民連席会議が開催され、私はそれに出席して広範な土地の再分配を勧告するテーゼ草案について討論しました。この会議には彭湃、方志敏、そ

れから二名のロシア共産黨員ヨールクとヴォーリンなどが出席していました。私の提議を採択した決議案は通過して共産党第五回大会に附託となりましたが、中央委員会はそれを却下しました。第五回大会が一九二七年五月に武漢で開催された頃には、党はまだ陳独秀の支配下でありました。すでに蔣介石は反革命を指導し、上海や南京で共産党の攻撃をはじめていたので、陳独秀はいぜんとして武漢の国民党にたいし、遠慮し、譲歩をつづけていました。あらゆる反対をおし切つてかれは右翼日和見主義的ブチブル政策に追従してました。当時私は党の政策、とくに農民運動にたいする政策にはなはだ不満でした。もっと農民工作が地主にたいする階級闘争をもっと徹底的に組織し、武装していたならば、ソヴェート組織は全国にわたつてもっと早く、かつはるかに強力な発展をとげていたと思います。

しかるに陳独秀は頑強に反対しました。彼は革命における農民の役割りを理解せず、当時その将来性を非常に過少評価してました。その結果大革命の危機の前夜に開かれた第五回大会は適切な土地綱領を通過させることができませんでした。農民闘争の急速な強化を主張した私の意見は討議すらされませんでした。というのは、まだ陳独秀が支配していた中央委員会はその案を審議(8)にすることを拒絶したからであります。

毛沢東はこのなかで陳独秀だけを責め、かれをここにいたらしめたコミンテルンの責任については一言もふれていない。しかしコミンテルン十二月決議とはほぼ同時に開かれた中共中央委員会総会における決議でも「労働者農民の実際闘争における左翼小児病の根絶」をといているのである。ここでいう「左翼小児病」が毛沢東らの思想傾向をさしていること

はあきらみかた。彼らの政策に誰よりもくらしめられていた毛沢東が、この中央委の政策の背後にあるものを知らないはずはない。それにもかかわらず、それがコミンテルンの指導について一言も批難めいたことをいわない理由はなにか。それにはスターリンの生存中はかれに反対するものすべてに「トロツキスト」の烙印がおされる時代であったことを忘れてはならない。

コミンテルンの十二月決議の「農民運動をこの段階の中心問題とする」という文句はいかにも革命的なひびきをもっている。これは「農民運動の抑止」とはどうにもむすびつかない。這般の事情はその当時中国にあつて、中国革命の推移を観察していた橋樑氏が昭和三年（一九二八年）一月満蒙に発表した次の一文によってしることができよう。

「中国共産党がコミンテルン執行委員会からさづけられた任務は、大体次の如くである。……国民

党政府機関は農民に接触する為の実際的の近途である。故に共産党は必ずこの機関を利用せねばならぬ。……共産党およびその革命同盟者の任務は新政府の機関に参加し、国民革命の農村政綱に實際的表現を与うることにある。即ち国家機関を利用して土地を没収し、租税を制限し、且農民委員会に実力を付与することである。

ここに所謂土地の没収とは、一九二七年の上半期に湖南及び湖北、江西の一部で行われたような下級機関による自由没収ではなく、決議第四節に掲げられた農村革命政綱の第四項に所謂「反動軍閥に属する寺院及び土地並に国民政府に反抗して戦える買弁・地主・劣紳等の土地を没収すべし」と言う条件付の没収である。これによればコミンテルンの所謂「徹底的にして急進的なる農村改良政策」の内容が、国民党の主義政策と究竟は相容れぬものであることを予想し得るとしても、先づ

差当つては国民党と協調して、彼等の所謂小資産階級的民権革命の範圍に踏み止まりつつ行動する考であつたらしい。前題の農民委員会については同会議におけるスターリン氏の所説を引用するのが便利だと思ふ。

スターリン氏は、シナの農村にもソヴィエト政權を樹立すべしと言う提議を過激であると非難し「シナの工業中心地を差措いて農村にソヴィエト政權を組織することは不可能である。シナの場合を見るに工業中心地のソヴィエト問題すら現在のところ実行を得られない。ソヴィエトは決して環境を超越した存在でないことに注意して貰わねばならぬ。農民ソヴィエトの組織は一方にシナの農民運動が最高潮に達して、旧政權の破壊と新政權の創造とを要求し、他方工業中心地に既に障害物を破壊して了つて、ソヴィエト政權獲得の段階に達した際始めて可能である。今日農

民ソヴィエトの組織を主張するのは時機尚早の謗を免がれない」と説いて、急進論者を押えつつ、更に語を次いで曰く、「故に現在の問題はソヴィエト組織にあらずして農民委員会の組織にある。農民の選挙せる農民委員会をして農民の根本要求を提出し、各種の方法及び革命的秩序によりて、これらの要求を実現せしむべきである。農民委員会は村落を革命化し、その環境の發達と防衛とに従事することを使命とする。」

彼は又農民委員会と国民党が民衆に与えた農民協会との關係を説明して曰く、「農民協会は農民委員会の周囲に結束するか、然らざれば農民委員会に変化せしむべきである。何れにしても、農民協会は農民の要求を実現するためになくはならない權力たるべきである。」これを要するにスターリン氏のシナ農民運動にたいする方策は農村ソヴィエトというがごとき名目的共産化の躁急且

拙劣なる手段を避け、国民党と協調しつつ農民運動の主動力を共産化しようと言うにある。」

橋氏がここでのべられているように、スターリンの所謂「土地没収」は、毛沢東方式の農民協会による下からの「土地没収」すなわち橋氏の所謂、「下級機関による自由没収」ではない。スターリンは農民協会を農民委員会の官僚的統制の下に置いて、土地没収をいわゆる「革命的秩序」(註 国民党の革命的秩序)のもとにおこなおうというのである。またかれは「工業中心地のソヴィエト問題すら現在のところ実行されていない」現在「農民ソヴィエトの組織を主張するのは時機尚早の謗りを免れない」とはつきりのべ、農民協会が政治権力をもつことに頭から反対している。スターリンがこう考えている以上、コミンテルン代表が陳独秀に命じて毛沢東方式の農民運動を抑圧させたのは当然のことであ

る。それ故橋氏もまた陳独秀だけが「機會主義者」として党内外から批判されたことに疑問をいだいてこういつている。

「ここで我々の考えさせられることは、共産党の指揮する湖南農民運動が少なくとも土地没収の問題において遙かにコミンテルンの決議の与えた範囲から逸出していたことである。コミンテルンの一九二七年七月の決議が当時における共産党員の行動(註 すなわち毛沢東らの行動)を賛許し、それを緩和しようとした陳独秀及び譚平山の態度を機會主義的であるとして強く詰責したところから見ると、或いは三月頃に前記決議とは内容を異にした何らかの指令がモスクワから発せられたのではないかとも疑われるが、私の蒐集した資料の範囲内では有るとも無いとも明言できない。」

今日ではこの間(即ち一九二六年の十二月決議と

一九二七年七月の決議の間)に五月二十四日コミンテルン第八回ブレナムの「五月決議」があったことがわかつている。だが五月決議は「原則的にこれまでの戦術に反するものはなにもありえない」といわれているように十二月決議と内容はおなじである。

とすれば、陳独秀はスターリンの命令にしたがって農民運動をおさえ、しかもかれだけが、革命失敗の責任をおわされて処罰されたわけだ。この事情を中央委員たる毛沢東が知らないはずはない。しかしこれは陳独秀の名をスターリンのそれに関連させたこととはなかった。

のみならず、スターリンと陳独秀の距離をできるだけ引きはなすために、陳独秀の名をスターリンにたいしてもっとも強烈に反対したトロツキーの名とむすびつけようとした。これは「水と油」の化合よりもむずかしい試みであるが、それは一応成功し、中国では陳独秀は「トロツキスト」とよばれる破目

になった。

中共や日本のいわゆる「進歩的」歴史科学者の間で、これほど反証のそろった歴史的うそをあばく勇氣のある人がでなかったことは「歴史科学」という言葉にたいしてもはずかしいことである。

一九五六年四月五日中共の人民日報はスターリンの間違いに言及し「一九二七年から三六年まで犯した季立三コース、王明コースなどの重大な誤りは一部の同志がスターリンの間違った情勢判断をうのみにしたためである」とのべている。これは中共が歴史の真実の前にひれふした正直な自白だ。そこに陳独秀の名がオミットされている理由については色々な推測ができる。それには毛沢東の陳独秀にたいするはげしい憎悪の感情とともに「トロツキスト陳独秀」についての言いわけのむずかしさも関係があるようだ。

五 スターリンの「二重帳簿」

コミンテルンの十二月決議は一方では「農民運動こそ中国革命の中心課題である」といいながら他方では農民運動を国民党の「革命秩序」のもとにおけるものであるから、陳独秀がどうしてよいかかわからないのは当然のことである。トロツキーは、これこそ官僚主義者スターリンがいつもつかう責任のがれの手であって、表面は革命的、裏面は官僚的なスターリンの「二重帳簿」的やりかたと評している。スターリンの「二重帳簿」的やりかたはコミンテルン第八回総会の演説（五月四日）につきのように顕著にあらわれている。

「農業革命は中国におけるブルジョア民主主義革命の基礎である。そして漢口の国民党と漢口政府はブルジョア民主主義革命運動の中心である……」

反対派（註 トロツキー派）のいうように労働代表のソヴィエトをつくることはソヴィエトと漢口政府の二重政府をつくることと同じことになる。それは不可避免的に漢口政府をたおせというスローガンを生むことになるだろう……中国に左翼国民党のような人気のある革命的民主主義組織がなければ話は別である。しかしそこには中国の特別の状態に適し、中国のブルジョア民主主義の第一層の発展にたいしてその価値を示しつつある特定の革命組織がある。それを建設するのに多年を要したこの組織を破壊することは馬鹿なことであり、賢明なことではないであろう。とくにブルジョア民主主義革命がまだはじまったばかりであり、敵を征服したわけではなく、しばらくの間は勝利を得ることのできない瞬間においては。」

これでもわかるように、彼は革命的言葉はうまく

つかっているが、実際には武漢の国民党政府と対立する可能性のある一切の組織、とくに農民ソヴェエトの建設に反対しているのだ。しかしトロツキーはスターリンの国民党政府にたいするかような期待はすべてイリュージョンにすぎないといひ、武漢政府はおそらく蒋介石と同じ道を行くであらうから、もしプロレタリアートが同政府のヘゲモニーをにぎって革命の道に同行させたいならば、農民自身が立ちあがって土地を没収し、ソヴェエトをつくらなければならぬといひた。ではこのコミンテルン第八回總會で行われた彼の反対演説をきこよう。

「漢口の領袖のプロックはいまだ革命的政府ではない。この点に関して幻影を創造して流布することとは革命に死の宣告を下すことである。ただしソヴェエトのみが革命政府の基礎となることのできるのである。⁽¹⁰⁾

「スターリンは、国民党と武漢政府が農民革命の

ための十分な手段であり、道具であると論じ、再びこの席上で労働者農民のソヴェエトに反対を表明した。そうすることによってスターリンは蒋介石の前「国民政府」の政策にたいする責任を再三引き受けたように（とくに四月五日の演説。もちろんその速記録はインターナショナルから隠蔽されたが）国民党と武漢政府の政策にたいする責任を自ら引きうけ、かつインターナショナルにもこれを引きうけさせようと欲するのである。……われわれは武漢政府の政策と国民党の指導にたいする責任の片影さえも引き受けることを欲しない。そして、かかる責任を拒否することをコミンテルンにむかって切に忠告するものである。われわれは直接中国農民に告げる。もしも君たちが君たち自身のソヴェエトを組織するかわりに、武漢の首領たちに追隨するならば、汪精衛型の左翼国民党指導者たちは必ずや君たちを裏切るである

う。農業革命は重大事である。汪精衛型の政治家は困難な情勢下では労働者と農民に叛いて十度も蔣介石と結ぶであろう。……農民が君たち革命的プロレタリアートによって指導せられるかわりに、プチ・ブルジョアの急進論者の指導に甘んずるならば、農業革命を窮極まで遂行することはないであろう。ゆえに君達労働者のソヴィエトを樹立し、農民とソヴィエトを結びつけよ。ソヴィエトをつうじて武装せよ。兵士の代表をソヴィエトに引き入れよ。……中国のブルジョア民主主義的⁽¹¹⁾革命はソヴィエト形態において前進し、勝利を獲得するか、でなかったら否である。」

この演説が示している方針は、トロツキーのロシア革命における実践からにじみでたものであるが、それは同時に、毛沢東が中国革命の実践から採らざるをえなかった道でもある。毛はコミンテルン及び

党中央の指令を革命の現場にあてはめて実施しようと試みたが、その実行が中国革命の推進に害がある⁽¹²⁾とわかると、あるときはその指令に勇敢に反抗し、あるときはそれをサボタージュして、別に現場に適用できる戦略戦術を発見し、小規模ながら勝利と経⁽¹³⁾験をつみかさねていった。かれは中央委員会から遠くはなれた湖南、江西の辺鄙な田舎で活動していたので、トロツキーの演説内容などを知るはずはないが、それにもかかわらず、中国革命の第一線における経験から、農民がプロレタリアートの指導の下に武装してソヴィエト政権をたてることのみが勝利につながる。すなわち「中国のブルジョア民主主義的⁽¹⁴⁾革命はソヴィエト形態において前進し、勝利を獲得するか、でなかったら否である」という信念に到達したのだ。かれのつくった紅軍は共産党の旗印をかかげてはいるが、その階級的構成は農民軍であり、その戦争は本質的には世界史上かつて見ぬ壮大

な規模における農民戦争なのだ。かれのこの信念の背景には中国の伝統的革新思想と、農民戦争の伝統的観念があることはたしかだ。だがそれは単純なその観念の延長ではない。かれがマルクス主義者になる以前の観念がいわば「即自的」なものであるならば、今はすでに「対自的」なものになっている。そのなかには帝国主義の時代において、農民戦争を成功させるためのあらゆる条件が計算済みになっているのだ。

第五章 毛沢東と党中央委員会の抗争

一 毛沢東体制とコミンテルン体制

一九二六―二七年からその後の数年にかけて毛沢東は、中央からとおくはなれた湖南とその周辺の諸省で農民運動を指導していた。その間、党中央との連絡もとだえがちとなり、多くの場合、かれは党中央よりもかれの周囲にあつまつた人々とはかつて事を決することが多かった。党中央委員会から指令もきたが、その多くは時機を失していたり、またかれの考えかたや、現地の事情とひどく食いちがっていたものだった。かれはそういうものを無視し、自分の判断で行動しなければならぬことを知った。こうしてかれと中央委員会の間の距離はしだいに大きくなっていった。

当時中国共産党はすでに黨員三万を擁していたが、陳独秀に支配されていた党中央委員会は、ほと

んどインテリによって占領され、プロレタリア、農民出身の黨員はほんのかぞえるばかりだった。その実事情について、例のコミンテルンの派遣員が書いた三人の報告書はこう証明している。

「中国共産党の上層部は大衆と接触していない。これは、三年前には党はまだインテリゲンチヤの小さなサークルであったという事実、そして党指導部は、党がとつきの昔にもはやサークルではなくなつて、三万の黨員を擁し、幾百万の労働者と農民にたいする影響力をもち、中国革命のもつとも強力な組織力となつてゐるということを理解することが困難であつたという事実によつて、歴史的に説明せられるのである。この嫌惡すべき一小サークル的精神をいそいで清算するかわりに、E C C Iの代表者（註 コミンテルン執行委員の代表者、この場合ヴロージン、その他のコミンテルン駐華代表を指す）はこれを奨励し、これに祝福

をあたえている。

党の指導部、労働者や農民の組織の指導部は、どこでもかしくても、インテリゲンチヤや学生からなっている。これらの人々は、すぐれた性質をもっているにもかかわらず、大衆にはほとんど結びついていず、大衆がなにを要求しているかをもも理解しているわけではない。この状態は今日もなおつづいているのである。それは指導部に参加する能力のある労働者がいないためではなくて、労働者が指導部へ参加することを、党組織の上層サークルがゆるしたがらないからである。ほんのすこしまえ、つまり二月中旬に党大会が上海において開かれた。周知のとおり上海の組織の七〇％は労働者からなっている。しかるに新しく選挙された党委員会に、十六名の委員が選びだされたが、そのうちにはただの一人も労働者はいなかった。(1)

中共を創設したのは陳独秀、李大釗らの高級インテリであって、この人々のサイコロジーには儒教的伝統によって培養されているエリート意識があつて、無教育の大衆がかれらの間にはいりこむことをさまたげさせたことは想像にかたくない。中央委員会はこのころ、ソ連から共産主義大学におくる労働者、農民を選んでくれという要請をうけていたが、彼らは労働者農民を一人も指名せず、インテリゲンチヤと学生だけを派遣することに決定した。それについて委員の一人はその決定の理由としてつぎの点をあげている。

「一、労働者はなに一つ読むことも、書くことも、話すことも、理解することもできない。講義をうけるような一七五名もの労働者をいっただこで見つけたらいいのか。

二、もしも労働者と農民がロシアで特別講義をう

ける機会をうるとしたら、かれらは有利な状態で生活することになるだろう。これはかれらに墮落的な影響をあたえ、中国へかえってきてもはや党のために働こうとはしなくなるであろう。これに反して学生はこの欠点に悩まされてはいない。」

これはほんの一例であるが、その他多くの実例は、当時の党中央委がそのなかに労働者、農民がはいりこみ、かれらの自由な指導権に口をだすようなことをおそれていたことを示している。こうしてかれらは大衆との間に自ら一線をかくしてしまった。もちろんこういう事態を生んだ理由を単にかれらのエリート意識から説明することは妥当ではない（もしそれだけとすれば毛沢東の場合にも同じことがいえるわけだ）。考えられるもう一つの大きな理由は、かれらが年非合法生活をしていたので、大衆と接触する機会が少なく、いつもこそそこそかれらのせ

まいサークルだけで活動する習慣をつけてしまったことだ。かれらのサークルは「紙に書かれた指令、派閥的封建人、およびロシアによる操作の世界」であり、大衆とかれらをつなぐものは、そこから矢つぎ早やにとびだす指令だけだった。これにたいし、毛沢東ははじめからこのサークルの空気とは肌があわなかった。かれのカパンをかかえて大都会の雑踏のなかを、連絡の場所から場所へ、こそそこあるきまわるような生活はかれの性にあわなかった。かれは入党のはじめから、その周囲にかれの「大衆」をもっていた。この大衆とはなれるとき、かれは自分よりないものに感ぜられ、この大衆のなかにいるときには、どんな苦しいときでも天性の楽天家のようにであった。彼はつねに大衆と接触し、その信頼をうけていれば、身に危険がせまったときには、いつでも大衆のなかににげこむことができる。そしていったんそこに逃げこめば、衣食住の問題はなんとか解

決がつくということを経験によってしっていた。中国の民衆は伝統的にたての關係（対政府關係）よりも、よこの關係（朋友相互援助關係）を重んじている。これらの仲間になったものが政府から追われていることをしりながら、それをつき出したりすることはひどく道義に反することだとかんがえられている。かれは中国民衆のこのような伝統の世界を自分の革命的資本だと考えていた。これが毛沢東のいわゆる「大衆路線」の背景となっている。この「大衆路線」こそ毛沢東と党中央との距離を決定的なものにした要素の一つだ。ジョン・ウィルソン・ルイスは、これについてつぎのような觀察を下している。

「毛沢東は初期の著作のなかでプライドをもつて、大衆路線方式の確実な成果を強調するとともに、中央指導部の官僚的な方法および指導部が、貧農大衆との意義深い連繫をつくりだすことに失

敗したことを強く批判した。このような挑戦をうけたため中央委員会は、一九二七年に幾月間も毛沢東をその名簿からはずした。けれども一九二七年中頃、党の勢力の転機とともに、毛沢東は大衆路線を広範に実施する機会を獲得した。……毛沢東は新しい確信と熱意とをもって一九二七年以前に有効であるとわかっていた大衆路線活動を開始した。さらにかれは大衆路線方式のなかで、人民のほんとうの支持を拡大し、党員をつよい責任と忠誠の体制を確立する計画をくみこもうとつとめた。」

ここにいわれている「忠誠」とは、抽象的な共產主義のイデオロギーにたいするよりも多分にかれ個人にたいする忠誠の意味を含むものと解釈して、はじめて真実にちかひものになる。毛沢東はその周囲にかれ個人と、そのイデオロギーに忠実な黨員と、

大衆の「忠誠の体制」をつくる努力をかさねつつ、中央委員会がどうすることもできない存在にのしあがってしまった。結局この体制が中央委員会を「征服」し、そのなかからかれに忠誠をちかう分子を吸収することによって、現在の中国共産党ができあがったのだ。しかしそれに達するまでは、毛沢東集団は中央委員会の主流とは別流をなし、しばしば両者は対立関係にさえなったのである。それ故この間の中共党史は、中央委員会の動きと、毛沢東の動きを同時ににらみあわせながら研究しなければならぬ。

二 瞿秋白と毛沢東の關係

一九二七年の夏までは、すべて陳独秀の一存によって動かされていた。いな正確には、彼の背後にあるコミンテルンによって動かされていた。毛沢東は自伝のなかで、「当時陳は中国の党の完全な独裁者

で、中央委員会にさえ相談せず、に重大な決定をしていた。かれはほかの党の指導者に、コミンテルンの命令を見せず、ましてそれについて私たちと討論しようとしませんでした」といっている。

陳独秀の独裁に終止符がうたれたのは一九二七年八月七日から漢口（九江という説もある）で開かれた「八・七緊急會議」である。これよりさき四月二十四日から半カ月の間、漢口で行われた五全大会では、毛沢東の意見は討議にさえふされなかったが、この間三カ月の間に情勢はすっかりかわっていた。七月十五日をもって国共は分裂し、陳独秀は一切の責任を負わされた。毛沢東は当時を回顧しながら、こういつている。

「党内はこんとんたるありさまでした。ほとんど誰もが陳独秀の指導とかれの日和見主義的方针に反対でした。武漢における合作の潰滅から、その(5)のちまもなくかれは没落することになりました。」

八・七緊急会議は、コミンテルンから新たに派遣された代表ロミナーゼが召集したもので、それに参加した中央委員は十二人といわれている。おそらく李立三、瞿秋白、張国燾、向忠発、蘇兆徴、張太雷、毛沢東、方志敏、李維漢、鄧中夏、蔡和森、彭公達の十二名であろう。この会議で陳独秀おだしにいちばん活動したのは瞿秋白であった。毛沢東は瞿秋白とよく三全大会でも一緒に陳独秀に反対したとい⁽⁶⁾う。

陳を追いだしてから瞿は、短期間ではあったが中央委員会を支配した。瞿が去ってから李立三時代となり、李がソ連派といわれる陳紹禹（王明）、秦邦憲に追われてからは、陳紹禹、秦邦憲時代をむかえる。これらすべての時代を通じて中央委員会の実際の支配者はコミンテルンであった。しかし歴代の党総書記のうちでは、瞿秋白の考え方が一番毛沢東に

ちかかったようである。彼の名著「農民政権と土地革命」にはこうのべられている。

「軍閥がその割拠する地盤において督軍および省長の椅子に坐り、その罪惡にみちた政權を維持し得るゆえんのもの、決して自分の兵力に依頼するのみではない。郷村の土豪劣紳は實際上郷村内の小政府であり、同時に農村的軍閥でもある。これらの土豪、劣紳は、農村内の一切の地方公務を壟断し、宗教の祠廟やいわゆる慈善団体ないし公益団体所属の土地財産を占有し、村民を圧迫し、小作人を搾取する等、儼然たる小諸候のかんがある。軍閥の政權は、当然これらの手をへて農民を搾取するもので、すなわちかれらは軍隊や県官のために徴税を請負い、種々苛酷なる徴収を施行する。かれらは任意に農民を逮捕して、これに私刑を加えるばかりでなく、甚だしきは生理めとか火焙りとかの惨酷の手段を用いて、これを殺戮する

ことを常習としている。語をかえていえば、軍閥の農民統治の力はまさに土豪、劣紳の封建宗法的政權をその基礎とするものである。又土豪、劣紳は軍閥の軍隊がいかに自らの武装を有する。たとえば広東の民団、湖南の団防、各省のいわゆる保衛團保甲のごときものである。その名目は雑多であるが、すべて地主土豪の鄉村軍隊であり、名は土匪の防禦であるが、じつは農民を圧迫する武器にすぎない、……（故に）帝國主義および軍閥のシナにたいする統治と搾取とを顛覆するためには、ぜひとも現存の土地制度を徹底的に改造しなくてはならぬ。……シナの國民革命は、土地革命を中樞とすべきであり、シナに土地革命なくば決して帝國主義や軍閥の統治および搾取の基礎を掘りかえすわけにいかぬ。……」

瞿秋白は、陳独秀が地主を「劣紳」と「良紳」に

また反動的で革命に悪意ある地主とそうでないものに分けて差別待遇することは、土地革命を事実上サボタージュすることだとして、「すべて『土』をもつものはことごとく『豪』であり、『紳』にして『劣』でないものは一人もいない」というテーゼをうちだした。この点まったく毛沢東（従つてまたトロツキーとも）と立場をおなじくしている。また國共合作については、

- 1 中国のブルジョアジーは非常に弱体であり、「それは自己の政党を組織する能力がなく、自己の指導權を國民革命の政党のなかで鞏固にすることもできない」から、共産党はこの政党に加入してそのなかで左派をつくっていくことができる。
- 2 共産党は、国民党に加入しなければ広汎な小資産階級大衆を獲得できないから、國共合作を行わなければならない。
- 3 國共合作の指導權は無産階級がにぎり、國民革

命の名儀をもって資産階級と階級闘争をおこなうべきである。（「中国革命中之争論問題」）

という見解をとっていたから、この点でも毛沢東と立場を同じくしている。

八七緊急会議を支配したのはこの瞿秋白の見解であった。それ故かれが党中央委の指導権をにぎっているあいだ、毛沢東と党中央委員会の関係は比較的円満だった。しかしながら党中央委がスターリン・コミンテルンの強い影響下におかれているかぎり、それからである政策にその影響があらわれなければならない。そのうえプロレタリアートの役割りについては、毛沢東と瞿秋白の見解にも若干相違があった。瞿秋白は、農村革命は中国におけるブルジョア民主主義革命を成功させる条件であるとかんがえていたが、毛沢東のように、農民を革命の主力軍とはかんがえていなかった。かれはそれ以上に重要なことは、都市におけるプロレタリアートの組織（赤色労

働組合組織）であるとしてこういつている。

「無産階級は大衆を独立の階級的組織のなかに組織しなければならぬ。……これこそ中国国民革命の主力軍である。その発展は中国革命の発展であり、それが革命の指導権を取得することこそ中国革命の勝利の先決条件である。」

もちろん毛沢東もプロレタリアートを中国革命の指導力と認めてはいるが、ただ問題はその認め方である。かれの「中国社会各種階級の分析」では、「地主階級と買弁階級」「中産階級」の説明については、「小資産階級」（自作農、手工業主、小知識階級—学生、中小学教員、小官吏、小事務員、小弁護士、小商人）を説明し、そのあとに「半無産階級」（半自耕農、貧農、小手工業者、店員、小商人）の説明があり、そして最後に「無産階級」がでてくる。しかもかれのいう「無産階級」はそのまま工業

プロレタリアートを指すのではない。かれはこの階級のなかにプロレタリアートばかりでなく、都市苦力（人力車夫、清掃人夫等）および農村無産階級（農村の雇農、すなわち年ぎめ、又は月ぎめ作男）までも含めている。この点からみれば、かれがプロレタリアートの「領導力量」をそれほどたかく買っているとはみられない。こう判断してよいと考えられるもう一つのデータは、「湖南農民運動考察報告」のなかにある。彼はそこで「論功行賞をおこなうときに民主革命完成の功績を十点とすれば、市民および軍隊の功績はわずか三点であって、農民の農村革命における功績は七点でなければならぬ」とのべている。

しかしこの「市民」ということばのなかに工業プロレタリアートばかりでなく、都市苦力、中産階級、小商人らの一部都市的革命要素が含まれているのであるから、プロレタリアートの「領導的役割」

にたいするかれの評価がいかに低いかがよくわかる。そしてこれには十分理由があるとかがえられる。反革命軍に包囲されて文明社会から隔離された内陸中国で、毎日血みどろの闘争を行なっていたかれは、「国際プロレタリアートの援助」や、都会の「プロレタリアートの指導」をあてにはできなかった。かれがたよることができたのはかれの身近にいる農民と、大部分が農民出身の軍隊であったということがその大きな理由であろう。

三 都市重視主義にたいする抵抗

スターリンはプロレタリアートをたよらず、農民を主要なよりどころとする毛沢東の傾向をにがにがしく思っていた。八七緊急会議の決議文にある「農民運動はプロレタリアート政党的系統ある革命指導をうけるにあらざれば、無組織乱雑にしてかつ原始

的な爆発に陥りやすい」という言葉には、彼の批難が反映している。この傾向はしばしばコミンテルン駐華代表によって批判され、中共の政策にはそのたびに、都市における工業プロレタリア組織運動、農民軍による都市占領の強調があらわれた。瞿秋白、李立三、王明と党中央委員会の指導権をにぎる人々はおかされたが、これらの人々の政策はすべて「都市重視主義」によってつらぬかれていた。これが中共にどのくらい害をなしたかわからない。たとえば一九二七年八月一日におこった南昌暴動にしても、当時の勢力関係からいって、中共軍がこの都市をいつまでも維持できるとは到底かんがえられなかった。事実南昌を新たな「革命の中心」とする計画は四日間で失敗してしまった。この冒険に参加した賀竜、葉挺の軍隊は南方に逃走し、十一月一日彭湃の農民軍とともに、海豊ソヴェート政権を樹立することに成功したが、それも四カ月の後に蒋介石軍に壊滅

させられた。このような冒険政策をあえて敢行させたものはすべてコミンテルン代表の圧力によるものであった。

十二月十一日に行われた広東クーデターについても同じことがいえる。このクーデターは、ちょうどその頃そこを準備していた汪兆銘系の張發奎部隊が前線にでていて、守備が手うすだったので比較的容易におこなわれた。だがこのクーデターは事前に周密な計画のもとにおこなわれたものではないので、張發奎部隊がかえってくると、たちまち血の海のなかに鎮圧されてしまったのである。この無謀な冒険がコミンテルン派遣員のハインツ・ノイマンによって指導されていたことは周知の事実である。かれも「広東暴動を計画し、執行することに指導的役割りを演じた」ことを否定していない。また当時、党の通信担当記者をしていたという李昂はこうのべている。

「コミンテルンは中国共産党にたいして、広東その他の大都市で蜂起するように、とくそくする電報を毎日おくりてきた。これらの電報はすべてつよい調子をおびており、議論の余地をみとめようとしなかった。」

毛沢東もこのころ、八七緊急会議の決議にもとづいて、いわゆる湖南、湖北、広東、江西四省の「秋収暴動」を指導するために湖南に派遣されていた。党中央が毛沢東にあたえた任務は「両湖暴動計画案」といわれる非常に膨大なもので、革命の高潮がすでに去りつつあった当時の情勢において、はじめから実行不可能にちかいものであった。その決議は「徹底的に土地革命を實行し、両湖の労働大衆を指導して暴動をおこし、唐生智の政權を転覆して、武漢政府をたおし、真の平民的革命政權を樹立する」こと、そのために軍隊と土匪をあてにせず、農民大

衆の力にたよって土地革命を實行し、大中地主の土地没収、土豪劣紳の処刑を行ない、とくに長沙では九月十二、三日に暴動を實行し、政權を獲得して湖南省政府を転覆することを命じている。前にのべたように、党中央委と地方の前線で実際にはたらいいている前衛たちとのあいだには緊急な結びつきがなく、党中央委は前線における情勢、とくに敵味方の勢力關係をしいていなかった。それにもかかわらず中央委はコミンテルン代表に尻をたたかれるままに、前線ではとうてい実行できない命令を無責任に乱発した。前線の黨員がそれを実行しなければ、党籍剝奪をもっておびやかされるので、前線の指導者たちはひじょうに困った立場におかれた。その実例を「両湖暴動計画」にみよう。それは「徹底的に土地革命を實行せよ」といいながら、没収する土地を「大中地主の土地」に限定している。スターリンは汪精衛の反共表明以後も国民党との合作にのぞみをすて

ず、そのために土地の無制限没収には反対していた。これは農民暴動をおこすどころか鎮圧する作用さえももっている。また「九月十二、三日」と日時を指定して湖南の中心都市長沙の占領を命じていることもおかしい話である。そういう具体的なことは前線の指揮者が彼我の情勢にもとづいて決定すべき性質のものであって、戦場から遠くはなれた大都会のどこかの屋根の下できめる事項ではない。毛沢東はおそらく命令通りにやったのでは、土地革命も実行不可能であり、農民暴動もおこせないと思ったのであろう。かれは自分で命令をかえて、かれの持論によって、大地主の土地ばかりでなく、すべての土地の没収を命じた。長沙占領計画も実行するにはしたが、もちろんよせ集めの労働革命軍の手におえる仕事ではなかったから——革命の高潮期なら話は別であるが——たちまち壊滅的な損害をうけて失敗した。はじめからこの計画にのり気でなかった毛沢

東は、ただちに周囲の同志を説得し、党の同意をえて中心都市奪取の計画を放棄し、井崗山に転進し、革命根拠地を建設することに決定したのである。

党中央委はこの暴動において、毛沢東とその労働軍の一般綱領（土地の無差別没収）をみとめず、毛沢東のやったことは、軍閥時代の「軍隊暴動」と同じだと批判した。だがこのときすでに毛沢東の周辺には、中央委員会ではどうすることもできない勢力が結集していたので、中央委もそれ以上の処分にはでられなかった。これは毛沢東の自伝ではつぎのようになっている。

「湖南委員会とわれわれの軍隊の一般綱領は、党中央委員会の反対をうけました。しかし中央委員は積極的に反対するというよりも、むしろ傍観の政策をとりました。」

「傍観」というのはなにもしないことであるが、

実際はそんなまやさしいものではなかった。中央委員会が湖南省委を通じ、ことあるごとに底いじのわるい態度にでた。そのいきさつは党中央委と毛沢東の関係をしる上に、また毛沢東共産党の形成を鮮明にする上に重要であるから概略をのべておこう。

四 中央委員会の圧迫

一九二七年毛沢東が湖南で有名な秋収暴動を指導したとき、かれは湖南省党部が組織した「前敵委員会」(註 前線委員会)書記の資格で活動していたのである。かれはたちまちこの「前敵委員会」を暴動指揮の最高機関にしてしまった。ところが湖南省党委員会は「前敵委員会」と別箇に「湘南(湖南南部)特別委員会」というものを組織して、かれの指揮権をうばおうとした。両者のあいだには指揮権をめぐる激烈な闘争がおこり、結局一九二八年三月

「湘南特別委員会」は、毛沢東の「前敵委員会」をとり消し、毛沢東の権限をうばってしまった。毛沢東がつくった「工農軍第一軍第一師」という革命軍にたいしては、党はそのなかに成立した師委員会に、何挺穎という幹部を派遣し、毛沢東が軍隊を自由にくるかすことができないようにしてしまった。

そこで毛沢東は党のつくった湘南特別委員会の勢力範囲外にあった湖南省と江西省の辺疆、井崗山をも含めた江西省境地方の諸地区に目をつけた。かれはこれらの地区に成立した党組織を集合して、一九二八年五月、別に「辺区特別委員会」というものをつくりあげた。

湖南省党委員会がこれを放任しておくわけにいかない。事態をこのままにしておけば、自分らのつくった湘南特別委の権限は非常に局限されたものになる。しかしすでにできてしまったものを取消すまでもないので、一応辺地区特別委員会の成立を認める

とともに、毛沢東の手からそれをうばいとるために楊開明というものを書記代理として派遣した。楊は湖南省党委員会の意をうけて、毛沢東の辺区特別委員会を湖南地区に移すことを主張した。毛はかれの主張をききいれなかったばかりか、かれを追い帰してしまった。湖南省党委はこれにこりず、ふたたび譚震林を書記代理として辺区特別委員会におくり、毛沢東の指導権に制肘を加えようとした。共産党の間においては、党の権威という「大義名分」は、個人の声望よりもはるかに大きな影響力をもっている。それがためこの年の十月におこなわれた辺区特別委員会の第二次選挙では、十九名の委員当選者中、党から派遣された譚震林は第一位で当選し、毛沢東は第十五位でかろうじて委員の椅子を維持することができたのである。¹⁰⁾ この当時の事情を毛沢東自身は、その自伝のなかでこうのべている

「秋収暴動の綱領は中央委員会の承認をうけてお

らず、また第一軍はかなりひどい損害をうけ、都市側の目でみればこの運動は失敗の運命にあるとみなされたために、中央委員会はだんこととしてわたくしを排斥しました。わたくしは政治局からおいだされ、また党前敵委員会の職も剝奪されました。湖南省委員会も『鉄砲運動』といって、わたくしたちを攻撃しました。それにもかかわらずわたくしたちは、自分らが正しい方針に従っていることを確信し、われわれの部隊を井崗山に集結しておりました。その後の事件はわれわれの正しかったことを十分証明しました。」¹¹⁾

毛沢東がここで「都市側」といっているのは、あきらかに党中央委員会のことである。中央委と毛沢東ら前線活動者のあいだで、かような暗闘をくりかえしている間にも、国民党は着々海岸地方の地盤をかため、そのなかの都市にいた共産党をとらえて極

刑に処した。生き残った党中央委員会のメンバーの多くはソ連に亡命し、党六全大会（一九二八年七月）もモスコで開かねばならぬという状態だった。かような関係で、なお国内にあって国民党軍と戦っている毛沢東の立場は、自然と重要視されるようになった。この年の冬モスコから上海に移ってきた党中央は、毛沢東の主張をみとめ、彼のいうとおり「前敵委員会」（実際には辺地区特別委）を復活し、かれをその書記に任命した。これでかれの党内における地位の問題は一応解決したわけである。毛沢東は自伝でこうかたっている。

「この大会で採択された新方針に朱徳と私とは完全に賛成しました。このとき以後、党の指導者と農業地区のソヴィエト運動の指導者たちのあいだの意見の相違は消滅しました。党内の調和がふたたび確立されました。」⁽¹²⁾

党中央と毛沢東のあいだに意見の相違がなくなつたということは、スターリン——党中央委員会の事実上の方針決定者——が国共合作の失敗から毛沢東の農民運動、ソヴィエト建設運動を認めざるをえなくなった結果である。しかしスターリンは、毛沢東のプロレタリアよりも農民を重視する傾向までも承認したわけではない。この後もスターリンは党中央委を通じ、しばしば中共の諸活動をプロレタリアート重視主義にひきもどそうとした。そのつどかれは党中央の情勢を無視した過大な要求のためにしばしば危険にさらされた。そしてそのつどかれは「大衆路線」にたいする信念をふかめ、自分の周囲にかれ個人とその信条に帰依する忠実な黨員と、大衆の強固な体制をつくっていった。このようにしてできあがった集団が現在の中国共産党なのである。

五 大衆路線への信賴

毛沢東がこの期間に経験し、発見したもう一つのこととは軍事闘争にも「大衆路線」を適用しなければならぬということである。軍事的な成功、とくにこの当時から指導した地方的戦闘は、その成功か失敗かにその地方の政治的成果の如何がかかっていた。事実その成功は、その地方の政治的成果を維持し拡大する上にかくべからざるものだった。それ故かれはいわゆる「単純な軍事的観点」を排斥し、政治が軍事の上にたたなければならぬと考えた。しかしこの見解には、軍隊の指導者のなかにも多くの反対者があった。かれらは軍隊の指揮が政治的指揮者によってみだされてはならないと考えたのだ。これにたいして毛沢東はそのあやまりを一九二九年の十二月に発表した「党内のあやまった思想糾正につい

て」において、次のように批判している。

「単純なる軍事的観点は紅軍の一部の同志の間に非常に発展しつつある。それはつぎのように表現される。

① 軍事と政治の兩者を対立的なものとしてみとめ、軍事がただ政治任務完成の一つの道具であることを承認しない。なかには「軍事がよければ、政治も自然によくなる。軍事がわるければ政治もよくなりえない」といい、すずんで軍事が政治を指導することをかながえているものさえある。

② 紅軍の任務も白軍と同じように単純に戦争するだけであるとかんがえている。かれらは紅軍が革命の政治任務を執行する武装集団であることを知らない。とくに現在紅軍はけっして単純に戦っているだけではない。敵の軍事力を消滅するほか、大衆にたいする宣伝、大衆を組織

し、武装、大衆の革命政権を建設、共産党の組織をたすける重大任務をおこなうものである。紅軍の戦闘は単純な戦闘のための戦闘ではなく、対大衆宣伝、大衆組織、大衆武装、大衆の革命政権樹立援助のための戦闘である。対大衆宣伝、大衆組織、武装、革命政権建設等の目標をはなれては戦闘の意義をうしない、紅軍存在の意義をうしないものである。

③ それ故かれらは組織上、紅軍の政治工作機関を軍事工作機関に隷屬させ、それを「対外的司令部」にせよというスローガンを提出している。このような思想が発展してゆけば大衆から離脱し、軍隊をもって政権を牽制し、無産階級の指導をはなれる危険があり、国民党軍隊が軍閥主義の道をはしったのとおなじことになる。」

毛沢東集団がこのような大衆的軍事組織として発

展してゆくあいだに、軍事的要請からくるかずかずの特徴を身につけたことはきわめて自然である。政治優先主義（のちのいわゆる「政治掛帥」）、軍事的命令組織、上部機関にたいする下部の絶対服従、等々がそれである。毛沢東は「大衆の革命政権」といっているが、都会の白軍勢力から遠くはなれた辺鄙な地方に樹立された政権であるから、その構成人員は労働者よりも農民の比重が圧倒的に多かった。こうした関係から毛沢東共産党はいわゆるソ連や東欧、または西欧のそれとは非常にちがった性格を帯びるようになったのである。

六 ソ連の毛沢東にたいする不満

中国共産党がその形成の過程において身につけた諸特徴は、現在もなお顕著にのこっていて、その諸政策に決定的作用を及ぼしている。国際共産主義が

現在中共にいだいている不満の多くはこれらの特徴にかかわるものである。

本年(六四年)の二月モスコで行われたソ連共産党中央幹部会で、レーニンの親友で、スターリン時代を生きぬいた唯一人であったクレーシネンは、その演説——おそらくかれの最後の演説——で、毛沢東のいわゆる「人民の民主主義独裁」がプロレタリアート独裁ではなく、じつはかれ個人の独裁であるといっている。その理由は、中国では本来労働者の独裁であるべき共産党において、労働組合の待遇改善の要求さえ拒否され、このような運動はサンガリカリズムの傾向として糾弾されているということである。かれによれば、中国共産党は権力獲得以前からずっとプロレタリアートの役割りを無視してきたという。この演説は単にそれだけではなく、コミンテルンの中国共産党にたいする指導のありかたにもふれているのでここに必要な部分をあげておく。

「……中国では労働者にたいして盲従を要求している。中国の指導者たちは、労働者階級ではなく、農民こそ主要なよりどころであるとして、それにすべての政治的期待をかけている。国内労働運動の発展にたいする中国共産党指導部のこのような正しくない態度、実質上それをあなどった態度はなにも別にあたらしいものではない。それはかつてコミンテルンからきびしく批判されたことのあるものである。コミンテルンのすべての決定、従って中国問題に関する決定も、すべてがすべてあやまりのないものであったとは私は毛頭考えていない。しかしこの原則的な問題に関するかぎり、コミンテルンは一〇〇パーセント正しかつたと思っっている。

社会主義革命にかける農民の役割りを保証し、一方ではマルクス主義の見地からして、社会のたつたひとつの徹底した革命的階級である労働者階

級の役割りと可能性を過小評価することは、総じて中国で広く宣伝されているプチブル的見解の特徴である。

中共の指導者たちは権力獲得に先だつ時期においても、党内のプロレタリア層にしかるべき注意を払わず、都会のプロレタリアートの間であまり活動しなかった。中国の指導者たちは、たとえば上海のような最大の労働者センターでも、国民党の方が共産党よりも大きい影響をもっているといつてぶつぶついい、それを労働者のせいにした。

中共の指導者と宣伝家たちは、プロレタリア独裁についてのレーニン学説を乱暴にゆがめた結果、みずからおちいった苦境を切り抜けるために、つぎのようなきわめてあっさりした説明を試みている、つまり中国に共産党があり、結局は党が国のすべての重要な問題を解決しているのなら、それによって労働者階級の指導的役割りと独裁も実現

されているわけではないかというのがそれである。……レーニンは『共産党をなすすべての党が、ほんとうに労働者階級の前衛、認められた指導者であるとはとてもいえない』といっている。

党がプロレタリアートの利益に合致する正しい政策を行うなら、党がプロレタリアートと密着し、プロレタリアートの完全な信頼をえているなら、そのときはじめて党は労働者階級の真の前衛になりうるのである。……中共の上層部は、レーニンのこの要求を考慮しているだろうか。

かれらは『政治指導優先』『党書記は生産指導官』『人民解放軍に学べ』と労働者によびかけ、頭から服従と軍隊式規律を要求しているのである。

中共はいま事実上プロレタリアートの指導的役割をはたしうる労働者階級の真の前衛とはいえない。いま中国にはなんら人民の独裁もなく、プロレタリアートの独裁もなく、プロレタリアートの

地位も、共産党の前衛的な役割りもないのである。中国の指導者たちのすべてのえせマルクス主義的言辭は、実際に中国に存在する独裁をおおいかくすカムフラージュにすぎない。それらは指導者の独裁、もっと正確にいえば、個人の独裁である。

中国では社会主義民主主義は、個人の独裁の陽かげでそだたない花なのである。毛沢東の個人独裁は、中国の働く人民の全生活に圧力を加えている。これは国のすみずみいたるところに感じられる。党の指導的幹部は毛沢東の独裁があることをかくさないばかりか、彼の完全無欠をありとあらゆる方法でたたえ、かれの個人崇拜をますます大げさにしている。中国では毛沢東の個人崇拜が、どんなに夢のような規模をとるにいたったかはよく知られている。かれがひまにまかせて書いた詩までが、中国の思想生活における歴史的できごと

として紹介されている。このような偶像崇拜主義におちいった中国の指導者たちは、これによってマルクス・レーニン主義の諸原則からだけではなく、ごくあたりまえのことからも、全くかけはなれてしまったことさえ気づかないのである。⁽¹³⁾

さすがにクレーシネンは中国共産党が毛沢東の個人独裁であるという特徴をみのがさなかつた。しかしこの特徴は中国の特殊な、政治的クライメイトにそだち、歴史的にはコミンテルンの指導の失敗から生れたことに気づいていない。もっともかれは「コミンテルンのすべての決定、従って中国問題に関する決定もすべてがあやまりのないものであったとは私も毛頭かんがえていない」といつているが、かれはスターリンが中国共産党指導においておかしなはずかずの誤謬に気がとがめているのかもしれない。しかしすぐに「中国の指導者たちが労働者階級ではな

く、農民こそ主要なよりどころであるとしている」ことをとがめ、「この原則的な問題に関するかぎりコミンテルンは一〇〇パーセント正しかったと思っ
ている」とひらきなおっている。

実はクーシネンのこの考えかたこそ往年のスターリンのそれであり、中国革命の指導に現われたコミンテルンの誤謬に直接つながるものなのだ。それは毛沢東の農民偏重主義が、中国の政治的風土から生れたものであることに一片の理解もしめさず、あらゆる社会主義革命は、プロレタリアートが先頭にたたなければならぬという西欧的な考え方を、絶対とする考えかたである。この考えかたを、条件を無視して中国に押しつけようとしたところに、コミンテルン指導上の失敗があったのだ。それがもつとも顕著にあらわれたのは、中国共産党中央委が李立三に支配された時代、すなわちいわゆる李立三主義の時代においてである。

七 李立三主義

李立三主義は一九二七年七月のコミンテルン執行委の決議、いわゆる「中国革命の現在の瞬間にかんするコミンテルン執行委の決議」ときはなすことはできない。コミンテルンから中国共産党指導者のために改めて中国に派遣されたロミナーゼとノイマンの両代表は、この決議をかれらの指導原則としたのである。この決議は中共にたいして、一方においては農業革命を展開せよと要求するとともに、他方ではそれをプロレタリアートのヘゲモニーの下に実行されなければならぬとした。決議は、「平民的な方法、すなわちプロレタリアートのヘゲモニーの下に、労働者、農民及び都会貧民のプロロックが革命的攻撃をおこなうことによって、ブルジョア民主主義革命の完成のための闘争を継続せよ」といっている

が、これはわかりやすくいえば労働者の武装によって、都市を奪取せよということである。この方針は一九二七年十一月二十八日、中共の中央臨時政治局拡大会議の決議につきのようにとりあげられている。

「都市労働者暴動の発生は非常に重要な意義をもつ。都市労働者を軽くみて、たんに農民にたいする声援にすぎないと考えることは甚だしき錯誤である。党の責任は、労働者の日常闘争を指導しつつ、広大なる群衆の革命的興奮をかめ、暴動を組織し、かれらを誘って武装暴動にまで進ましめ、都市暴動をして自発的に農民、労働者の中心兼指導たらしむるにある。すなわち都市労働者の暴動は、巨大なる暴動の内部にありて革命の勝利を保証するところの先決条件である。」

しかし都市の労働者は四・一二事件以来、すっか

り革命的情熱を失っていたので、笛吹けどもおどらずで、労働者だけで都市を奪取するなどおもしろなかつた。それ故このコミンテルンの要請をなんらかの形で実現するためには、都市の外部から、すなわち地方の各所にまだのこっていた農民革命軍を動員して、都市を攻撃させ、内部と相呼応して、都市を奪取するほかはない。この方式を実行にうつそうとしたのが李立三である。かれはまず長沙を占領し、つづいて武漢を占領する計画をたてた。一九三〇年六月十一日、かれが実権をにぎる党中央政治局をして、「あらたな革命の高潮と一省または数省の首先勝利」という決議を通過させた。同年七月、李はその決議にもとづき、彭徳懐の第五軍を中心とする紅軍に、長沙占領を命じたのである。ちょうどこのとき長沙守備にあたっていた何鍵は、対蔣介石作戦に兵をさいていて、防備は手うすだったので、

紅軍は攻撃わずか二日間でこの町を一応占領する

ことには成功したが、何鍵の援軍がくると、広東占領と同じようにたちまち壊走してしまった。李立三のほんとの目標は武漢の占領であったが、長沙攻撃の失敗で、その一切がおわってしまったのである。毛沢東はそれについてこういつている。

「この失敗は李立三路線を破棄するのに役立つ、李が主張していた致命的な武漢攻撃がおそらくもたらしたであろう損害を、紅軍はうけずにすみませした。当時の紅軍のおもな仕事は新しい部隊を募集して、新しい農業地域をソヴィエト化し、なかんずくすでに紅軍の占領下に入った地区を、完全なソヴィエト権力の下に強化することでした。このような政綱にとっては長沙攻撃は必要ではなく、攻撃ししんのなかに冒険の要素をふくんでおりました。しかし、もしも最初の占領が一時的な行動としてくわだてられたものとすれば、そしてその城市を保持して、そこに国家権力をうち

立てようとする考えをもたなかったものとするれば、その効果は有益であったと考えることができ、るかもしれませんが。なぜなら国民革命運動にたいしてあたえた反響は非常に大きいものであったからです。誤謬はソヴィエト権力がまだその背後で強化されていないのに、長沙を基地にしようとした戦術および戦略上の誤謬でありました。」⁽¹⁴⁾

この毛沢東の批難は李立三にたいするばかりでなく、同時に李立三路線の背景すなわちコミンテルン——スターリンに向けられているのである。当時よりやく辺区に地盤をかためようとしている農民軍を、命令一つでその根拠地から引きだし、圧倒的に強大な白軍が、近代的な兵器をもって守備している都会を攻撃させることは、中国の農民軍を敵の手で虐殺させるに等しいことである。多年農民軍の先頭に立って戦っていた毛沢東が、このような命令に従

わなければならなかったことは、かれとしてはな
 になかれぬ思いだったろう。当時のかれと党中央と
 の力関係から、命令の無理をしりながらもそれに従
 わざるをえなかったのだ。李立三は長沙攻撃の失敗
 からすぐに失脚したのではない。毛の最悪の日はま
 だつづいた。「李立三主義が決定的に葬られるまで
 は軍隊内に重大な時期がありました」と、彼自身そ
 のころをふりかえってつぎのように述懐している。

「第三軍団の一部は李立三の方針に従うことに賛
 成して、第三軍団を他の軍団から分離することを
 要求しました。しかし彭徳懐は強力にこの傾向と
 たたかい、かれの指揮下に兵力を統合し、かれら
 の最高指導部への忠誠を維持することに成功しま
 した。しかし劉敵藻にひきいられた第二十軍は、
 公然たる叛乱をひきおこし、江西ソヴィエートの
 主席を捕え、多数の将校と官吏を逮捕し、その李
 立三方針にもとづいて私たちを政治的に攻撃しま

した。これは富田でおこったので富田事件として
 しられています。富田は当時ソヴィエート地区の
 中心であった吉安に近かったので、この事件は反
 響をまきおこし、多くの人たちには革命の運命が
 この闘争の結果にかかっているように思われたに
 ちがひありません。しかしこの叛乱は第三軍の忠
 誠と党および紅軍の一致団結と、農民の支持との
 おかげで迅速に鎮圧されました。劉敵藻は逮捕さ
 れ、他の叛乱者たちも武装を解除され、一掃され
 ました。私たちの方針はふたたび確認され、『李
 立三主義』は決定的におさえられ、その結果とし
 てソヴィエート運動はのちに非常な成功を記録し
 ました。」⁽¹⁵⁾

「李立三主義が決定的におさえられた」というの
 は、スターリンの影響がおさえられたということ
 である。「私たちの方針が確認された」ということ

は、都市のプロレタリアートをあてにせず、農民を
主要なよりどころとして、国民党軍の勢力のおよば
ない辺鄙な地方にソヴェエト政權を樹立する毛沢
東方針が確認されたことである。この方針が確認さ
れていらい、中国のソヴェエト運動は着実に地歩
をかためてゆき、そこに現在の中国共産党の基礎が
できたことは周知の事実であらう。

第六章 江西ソヴェエト時代——都会との訣別

一 匪賊の理論

秋収暴動に失敗した毛沢東は辛うじて一九二七年の暮、湖南江西の省境井崗山に逃げこみ、そこにかれらのいわゆる「革命根拠地」をつくった。これが中国革命の前途にどんなに大きなプラスであったかは評価しきれないものがある。当時全国に蜂起した共産党系の叛乱軍には種々雑多な分子がふくまれていたが、かれらのうちで井崗山に逃げこんだものも多くは、毛沢東から政治的再教育とともに、かれのつよい個人的影響をうけ、中国の前途にあかるい理想をもつ共産主義の軍隊にあげられた。とくに南昌暴動（一九二七年八月一日「八・一暴動」）の失敗後ここに逃げこんだ朱徳は毛沢東にとって大きなプラスだった。朱徳は雲南講武堂出身の生粋の軍人で、雲南軍の排長をふり出しに旅長にまで昇進

し、それから革命側に転向した人である。毛沢東は党内においてそのライバルとしばしば理論闘争をおこない窮地においこまれたこともあったが、結局かれを勝利者として出現させたものは毛沢東とこれら軍人とのむすびつきである。江西省においても政治局内の抗争はしばしば毛沢東にひどく不利に見えたが、実際には毛沢東が養った紅軍の実力がものをいだったのである。これについてスノーもこういつている。

「当時（註 江西省時代）は、政治局内部の抗争で、一、二の政治的見解なり路線なり、またはこの両者ともが、外見上、毛に不利に見えていた際にも、じつは共産主義者のいわゆる『生命力』たる軍事力、ないしはその現実の把握こそが、いっそう強力な決定権として働いたのであった。理論闘争の際にもつねに毛と朱徳が協力している事実と記憶がのしかかった。これは華南における毛の

ライバルすべてにとつて、抜きがたい障壁であつた。

毛の感化はまず朱徳に及んだが、それだけではない。彭徳懐、羅炳輝、劉伯承、林彪、蕭克、賀竜、すべてがそうである。⁽¹⁾

毛沢東がこれらの軍人にあたえたものは、共産主義の理論よりもまず中国の前途への希望と安心感であつた。かれは軍人達の不安感にこたえて、このような紅色根拠地が、白色政権の統治する国家の真中に存在できる理由を理論づけた。毛はそれを「中国の紅色政権はなぜ存在できるか」という論文（一九二八年十月五日発表）において次のように展開している。

「一国のなかで周囲を白色政権にかこまれたながら、紅色政権の一つまたはいくつかの小さな地域が存在するということは、世界にこれまでなかつたこと

です。このような奇怪なことがおこつたのは中国独特の原因があつたからであり、またその存在と発展には相当な条件があつたからであります。第一にそれはどんな帝国主義国家にも、また帝国主義の直接統治植民地にもおこりえないことで、かならず帝国主義が間接に統治している、経済的にたちおくれた半植民地であるところの中国だけにおこることあります。なぜか、それはこの奇怪な現象が、かならずもう一つの奇怪な現象をとまなうからであります。それは白色政権間の戦争といふことです。帝国主義と国内買弁、豪紳階級が支持するそれぞれの新旧軍閥は民国元年以来、おたがい不断の戦争をつづけております。これが半植民地中国の特徴のひとつであります。

全世界の帝国主義国家にも、帝国主義が直接統治する植民地にも、一国としてこの種の現象はありません。ただ帝国主義が間接に統治している中国

だけに、この種の現象がありうるのです。それをおこした原因は二つあります。すなわち地方的農業経済（統一された資本主義経済ではない）と帝國主義が、それぞれの勢力範囲においてとつていふ分裂的搾取政策であります。

白色政權間の長期にわたる分裂と戦争があるからこそ共産党の領導するひとつまたいくつかの小さな紅色区域が、周囲を白色政權にとりまかれなかに発生し、かつ、つづいて行く条件があたえられたのです。湖南江西省境の割拠地は、これら多くの紅色地域のなかの一小地域であります。同志のあるものは困難と危急に際して往々このような紅色政權の存在しうることに懐疑的になり、悲觀的情緒をおこします。それは紅色政權がなぜおこったか、なぜ存在しうるかを正確に理解しないところからきています。中国の白色政權の分裂と戦争がつづいていくかぎり、紅色政權の発生と存

在、かつまた、それが日ましに發展してゆくことに疑問はありません。(2)

ここに展開されている理論の背景には、中国史をつらぬく「水滸伝」の伝統がある。中国はどんな王朝の時代にもほんとうの意味で全国的統一がもたらされたことはない。各地域を分轄する地方行政官はそれぞれのうけもち地域の治安につき皇帝に責任を負っているが、実際にかれらが統治しているのは都会とその周辺だけで、中心からはなれた山間避地、とくに行政区の境界などは、その土地の豪族に治安維持をまかせており、暴動などがおこってもよほど大きくならないかぎり、直接、兵をおくるようなことはない。したがって中国では、どんな時代にも山間避地は皇帝に反抗する不平分子や匪賊たちにとって安全な割拠地を提供した。かれらは一方の地区の知事が討伐兵をだせば、しばらくとなりの地区にほと

ほりがさめるまで身をかくし、兵が退けば、またそろもとの地区にかえるという方法をくりかえすことよって生きのびることができた。匪賊のいる地方には政府の苛酷な税吏はちかづかないから、その地方の農民は自分に被害が及ばないかぎりかれらの存在をあまり苦にしない。もしもかれらの農民にたいする態度がよければかれらを歓迎さえする。それ故匪賊はその根拠地の周囲の農民には徳をほどこし、自分の味方につけておく。この関係において梁山泊はいつの時代にも存在していたのである。

毛沢東も井崗山において兵士と農民の関係につき、神経質なほど微にいり細にいった注意を与えている。ここにかれが紅軍兵士にあたえた有名な「八つの注意」がある。

- 1 人家をはなれるときにはすべての戸をもとどおりにすること。(註 紅軍兵士は夜宮の際、農民の家にはいつてぬることは許されていな

い。ただ戸板をかりてその上にぬることは許されてゐる。)

- 2 自分のねたわら、むしろは巻いてかえすこと。

- 3 人民にたいしては礼儀を厚くし、丁寧にし、できるだけかれらを助けること。

- 4 借りたものはすべて返すこと。

- 5 こわしたものはすべて弁償すること。

- 6 農民との取引きを誠実に行ふこと。

- 7 買ったものはきつと代金を払うこと。

- 8 衛生に注意し、とくに便所をつくるときは人家から十分距離をはなすこと。

これらはいずれにも小さな日常茶飯事で、紅軍の事実上の総指揮官たる毛沢東が、全軍に向つておこなう演説のなかでのべられるにふさわしくないと考へる人があるかも知れないが、このなかにはかれの緻密な政治的計算があるのだ。

第一に根拠地およびその周辺の農民の好感をえておくことは、紅軍の周囲に幅のひろい情報網をもつことである。天険以外に要塞をもたないがけらは、圧倒的兵力をもつ官軍がくればなにおいても正面衝突をさげなければならぬ。その場合に一番重要なことは、敵がどの方面からどのくらいの兵力でやってくるかということはいちはやくキャッチすることだ。この用意なしでは一日もあつかんとしておられない。そして井岡山周辺の農民は紅軍の平常の行動を通じて紅軍に好感をもつようになり、いつも信頼のおける情報を提供してくれた。

つぎに農民は、党にかわって党の宣伝を担当してくれた。新聞のない中国の田舎では、口から口につたえられる新聞は非常に速度がはやい。当時井岡山周辺の農民がつたえるかずかずの「紅軍美談」は、梁山泊レゲントのように農村の不平分子たちを刺激した。中国の農村には伝統的に不平不満分子が充満

している。これがどのくらい紅軍の兵力補充に役だつたかわからない。

さらに根拠地の兵の食糧は結局周囲の農民に依存しなければならぬ。紅軍に好意をもつ農民は代価さえはらってもらえれば、たとえ自分のところの食糧がなくとも、かれらの横の連絡でどこからか手にいれてくれる。したがって農民を味方につけることは強力な兵站部隊をもつことである。

伝統的匪賊が生きのこるためのもう一つの重要な条件は団結である。かれらの失敗の多くは仲間われからきている。その故、梁山泊の誓文にも「一百八人、一心一体、心心皎潔、樂しきは必ず同じく樂しみ、憂は必ず同じく憂う。生時を同じくせずとも必ず同時に死なん」とある。かれらの間には原始的共産主義がおこなわれ、不平不満のおこらないようにした。こうすることはつねに相当量の兵力をあつめておく保証であり、よって以て官軍の追捕をおいか

えず条件でもある。

毛沢東がこういふ諸関係をよくしっていたことは、かれが一九二八年十一月にかいた「井崗山の闘争」をよめばすぐわかる。そのなかでかれはこういつている。

「労働武装割換の存在と発展はつぎのような条件をもたなければならない。すなわち、

- ① 非常によい大衆をもつこと
 - ② 非常によい党をもつこと
 - ③ 相当力量の紅軍をもつこと
 - ④ 作戦に便利な地勢をもつこと
 - ⑤ 給養するにたる経済力をもつこと⁽³⁾
- 等である。」

毛沢東はこれらの条件がまもられるかぎり、山間避地における労働革命軍の根拠地は十分存在しうるばかりでなく、日ましに発展さえしてゆくものだと

いう。かれはかようなソヴィエトが中国各地におこり、そのなかに革命のエネルギーが蓄積されてゆけば「農村によって逐次都市を包囲し、最後に都市を奪取し、全国的勝利を収める」ことは可能であると確信した。これがスターリンともトロツキーともちがう毛沢東独特の革命路線なのである。

二 スターリン中国革命論の破産

北伐の進行中、労働者、農民がかれらの政權、ソヴィエトをつくらなければ必ずブルジョアジーに裏ざられると警告しつづけたのはトロツキーであった。そして、そのようなことをすれば国民党を弱体化させ、北伐を阻止することになるから、それは事実上の反革命的提唱であるといったのはスターリンであった。毛沢東はトロツキーとは無関係に、農民闘争における実践から、農民自身による地方小政權

(ソヴェエトの胎児的形態)の樹立を主張し、党中央委——コミンテルン——スターリンから排撃されたことはすでにのべた通りである。このソ連におけるスターリン、トロツキーの抗争は中国革命のあらゆる問題につきまとい、深刻な影響を及ぼした。

国民党さえも両者の闘争を利用し、毛沢東の主張がトロツキー的であるといつて批難した。一九二七年六月十六日武漢国民政府主席汪精衛は湖北国民党代表会議において、湖南の農民運動の指導者(註 毛沢東をさす)の主張はトロツキーの主張と同じひびきをもつといい、それ故にかれらは反革命的だといつている。

「私は大衆運動を指導するこれらの人々が、国民党すなわち国民政府の力を信頼せず、自分自身を信頼せよといっているのをしばしば耳にしている。……その結果人々は国民党又は政府の指令にしたがわず、その命令をうけることをこぼんでい

る。それは、人民を国民党から疎外したばかりでなく、国民党の指導なしに反革命にたいして独立的戦争をおこなわせるような危険な破目に人々を追いやった。それ故国民党はかれらを救うことができなかつたのである。……」

汪精衛はこのような運動は国民党以外に多くの政府をつくる結果となり、事実上のアナキーに近い状態をつくり出すと結論している。この汪精衛の口調は、奇妙にもスターリンのそれとまったくおなじである。

スターリンの理論はトロツキーを失脚させることには成功したが、中国革命のきびしい現実の前には弱点を暴露せざるをえなかつた。かれが最後まで望みをかけた武漢国民党もトロツキーの警告通り反革命陣営に加わり、反共にのりだした。スターリンはこの予想外の事態にたいして、反対者トロツキーの

理論をそのまま採用しなければならなかった。このような百八十度の政策転換には内外面において高度の政治技術とマキャベリズムを必要とした。中国にたいしてはスターリンの国共合作方針は正しかったのだが、中共指導者がその方針にしたがわなかった。このような結果になったと証明しなければならぬ。そのため苦汁をのまされたのは中共の指導者たちである。これがため汪精衛の共産党追放がはじまってもスターリンは共産党員が国民党から退出することを許さなかった。一九二七年七月十四日のコミンテルン執行委員会の決議は「武漢政府の革命的役割りはおわった。それはいまや反革命勢力となりつつある」といいながら「国民党の指導者によって共産党員追放の運動がおこなわれているにかかわらず共産党員は国民党内にとどまらなければならぬ。国民党メンバーや大衆と一層密接に接近し、かれらをして国民党執行委の行動にたいして決定的に

抗議し、国民党の現在の指導者の交代とこれらの方針のうえに、国民党の党会議の開催準備を要求する決議を承認せしめなければならぬ」といつている。

陳独秀はこのとき「コミンテルンは一方ではわれ自身の政策を実行せよといいながら、他方では国民党から引きあげることをつるさない。実際どうしてよいかわからないので、私は仕事をつづけて行くことはできなくなりました」（陳独秀「同志に答える書」）といつて党を去っている。しかしそれからわずか十日のち、すなわち七月二十五日の「プラウダ」には突如として「ソヴィエト樹立こそ中国の今日の課題だ」という論説があらわれたのである。「それは国民党の危機はソヴィエトの問題を今日の議程においている。ソヴィエトのスローガンは今こそ正しいものである」といい、同時にトロツキーのソヴィエト提唱は「大衆をして運動が通過しなければならぬ諸段階を飛びこえようとしたも

のだ」と批判している。このロジックからいえば国民党の背反は大眾が当然通過しなければならぬ段階だというわけである。この論拠はまもなくスターリンによって次のように展開された。

「今日の發展段階の新たな革命の進展においてソヴィエト形成の問題は完全に成熟するのである。昨日、数カ月前、中国共産党はソヴィエトのスローガンを提起することはできなかった。なるとなればそれは冒険主義となったであろうし……なんとなれば国民党の指導者がまだ革命の敵になりさがらなかつたからである。」（スターリン「今日の問題」）

このみじかい言葉のなかにはスターリンのソヴィエトにたいする考え方がはっきりでている。つまり数カ月前、すなわち蔣介石の反革命が明らかになつても、武漢国民政府がのこっているかぎり、ソヴ

ィエト樹立を主張することはまちがいで、それは冒険主義につながるものだというのだ。では、いったいこの国民政府のもとで土地問題はだれが解決してくれるであろうか。それは国民党の「革命的秩序」のもとに解決されたであろうか。湖南湖北の農民たちは国民党の「耕者有其田」のスローガンを言葉どおりに信じたので、自分らの耕やしている土地を地主からとりあげた。それには地主の反攻をしりぞけ土地をまもる組織の力が必要だから自分達の村落小政権をつくりだした。それがソヴィエトなのである。広大な中国の村々におこるであろう無数のこのような村落政権が横につらなつた場合、それはひとつの偉大な革命勢力を形成する。それができれば国民党の指導者が帝国主義とやみ取りきをして革命を売りわたすことは不可能である。毛沢東——そしてトロツキー——が考えたソヴィエト樹立運動はこのような性格のものであつた。それゆえソヴィエ

ト樹立のスローガンは国民党が背反した今日よりもむしろ国民党がまだ革命陣営にあった昨日の議程にのぼるべきものであった。八月七日に行われた所謂「八・七緊急会議」はスターリンやコミンテルンのこれまでのあやまりをジャスティファイし現在の主張との矛盾をとりつくりうために「緊急」にひらかれたものである。この会議は、コミンテルンの指導は昔もいまもすべて正しく、今日の失敗の原因は、すべてコミンテルンの正しい指導を具体化することができなかつた陳独秀の「機會主義」にありと
いうことで一応事態に結末をつけたのだ。

その結果中国共産党はこれまでとは反対に、ソヴェート樹立を目標として広範囲な農民運動を展開することになった。この方針に疑問を提出するものはすべて「機會主義者」のレッテルをはりつけ党籍をうばった。そうするために会議は手まわしよく「党のボルシェビキ化」を決議している。党のボル

シェビキ化ということとは党命令に絶対服従ということである。この政策に責任のある瞿秋白でさえ「中国革命」のなかで当時の空気について「八・七会議以後……もしも誰かが蜂起の政策に対して疑問をのべれば、かれはただちに機會主義者として容赦なく攻撃された」とのべている。だがこのときは革命の高潮期はすでにすぎさっており、労働者農民には北伐進行当時のような積極性はなくなっていた。それ故農民蜂起が広汎にひろがることはなく、ほとんどが弾圧されてしまった。

しかしスターリン——コミンテルン——党中央委はこの革命的退潮を率直にみとめようとはしなかつた。それは自分達の政策のあやまりをみとめることになるからである。かれらはこの年の十一月に行われた中共中央臨時政治局擴大會議は、秋收暴動の失敗にも目をつぶり、中国における勤労大衆の「革命運動の力は疲れた」どころではない。それは革命がこ

うむったかかずの敗北にもかかわらず、革命闘争の復活のなかに、ようやくその力を見せはじめつつある。……これらすべてによって中国共産党中央委員会拡大会議はこう宣言する。いまや決定的革命状態が全中国に存在する。」という情勢判断を下している。かような楽観的な情勢判断のもとに「一切の政権を労働兵士貧民の代表会議に」というスローガンをかかげて民衆をアジリ孤立的冒険主義的計画を各地におこしたのであるから、そのいずれもが失敗して損害を大きくしていったのは当然のことである。

陳独秀は適切にもこの新しい方針を批判して、中国共産党は「過去においてはただいかに妥協するかということだけを学んだ」が、「いまや退却する必要のあることを理解する機会ひとつ与えられなかった」といっている。⁽⁵⁾

三 白色テロ

以上の経過から、同じくソヴィエト樹立といってもスターリン——コミンテルン——党中央のそれと毛沢東のそれとは大きな相違のあることがわかる。毛沢東が井崗山に根拠地をもとめたのは革命の退潮期において革命のエネルギーを温存し、それを発展させてゆき、高潮期の到来にそなえる意味がよかった。もしもかれが当時「決定的革命状態が全中国に存在している」と判断すれば、かれがそれから十数年後に実行したように、ただちに根拠地から平原にでて国民党軍と対決したであろう。これに反し、スターリン——コミンテルン——党中央はいま決定的革命状態で、ブルジョアジーとプロレタリア農民との直接闘争の段階にはいたのであるからソヴィエト政権を樹立してブルジョアジーと戦うべ

	死刑又は殺されたもの	在獄政治犯人
1927年 (4~12月)	37,985人	32,316人
1928年 (1~8月)	27,699人	17,000人以上

きたである。ソヴィエトがこの大事な時に山間避地にただ存在しているだけではなんの意味もない——かれらはこれを革命上山主義とよんでいた——主要都市に進出して、革命に決定的な影響をあたえる存在になって貰わなければならぬというのだ。

武漢占領計画などをふくめて、李立三がおかしたかずかずの誤謬は、すべてコミンテルンが過大に評価した革命情勢と、あまりにもちがった中国の現状のつじつまをあわせようとしたために起こっているといつても過言ではない。そのために中共とその同調者がこうむった被害は惨絶なものだった。或る調査は、新聞その他の刊行物に公表されたものだけから計算して中共側革命犠牲者の数を上記のように報

告している。

その翌年からはこういう数字は公表されなくなったが、中国救済会のあげている死刑囚と在獄政治犯の総数は、一九三〇年末において十四万人となっている。翌三一年度は六省の都市だけで三八、七七八人が処刑されている。それ以後は全くわからない。

これらの公表数字は秘密裡に処刑できなかった政治犯のものばかりである。つまりその大部分は都市の共産党員および党関係労働組合員であろう。これは一九三一年度の六省の都市だけの数字が諸年度のそれとほぼ同じであることから示唆されている。

都市は当時例外なく白色政権の支配下にあり、国民党はその権力をフルにつかって共産党関係者を徹底的に弾圧していた。労働者も共産党の指令にしたがったためしばしば痛い目にあつたので、共産党にたいする信頼をまったく失っていた。かれらがストライキをやっているときに、共産党員が指導のため

にゆくと、「あなたがたのお話はごもっともですが、私たちにとても実行できません。私たちはただ賃銀をちよっぴりあげてもらって職を失うことがなければそれで十分なんです」といって追いかえました。この話を報告している共産党中央委員会会報はさらにこうのべている。

「労働組合組織はほとんどゼロにちかく収縮してしまつた。各地の都市で組織は分散させられ、工業労働者の健全な組織核は全国を通じてほとんど存在していない。」(一九二八年七月二十五日、中共党中央委員会会報)

国共分裂後も労働組合の存在はゆるされていたが、その幹部は反共の色彩のはっきりした国民党系のものでなければならなかつた。労働者のおおくは組合運動そのものに興味を失つており、一九二七年には三百万人の組合員を擁していた労働組合も、翌

二八年には半数にへつていた。一九三〇年には労働組合数は、公式発表によれば七四一、組合員数は五七四、七六六人で、この数字は前年度より六〇パーセントの減少を示している。一九三二年には組合数は六二一、組合員数は四一〇、〇六七人とへる一方だつた。このように労働運動そのものが低調になつたときに共産党が「ソヴィエトを樹立せよ」という指令をとばしても労働者がそれに呼応して立つはずはない。一体中国の労働者農民がこれまでその名をきいたこともない蘇維特^{ソヴィエト}先生(註 当時蘇維特を人名だと考えたものが少なくなかつた)のために生命を賭して闘うものがあるうか。案の定党がソヴィエトを樹立せよというピラをまけばまくほど労働者は党をおそれて遠ざかり、自分の生活のからのがにかたくと同じこもるようになった。中共は労働者のこのような現象をすべて組合幹部の日和見主義の影響とみ、その対策としてソヴィエト樹立のスロ

ーガンをいれる赤色組合をつくって、白色組合と對抗させようとした。これは合法的組合のもとに結成されている組織労働者のすべてを敵にまわすことだった。したがって赤色労働組合員となるものは共産党員のはかにないから、その地区の共産党員が多くの場合党と組合の両方に名をつらねた。まれには党員以外で赤色組合員となるものもあるが、その多くは未組織のわかい労働者や半ばすてばち気分のルンペン労働者だった。この状態について中共の著名な労働指導者項英さえ「赤色組合は完全に大衆の外がわに組織された」と自己批判している。

一九二七年に行われた漢口の第四回全国労働会議では三百万人の組織労働者が代表されたが、その大部分は共産党系であった。ところが、二九年十一月に行われた「第五回全国労働会議」に代表された組合員はわずか三万人にすぎなかったのである。共産党が公表した全国赤色労働組合員の数——これは例

によっていつも非常に水まじきされているが——は一九三〇年の夏には六四、三八一人である。しかし上海、武漢、香港、ハルビン、天津、厦門、無錫をふくむ主要都市の組合員数は一万人をはるかに割ってわずか五、七四八人にすぎない。それからわずか数カ月後（一九三一年二月）党中央委の一人羅邁は「今やほんとうの赤色組合はひとつもない……かれらはみな掃討されてしまった。すべての事業は放棄された」とかいている。

四 農民革命の構想

都市におけるプロレタリア組織運動の完全な失敗は、中国共産党の性格に重大な影響をあたえた。当時都会の白色テロをのがれて紅軍に加わったインテリゲンチヤや労働者もあったが、それらはごくかぎられた数であった。紅軍根拠地と都会の間には、白

軍のあついかべがあつて両者をへだてていた。その結果ソヴィエト樹立運動ははじめからプロレタリアートの指導力に期待することができなかったもので農民への依存度がますますたかまつていった。

農民もちろん革命低調の全般的影響をうけ、革命的情熱は一九二七年当時にくらべものにならないほど低下していた。だが農村には農民のたちあがらなければならぬ理由が、ごまんとあつた。第一に、農民暴動のおこつた諸地方では地主たちの残酷な復讐がはじまつていた。かつて農民協会に關係した農民連——それは耕作農民の大部分であつた——のなかで生きのこつたものもひどい圧迫をうけ毎日を戦々恐々とおくつていた。それ故紅軍がかれらの村の付近にきたといううわさがつたわるとかれらのなかから幾人かは村をすてて紅軍に参加する機会をのがさなかつた。

また中国の農村にはそれだけでなくとも紅軍に参加す

る可能性のある潜在的失業人口が常在していた。かれらは食事を保証されるだけでどんな仕事でもやろうという、半ばすてばちな気分をもつていた。過去においてこれらの人々をおさええてきたものは家族制度の基礎のうえにたつ宗法社会の道徳であつた。それは大革命の混乱期にほとんど破産に類していたが、実はそれよりずっと以前から家父長が絶対権をもつ家族制度は崩壊しつつあつたのである。耕地も農具も少ない中国の農家では、家父長は子供連が大きくなくても土地をわけて分家させてやることはできない。そんな「田分け」をすれば家族全体がくえなくなることはわかっている。⁽¹⁰⁾そこで家父長は子供が大きくなつても分家させず、その妻たちともども自分の耕地のうゑで労働力として使用する。子供たちは独立しようとしても村にはあまつた耕地はない。他の国家のように中国には農村のあまつた労働力を吸収する都会の工業が未発達であるから、かれ

らが家をでれば生きる道はほとんどない。それ故家父長のかれらにたいする權威は絶対であり、かれらは、その命令のもとに金銭報酬のない労働をつづけなければならぬのである。

そこで当然考えられることはこの家族制度の内側がそと目で考えられるような、愛情にみちたものではなく、従属家族員の不平不満が渦をまいていくということである。この傾向は西欧の自由な考え方が中国につたわるようになると、一層顕著になってきた。康有為はすでにその「大同書」のなかでこうのべている。

「故に凡そ中国の人、上は簪纓詩礼の世家より、下は里巷崔嵬の衆庶にいたるまで、其の門外を視れば太和蒸蒸、其の門内を叩けば怨氣盈溢、蓋し凡そ家あればよくまぬかるるなし。……けだし国に太平の時あるも家に太平の日なし、其の口舌は兵才よりも甚しく其の怨毒は水火に過ぐ……」

こうして中国の家族制度はそれ自身反抗分子の坩堝であり、その上にたつ宗法社会はまさに「怨氣盈溢」の社会だったのだ。毛沢東はこのことをかれの少年時代に身をもって体験している。それゆえかれは「宗法社会」を破壊すれば、そのなかからいくらでも革命のエネルギーをくみとることができることを確信していた。白色政權の圧力のおよばない農村をつぎつぎに革命化し、やがては白色政權の本拠たる都會を包囲するという、レーニン方式にないかれ独自の革命構想も実にこの確信を基礎としたものである。この戦略は都會と農村の関係を「点」と「面」に都會と都會をむすぶ交通線や「線」にたとえることによつて一層明瞭となる。かれは「面」を構成する広大なひろがりをもつ農村を革命化することによつて「線」は切断され「点」は包囲され、結局そこに基礎をおく帝国主義とブルジョアジーを屈服させ

ることができるとかんがえたのだ。

五 農民共産党への指向

都市プロレタリア運動の凋落と紅軍の形における農民運動の拡大は、党中央委と毛沢東の勢力関係にも大きな変化をもたらした。事実党中央委の実権をにぎっていたコミンテルン駐華代表ミフは一九三〇年の終りに、政策失敗の責任を李立三におしつけて、党総書記のポストからかれを追いはらった。そのあとをうけて党中央委の重要ポストについたのはソ連がえりの若い学生の一団であった。党総書記の地位をあたえられたのはミフの秘書をしていた王明（陳紹禹）である。これらの若ものの一団は「党のボルシェビキ化」を強調し、かれらに反対するすべてのものを党外に追放した。辛うじて党にとどまることのできた老党员はそれぞれの反省書（註）のち

の坦白書）を提出しなければならなかった。たとえば瞿秋白は「自分は卑怯な機會主義者でありました」と自己批判し、周恩来は「私は全党が私の誤謬をのしることを要求する」と反省している。⁽ⁱⁱ⁾

新しい党中央委は形のごとく李立三の冒險主義を批判し、今の紅軍には武漢など大都會を占領する実力のないことを確認した。その結果「真の労働者農民の紅軍」をつくるために現存のソヴィエト地域のひとつに中央ソヴィエト政府をつくることを当面の課題とした。これはすべてコミンテルンの指令によるものである。

現存のソヴィエト地域に中央ソヴィエト政權をたてるということになる、それ自身すでに毛沢東の主張への屈服を意味する。事実中共中央委のなかにもそれは敗北主義だという抗議もあったようだ。げんに一九三〇年十一月十六日のモスコイから中央委にあてた手紙には「ただボルシェビズムとな

んら共通のものをもたないもののみがこれを退却路線と解釈するだろう」といつてかような批難をおさえている。しかしこの新方針はなんと弁解しても運動の中心を都会から田舎に、いかなればプロレタリアから農民のなかにうつしたことは否定できない。

もしも都会におけるプロレタリア組織運動が王明のあたらしい指導部のもとで或る程度活発化しており、ソヴィエト樹立運動にプロレタリアートをおくりこむことができたとすれば、ソヴィエトにおける指導関係をかえ、毛沢東を党中央委の統制下に置くことができたかもしれない。だが、都市プロレタリアート運動は新中央委のもとで活発化するどころか、ますます低調になっていった。これにたいし、ミフは労働運動について事実とかけはなれた誇大な報告をして事態をごまかそうとした。一例をあげれば、一九三二年九月ミフは上海の紡績労働者十二万人の圧倒的多数は赤色組合メンバーだと報告してい

る。だが中共自身の調査報告によると、三二年十二月の組合メンバーはわずか一千人にすぎないのだ。

組合運動の低調は中国共産党の階級構成にも大きな影響をあたえた。一九二七年の四月における中国共産党の党員は六万人と報ぜられ、その五八パーセントは主要工業都市ではたらく工業労働者であった。この年共産党は惨状な敗北をきつしたが、それでも翌二八年の党員数は十万人、三〇年度は十二万、三四年度は四二万人と報ぜられている。もちろんこの数字は多分に水増されているであろうが、そのことはしばらくおく。ここで重大なのはこの党員のなかに工業労働者のしめる比率である。それは党の階級構成を示すものであるから、党組織の責任者はしばしばその実数を報告している。それによると、一九二八年度は党員中プロレタリア出身党員のしめる率は一〇パーセント、二十九年度三パーセント、三〇年度(三月)二・五パーセント(以上は一九三

○年三月二十六日、紅旗の発表）九月一・六パーセント（周恩来、一九三〇年九月二十四日の報告）その年の終りにはゼロになっている。つまり一九三〇年頃の共産黨員はほとんど知識階級と農民階級出身者からなっていたのである。

江西の紅軍にあらたに参加したものの多くは農民と国民党からねがえた兵士達であったが、兵士たちは農民の二男三男、または土地を失なった農民達である。かれらが紅軍に参加した理由は色々あるが、共通なものは紅軍が勝てば自分や家族が耕地がもらえるということである。中共がもしかれらのなから黨員をリクルートし自らを拡大していかなければならないとすれば、この農民の要求を中心として動かざるをえない。しかし農民は自分の要求が満たされれば一応は現状に満足し、とことんまでの革命にはあまり興味をもたない。かれらを革命の最終的勝利にまで導いてゆくものは共産主義世界観をも

つ「プロレタリアートの指導」でなければならぬ。これがマルクシズムの教である。

しかし工業中心から遠く離れた江西の紅軍根拠地ではこの任務をになうプロレタリアートの参加はのぞめない。では「プロレタリアートの指導問題」はいかに解決するか。

毛沢東はマルクス主義者として勿論「プロレタリアの指導」の必要性を否定してはいない。だが彼はこの言葉にたいして字義にとらわれない解釈をあたえている。中国プロレタリアートの階級としての未熟性をよくしっているかれは、共産党がプロレタリアートの指導を代表しているから、それでよいではないかという解釈である。したがってかれは都市プロレタリアートが農民指導のために江西にはいってこなくとも、それほど苦にしなかった。

一九三一年十一月七日江西省の瑞金において中共は「中国蘇維特共和国」を宣言し仮政府の主席とし

て毛沢東がえらばれた。今や上海、武漢、天津、北京等の主要都市をふくむ「非蘇維特區」における党員の主要な任務は「紅軍の偉大な勝利のために支持を強化し」（一九三一年十一月十日「中央の重要問題決議」）紅軍のために兵をつのることになった。つまり中国における階級闘争の最前線が江西にうつり、上海や天津等の工業中心地が後方地になったことが国際的に承認されたのである。一九三一年九月李立三は「我々が山のなかに首府をたてたとしたら、私はそれは冗談だと思ふ」といい毛沢東を「革命上山主義」とあざけたが、それからわずか一年後にはその「冗談」はほんとうとなり、革命の首都は江西の山のなかにたてられたのである。この経過は中国革命の路線についてスターリン構想の失敗と毛沢東構想の勝利を明確にしめすものであろう。

第七章 労働者のいないプロレタリア政党

一 江西における指導権あらそい

一九二七年の暮に毛沢東が井崗山にはいつてから一九三四年十月「長征」にでるまでの七年間、かれの周囲にはかれと人間的にむすびついた指導者集団が形成され、その指揮下に秋収暴動その他の戦闘でかれらとともにたたかっていた湖南、湖北の農民労働者や国民党からねがえた兵士からなる紅軍が成長した。かれらは中国各地からあつまった、種々雑多な現状不満分子であるが、ひとたび毛沢東の指揮にはいつて共産主義教育をうけると、自分達の戦いは共産主義の世界をつくるための戦いであるという自覚に到達した。この共産主義教育の過程において毛沢東は紅軍兵士の忠誠をかれ個人への忠誠に限定するわけにはいかなかった。これは毛沢東と党中央との理論的闘争においてしばしば相手方にねらわれる弱

点となった。

李立三派を逐って新中央委員会をつくったロシア留学生派は、都会では白色テロの弾圧のために動きがとれなくなり、一九三三年のはじめに江西ソヴィエト区に中央委員会をうつした。当時陳紹禹はモスコに去り、そのあとを秦邦憲がついでいた。翌三四年にはやはりロシア留学生派の張聞天が中央委の指導権をにぎった。このような党中央委の人事異動のほんとうの原因ははっきりわかっていない。甘友蘭の「毛沢東及びその集団」は毛沢東と陳紹禹の間につきのような出来ごとがあつたと報じている。

「一九三二年の夏陳紹禹が毛沢東に会う用事があるって、上海から瑞金にきたとき毛沢東に抑留されてしまった……モスコは非常に心痛したが、毛沢東に実力があるのでどうすることもできない。このような事情からミフは陳紹禹を王座からひきおろす計画をめぐらし、同じ系統の秦邦憲をかれ

の地位にすえ、陳紹禹を中共代表の資格でコミンテルンに派遣することにした。こうして一九三二年の秋、かれは中国をはなれソ連にいった。⁽¹⁾

陳紹禹がモスコにさつたことは事実であるが、その背景にこのような事情があつたかどうかは確認されてはいない。しかしこの話は毛沢東の当時の実力について、やや過大な評価をくだしているようである。毛沢東がもし党中央をこのようにその手のなかににぎっていたとするならば、長征途上遵義会議をひらいてかれの指導権をうばう必要はなかつたはずだ。

また一九四五年四月七全会が採択した「若干の歴史問題にかんする決議」はこの期間におけるロシア留學生派の指導のまちがいを批判してこういつている。

「他方日本帝国主義が一九三一年九・一八にはじ

めた進攻はまた全国的に民族民主運動のあたらしいたかまりをよびおこしたが、新中央委はこれらの事実によってつくりだされたあたらしい情勢についてはじめから完全にまちがった評価をおこなつてきた。」

もし毛沢東が当時の党中央の事実上の支配者であつたならば、この批判はかれ自身にも向けられたものになる。それならば毛が完全に党中央を支配していたと思われ一九四五年にこのような決議をするとは考えられない。

勿論当時の誤謬のすべてをかれらにおしつけることによつて毛沢東の不可謬性を証明するということも考えられないこともないが、当時の実情を知っている人々がまだ多く生きのこっているとき、それはかえつて逆効果をともなうから、この考え方はなりたたない。

江西ソヴェエトの成り立ちや紅軍における毛沢東の思想的影響を考慮にいれば、かれがわかいロシア留學生の新中央委のあやまった指導下にたったのはいささか不思議のようであるが、毛沢東が紅軍の兵士にはどこしている共産主義教育から考えればそれは当然のことである。かれの共産主義教育では上級の決議にたいする下級の絶対服従を要求している。この規律なしでは紅軍の統制はたもたれない。紅軍の兵士たちは毛沢東を尊敬はしているが、かれ個人の私兵ではなく、共産主義の理想実現のために戦う軍隊だという自覚をもっていた。この自覚は毛沢東をふくめてその指導者集団の人々にも共通のものである。

それ故かれらも兵士たちも党中央の決定には、それがたとえ現実をはなれていても、一応はそれに服従しようとしたのである。

二 「日本の侵略」をめぐる党内闘争

当時、党中央委と毛沢東の間に情勢の評価及び党路線について意見の対立があったことは否定できない。それについて公認党史「中国共産党の三十年」の著者胡喬木はこういつている。

「王明（陳紹禹）博古（秦邦憲）を先頭とする新しい左翼派は日本の侵略によってひきおこされた国内政治の重大な変化を完全に否定し、国民党の各派各中間派はすべて同じ反革命であるから、党はかれらにたいして一律に決死的闘争をおこなわなければならないとした。この『左』翼派は紅軍の戦争の問題でも……中心都市を奪取することをひきつづき要求した。また国民党地域の秘密工作の問題でも……大衆から遊離した冒險政策をひきつづき実行した。このあやまった指導のもとに国

民党統治区の組織はほとんど全部破壊された。左傾分子の組織する臨時中央委員会は一九三三年中央紅軍根拠地にうつり紅軍と革命根拠地工作の中央委員毛沢東同志らと一緒に正式の中央機関をつくった。しかし毛沢東同志の指導、とくに紅軍にたいする指導をしりぞけた。こうして紅軍の勝利と国民党統治地域の大量運動の昂揚によってあらわれてきた革命の復活は破壊されてしまったのである」⁽²⁾

李立三も陳紹禹もともにコミンテルンの思想路線を代表しているのであるから、毛沢東と新中央委が対立することは当然のことであった。陳紹禹が李立三を党総書記の地位から追ったのはかれが李の都市中心主義に反対し、毛沢東の農村革命中心主義に賛成したためではない。李立三路線は基本的な点では「コミンテルンの方針と完全に調和していた」

(一九三〇年九月中国共産党三中全会における周恩来報告)といわれ、陳紹禹もその点ではまた李立三路線を踏襲して・都市中心主義をとっていたのである。それ故前出の「若干の歴史問題に関する決議」もこういっている。

「かれ(註 陳紹禹)は革命情勢と党の任務の問題ではひきつづき全国性的「革命的高潮」と党の全国的範囲における攻勢方針を強調し、いわゆる「直接革命情勢」が非常にはやく、一つまたはいくつかの中心城市をもつ主要省をおおうであろうとかんがえた。かれは左翼的観点からその当時の中国にはまだ真の紅軍と、農兵代表会議政府(註 ソヴェエト政府)がないとさげすみ、とくに当時における党内の主要な危険はいわゆる「右傾機会主義」「実際工作のなかにある機会主義」と「富農路線」であることを強調した。……全体としてかれは李立三路線に比して左傾はさらに強

固であり、さらに理論があり、形態もさらに完備していた。」

ここにのべられている「革命情勢」とは一九三一年の「九・一八」すなわち満州事変によって中国の民衆の間におこされた民族反帝闘争のあらたな昂揚についていったものである。この新しい革命情勢にたいして中国共産党がとった方針はこれまでとなんらことなるものはない。それは毛沢東がのちに採用した日本帝国主義だけを目標とし、それに反対するすべての要素——国民党までもふくめる——をひとつの民族統一戦線に結集させることではなく、日本帝国主義は「すべての帝国主義及びその出店国民の援助をうけているという前提のもとに、国民党にたいする闘争をますます激化させることである。それのちに蔣介石がとった、「対外先安内」（すなわち外国と戦うにはまず国内を安定せよ）のスローガ

ンのもとに共産党をたおすことを先決条件とする政策の裏がえしである。この方針は一九三二年九月十八日の「抗日宣言」につぎのように定式化されている。

「ソヴィエト臨時中央政府は全中国の労働紅軍とソヴィエト区の広汎な労働農動大衆を指導して積極的に革命戦争をすすめ、中心都市をうばいとり、国民党の統治を顛覆せしめようとしている。これが実際に民族革命戦争をすすめ日本帝国主義とたたかう前提である。われわれは白色区域の労働者、農民、兵士、学生およびすべての勤労大衆に民衆抗日義勇軍を頻発的に組織させ、国民党軍の武器をうばいとして自己を武装せしめるようによびかけよう。……ソヴィエト政府があつてはじめて全国の民族革命戦争を指導し、直接日本とたたかい、帝国主義の中国分割に反対することができるといふこと。また労働紅軍があつては

じめて民族革命戦争を實行することができるとい
うことを認識すべきである。⁽³⁾

当時白色区域内にはすでに前章でみたように中共の拠点となるべきものは存在しなかった。したがって国民党の武器をうばいとして抗日義勇軍を組織せよと大衆によびかけても、その運動を組織する核心となるものがないので実現はのぞめなかった。たとえ「民衆抗日義勇軍」なるものができたとしても、それと国民党軍との武力衝突は必至であるから、流血によって鎮圧されることは明らかである。このような実現性のない方針の背景にはやはりスターリンの考えがつよく働いていたようである。それを示唆するものは一九三二年九月のコミンテルン第十三回ブレナムの決議である。それは日本帝国主義はフランス及びイギリスの事実上の支持をうけているばかりでなく、国際連盟も「フランス及びイギリスの指

令によって日本に味方している」という情勢分析のもとに満州を自己の植民地に転化しようとしているとい、中国共産党にその対策を次のように指令している。

- 1 中国共産党は、国民党中国内の大衆的反帝国主義運動においてプロレタリアートのヘゲモニーを確保するため、今後も全力をつくすこと。
- 2 この目的のためにソヴェエト運動を一層展開し深化させ、紅軍と中国ソヴェエトを強化し、ソヴェエト運動と国民党中国内の大衆の反帝国主義闘争と結合させることを任務とし、大衆の反帝国主義闘争において、下からの統一戦線戦術を広汎かつ徹底的に適用すること。
- 3 すべての帝国主義者にたいする中国の独立及び保全のために帝国主義の手先き——国民党の顛覆のために大衆を革命的民族解放戦争の旗下に組織すること。

これは日本帝國主義だけではなく、すべての帝國主義プラス國民黨を敵にまわして、中国ソヴィエトが大衆を組織してたたかえということであり、當時の中国ソヴィエトのおかれた状態からいえばまったく実現性のない非現実的な考え方であった。

ここで問題はこのような非現実的な方針に毛沢東が——陳紹禹、李立三、王明の非現実的方針に抗してやっと中国ソヴィエトの基礎をつくりあげた毛沢東が——果して心から賛成していたか、ということである。石川忠雄教授はこの当時の毛沢東の著述、「われわれの経済政策」などの内容を分析したあげく、毛沢東とソ連留学生らの間に見解の相違がないとみておられるようだ。即ち毛沢東が上述の論文で「われわれの経済政策の原則は……民衆の生活を極力改善し、労働者、農民の経済面での連携を強化し、プロレタリアートの農民にたいする指導を保証し、私営経済にたいする国营経済の指導権をたた

かいたり、将来社会主義に発展する前提をつくらうとするものである」とのべているところから、「この見解は、明らかに現在の革命がソヴィエト革命の段階にあることを確認したものであり、労働の民主専政から直接的に社会主義へ移行することを予定しているものであって、後年の抗日民族統一戦線への期待はまったくくみい」だせないといわれている。

この見方からいえば「抗日反帝統一戦線の問題にかんするかぎり、ロシア留学生派と毛沢東の間には見解の基本的相違は存在しなかった」ということになり、毛沢東は「満州事変以後の日本の侵入にともなう中国の政治情況の構造的変化に対しては、基本的にはロシア留学生派と同じように明確な認識をもっていないかのように理解される」という結論がでるのは当然である。⁽⁴⁾

三 毛沢東は抗日統一戦線を考えて

いたか

おそらく毛沢東は、当時たとえ党中央——コミンテルンの路線に反対の意見をもっていたとしても、真向からかれらと対立するようなことはしなかったであろう。陳独秀時代にも李立三時代にもかれのといった態度は「忍」の一字につきる。かれは真向から戦って勝つことのできる実力と自信がつくまでは決して動かない。いったん動きだしたときは相手を徹底的に打倒する実力を自覚したときである。これはかれの軍事における作戦技術にも共通するやり方である。毛沢東に直接接触してきた中国民主同盟の元秘書長周鯨文氏は毛沢東のこの性格を「忍と狼」という言葉で表現している。狼とは残酷のいみであるが、かれの言葉にはきくべきものがある。

「かれは狼を運用するうえで一定の試探の期間を置き、情勢不利とみると忍を用い、情勢有利とみると狼を用いる。かれは感情に溺れて自己が受動的立場に陥るようなことは決してやらぬ。かれの戦術の『敵退けば我進み、敵進めば我退き、敵少なければ我攻め敵多ければ我逃ぐる』も同じ原理の運用である。」

また毛沢東がプロレタリアートの農民にたいする指導を云々したからといって、それがコミンテルン——党中央の考えている「プロレタリアートの指導」と同じ意味とは考えられない。江西ソヴェエトには近代的プロレタリアートはほとんどいなかったし、毛沢東はそういうありもしないものの指導をあてにはしていなかった。毛沢東が「プロレタリアートの指導」という意味はプロレタリアートの前衛たる「党の指導」ということだ。かれが政権をとつ

たのち、「プロレタリアートの指導下における労働同盟」という言葉をしばしばつかっているが、それと同時にプロレタリアートの指導は「共産党を経過しなければならぬ」（政協籌備会における毛沢東の演説）とはっきりことわっている。プロレタリアートの指導がもし党のきめたワクを通過したものでなければならぬとすれば、最高の指導者は明らかにプロレタリアートではなく「党」である。

毛沢東が「抗日統一戦線」に反するコミンテルン——王明路線を心から支持していたかどうかを判断するもうひとつの重要な観点は毛沢東の半生にあらわれている民族主義的傾向である。そもそも富農の子毛沢東が共産党にはいった動機は、マルクス主義者として中国のプロレタリア農民を解放しようというよりも混乱し疲弊した祖国を帝国主義の圧迫から解放し、世界列強と肩をならべる中国を再建しようという愛国的動機であった。いまその祖国が日本軍

の侵略に直面し、中国人の民族意識（ブルジョアジーもだれもかれもの）昂揚しつつあるとき、かれが今までと同じようにプロレタリアートのブルジョアにたいする「直接闘争」などを考えていたとは思われない。いま国民の圧倒的多数が日本と戦いたがっているとき、「プロレタリアートのヘゲモニー」の下にブルジョア政党和国家に「直接闘争」をいどみ、それを倒してから日本と戦おうというような戦略はどうかんがえても革命の実際家毛沢東のものではない。毛の自伝によると、一九三三年のはじめに「ソヴィエト政府（駐江西ソヴィエト政府）は内戦を中止し、ソヴィエトおよび紅軍にたいする攻撃を中止し、大衆に市民的自由と民主主義的権利を保証し、民衆を抗日戦のために武装せしめることを条件として、いかなる白軍とも協力する用意がある」と宣言した」とあるが、実際には「抗日統一戦線」の構想はそれよりもずっと以前、おそらく「九

・一八」事変開始後、間もなくかれの脳裏を去来していたにちがいない。この事変がひきおこした全国の民族的興奮を考えると、政治的計算にたけた毛沢東がそれを江西の山間に半ば封ぜられた紅軍の運命とむすびつけずにはおかなかったと思う。

四 江西ソヴィエートの危機

当時の江西ソヴィエートのおかれた実情を知れば、ますますそう考えざるをえない。紅軍は蒋介石の掃討戦にたいして自らをまもるのがやっとで、白色区域にはたらきかけて抗日義勇軍を組織する余力などは到底かんがえられなかった。蒋介石の掃討作戦はまず第一次（一九三〇年十二月～三一年一月）、第二次（三一年五月～六月）、第三次（三一年七月～十月）の三回にわたって行われたが、三回が三回とも大きな損害をうけて撃退された。それから二年間

の空白期間において第四次（一九三三年四月～十月）、第五次（三三年十月～三四年十月）がおこなわれた。かように江西ソヴィエート地区では不断に戦闘がつづき、土地はあらされ、経済状態は悪化するばかりだった。

紅軍は一九三二年の概算（紅軍側発表文献から）によれば、十五万一千人、そのうちライフル銃をもっているものは九万七千五百人にすぎなかった。財政的にそれをささえる江西ソヴィエート地区の領土の安定した部分は江西省八十一県のうち僅か十七県で、その人口は三百万にすぎなかった。もち論紅軍は流動しつつ、その駐在地で食糧を調達する方法をとってはいしたが、恒常的に依存できる「領土」はただこれだけだった。

しかしこの領土及び付近の農民達の紅軍にたいする物質的、精神的支持にはおどろくべきものがある。かれらは国民党軍にわかれば生命をあやうくす

るような性格の援助を紅軍におしみなく与えた。一九三一年八月十九日の「ノース・チャイナ・デリー・ニュース」の通信員はこの事実⁶に言及しつつ「あれほど多くの人々が明らかにかれらの死を意味することをよろこんでおこなっているのは不思議なことだ」とのべている。

江西の農民はなぜ紅軍にこのような支持をあたえたのか。これについて今ではほとんどみかたが一致している。その理由は「土地改革」の一言につきる。土地をわけてもらった農民は国民党がその地方を奪回すれば、土地をうばわれたりえにひどい刑罰をうけることを知っていたので、つねに紅軍とともにたたかった。これはその土地のためにはよろこんでその生命をかける中国農民の心理をよく知っている毛沢東の計算からうまれた戦術である。

紅軍は井岡山以前の戦争でも駐留したところではどこでも地主の財産を没収し、余分のものは貧農に

分配するとともに、一部をもって紅軍の給与にあてる政策をとってきた。土地は貧農や雇農に分配され、かれらは小自作農として更生する。こうして創造された多数の小自作農は自分の運命が紅軍の手にあることを自覚し、よろこんで紅軍にその手をかすようになる。この土地分配の方針は一九三〇年五月の第一次ソヴィエト大会を通過した暫定土地法及び三一年十一月の中国ソヴィエト土地法に成文化された。これらの土地法はいずれも「封建的地主、豪紳、官僚その他の大私有者」の土地を全部無償で没収し、郷村毎に労働能力に応じ、男女をとわぬ頭わり均分をおこなうことを規定している。これらの「分田」は農民の生活を改善するうえにそれほど大きな効果をあたえたとは考えられないが、その政治的戦術的效果は確実であった。

当時ソヴィエト区の農民生活はもち論「戦時」という悪条件を考慮にいたたとしても、それほど急

速に改善されてきているという証明はない。江西ソヴェート区はほとんど工業のない封鎖された純農業地区であり、その農民が土地を分配され多数の零細農ができただけで、ただ「貧困の平均化」が行われたにすぎなかったのだ。

五 江西ソヴェートの「富農主義」

こういう経済状態のなかで、紅軍が財政的に依存できたのは主として富農——貧農のなかの比較的富裕な農民層——と外部の省と物資の交易をやっている富裕な商人層である。自然に紅軍は彼らに依存するようになった。富農は多くの場合土地改革をなすべく小範囲にとどめようとし、それがどうにもならなくなつて「分田」がはじまると、自分の既成勢力を利用して地味のよい土地を自分のものとした。この傾向は中共当局にも責任がある。

党中央委員会は「富農との連合のために農業労働者の利益は犠牲にされなければならぬ。……われわれは富農の反革命的転向をおそれて農業労働者にその要求をひくめるように要求した」（一九二八年八月、中共中央委員会決議）といっている。一九三〇年五月上海で行われた全国ソヴェート代表会議ではこのことが問題になった。席上陳紹禹は現状のままでは共産党はプロレタリアの党ではなくなるといふ。「われわれは富農をおそれて農業労働者を組織することに失敗してよいであろうか」と自問しながらこうつぶやいている。

「もしいうならば、われわれは絶対にプロレタリアートの党ではない。多くのソヴェート農村では富農心理が支配している。富農は大衆組織や党の内部で決して小さくない地位を占めている。かれらは富農の利益のみを尊重している。これはわれわれが富農の心理を農民大衆の基本的心理と

んがえるようになっていゝことを意味する。同じ理由からかれらは店員、手工業者、小企業労働者を組織しようもしない。たとえば湖北、河南（ソヴィエト）地区では『中小商人の利益擁護』というスローガンが公然と宣言され、その結果店員や手工業労働者の要求はなにひとつとりあげられていない。』（一九三〇年六月二十一日「紅旗」）

この全国のソヴィエト地区にみなざる富農優先の空気はコミンテルンでもとりあげられた。一九三〇年十一月十六日にコミンテルン執行委から中共央委に与えられた手紙はこういつている。

「中国ソヴィエト地区においては農業革命のもっとも重大な任務はまだ解決されていない。富農ばかりか小地主までも中国ソヴィエトの内部に、新政権の諸機関や紅軍の内部にもぐりこんで

いる。富農は農業革命の果実をぬすもうとしている。「土地は生産要具にしたがって分配せよ」という富農的スローガンは抵抗をうけていない。：土地均分は農業革命のもっとも重要な任務であるにかかわらず、それが行われているのはほんの僅かな部分にすぎない。貧農の組織はまだ手がつけられていないし、農業労働者、苦力は組合にさえ組織されていないのである。」

中共中央委やコミンテルンは、この傾向を「富農主義」とか「右翼機会主義」とかよび、その張本人が毛沢東であるかのように見ている。しかし毛沢東自身もこの弊害をみとめそれと戦う必要を強調している。かれは、一九三三年八月三十一日付「紅旗」にかいた論文のなかではこうのべている。

「多くの地主および富農は革命的色彩をみにつけ、口では革命に賛成し、土地分配に賛成すると

いつている。……かれらは非常に積極的に「はなしもうまく文もうまい」伝統的強みによって最初の期間に農業革命の果実をぬすんでしまった。多くの場所において無数の事実、かれらが地方政權をにぎり、紅軍のなかにまぎれこみ、革命組織を支配し、貧農よりもよい土地をより多くわけとってしまったことを示している。⁽⁸⁾

一九三四年一月瑞金で行われたソヴィエート大会でも、毛沢東は前年度三三年夏におこなわれた「査田」(土地分配後の再検査)運動によって江西ソヴィエート地区で地主六、九八八家族と富農六、六三八家族が過大な土地を所有していた事実を発見したと報告している。

こういう環境のなかに「プロレタリアートの指導」の実態がないことは明らかである。当時瑞金における党指導者の一人はこういつている。

「ソヴィエート地区の党は一般的にプロレタリアートのヘゲモニーを無視している。どこでもかしくでもわれわれは労働組合運動の継続的無視の現象を見出す。……委員会はそれについていちども討論したことはない。……プロレタリアートの指導は党文献のなかの言葉として主として存在しているのだ。」(一九三三年二月四日「闘争」)⁽⁹⁾

ソヴィエート中国でプロレタリアートの指導というの是一种の口頭禪で、その実態はなかった。それでも手工業者または農業労働者を「プロレタリアート」として党員に多くとりいれようとする試みはしばしばおこなわれていた。江西ソヴィエート時代にはそれもなから放棄されていたので党内からこのような批判がおこったのだ。

江西ソヴィエート内部には富農主義が徐々にひろがり、農民兵士の闘争組織をまひさせ、かれらの間

には徐々にベシミズムがひろがっていった。一九三三年頃には幹部の一人は「この大衆の気分はわれわれの最良の指導者がこようとも、たとえスターリン自身がこようとも、レーニンを墓場からよびもどしてみんなに緒三日三晩大衆を説こうとも変わるとは思われない」(一九三三・二・四「闘争」といっている。このベシミズムは福建省党委員の羅明からはじまっているとみられ、羅明主義ともいわれた。こうして江西ソヴィエトの紅軍は緊急になんらかの活路を見ださないかぎり、かれらは着々その包囲圏をちぢめて行く第五次「回勦」のなかで全滅するのは時日の問題となったのである。

しかしこのときこの包囲陣のそとがわの世界には中共が十分利用できる絶好の情勢が發展しつつあった。蔣介石が剿共戦でうごきがとれなくなっている間に、日本の軍事的経済的侵略の手は急速に中国本土にのびようとしており、それに反抗する国民のふ

んげきは日ましにたかまってきた。誰かが率先して日本と戦えば国民はその人のもとに糾然とあつまる情勢だった。毛沢東がこの情勢を見おとすはずはない。かれがこの際思いきって北上し、抗日戦争のイニシアティブをとれば国民大衆を中共にひきつける機会があると考えたのは極めて自然であろう。

それだけでなく、なんとかしてこの包囲陣から脱出しなければ、ベシミズムに毒された紅軍は自滅をまづばかりだった。こうして二万五千里の長征ははじまるべくしてはじまったのである。

毛沢東がはじめからこの長征にかなりの確信をもっていたことはおどろくべきことである。いったいこの確信と楽観主義はどこからきたのであろうか。ひとつはせつばつまったことである。それ以外に行きみちがないことである。そして中国には長い歴史を通じてこのような立場におかれた軍隊のとるべき道をおしえた戦争科学が發展していた。毛沢東はか

れの愛読していた孫子によって次の言葉をよく玩味していたにちがいない。

「饒野に掠めて三軍食を足し、謹み養って勞する勿れ、氣を合せ、力を積み、兵をめぐらして計謀し、測るべからざるを為し、これを征くところなきに投ずれば死すとも北^北げし」

これを簡訳するところいう意味になる。

敵地の豊饒な地方で掠奪して大軍が糧食を十分にとり、よく注意して十分に休養し、無駄な努力をさけ、上下気を合せて協力一致し、兵を離合集散させて敵の意表をつき、士卒を（目的地以外には）どこにもゆけないところに導いてゆけば、かれらは死んでも逃亡しないであろう。

ここにうたわれている絶対絶命の境地にたった全軍の不思議な親和力と反接力、毛沢東はこのなかに敵地ふかく長征する紅軍の運命の転機をみいだそう

としたにちがいない。長征は紅軍が死中に活をもとめた快挙、それはまさに「之を亡地に投じて然るのちに存し之を死地に陥れて然る後に生かす」（孫子九地第十一）ものであった。

第八章 長征——毛沢東共産党の確立

一 江西ソヴィエート失陥の責任者

はだれか

江西ソヴィエートにたいする蔣介石の第五次包囲戦には約九十万の兵力が動員され、そのうち四十万

が直接戦闘に参加している。これにたいする紅軍は、正規軍およびすべての予備軍とともに総兵力十八万、その武器は小銃十萬挺にすぎなかった。しかもその大部分は瑞金の紅軍兵器廠でつくられた性能のわるいもので、手榴弾などは投げてみなければ爆発するかどうか判らないというしろものである。これに反し国民党軍には精巧な外国製の武器がゆきわたっており、その上四百台近い航空機もあった。蔣介石はそれまでの包囲戦におけるにがい敗北にこり、ナチの前参謀長ホン・セークトの戦略を容れて、紅軍と直接戦うことをさけ、トーチカと軍用道路で大きく包囲体制をとり、そのわくを次第にちぢ

めてゆくという戦術をとった。これにたいし党中央委は、コミンテルンから派遣されたドイツ人軍事指導者リトロフの策を用いて、陣地戦を採用した。そのため兵力と火力の相違が大きくものをいい、紅軍はじりじり圧迫されてきた。

党がこのような戦略を採用した理由は、「毛沢東をしりぞけて、紅軍と根拠地の指導権をにぎっていった陳紹禹、秦邦憲たちモスクワ派の不手際」（たとえば岡本隆三の「長征」二頁）にあったともいわれている。しかし、毛沢東に全然責任がないといえるであろうか。そうだといいきるためには毛沢東が、かれとあれほど人間的にむすびついていった紅軍の指導権からまったくひきはなされていたということを立てなければならぬ。ソヴィエート地区にも毛沢東の指導権に挑戦する多くのグループのあったことはいうまでもない。当時の資料のなかにでくるトロツキスト、AB団、社会民主派、李立三派など

という名前は、ソヴィエト地区内の指導権争いの
はげしさをものがたっている。そのうえ毛沢東と軍
指揮官のあるグループとの間に闘争のあったことも
知られている。しかしかれが紅軍の指導権を完全に
うしない、代りに党中央委員会がそれをにぎったと
いう証拠はほとんどないのである。中央委と毛沢東
とのあいだに意見の対立があったことは事実だが、
かれらが千軍万馬の毛沢東から軍の指揮権をうば
い、全くその意に反した戦略を採用するようなこと
は、両者の関係からみてありえないことである。中
央委が上海からソヴィエト区にうつったのはもち
ろんかれらの身辺が危険となり、都市における活動
が不可能になったためでもあるが、他面毛沢東がか
れらをソヴィエト区によんだことが直接の動機だ
ともいわれる。毛がかれらをソヴィエト区によん
だのは、自分の王座を「正統化」するためだったとい
う説もかなり有力である。ペンジャミン・シユワル

ツの「中国共産党と毛の勃興」は李昂の「紅色舞
台」(一四三頁)からつぎのように引用して、両者
の関係を説明している。

「(江西ソヴィエト)臨時政府の樹立後、毛は
かれ自身全体として中国共産主義運動を支配しう
る地位にあると感じた。そこでかれは、かれのす
きな中国の小説『三国志』の曹操の戦略、すなわ
ち『諸侯を支配するために皇帝を手に入れる』戦
略を採用しようと決心した。かれは一連の電報を
中央委員会におくり、その本部を瑞金に移すよう
にすすめた。その理由は、上海は『白色テロ』の
危険があること、前敵委員会の参加する五中全会
を召集する必要があること、およびソヴィエト
政府は有能な指導幹部の不足に苦しんでいるとい
うことであつた。」⁽¹⁾

しかし中央委は毛の提案に応ずることは、かれの

権力下にはいることになると感じたらしく、はじめはそれに応ずる気配はなかった。そこで「毛は今後は交通が困難であるから、ソヴィエト区から資金を供給することはできないだろうという意味の電報を送った。このおどかしが上海におけるその立場がますます不安定さをましていることとむすびついて、ついに中央委を瑞金に移転させるにいたったのである」という。

かような関係からみれば、中央委が毛沢東を紅軍指導権から追いだし、あやまった戦略を採用したという説はとりがたい。毛沢東自身は自伝のなかで、この戦略上の失敗について、「私たちのあやまち」という表現を用いている。すなわち、

「この時期に私たちは二つの大きな誤謬をおかしました。一つは一九三三年の福建事変中に蔡挺樞の軍隊と合流するのに失敗したことです。もう一つは、従来私たちの用いていた機動戦略を放棄し

て、単なる防禦という誤った戦略を採用したことであり、紅軍が技術的にも精神的にも最上の条件にない陣地戦において、はるかに優勢な南京政府軍と遭遇することは致命的な誤謬でありました。

これらの誤謬の結果として、また数的にも技術的にも、はるかに優勢な国民政府軍と結びついた討伐戦の新戦術や新戦略の結果として、紅軍は一九三四年に当時急速に事態の悪化しつつあった江西での存立条件を変更せざるを得ませんでした。第二に国内の政情が主要な行動局面を西北に移す決定に影響をあたえました。(2)……」

この説明からみて明らかにかれ自身この敗戦にも責任を感じているように読みとられる。もしかれば当時紅軍の指導権から完全にはなれていたとすれば、その直後から開始された「長征」はといった誰

の指揮下におこなわれたのであるうか。長征が毛沢東の指揮下に行われた事実——それゆえに長征の先見と、その成功がかれのクレディットになっている——を否定するなら話は別だが、第五次包圍戦における失敗の全責任を秦邦憲らの中央委だけに帰し、その直後におこなわれた長征の功績を毛沢東だけに帰することはおかしな話である。

二 二万八千里の長征

第五次包圍戦における失敗以来、紅軍は七カ年にわたってすみなれた江西ソヴィエトを棄てて北上の準備にとりかかった。準備は秘密裡におこなわれて、国民党軍にはその気配さえ感じられなかった。スノーはそれについてこうのべている。

「江西省からの退却はあきらかに非常に敏速に秘密裡に行われたので、約九万人と推定される紅軍

の主力がすでに数日間行軍してしまつてから、はじめて敵の司令部は何かおこなわれつつあるかを知るに到つたほどである。紅軍は江西省南部で動員をおこない、大部分の正規軍を北部戦線から撤去して、遊撃隊におきかえた。この移動はつねに夜間におこなわれた。じっさい全紅軍が江西省南部の零都付近に集結したときに、長征の命令が下され、行軍は一九三四年十月十六日に開始された。

三夜つづいて紅軍はふたつの縦隊に分れて西方と南方に強行軍した。四日目の夜にかれらはまったく不意打ちに湖南と広東との防塞線をほとんど同時に攻撃した。かれらは強襲によつてそこを占領し、あわてふためく敵を潰走させ、ついに南方戦線の礮楼と保塁の封鎖線を占拠した。これはかれらに南方と西方への道を開かせ、この道に沿うて、かれらの前衛は耳を驚かす進軍を開始した。⁽³⁾

この記述をよむと、長征はまるで幸運の女神にまもられながらはじまったかのように見えるが、実際には一九三四年の夏、方志敏が北上先遣隊をひきいて安徽省の南部から蕪湖にせまり、その方面に國府軍の注意をひきつけておいたが、ついに包囲されて壊滅してしまつたのだ。同じ八月に任弼時、肅克のひきいる約八千人が、湖南省南部から貴州にはいった。つづいて九月に徐海東の部隊が安徽、河南省北省境の根契地から北上して陝西省南部にはいった。いずれも非常な損害をうけている。しかしこれによつて江西省における国民党の包囲体制にやみだれができたので、紅軍の主力はこのすきをついて長征の準備を完了したのである。その後の「長征」の経過を日を追つて見ることにしよう。

一九三四年

一〇月一六日 紅軍主力江西省雩都に集結

一〇月二日 国民党の第一封鎖線（贛州——南

雄間、守備隊は陳濟棠の広東軍）を突破

十一月四日

江西、湖南、広東省境の城口において第二封鎖線（広東軍）を突破

十一月四日

湖南省にはいり、宜章と白石渡を占領、第三封鎖線を簡単に突破、

湖南軍は戦わなかつた。ここで紅軍は二手に分かれる

十一月三〇日

湖南省湘江の上流の全県、興安で兩軍再び集結、湖南軍、広東軍と

戦いながら湘江をわたる。しかしこの渡河戦において紅軍は非常な

損害をうける

十二月一七日

貴州省黎平を占領、政治局會議を開催す

一九三五年

一月三日 貴州軍四川軍と戦つて烏江を渡河
一月五日 遵義占領、ここで「遵義會議」開
催。この會議で王明、秦邦憲は中
央委の指導的地位からしりぞけら
れ、毛沢東、中央書記局書記にえ
らばれる。しかしこの會議には張
國燾の代表は参加していない

一月一八日 遵義出發、四川省境に向う。赤水
にて強大な四川軍に遭遇す。紅軍
北上をやめて、西進するかに見せ
て、再び東にかえり、遵義付近で
蔣直系の吳奇偉軍を撃滅す

一月二九日 紅軍は赤水を渡つて北上すること
は不可能なことを知り、一隊をし
て貴陽を襲う体制をとらしめ、他
の一隊をして再び湖南省境に向う
体制をとらしめる。敵軍がこれに

応戦する体制をとっている間に紅
軍本隊は西進して雲南省にむかう
二月二日 北盤江をわたる

四月二七日 紅軍主力（第一方面軍）雲南省に
はいる

五月一日 金沙江上流渡河点、竜街渡、絞車
渡において奇襲渡河に成功

五月二二日 紅軍主力安順場にて大渡河を渡る
五月二五日 安順場の上流瀘定の渡河点を占領
し、甘肅に向つて北上を開始

六月一七日 大雪山脈夾金山の難所をこえて大
維にて張國燾の第四方面軍と合流

六月一八日 懋功を占領、これより再び大雪山
脈をこえ北上し、兩河口にて毛沢
東、張國燾と会見、北上について
意見対立す

七月一五日 毛兎蓋を占領

八月一日 毛児蓋滯在期間中にいわゆる毛児

蓋会議（遵義會議の延長）が行われる。毛・張の北上に関する意見の対立は毛沢東派の勝利となり、この日、中央委員会「抗日救国のため全国同胞に告ぐ」（八・一言）が発表さる

八月二日 いよいよ北上開始、大草原をこえ

て甘肅にむかう

八月下旬 毛沢東の第一方面軍包座占領。

このとき張國燾毛児蓋會議の決定を無視して、第四方面軍南下命令を出す。毛沢東に同行した第四方面軍の一部もこれに従う

九月一七日 毛沢東軍包座から再び北上開始。

甘肅省にはいり省境臘子口を占領す

九月二日 哈達舖にて全軍の幹部會議開催。

九月三〇日 通渭（興城）占領

一〇月三日 会寧及び界石舖にて毛炳文の国民党封鎖線を突破

一〇月一七日 陝西、甘肅省境に達す

一〇月一九日 陝西省にはいり、紅軍根拠地、吳起鎮に到着。これで長征は事実上終了

一一月三〇日 紅軍吳起鎮から延安南方の象子湾に進む。ここで長征終了の宣言方式に発表された。

長征期間を一九三四年十月十六日から、翌年十一月三十日までとすれば、所有日数は四百十日間に達する。第一軍団直屬部隊の記録では所要日数三百七十一日、行軍距離は九〇四四キロ、この間十一省を通過し、五十余の大中興城を占領している。長征は国民党軍の勢力圏から遠ざかった。比較的安全な地

方に新たな根拠地をたて、そこから抗日革命運動をつづけるという遠大な目的をもっておこなわれた。

この目的がながい行軍において紅軍の志気をささえるうえに、重大な役割りをえんじたことは事実であるが、この大行軍の直接の動機はそれではない。なんとしても敵の手からのがれて生きのびたいという生物的本能であった。それ故長征はハンニバルのローマ遠征よりもむしろナポレオンのモスコワからの撤退に比すべきものである。

三 長征と農民革命

長征の途上、大きな戦闘もあったが、それは行手をはばまれてやむをえない場合にかぎられ、多くの場合紅軍はできるだけ戦闘による損害をさげようとした。そのためには、たとえば人口族地帯を通ったときのように、敵の部隊長を買収したり、それと妥

協したりするような外交手段をとる場合もあった。それにしてもこの六千哩にわたる大後退戦を成功させたものは、紅軍の勇気だけではない。現在はまだそれだけを強調している書物が多く現われているがそれらは長征の真実をみおとさせ、卑俗な英雄物語化している。

紅軍が通過した十一省は外国ではない。紅軍が所謂「敵地」を強行突破したかのように考えるのは大きな間違いである。当時中国の農民、とくに紅軍の通過した地方の農民の窮乏化はひどく、国民党の政治的宣伝に耳をかたむける余裕などはなかった。それ故紅軍についてとくに敵意をもっていない。かれらは多年の経験から兵隊になるようなものはろくな者はないと考えていたが、村にはいつてきた紅軍をみてからは、このかんがえをかえはじめた。紅軍は糧食の不足になやんでいたが、農民からは決して略奪せず、必ず正直な価格で購入した。もちろん略奪

を全然おこなわなかったわけではない。ある地方を占領すると、その地方軍閥や大地主の倉庫を没収し、その糧食を略奪し、必要以外のものは貧民にわけてやった。この略奪を正当化し、かつ円滑に行うためには政治宣伝と土地改革が必要である。それ故に紅軍は行くさきさきでそれを行なった。平和にみえる中国の農村も一歩内部にはいると、なかには憎悪がうずまいていた。そこには地方軍閥の苛酷な徴税にたいする大衆の反抗、家父長制にたいする青少年の不満があった。だが農民のなによりもはげしいのは、土地収獲の五〇パーセントから六〇パーセント（四川省などは七〇パーセント以上）をとる小作制度と、それを力によって支持している地主や軍閥にたいするものであった。その爆発をかるうじておさえていたのは、毛沢東や瞿秋白のいわゆる「封建的宗法的政権」であるが、紅軍がある地方に近づくと、その土地のボスや大地主はいちはやく省城に

避難してしまふので、その権威は地におち、あるものは全く解消してしまつた。その結果、それまでおさえられていた農民革命のエネルギーは一時に爆発し、その一部が紅軍に吸収された。これが紅軍を長征の途上でへたばらせなかつた有力な要素である。

長征をおわつたばかりの紅軍兵士や、かれらに接していた農民とインタビュしたエドガー・スノーは、農民が心から紅軍を支持しているかどうかを熱心にたずねている。かれは同行の傅という共産黨員を通じて、紅軍にたいして色々な不平をならべる年よりの農民に、つぎのような質問を發している。

「さてお爺さん、あなたは私たちよりも白軍の方が好きですか！ さあこの間に答えて下さい。いったい白軍はあなたがたの作物のかわりに何をくれましたか？」

これにたいする答えは「私たちが選ばなければな

らないとすれば、私たちは紅軍をとります」であつた。スノーはすかさず「なぜ紅軍を選ぶのか」とたずねた。その質問にたいしてその老人は、「白軍がくるとどんなことが起るだろう」と自問しながら、具体的な実例をあげてこう答えている。

「かれらはこれこれの量の食糧を要求し、支払いについては一言もいわない。もし私たちがこぼれば共産党だといって逮捕されます。もし私達がそれをかれらにあたえれば、私たちは税金を納めることはできない。いずれにしても、私たちは税金を払うことができないのです。そうなるとうどうでしょう。かれらは私たちの家畜を奪つてうりはらいます。去年紅軍が去つて、白軍がもどつてくると、かれらは私の二頭の驃馬と四匹の豚をとりあげました。驃馬は一頭三十元、豚は大きいので一匹二元はします。かれらはそれにたいしてどんな支払いをしてくれたでしょう。」

いやはや、かれらのいふぶんでは、私の方こそ税金や地代として八十元はらう義務があるというわけです。そして私の家畜は四十元に見積つてやるといふのです。それでさらに四十元請求しました。私はそれを手に入れることができるでしょうか。もうかれらにとられるものは何一つもっていませんでした。かれらは私に娘を売れといいました。これは本当の話です。この地方でもある人はそうしなければなりません。家畜も娘も持つていないものは保安に行つて牢屋にはいりました。そしてたくさんの人が寒さのために死にました。(5)……」

この老人の話は、中国では農民革命がなぜ必要なのか、彼らが白軍よりも紅軍をなぜえらんだのか——というならば長征成功の真の理由がどこにあったかを、どんな理論よりも明瞭に答えている。長征の成

功はゆくさきさきで土地革命をおこし、農民によって支持されたからである。

四 遵義會議——毛沢東体制の確立

長征によって中国共産党がますます都会のプロレタリアート運動からはなれ、農民革命軍の様相をおびてきたことは否定できない。それは江西ソヴィエートの存在が、多少とも影響をあたえていた海岸の都会の革命運動をはるかかなたに見棄ててしまったのだ。この期間において都会の革命インテリゲンチヤのあるものは転向し、国民党の陣営にはいった。又中国の政治的前途に失望し、無関心という政治的自殺をはかった。それにはこの間の世界情勢の大きな変化も関係がある。ドイツにはヒットラーの抬頭があり、ソ連共産党につぐ組織をもつドイツ共産党は壊滅してしまった。ヒットラーをおそれたスター

リンは、それまで反共陣営の元兇として批難しつづけてきた英国やフランスの資本主義を、「平和愛好的」デモクラシーともちあげ、これと連合して反ファシズム戦線を結集しようとした。遵義會議からは半カ年後にモスクーで行われたコミンテルン第七回世界大会（一九三五年七月）はプロレタリア革命のためでなく、デモクラシーのために戦うことを世界に宣言した。「平和愛好」的資本国においては、共産党はそれぞれの政府にたいする反対をやめた。

かような内外情勢のなかで、毛沢東はおそらくこの瞬間、中国革命のために戦っているものは自分達紅軍だけだとかんがえたであろう。長征途上の遵義會議で毛沢東は、この考え方をはじめて党のテーゼとしてとりあげた。即ち——中国革命においては革命の武装組織（註 紅軍とよむべし）が中国革命の主要組織形態であるというテーゼである。これは紅軍が国民党を武力でたおして、政権を獲得すること

が中国革命の第一条件だということである。それは「プロレタリアートの武装蜂起による暴力革命」という、ソ連方式が中国革命の具体的な条件に合致しないということを正式に宣言したのに等しい。

遵義会議（党中央政治局拡大会議）のもう一つの決定は、農村が都市を包囲する方式を、通常の条件のもとでは、都市による農村指導という方式にとつてかえたことである。これによって「都市から農村へ」というスターリン方式は、最終的に「農村から都市へ」という、毛沢東方式に改められたのだ。

もう一つの決定は、抗日統一戦線という形において民族ブルジョアシーを革命の「担い手」仲間なかに加えたことである。この政策をマルクス主義理論とむすびつけることは毛沢東にとっても容易なことではなかった。誰でも知っているように、マルクスは革命の担い手としてのプロレタリアートの意義を説いている。そしてプロレタリアート以外の階級

が資本主義の時代において、革命的役割を果たすことは想像もしていなかった。レーニンもマルクスの革命理論に従ってロシア階級分析を行ない、資本主義の発達しないロシアでは、プロレタリアートだけでは革命を実行する力がないことを知って、農民をその同盟者としてとりあげた。そこではじめて「労働同盟」を革命の担い手として登場させた。その中には勿論ブルジョアシーの座席はなかった。毛沢東もマルクス理論を適用して中国の階級分析を行なったが、かれが到達した結論は、この国のプロレタリアートは、革命当時のロシアほどの力はないが、それに反し農民は、ロシアの農民よりはるかに熾烈な革命的伝統と豊富な革命的エネルギーをもっているということである。それ故かれはレーニンがロシアに適用した都市革命方式をすてて、農村革命を権力奪取の主要方式と考えたのである。これはみな毛沢東の中国革命の実践から生みだされた革命理論で

ある。だが毛の理論的發展はこれだけに終わっていない。

五 民族統一戦線の構想

日本帝国主義の侵略に直面した中国では、いたるところ民族ブルジョアジーがプロレタリアートや農民とともに抗日運動にたちあがっていた。毛沢東は前からブルジョアジーを分析し、そのうちのあるものは農民やプロレタリアートの戦列に加えることができるかと考えたが、いま全中国にまさあがった全民的抗日運動の情勢をみて、その考えを一層つよくした。毛沢東が一九三五年十二月十二日に発表した「日本帝国主義にたいする反対方策を論ず」は、この考えをまとめたものである。

かれはそのなかで、まず日本が中国をその独占的植民地化しようとしているとき、それに終始反抗し

てきたものはプロレタリアートと農民階級であり、それにつづくものは中国小ブルジョアジー及び学生層であることを述べた後、必ず敵側に立つものとして「大土豪、大劣紳、大軍閥、大官僚、大買弁」をあげ、つぎに民族ブルジョアジーの性格をこう説明している。

「民族ブルジョアジーには、地主階級のように強い封建性もなければ、買弁階級のように強い買弁性もない。民族ブルジョアジーのなかには、外国資本や国内の土地所有と比較的深い関係をもっているものも一部ある。それらは民族ブルジョアジーの右翼であるが、われわれは、それらの人々の変化の可能性については、その評価をひかえておく。問題はそうした関係のないもの、あるいは関係の比較的すくない多くの人々である。われわれは民族ブルジョアジーのなかのこうした部分の態度には、植民地化の脅威のせまっている新しい環

境のもとでは変化がおこる可能性があると思う。この変化の特徴は、すなわちかれらの動揺である。かれらは一方では帝国主義をこのまないが、同時にまた他方では、革命の徹底性をおそれて、この二つの間を動揺している。このことは一九二四年から一九二七年の革命の時期に、かれらがどういうわけでこの革命に参加したか、またこの時期の終りになると、かれらはまたどういうわけで蒋介石のほうにいつてしまったかを説明している。——当時の中国はまだ一つの半植民地であったが、現在ではまさに植民地化に向っている。かれらは自己の同盟者として、労働者階級をすて地主買弁階級とむすんだこの九年間に、いったいどんな得をしたであろうか。かれらが得たものは民族工業の破産、あるいは半破産の状態だけである。こうした情況からして、われわれは民族ブルジョアジーの態度は、今日の時局のもとでは変化

をおこす可能性ありと見る。ではその変化の程度はどんなものか。一般的な特徴は動揺である。だが闘争のある段階においてはかれらのなかの一部分（左翼）が闘争に参加することも可能である。また他の一部は動揺から中立態度をとる可能性がある。」

彼はこの分析の正しさを証明するためにまず蔡廷楷の十九路軍の実例をあげた。

「蔡廷楷などが指導している十九路軍はどんな階級の利益を代表しているか。かれらは民族ブルジョアジー、小ブルジョアジーの上層、農村の富農および小地主を代表している。蔡廷楷たちはかつて紅軍と必死の戦争を行なったものではないか。ところが、あとでは紅軍と抗日反蔣同盟をむすんでいる。かれらは江西省では紅軍を攻撃し、上海にとんでゆくと、こんどは日本帝国主義に対抗し、

福建省にゆくはずぐ紅軍と妥協し、蔣介石にたいして戦争をはじめた。……かれらが以前には紅軍にむけた銃口を、日本帝国主義と蔣介石にむけたことは、革命にとってためになる行為だったといわなければならぬ。これは国民党陣営の分裂である。九・一八事変以後の環境はこうした一部の人々を国民党陣営から分裂させることができた。それならばどうして今日の環境では、国民党の分裂をひきおこすことができぬであろうか。

毛沢東はこうして日本帝国主義と抗日に反対する「大土豪、大劣紳、大軍閥、大官僚、大買弁」すなわち「売国的」国民党の最上層部だけを敵側とし、これに反対する中国の諸階級を、一つの陣営にまとめる「抗日民族統一戦線」をよびかけたのである。この方針には勿論党内でも多くの反対者をだした。反対論はオルソドックスのマルクシズムの理論の上

にたつものもあり、「大革命」でブルジョアに裏切られたにがい経験の上になつものもあった。毛沢東はかれらにたいしてこう反駁している。

「もしある人が、中国の民族ブルジョアの政治的経済的軟弱性という一点をとってわれわれの論点に反対し、中国の民族ブルジョアは新しい環境においても、態度を変える可能性はないというならば、この説は正しいであろうか。私はまちがっていると思う。もしも態度をかえない原因が、民族ブルジョアの軟弱性であるならば、一九二四年——二七年はなぜ彼らの常態をかえたか。彼らはなぜ動揺したばかりでなく、革命にさえ参加したのか。民族ブルジョアの軟弱性は後からでてきた欠点であり、母胎からおびてきた欠点とはいえないであろう。また彼らは、今日は軟弱だが、かつては軟弱ではなかったというのか。半植民地の政治経済の主要特点の一つは、民

族ブルジョアジーの軟弱性ということである。まさにこれがために帝国主義はかれらをあえて馬鹿にしている。そしてこのことこそかれらが帝国主義をよるこばない特徴を規定するものである。それ故にこそわれわれはかれらの軟弱性を否定しなければかりか、それを完全に承認する。と、同時にこのことあるが故に帝国主義や地主買弁階級は、その時に応じて賄賂や好餌をあたえ、容易にかれらを味方にひきいれてしまったのである。これは彼らの革命にたいする、不徹底性を規定している。だからといって、今日の情況の下にかれらは地主階級や買弁階級となら區別はないといいきれるであろうか。」

こうしてかれは民族ブルジョアジーの動揺性を承認すると同時に、その動揺性から民族ブルジョアジーが抗日民族統一戦線に加わる可能性のあることを

立証し、それを強調した。

この民族統一戦線が、日本帝国主義と大ブルジョアジー及び大地主階級と戦って政権を獲得した場合、もしもその国家をプロレタリアート農民の独裁下におくとすれば、民族ブルジョアジーは誰もこの革命に努力するはずはない。それ故民族統一戦線は当然「人民共和国」という考えかたとむすびつく。毛沢東はそれ故こうつつづけている。

「もしもわれわれの過去の政府がプロレタリアート、農民、都市小ブルジョアの連合政府であったというならば、現在以後はプロレタリアート、農民、都市小ブルジョアの外に、その他の階級のなから民族革命に参加することを願う分子を加えるように改めなければならぬ。現在この政府の基本任務は、日本帝国主義の中国併呑に反対することであるから、この政府の成分を広汎な範圍に拡大し、民族革命には興味をもっているが土地革命

には興味はないという人々も参加できるようにすること。そればかりでなく、欧米帝国主義と関係があつて、欧米帝国主義には反対ではないが、日本帝国主義とその使用人（走狗）たる人々には反対するという人々も、希望するならば参加できるようにしなければならぬ。それ故、政府の綱領は日本帝国主義及びその使用人に反対する基本任務に適合することを原則とし、それによって適当に過去のわれわれの政策を改めなければならぬ。」

そこでこれまでの「労働共和国」というスローガンは、「人民共和国」のそれに改められた。毛沢東は「なぜ労働共和国を人民共和国に改めたか」と自問しながらこう説明している。

「われわれの政府はプロレタリアート農民を代表するばかりでなく、民族を代表する。この意味は元来労働民主共和国のスローガンのなかに包括さ

れていたのだ。なぜならば、プロレタリアート農民は、全民族人口の八〇パーセントないし九〇パーセントを占めている。わが党の第六次全国代表大会のきめた十大政綱は、プロレタリアート農民の利益を代表し、同時に民族の利益を代表するものである。しかし現在の情況は、われわれをしてこのスローガンを人民共和国と改めさせたのである。これは日本の侵略の情況が、中国の階級関係を變動させ、小ブルジョアジーばかりでなく、民族ブルジョアジーさえも抗日闘争に参加させる可能性をもたせたからである。」

こうしてみると現在の「中華人民共和国」の礎石は、この遵義會議のときにおかれたといつても過言ではない。その後の中共の行動はすべてこの會議の決定した方針にもとづいていることは周知の事実であらう。長征はこの意味において毛沢東共産党の大

きな勝利であったことは否定できない。

六 毛児蓋会議——張国燾との対決

遵義会議から半年後に行われたコミンテルン第七回世界大会において王明は、「国民党を民族的裏切りと国辱的政府として打倒することこそ、抗日民族戦争を成功的に遂行する前提条件である」という一九三三年の方針を改めて、「民族統一戦線」の方針を宣言した。この宣言の背景には次のような情勢があった。

当時スターリンは日本の東からの進攻にひどくおびえ、それを緩和するために国民党に目をつけた。日本が中国侵略に手をやけばやくほど、ソ連にたいする脅威は減少するわけである。この政策のためにソ連は、中共と国民党との対立をできるだけ緩和する必要があった。コミンテルン第七回大会における

王明の演説は、このような背景のもとに行われたのである。かような国内外の情勢から毛沢東の「抗日民族統一戦線」は、一応国際的にも是認された形になったのである。

しかし紅軍の指導者のなかには、それにはたいして強気に反対するものがあつた。なかでも政治的影響のをもっとも大きな反対論は、第四方面軍をその手にぎっていた張国燾のそれである。彼は「三十万の紅軍はわずか数方に減って解放区のすべてを失つた。蔣介石を代表とする中国ブルジョアジーはすべての政權を、しかも強固な政權をにぎっている。こんなときに蔣介石を代表とするブルジョアジーと連合して、抗日しようというのはプチブル的幻想だ」といってはげしく毛沢東に反対した。

四川省北境の毛児蓋で開かれた中央政治局會議では、第一方面軍と第四方面軍の事実上の指導者の間に激論がかわされた。この論争の内容がどんなもの

であったかを知るためには、毛沢東の「日本帝国主義に反対する策略を論ず」の次の一章をよむ必要がある。

「この大転移（註 長征）は旧区域を遊撃区に交じた。また転移中紅軍自身も非常に弱化した。もしもわれわれが全局面中のこの面だけをとってみれば、敵は暫時的部分的勝利をえ、我々は暫時的部分的失敗をうけたのである。こういいうい方は正しいであろうか、私は正しいとおもう。これは事実だからだ。しかしある人（たとえば張國燾）は中央紅軍（註 毛沢東指揮下の紅軍第一方面軍）は失敗したといっているが、これは正しいであろうか。正しくない。それは事実でないからである。マルクス主義者がある問題を見るときには部分ばかりでなく、全体をみる必要がある。一匹のがまが井戸の底で「天は井戸と同じ位な大きさ」だといえば、それは正しくない。なれ

ば天は井戸の大きさにとどまらないからである。もしも彼が「天のある部分は井戸ほどの大きさである」といえば、これは正しい。事実に合わせているからだ。われわれ紅軍はある方面（もとの陣地を保持する面）からいえば失敗であったが、別の方面（長征の計画を完成する面）からいえば勝利だった。このような論法をもってはじめて妥当なのである。なぜならばわれわれは長征を完成したからである。」

結局毛児蓋会議は多数決をもって張國燾の主張をしりぞけ全軍に「北上抗日」を指令した。だが張國燾の第四方面軍は北上しなかったばかりか、第一方面軍の朱徳と劉伯承を監禁してその北上を阻止してしまった。毛沢東はやむをえず第一方面軍の手もち部隊だけで四川省の北境の大湿原をこえて陝西省にむかったのだ。

こうして苦心さんたん長征を完成させたことが毛沢東や紅軍にあたえた精神的プラスは、評価しつくされないものがある。かれらは毛沢東の指導の下に團結して進みさえすれば、どんなことでも不可能はないという確信をもつようになった。毛沢東がこの長征をいかに高く評価しているかは、かれの次の言葉によくあらわれている。

「ころろみに長征はどんな意義をもっているかとききたまえ。われわれはいう。長征は歴史の紀錄上はじめてのことである。長征は宣言書であり、長征は宣伝隊であり、長征は播種機である。盤古の天地開びやく、以来、三皇五帝から現在にいたるまで、歴史上いまだかつてわれわれのやったような長征があったであろうか。十二月月の光陰のなかで天上には毎日数十の飛行機による爆撃があり、地上には行く手をさえぎる数十万の大軍団があり、路上には言いつくしがたい艱難險阻があっ

たが、われわれはすべて二本の脚を動かし、二万余里を長駆し、十一省を踏破したのである。ききたまえ、歴史上かつてわれわれのこのような長征があったであろうか。……長征はまた宣言書であった。それは全世界にむかって、紅軍は英雄好漢のあつまりであり、帝國主義とその走狗蔣介石どもは完全な役たらずであることを宣言した。長征は帝國主義と蔣介石の包圍追撃の失敗を宣告した。長征はまた宣伝隊である。それは十一省に住む約二億の人民にむかって、紅軍の道のみがかれらを解放する道であることを宣布した。このことがなければ広大な民衆がどうしてあのように早く、紅軍の主張する大道理がこの世界にあったことをしりえたであろうか。長征はまた播種機であった。それは十一省内に多くの種をまきちらした。それらはやがて芽を出し、葉をつけ、花を咲かせ、実をむすび、収穫をもつであろう。これを

要するに長征はわれわれの勝利、敵の失敗をもつておわたつたのである。誰が長征の勝利をもたらしたか、即ち共産党である。共産党がなければこのような長征は考えられないのだ。」

第九章 延安時代——抗日統一戦線をめぐるかきひき

一 民族統一戦線のよびかけ

毛沢東が長征のはてにようやくたどりついた陝西のソヴィエト地区は、劉子丹によって創設されたものである。劉子丹は陝西省保安県の中農の家庭に生まれ、長じて広東の黄埔軍官学校に学んだ。一九二六年に学校を卒業するとただちに北伐にしたがった。この過程において毛沢東に作用したとおなじ時代の力はかれにもはたらいて、かれを共産黨員に、そして故郷の保安における農民暴動の指導者に仕あげてしまった。叛乱、失敗、妥協そしてふたたび叛乱という数年の劇的な経過のうちに、かれは一九三三年保安県を中心として陝西ソヴィエト根拠地を確立した。翌三四年には同じ頃河南省で蜂起した除海東の部隊が加わり、もはや周囲の白軍ではどうにもならない勢力に発展してしまった。しかしながら

毛沢東が陝西にはいった頃の劉子丹は、正に彼の生涯最低のときだった。党中央委はかれの土匪のような過去の経歴から、かれを信用しなかつたので、張慶伝という査察員を派遣して、このソヴィエト区の創設者を監禁してしまつた。スノーはこの不可思議な事件をきいて、よほどおどろいたらしくこう書いてゐる。

「劉子丹が、自分を批判しようとする出しゃばり者として張先生を壁に張りつけにせず、おとなしくその審判を受諾して、いっさいの指導的地位から引退し、アキレスのように悄然として保安のかれの洞窟へ引込んだことは、ばかばかしいか、不可思議か、あるいはおそらくその両者であろうが、ともかくそれは『党の規律』の顕著な一例である。」⁽¹⁾

陝西の根拠地にはいった毛沢東はただちにこの事

態に一刀兩断の判決を下した。劉子丹とその一党の権限を復活し、張慶仏を逮捕監禁してしまったのである。劉は毛沢東の処置に感激し、よろこんでその指揮下に服した。陝西のソヴェートは、新米の毛とその軍隊に古くすみなれた根拠地のような安易さをあたえたようである。毛沢東はこの年の十二月瓦窟堡で政治局会議をひらき、改めて中国の内外情勢を分析し、党の政策を再検討した。その結果が十二月二十五日の所謂「十二月決議」である。それは日本帝国主義の侵略が中国の階級間の相互関係に大きな変化をあたえたことを強調し、今後の方針をつぎのようにうたっている。

「いかなる人々、いかなる派別、いかなる武装隊伍、いかなる階級をとわず、日本帝国主義と『売国賊』蔣介石に反対するものはすべて連合し、神聖な民族革命戦争をおこない、日本帝国主義を中国から駆逐し、日本帝国主義の『走狗』による中

国統治を打倒し、中華民族の徹底的解放を取得し、中国の独立と領土の完整を保持しなければならぬ。ただ広汎な反日民族統一戦線（下層と上層の）をもつてしてのみ日本帝国主義とその走狗たる蔣介石に打ちかつことができよう。……」

すでにのべた毛沢東の「日本帝国主義に反対する策略を論ず」はこの瓦窟堡会議の直後に行なわれた活動分子会議の席上における講演である。したがってこのなかには十二月決議の内容がくわしく展開されている。これをみればわかるように、このときの統一戦線のなかには「売国賊」蔣介石はふくまれない。それはむしろ「売国賊」蔣介石にたいする統一戦線だったのである。だが「日本帝国主義に反対する策略を論ず」のなかには、帝国主義の矛盾が激化すれば地主、買辦階級の陣営も分化する可能性のあることがのべられている。つまりこの理論によれ

ば、日本帝國主義と英米帝國主義との間の矛盾が激化すれば、英國主義の勢力下にある蔣介石さえも抗日戦線に参加する可能性のあることが予測されているわけである。それは国民党との民族統一戦線に道をひらいているといえよう。

二 国共合作の交渉

しかし實際に蔣介石をふくめての統一戦線のおよびかけが行なわれたのは、後出の山西省にたいする「東征」が失敗におわたつた直後で、即ち一九三六年五月五日の「停戦講和一致抗日通電」がそれだ。この通電は南京政府に対し、まず陝甘晋（陝西、甘肅、山西）三省内において内戦を停止すること、双方代表を派遣して救亡の具体的方法を共同協議することを提案している。単にそればかりでなく、この直後中共は周恩来と潘漢年を上海に派遣して、国民党代

表張冲とその具体的条件について協議させている。これについては蔣介石自身もその自著「蘇俄在中國」のなかで次のようにかたっている。

「二十五年（註 民國二十五—一九三六年）中共は『停戦講和』の通電を發した。間もなく周恩来が中共を代表し、潘漢年がコミンテルンを代表して上海にきて、張冲と協議した。私はこの報告をうけたとき、潘漢年がコミンテルンを代表するということについて大いに疑問をもつた。しかし陳立夫がそれをしらべた結果、潘がコミンテルンと通信する暗号帳をもっていること、電報を往復しているのはまちがいないことをしつた。その真疑はこの問題についてあまり重要でないと考えたので、それ以上は問わなかつた。潘漢年は南京にきて、陳立夫と談判したが、政府が中共にたいして提出した条件はつぎの四点である。

① 三民主義を遵奉すること、

② 蔣委員長の指揮に服従すること、

③ 『紅軍』を取消し、国軍に改編すること、

④ ソヴェエトを取消し地方政府に改めること

談判は長時間にわたり、結局最後にかれらはこの四項の原則をうけ入れた。こうしてすべての条件についての協議がほぼまとまって、ただ私が南京にかえって最後の指令をあたえるのをまつばかりになった。このとき共産党は各省において『和平』宣伝攻勢を展開し、陝西を第一目標とし、張学良、楊虎誠と積極的に勾結したのである。張学良のひきいる東北軍のなかから『抗日して剿共せず』のビラが発見され、張、楊ともに共産党と直接に関係しているという情報があった。かれらは西安において共産党員と、その外廓組織の活動擁護につとめていた。また『第三党』及び『救国会』は公開的に無遠慮な反動宣伝（註 蔣からみればこの際このような抗日宣伝は『反動』と考え

られた）を開始した。かかる事態の発展を防止しなければ、勢いかならず叛乱となると考えたので、私は自ら西安にとどまって鎮圧しようとしたのである。」

これでわかることは、蔣介石は中共の「統一戦線」の提案のなかに結局自分を弊る策略のひそんでいることをはつきり見透し、その路線を逆用してかえって蔣方式の「統一戦線」にしようと考えていたことである。たしかに毛沢東の統一戦線は、その過程において所謂進歩的な勢力を發展せしめ、中間勢力を味方に獲得し、反動勢力を孤立させること、つまり結局においては反動勢力の代表蔣介石を弊むることを計算にいれていた。彼に、もしこのような計算がなく、蔣委員長を指導者としていただき、その指揮に忠実にしたがう統一戦線を真険に考えたとなれば、かれは一九二七年の大革命の経験からなにも

学ばなかったということになる。

国民党にたいする「停戦講和」が瓦竈堡会議からわずか半カ年後に行なわれた理由は、単に国内外の情勢の変化からばかりではない。この間、即ち一九三六年二月、紅軍は「東征宣言」を発して、黄河をわたり山西省に遠征した。山西省は閻錫山が「山西自治」をモットーに統治し、治安と民政において比較的よい成績をあげていたところ。閻は蔣政権にたいして外様大名的地方軍閥で、蔣の指揮棒におどらされて、自から省外の中共に攻撃をしかけるような男ではない。それにもかかわらず中共が遠征軍をおくり、その十八の模範県を占領した。これは、統一戦線のロジックでは説明できない。だがその理由は陝西ソヴィエートの当時の情勢をしればよくわかる。スノーも描写しているように、陝西の根拠地は黄土層の秃山をつらねた高原で、地味もわるく、住民は粟、小麦、玉蜀黍の栽培ではそばと生活を支えて

いたのである。そこへ毛沢東の第一方面軍の生きのこり二万余人が到達し、つづいて後統部隊がそくそくとはいつてきたのであるから、当然食糧に不足をきたし、急速に根拠地を拡大する必要にせまられた。これが「東征」という軍事冒険となったのであろう。ところがこの企図は大失敗におわり、遠征軍は指揮者劉子丹が類死の重傷をおい、六月蔣介石の派遣した大軍に追われて、ほうほうのていで陝西に敗退した。これ以来陝西根拠地は江西ソヴィエートと同じように、周囲を国民党軍に包囲され、まったく守勢の地位にたたされたのである。中共が蔣介石をふくめての統一戦線をよびかけたのは、この山西敗戦の直後からであるから、中共がこの局面は政治的手段による以外に打開のみちがないと感じたことがその直接の動機ではないかと考えられる。蔣介石もそれをよく知っていたので、いまひとおしと考えて自ら包囲軍の督軍にのりだしたようだ。ただし包囲軍の

主力が彼の直系部隊ではなく、日本軍によって満洲を逐われた張学長の東北軍であったことが、彼にとつて大きな不幸となつたことは間もなくわかる。

三 中国人は中国人を打たず

このとき日本の中国圧迫はますますはげしくなり、中国人の民族的反ばつとも江西時代と比較にはならぬほど刺烈になつてきた。日本の圧迫という場合、武力的圧迫だけを考へてはいけない。ちやうど紅軍が大雪山をこえて四川の北部にはいつた頃、即ち一九三五年の六月、華北の中国海関はつぎのような報告書を發表している。

「商業の秩序は毎日この区域（華北）に流れこむ不合法的商品 *illicit cargo* の驚くべき数量によつて全く混乱させられている。これらの商品は鉄道によつて中国のいたるところに侵入し、商業を

破壊し、中国の対外借款の基礎たる国家収入を減少させつつある。」

「不法の商品」とは、満州から華北の海関を素通りして、中国本土に大量に密輸されていた日本商品をさして婉曲にいつているのである。三五年十一月冀東政権ができてから、密輸は一層大つびらになつた。この政権下に入つた品物にはごく廉い税がかけられる。この政権は政府要人も人民も中国人であるところから、中国の地方政権だといふ日本側の勝手な解釈から、ここで一度税をかけられた商品は、中国の国内にはいつたものとされる。それ故中国のどこでも二度と税はかけられない。こうして安価な日本商品は大手をふつて中国の市場を横行し、いたるところ中国の「国貨」を駆逐し、この国の民族商業を沈滞させ、民族工業を破壊していつた。国民の愛国心に訴える「国貨愛用」のスローガン位ではとう

ていこの密輸品の洪水をせきとめるわけにいかなく
った。その上政府にそれを阻止する力がないとすれ
ば、もはや亡国をまつばかりである。これが多少と
も愛国心のある中国人、とくに学生層を激発させた
のは当然のことである。それはついに一九三五年十
二月九日（十二月は瓦窟堡会議の開かれた月）北京
における学生の大愛国行進として爆発した（所謂
「一二・九事件」）。それにつづいて上海では復旦大
学の学生が政府に抗日を請願するために集まって、
北停車場を占領した。

これら学生の投じた一石は、抗日運動の波紋をた
ちまち全中国の社会の各階層につたえ、翌三六年一
月には、上海に各界救国連合会が成立した。その幹
部は浙江実業銀行の副經理章乃器、生活書店主李公
樸、弁護士会長沈鈞儒、その弟子の弁護士沙千里、
史良など民族ブルジョアジーの代表者であった。か
ように北京で一二・九の学生デモがおこると、それ

に呼応して上海、南京、天津、漢口、広東で同じよ
うな騒ぎがおこり、たちまち救国連合会に結集した
手ぎわよさは、その背後に中共の手がはたらいてい
ることを想わせる。国民党もこれに気づいて、三六
年二月「国民に告ぐるの書」を発表し、救国運動が
共産党に利用されていると国民に警告した。このと
きもし中共が「プロレタリア・イデオロギー」に服
を着せたような党員を送りこみ、例によって例のよ
うなフラクション活動をさせれば、救国運動に関係
している「善良な市民」たちは、かれらを運動から
つまみだすか、かれらがその運動を敬遠し、別行動
をとるかのおいづれかに出たであろう。

その当時中共は北京に北方局を設け、劉少奇が責
任者となつて、白区（国民党の地区）の地下運動を
指揮していた。北方局は救国運動のなかに党員を派
遣し、党のフラクションをつくつていたことはたし
かだが、大衆を「抗日救国」という最大公約数にお

いて結集させることに努力が集中され、運動の主導権争いをするような「共産党的」動きがなかったの
で、救国運動の表面にはどこにも中共の姿はみられ
なかつた。これが、抗日救国運動は共産党と結びつ
いていてという国民党の宣伝を無力化し、救国運動
を純粋な愛国運動として、国民の間にうけいれさせ
た。その結果、救国運動は社会のあらゆる階層をそ
のなかに捲きこんで救国運動の潮流の幅をひろげて
いった。

かくして蒋介石さえ、もはやこの潮流に正面から
反対することはできなくなつた。とはいえ、この潮
流をながれるままに放っておけば、日本との決戦は
とうていさけられない。そうならば、中共を陝西の
山地にとじこめることに成功し、今一步のところ
にきている国家統一の事業は御破算となり、中共にふ
たたびチャンスにあたえることになる。それ故蒋介石
はできるだけ日本との戦争をさけ時間をかせぎ、

その間に国家を統一し、日本の要求をはねかえす実
力をつけることを考えていた。これが彼のいう「対
外先内」政策（「攘外必先安内」の略、日本と戦うに
はまづ剿共による国内安定）である。

蒋介石の国家統一政策は、中共を消滅することを
当面の目的としているが、それと同時に各地方に割
拠している軍閥や、蔣直系以外の各派の勢力を消滅
させてゆく。このことなくしては国家統一の意味は
ない。それゆえ蒋介石の統一運動——かれは紅軍の
長征中も追討に名をかりて各地軍閥の地盤に中央の
勢力を及ぼしていった——が進展するにつれて彼ら
の不安は増すばかりだつた。しかし彼らは正面から
蒋介石の統一運動に反対する実力も大義名分もな
い。そこで彼らにとってこの境遇を打開するため
に、抗日救国の潮流にのることは賢明な方法のよう
に思われた。即ち抗日運動が進展し、中共のいう
「抗日国民国防政府」が実現すれば、彼らはそのな

かでは他の各党派と連合し、蔣介石の独裁を掣肘することができらうと考えたからである。

当時上海の救国連合会を積極的に支持した人々のなかに張学良（東北軍閥）、閻錫山（山西軍閥）、李宗仁、白崇禧（西南軍閥）、馮玉祥（西北軍閥）、李濟、陳銘樞（十九路軍）、宋慶齡、陳友仁（反蔣派）があったことは決して偶然ではない。筆者はかれらの一人陳友仁氏の日語秘書のような形で、晩年の三年間彼と接触していたので、当時の情勢及びその心境について、直接彼の口からきいているので、このことは確信をもっていえる。毛沢東は情勢の発展とともに国民党が分化するといっているが、これもその一例である。

このような情勢のさなかに所謂「綏遠事件」がおこった。一九三六年十一月察哈爾省徳化の蒙古人族長徳王が、日本の関東軍の派遣した特務機関田中隆吉に指囂されて綏遠省に侵入し、同省主席傅作義の

痛撃にあつて追いかえされた。当時の中国人の団結の力をもってすれば、内蒙古軍を壊滅させたといつて大さわざするほどのことでもないが、この内蒙古軍の背後のものが、日本の軍閥であり、その部隊に日本の軍人がまじっていたことから、これは中国が日本の企図した武力侵略をはじめて武力で阻止した大成功であると考えられた。それ故このニュースは全中国を民族的興奮のるつばにいった。かれらは街のいたるところで爆竹をならして勝利を祝い、商店のショーウィンドーには「民族英雄、傅作義將軍」の大写真が飾られた。毛沢東の「統一戦線」方策は「中国人は中国人を打たず」という簡潔なスローガンにまとめられていたが、綏遠事件によつてまきおこされた民族的興奮は、このスローガンをなんびとも抵抗しがたい力にしまった。陝西で紅軍と対峙していた東北軍の兵士達が、このスローガンに動かされたことにはなんの不思議もない。かれらは日

本軍によってその故郷から追われてきた部隊なのだ。張学良はこのとき部下の圧力におされて、綏遠戦線に出動させてくれというアピールを蔣介石に送った。そのなかで彼は「われわれの軍隊に統制を保つためには、機会がききたい敵と戦わせるといふ約束を守らなければならない。さもなければかれらは私自身だけでなく、貴下をも詐欺漢とみて、もうわれわれに服従しなくなるだろう」とのべている。しかし蔣介石は彼らを綏遠戦線にはおくらず、引きつづき同じ中国人を打たせようとしたので、張学良の兵士達の間には厭戦気運がみなぎっていた。その頃筆者は上海におり、章乃器、沈欽儒、史良などと会談する機会がしばしばあったが、十一月の或る日、章乃器が私にのべたつぎの言葉をいまでもよくおぼえている。

「綏遠事件以来、張学良の兵士達はすっかり内戦を嫌がっております。剿共戦線から武器を放棄し

て逃亡する兵士が続出しているときいています。中国では誰がなんといおうと、中国人同志を戦わせることは不可能だということがやがてわかるでしょう」⁽⁷⁾

この話をきいて間もなく、即ち一九三六年十一月二十三日、かれらをはじめとする救国会七人の指導者（「七君子」）は南京政府によって逮捕された。だがその南京政府の最高指導者は、翌月十二日には西安の華清池において、張学良の兵士達によって逮捕されてしまった。これが中国の抗日陣営と国家統一陣営のバランスを一変し、蔣介石をして毛の提案する統一戦線をうけいれざるをえなくした西安事変である。

四 西安事変——中共はどこまで関係

したか

張學良と中共とは西安事変前から結びついており、陝西における「内戦」は事実上停止されていた。当時張學良の顧問で、現在日本にきている苗劍秋は、張が延安をたずねて中共幹部と統一戦線について協議した模様について次のように語っている。

「八月十日頃、私のしらぬまに張氏は延安の近くにある膚施まで、密かに周恩来に会いに行ってきた。……張は周に向って『本当に抗日する気か』とたずねた。周は『本当だ』と答えた。張はまた『倒蔣抗日の方式でやるつもりか』ときいたら、周は『そうだ』と答えたので、張はすぐに『では私を返すか殺すかして下さい』と言った。周はあわてて『何故か』と反問した。張は『あなた方の抗日も、蔣委員長の攘外（抗日）も、倒蔣とか安

内（剿共）とかの条件つきでは、本気になってお相手はできない。何故ならば日本の軍部は倒蔣とか剿匪とかを待ってくれないからだ。』といい終るや、民族の悲運を悲しんで大声で泣きだした。周氏も感動して泣きだして、張氏に『どうすればいいのか』とあらためてたずねた。張は『擁蔣抗日のラインで民族統一抗日戦線をこしらえるに限る』と答えたので、その座にいる中共の大物達はみな不愉快な懷疑的薄笑いを洩した。周恩来だけが軟かく『擁蔣の気持ちになれないね』といったので、張はすかさず『ぢや連蔣でいいか』といった。周が別に毛沢東に請訓せず『よろしい』と答えたので、張は連蔣の大任を背負って西安に戻った。』

張學良も苗劍秋も西安事変の当事者であるから、恐らくこの話は真実か、少なくともそれに近いもの

であろうと考えたいが、歴史家は、人間には自分の役割りを誇大にかたる弱点があり、歴史がしばしば當事者によって曲げて伝えられることのあるのをよく知っている。もしもここでのべられていることが正しいとすれば、中共は八月十日頃までは「倒蔣抗日の方式でやるつもり」だったということになる。ところが蔣介石は実際にはそれより三月前、すなわち五月五日周恩来、潘漢年が上海にきて、国民党代表の張沖と国共の統一戦線について協議し、その結果擁蔣形式の統一戦線をうけいれることに決定したと知っている。こう「決定した」かどうか疑問があるとしても、蔣介石と交渉している以上「倒蔣抗日方式」はすでにそれ以前に放棄されていたとみなければならぬ。この交渉のことは毛沢東もスノーにこうかたっている。

「現在交渉はすでにすめられています。共産党は南京政府を説得して、日本に抵抗させることに

あまり大きな積極的希望を持ってはおりませんが、それにもかかわらずその実現は可能です。……たとえ蔣介石が内乱をつづけることをのぞいていても、紅軍は蔣をいれるつもりであります。」
(スノー三〇六頁)

これも間接的に蔣介石の言葉を立証するものである。

こうして中共は八月二十五日正式に「国民党に致すの書」を発表し、形の上では「蔣委員長」の下で擁蔣形式の統一戦線をうけいれることを明確にしている。それ故八月十日張学良の「涙の説得」で、中共がようやく「連蔣」形式の統一戦線に同意したという説は、いかに当事者の話でもいただけでない。

張学良が中共と前から話し合っていたということ、西安事件について中共と協同謀議をしたということにはならない。西安事変は蔣介石に劉共をせま

られた張學良が進退きわまってとった手段であった。それは通常の方法では相手の意見をかえるわけにいかないと考えたときにとる「兵諫」（註 武力でおびやかして諫める）という非常手段である。蔣自身もそれ故「この事件の主動者は実に張學良その人であり、まず最初に監禁の主張を提出したのは楊虎城であった。」⁽¹⁰⁾とのべている。中共はあとから事変をやって、この際蔣介石をどうするかという問題を改めて党内で討論した。中共のなかには毛沢東をはじめ、蔣介石に親兄弟を殺されたものも多かったので、最初は感情にはしる議論がでたことは想像にかたくない。しかし毛沢東をはじめからこれら感情論をおさえて蔣介石を南京にかえし、それによって内戦を停止させようとしたことは否定できない。

あのとき、もし蔣介石が殺されていたならば、南京政府の反共派は徹底的に中共攻撃をおこなったであろう。南京では西安事変がたわったときこれは張

學良、楊虎城が中共と結託しておこした叛乱だと解釈し、蔣介石は二度と南京にはかえらないであろうと考えた。かれらはこういう想定の下に武力討伐を主張した。このグループに属するものは黃埔軍官学校系の何応欽、陳誠、CC団の陳果夫、陳立夫、政学系の張群、改組派の汪精衛等があった。エドガー・スノーによると、この反共プロックは単に張學良及び中共にたいする武力討伐を考えていただけではなく、この際南京政府から英米派、親ソ派といわれるグループを一掃し、中国の運命を枢軸、とくに日本と結びつけようとしていたという。かれらがそれほど計画的であったとは思われないが、もしも南京政府が武力討伐を実行したならば収拾のつかない事態となり、結局日本の侵略を容易にしたであろうことは十分予想された。南京政府内の英米派の宋子文、宋美齡らはこのことを憂いていた。かれらは抵日運動と中共の関係について反共派とはやや異った見解

をもっている。抗日運動の背後には中共がいる。だがそれを警戒するあまり、抗日運動の本質を見失ってはならない。抗日運動の本質は、日本の中国侵略という現実にたいする国民の反抗である。それを取締りすぎて日本の中国侵略を助長するようなことがあってはならない。ましてそれが内乱ともなれば、日本が中国を屈服させ、中国市場を独占することをたすけることになろう。もちろん抗日運動がたんに「抗日」にとどまらず、中共の勢力を助長し、南京政府をたおすことになる危険もあるが、現実にとちらの危険がより多いかといえば、共産党より日本の侵略であることは誰の目にもはっきりしている——これが英米派および、その背景たる英米の考えかたであった。それ故英米派および英米は、日本の中国市場独占を防げる一つの方法として抗日運動に声援をおくっていた。現地の英米系刊行物が一般に「反日」的であり、抗日運動に好意的であったことはよ

く知られている。毛沢東はかような「帝国主義間の矛盾の発展」を十分計算にいれており、新しい中国が英米のために中国市場を機会あることに保証していた。エドガー・スノーにかたった中共の外交政策に関する次のことばなどはそのよい一例である。

「中国に友誼的な列強にたいしては、中国は平和裡に相互利益を談判したいとねがっている。そしてその他の列強とも今よりも一層広範囲の合作を準備している。……中国が真に独立したときは、合法的な外国商業利益は今よりもずっと便宜をうけるであろう。四億五千万の人民がひとたび解放されれば、あらゆる分野においてその偉大な潜在的生産力が解放され、もって全世界の経済を改善し、全世界の文化水準を向上せしめることができる。」

英米も英米派もこの言葉をディスプレイスカウントなしに

うけとるようなことはなかったろうが、少くとも共產党は日本帝国主義より現実的な危険性がないと考えていた。それ故かれらは西安事変の処理問題をめくって反共プロックとするべく対立した。こうして南京政府内に左右の論争がつづき、容赦なく日にちがたつてゆくうちに、東北軍の青年将校の間では、南京のこのような空気のなかに蒋介石を釈放するとは危険だという意見が強まってきた。このとき激昂する青年将校を説得して蒋介石を無事に生還させたのは、一に周恩来の努力によるものであった。

中共が最初西安事変を知ったとき、蒋介石を処刑すべしという主張が支配的であったが、モスコーの指令によって助命説にか変わったという説は、今ではかなり有力である（たとえば David, J, Dalling; Soviet Russia and the Far East, 1949.）。中共とモスコーの間に無電連絡がつづいていたことはたしかな事実で、蒋介石も中共の潘漢年がモスコーと無

電連絡をつづけていたことを確認している。それ故中共首脳部がスターリンの中国にたいする一般見解をしらないはずはない。当時スターリンがナチス・ドイツおよび日本にたいする両面作戦をおそれ、強力な国民党中国に期待するところが多く、そのために国共合作を願っていたことはすでにのべた。そればかりでなく西安事変のとき、スターリンからとくに電報があったことは、当時の中共首脳部の一人張国燾が承認している。ただしこの電報は「とくべつの勧告もしくは命令ではなく、ただかれの意見を表明したにすぎない普通電報」であったという。だがそれだけで十分であった。中共首脳部は「その電報を非常に真剣に討議し、それについて同一の意見を表明したにすぎないと感じた」といっている。

中共はわずか一年前の瓦窟堡会議で蒋介石を「売国賊」と宣伝していたのであるから、中共黨員の間に蒋介石を殺せという声があがったといっても不思議

議はない。しかし毛沢東をはじめとするその首脳部が、この声によって動揺させられ、スターリンの意思を無視するようなことはありえなかった。

蒋介石を失った南京政府にかわって中共が日本にたいする民族的反抗の中心となろうとすれば、国民党が日本にはしるであろうことは明瞭である。毛沢東とその首脳部はスターリンからの電報を待つまでもなく、蒋介石を生還させるつもりだったと見る方が自然であろう。かれらとすればすでに上海において擁護形式の国共合作を協議しており、それがましまりかけていたのであるから、この際蒋介石が他人の手で痛い目にあっているのを、自分の手で救いだしてやれば、統一戦線の構成について有利な条件を約束することができるという考をもったと見るのも自然であろう。

しかし西安の抗日勢力と、南京政府の蔣釈放についての交渉経過は決してスムーズにはおこなわれな

かった。談判はいくどかデット・ロックにのりあげた。交渉の決裂を辛うじて救ったものは、亡国の危機を前にして中国人の個人的感情をはなれた、高い理知と共通の責任感である。這般の事情はジョン・ガンサーの「アジアの内幕」のなかに面白く書かれている。

「交渉がすっかりデット・ロックに乗りあげてしまったとき、ドナルド（註 蔣の英国人顧問、彼は蔣にも張学良にも親交があった）が蔣夫人の処にきていった。『たった一つの解決の道がある。それは難しいことだが、実は貴女と領袖に或る共產主義者に会ってもらいたいのだ。』」

これは驚くべき要求で、領袖も夫人もこの十年來共產主義者と話をしたことはなかった。いなこの間かれらは中国全土に涉って共產主義者を追いまわしていたのである。かれらとは相容れざる敵である。しかし夫人はもともと鋭い政治的感覚を

もっていた。彼女はよくこの衝動にたえた。彼女は容をとり直して、周恩来に面会をゆるした。かれらは新しい協定をとり結び、蔣介石はクリスマス(13)の日に釈放された……」

クリスマス、一九三六年十二月二十五日のクリスマスの日、蔣介石は南京にかえることをゆるされた。国民はかれを凱旋將軍を迎えるように歓呼の声でむかえた。それはかれが國家の危機を前にして、南京政府の領袖ではなく、抗日統一戦線の領袖としてかえったことを知っていたからである。

五 蔣介石の「集中統一」と毛沢

東の「民主統一」

蔣介石が釈放されて四日とたたぬうちに、南京政府の重大な決意を感じさせる諸政策が局面にあらわれてきた、まず叛軍討伐の停止令と討逆大本營の解

散である。まもなく親日派の外交部長張群がやめ、英米派の王寵惠がそのあとを襲った。これを見るといかにも蔣介石が抗日統一戦線の要求をうけいれたかにみえる。だが蔣介石にはかれ自身の政治的計算があつた。日本の中国要求をはねかえすためには中國の拳國一致の姿、統一戦線は必要である。だが中共の統一戦線は国民党との停戦状態を利用して勢力を拡大し、国民党に勝つだけの力量をもったときに、局面の指導権をにぎるためである。国民党はその裏をかき、拳國一致の戦時体勢からくる有利な立場を利用して、「集中統一」すなわち独裁体制を確立しなければならぬというのが彼の計算であつた。

蔣介石が当時毛沢東の統一戦線をどう考えていたかは「中国における蘇連」の次の一項をみればよくわかる。

「二十六年（註 一九三七年）の秋、朱徳が第八路軍を率いて陝北から出発するとき、毛沢東はそ

の部隊にたいして講話している。その要点はつぎの通り。

① 中日戦争は中共が発展する絶好の機会である。われわれの決定した政策は七分の発展、二分の応対（国民政府にたいして）一分の抗日である。

② この政策は三つの段階に分けて実施することができる。

第一段階 国民党と妥協して生存と発展を求め

第二段階 国民党にたいする力のバランスを獲得し、これと対峙する。

第三段階 華中各地に深入し、華中根拠地を建設し、国民党にたいして反抗する。

この年の十月は中共「中央政治局」の「抗戦の前途と中共の路線」に関する決議は、その工作方針を

つぎのように確定した。

① 統一戦線の拡大、強化、組織、活動は、秘密から公開に変化し、局部から全面に変化する。

それは党（共産党）が合法的且平等なる競争地位を取得するためである。

② 中国における政治上の決定力は武力である。

抗戦の過程においてはできるだけ武装力量を拡大し、将来政権を奪取する基礎としなければならぬ。

これがすなわち中共の抗戦過程における中共の路線だ。その後の八年間におけるかれらの行動は勿論この路線にそうていた。⁽¹⁴⁾

蒋介石は中共の統一戦線政策をこのように理解していたので、抗日戦争中も日本にたいしてその全力をだしつくして戦うわけにはいかなかった。つねに片方の眼をもって中共のうごきを注視していなければ

ばならなかったのである。抗戦の最初の段階において国民党軍がほとんど一手に日本軍をひきうけて戦っている間に、紅軍は着々とかれらの所謂「武装力量」を増強し、根拠地を拡大していったが、国民党はそれを見ながらどうすることもできなかったのである。このような情勢のもとに国民党のなかには抗日戦争をこのままつづけてゆけば、たとえ日本に勝つことができたとしても中共に政権をうばわれる憂いがあるから、事態がひどくならないうちに早く日本と「和平」して戦争をやめようと考えるものがでたのは当然だった。おそらくこういう主張は単に原則論とすれば、蒋介石さえも保持していたであろう。だが和平には相手があり、その相手が日本であるという条件の下では、これはほとんど不可能に近かったのである。当時の日本は満洲国の承認を和平の条件としたにちがいないが、国民党がそれを許せば国民の大部分は国民党を放棄し、「徹底抗戦」を主張

する共産党側にはしることはわかりきっていた。蒋介石は抗戦開始以来一度も事変の「和平」解決を否定する言葉をはなつたことはないが、和平をいう場合には必ず「光荣ある和平」という言葉で表現している。これを一言でいえば「領土の完整」を認めた和平、つまり「満洲国承認」を条件としない和平のことである。もしこのとき日本の為政者が、蒋介石に満洲国を認めさせることは彼の政治的生命をうばい、結局は中共に政権を引きわたすことだと知ってこのような要求を撤回したならば——こんなことは実際にはありえなかった。当時の日本の情況からいえば、革命でもおこらないかぎり「満洲国」の取消しは不可能であったから——歴史はちがった方向をとったかもしれない。毛沢東は抗日戦争の進行とともに国民党内部の矛盾が激化し、その一部が日本に接近する可能性のあることを早くから予測していた。それ故かれは蒋介石の「集中統一」にたいして

「民主統一」を主張し、国民の力で蒋介石の独裁を制肘し、かような局面のおこらないようにしようとしていた。一九三七年五月三日に発表した「中国共産党の抗日時期における任務」にはこのことをのべている。

「国民党の三中全会（註 一九三七年三月に行なわれた）はその内部に親日派がいたために、国民党の政策が明確且徹底的に転換したことを表明せず、問題を具体的に解決していない。しかしながら国民党は人民の圧迫とその内部の変動によって、過去十年間のあやまった政策をあらためざるをえなかった。これこそ内戦、独裁、対日無抵抗主義の政策から国内和平、民主、抗日への方向に転換し、抗日民族統一戦線政策をうけいれたゆえんである。この初歩の転換は三中全会においても表現されている。今後の要求は国民党をしてその政策を徹底的に転換させることである。それには

われわれおよび全国人民が抗日と民主主義運動を一層大きく発展させる必要がある。さらに進んで国民党を批判、督促し、推進させ、国民党内の和平、民主、抗日分子と団結して、動搖分子をおしあげ、親日分子を排除して、はじめて目的を達することができるとだ。」

六 持久戦論

抗日戦争が確定的となった三七年八月二十五日、中共中央政治局は陝北洛川で会議をひらき、「目前の形勢と党の任務に関する決定」を通過しているが、そのなかでも国民党の動搖の危険性が強調されている。

「今日の抗戦は中間にきわめて大きな危険性を包含している。その主要なものは、国民党がまだ全国人民を發動して抗戦に参加させることをねがわ

ないことだ。いな、かれらは抗戦を政府の仕事とみなし、いたるところ人民の参戦運動をおそれ、それを制約し、政府と軍隊と民衆とが結合するのをそがいでいる。かれらは人民に抗日救国の民主的権利をあたえず。徹底的に政治機構を改革し、政府を全民族的国防政府にすることをあえてしない。このような抗戦は局部的勝利をおさめることはできるかもしれないが、最後の勝利は決しておさめられない。いな、この種の抗戦には重大な失敗の可能性が存在している。

目前の抗戦にはその外にも嚴重な弱点が存在しているから、今後の抗戦の過程のなかでは多くの挫折、失敗、退却、内部の分化、叛変、暫時のおよび局部的妥協等、不利な情況が発生する可能性がある。それ故この抗戦は困苦にみちた持久戦とみなければならぬ……」⁽¹⁶⁾

毛沢東が翌三八年五月に発表した有名な持久戦論はこの見地から生れている。それは必然的に長期戦になる抗日戦争の戦略論である。そこでは、毛沢東は国民党と戦った遊撃戦争の原理をたくみに民族戦争に応用している。それを一言でいえば、敵とわが方の条件をひかくして、敵が自分よりも強いうちはあくまで決戦をさけ、相手がひとたび自分よりも悪い条件の下にたつたばあいにはのみ決戦をいどむということだ。第一段階、すなわち日本軍が強い場合はなるべく戦争をさけて自分を保存し、相手に戦力を消耗させることを主とする。この段階では運動戦を主とし、陣地戦を主とすべきではないということになる。この段階を通過すれば敵は戦線がのびるばかりでなく、その背後にも遊撃隊が出没し、士気は低下する。これに相反し、中国軍は奥地にはいつて地の利を得、戦線を縮少する。その上日本の暴行によって国民の敵愾心があがり、抗日の強い決意があら

われるから人の和をえる。こうして双方の力がバラ
 ンスして相峙の段階にはいる。つまり日本もそれ以
 上の深入りをさけるが、中国も戦略反抗にでるだけ
 の実力はまだできていない。このだんかいは遊撃
 戦が主要形態となる。もちろん敵の正面には防禦部
 隊を配するが、同時に大量の遊撃部隊を敵の背後に
 派遣して根拠地をつくり敵の戦力を消耗させる。こ
 れがうまくいけば敵の占領地の「三分の二を依然と
 してわれわれのもの」としておくことができる。こ
 の段階はおそらく非常にながい期間「中国にとって
 非常に痛苦な時期となり、同時に経済的困難と漢奸
 の擾乱が二つの重大問題となるであろう。」この間
 「敵は中国の統一戦線をはかいする活動をほしいま
 まにし、敵占領地のあらゆる漢奸組織は合流してい
 わゆる『統一政府』をつくるであろう。われわれの
 内部でも大都市の喪失と、戦争の困難のために、動
 揺分子は大いに妥協論をとなえ、悲観的感情がひろ

がって、深刻なものになるであろう。」そこで毛沢
 東はいつている。「われわれの任務は全国の民衆を
 動員し、一心一致戦争を堅持して、けつして動揺さ
 せず、統一戦線を拡大し、いっさいの悲観主義と妥
 協論を排除し、苦難の闘争を提唱することである。
 この段階においてわれわれは全国によびかけ、一つ
 の統一政府を維持し、分裂に反対し、計画的に作戦
 技術を強化し、軍隊を改造し、全国民を動員し、反
 攻を準備する。」その間にはかならず国際情勢が日
 本に不利になるし、日本の戦力は遊撃戦争のために
 ひどく消耗し、兵士のあいだには反戦心理があらわ
 れるであろう。そこで第三段階、すなわち中国の戦
 略的反抗段階がはじまる。そのとき日本軍と中国軍
 の条件はこれまでと反対となり、はじめて勝利の確
 信をもって決戦をいどむことができるというのだ。
 抗日戦争の経過はほぼこの持久戦論でのべられた
 とおりに進んだ。だが、かれの持久戦論は決して

日本だけを目標とするものではなかった。それが国民党を打倒して中共政権を獲得する持久戦戦略であったことは今では誰でも知っている。

第十章 彼の結婚生活と毛沢東思想の体系

一 毛沢東の結婚生活

毛沢東は一九三六年十二月に延安にはいったが、その頃この田舎町の人口はわずか二千余人にすぎなかつた。その人口は紅軍とともにどんどん増加し、

一九四一年にはすでに五万を突破していた。そのうちの三万人あまりは中共軍と公務員である。そのほかに多いものは外省からはいってきた学生達だつた。八・一宣言以来国民党支配地区の青年たちは行きづまった自分たちの運命と国の運命を革命とむすびつけることよって打開しようと考え、三々五々群れをなしてこの町に向つた。筆者は当時上海において中国の日本留学生たちと親しくしていたが、そのなかから延安に行ったものもすくなくない。インテリで国民政府に奉職することのできるものは国民党要人とコネのある少数にかぎられていたし、民間の

銀行、会社のポストもすくなくかつたので、かれらが自分たちの前途を中国革命の成功とむすびつけるのは当然のことだし、その上周囲にはこのまま亡国の危機を前にしてじっとしてはられない空気がみなぎっていたのだ。その為に学生達の延安へのなぐれはメッカの巡礼の列のようにつづいたのである。

延安ではこれらの学生を、教育するために陝西公学を、そのなかから文化工作者を教育するために魯迅芸術学院を、もうけた。そのほかに黨員のための教育機関として軍政大学、マルクス・レーニン学院があつた。毛沢東も自ら教壇にたつて学生たちに後世にのこる多くの講演をしたのである。学生たちは配給食糧がとぼしかつたので自ら耕作し、馬鈴薯などをつくりながら勉強した。毛沢東や公務員もかれらと同じように耕作しながら食糧をおぎなつていたのである。物資はとぼしく、洞窟すまいは快適ではなかつたが、かれのこれまでの生活でこれほど安定

した時期はなかったであろう。長征後の党内における地位はゆるぎないものになり、党の支配権力についてかれに挑戦するものはいなかった。蔣介石との政争もあり、抗日戦争もおこったが、延安の周囲にはもはや戦闘はなかった。毛沢東はこの間に彼のおしえていた女学生のひとりと「ブルジョア」新聞の身のうえ相談欄でよくみるような恋愛事件をおこす余裕さえあった。

相手は上海から来た映画女優藍蘋である。彼女には、やはり映画俳優をやっていた夫があった。彼もまた藍蘋のあとを追って延安にやってきた。このとき彼女はすでに毛沢東の愛人だったので、この男にはっきり絶縁を宣告した。そのためかれは上海へかえる途中自殺してしまった。一方毛沢東にも糟糠の妻賀子貞がいた。賀子貞がもしもブルジョア思想の持ち主で、藍蘋がすばらしい革命の女闘士であったならば、毛沢東の恋愛も階級闘争の立場から容易に

美化されて、毛沢東美談がひとつふえたであろう。だが賀子貞は毛沢東と長征をともした歴戦の女傑であり、藍蘋はその出身関係からかれらの間ではブルジョアの毒素を多分に身につけた女性と考えられてしかるべきひとである。階級の立場からは全然弁解の余地がなかった。

毛沢東はそれまで女性関係のスキャンダルめいたことをおこしたことはない。かれは一九二〇年北京で恩師楊懐中のむすめ楊開慧と結婚した。これがかれの最初の結婚である。郷里にかれが十四のとき父が勝手にもらった嫁（と、いうよりも労働力）がいたが、それはかれの認める妻ではない。楊開慧は井崗山にはいらず郷里で捕えられてしまったので、井崗山の毛沢東の身のまわりを世話する女性はいなかった。このとき新たに入党した賀子貞、賀怡という美しい姉妹があった。賀の生家は井崗山々麓の永新県の名家で、父は県政府の役人をしたこともあり、

退官後、永新で「海天春」という旅館を開いたこともある。⁽¹⁾ 彼女らはうつくしい上に女学校出身のインテリで、井崗山にはいるとたちまち英雄たちの目標となった。当時毛沢東は三十七才の男ざかり、その姉嬢と恋仲になったといつても不思議はない。このとき毛沢東の弟、毛沢軍の方は妹むすめに接近し、毛家と賀家の間に二組の夫婦ができたのである。

日本で発行された毛沢東伝、貝塚茂樹氏にしろ福本、岩本両氏にしろ、いずれも一九三〇年「毛沢東の妻楊開慧国民党軍に銃殺され、賀士貞と結婚」となっている。これはおかしな話である。そうすると毛沢東はその妻が捕えられて獄中にくるしんでいるとき賀士貞と恋愛し、妻が銃殺されるのを待って、もしくは銃殺されるのを待ちきれずに結婚したことになる。どんな人間でも自分の妻が自分のために投獄されているとき、なかなかほかの女と恋愛する気になれるものではない。そこがそれ英雄の英雄たる

所以だといえればそれまでだが、それはあまりにも人情にもとる話である。

この三〇年説の出所はスノーの本からではないかと思う。スノーの本では、毛沢東は一九三〇年六月に第二回長沙攻撃がはじまったことをのべたすぐあとに次のようにのべている。

「中国工農革命委員がこのころ組織されて私は主席に選出されました。湖南省における紅軍の影響は江西省にはほとんど同じくらい増大しました。私の名前は湖南の農民達の間にも有名になりました。というのは朱徳やその他の共産黨員と同じように、私を生死にかかわらず捕えたものに高額の賞金がかけられたからであります。湘潭の私の土地は国民党に没収されました。私の妻と妹は私の二人の弟毛沢洪と毛沢丹の妻たちや、私自身の息子と一緒に、みな何鍵の手で逮捕されました。私の妻と妹は処刑されました。外の者たちは後に釈放

されました。」⁽²⁾

ここで楊開慧の処刑が三〇年に行われたというところがはっきり書かれているわけではない。日本の毛沢東伝記作家たちは、ただ前後の關係からそれを三〇年と勝手にきめてしまったものであろう。もしスノー以外に三〇年説の出所があれば話は別であるが――

ロバート・ペインはスノーと同様直接毛沢東と会ってかれの話をきいている一人だが、かれは賀士貞についてのべながら楊開慧が処刑された年をはっきり一九二八年としている。

「毛の妻賀士貞は身重で、しかも爆撃によって重傷を負った。彼女の傷は殆んど致命的なものだった。榴散弾の破片が十八か二十、身体にはいったのだ。彼女は中国共産党が陝西省北部におちついでから後も長い間この傷で苦しんでいた。毛は最

初の妻が一九二八年に何鍵によって処刑されたのち、彼女と結婚した。彼女は毛がかつて学んだ長沙の師範学校に暫らく在学していたようである。彼女は七年間に五人の子供を生んだが、その中三人は長征の途次出遭った農民に托した。後年この子供たちを探したが、かれらは全く行方不明になっていた。毛は長征中の賀士貞の気丈さに強く心を動かされ、女たちは男たちよりも遙かに偉大な勇氣を発揮すると言った。……」⁽³⁾

楊開慧が一九二八年に処刑されてから二年後に、毛が賀士貞との結婚生活にはいったというのなれば話はずっと自然であり、すっきりしたものになる。ペインの毛沢東伝は毛沢東研究でもっとも信用できる原典の一つであるが、三〇年説はそれにはっきり二八年と書いてある事実に一言も言及していないのはどういいうわけであろうか。

賀士貞の身体には「十八か二十、榴散弾の破片がはいつて陝西省北部におちつてから長い間この傷で苦しんでいた」というが、スノーによると「陝西に来てからはほとんど普通の健康とかわらず」かれ自身保安で彼女と一緒によくトランプをやったといっている。しかし毛沢東と彼女の間はどうもうまくいかなかったらしい。二人が家庭争議で立ちまわりをやったという話もつたわっている。筆者のはなはだうがちすぎた想像を加えれば彼女はやはり身体にはいった榴散弾の破片から健康をがいしており、夫婦生活ができなかったのではないかと思う。ともかく延安にうつってから間もなく、毛沢東は彼女を「療養のために」モスコにおくってしまった。そして一九三七年に彼女と正式に離婚し、三九年に藍蘋と正式に結婚した。この間にもスキャンダルめいたことはなにもない。

しかし毛沢東が多年苦勞をともした同志賀士貞

を離婚したことは、卒先示範をモットーとする共産黨員を非常にこまめた立場においたことは否定できない。

当時延安にやってきた学生のなかには女性も多少まじっていたが、勿論大部分は男性であった。その上紅軍や共産黨員はほとんどが男である。それがため延安の男女人口比例は十八対一人になったといわれている。⁵⁾ 共産党幹部のなかには四十才以上の独身者が多く、そういう人々をさしおいて、若い男女が恋愛問題をおこすこと（「閨男女関係」）は、革命的情熱がない証拠とみとめられ精神的弾圧をうけた。こういう空気のなかでおこった四十六才の毛沢東と二十五才の女優の恋愛事件はうっかりすると内外の政敵によって利用される可能性が十分あったからである。それにもかかわらず毛沢東が自分の恋愛事件を下手にごまかすことなく結婚によって解決した行動は立派である。同時にこのことは毛沢東の延安に

おける地位がすっかりかたまっていくことを証明している。毛沢東が温かい家庭生活をもつことは彼の生活に大きなプラスであった。毛沢東が延安時代に後世にのこる論著を多くすることができたのはかれの政治的地位の安全感と家庭生活の充実がその背景にあったからであろう。

二 延安時代における彼の著述

毛沢東が延安時代に書いた主要著書とその発表順に列記し若干その内容にふれてみよう。

① 一九三六年、十二月「中国革命戦争の戦略問題」

この本は江西における反割共作戦、長征の経験にもとづいて中国革命戦争の戦略問題を研究したもので、陝北紅軍大学の講義案としてまとめられたものである。このなかでは、戦争が正義の戦争と

不正義の戦争にわけられ、戦争一般を否定することとは間違っているという観点が明瞭にされている。中ソ論争における中共の立場はこの考え方から発していることがよくわかる。

② 一九三七年七月 実践論

八月 矛盾論

この二篇は延安の抗日軍事政治大学の講義案として書かれたもの、直接には当時党内にみなどいていた教条主義にたいする思想闘争に理論的基礎をあたえようとしたものである。かれはこれをまとめるためにマルクス主義哲学をはじめ系統的に勉強したといわれている。それをよむとかれが本をよみながらその内容をいつも中国革命の現実にてらし合わせながら一句一句理解していったことがよくわかる。そのためにマルクス主義哲学をあまりに単純化しすぎているところもみられるが、それだけに難解な矛盾論や実践論をわれわれ

の身近な実例で誰にもわかりやすく説明している。この二つの論著こそ毛沢東思想の哲学的基礎をなすものである。

③ 一九三八年五月 「論持久戦」

これは一九三八年五月二十六日から六月三日まで延安で行われた抗日戦研究会の席上における講演の内容である。その大体についてはすでに前章のべてあるからここには多くはのべない。かれがこのなかで戦争の経過を予言者めいた態度で叙述しながら、最後の勝利が中国にあることをのべたことは、当時中国軍の全面的退却に失望していた中国人をどのくらい鼓舞したかわからない。

ペインはこの持久戦論をこう批評している。

「(彼は)一見いかにも行きあたりばったりに戦争の諸段階を分析し、非科学的な一種の予言をしているようにさえ見える。まるで毛は『明日は天気だろう。明後日は風がひどいだろう』といって

いるかのようだ。『様々な大きな変化が生ずるであろう』という言葉ですら、孔子の『春秋』にたちかえている様にさえ思われる。『春秋』はまさしくかような政治的予言を主題としたものである。しかも毛は非常に簡単な科学的法則に従って、凡そ想像し得るあらゆる戦争の可能形態を含むする厳密な図式を略述しているのだ。』

持久戦論では抗日戦争における民族戦争の場面だけが説かれており、抗日戦争をいかにして階級戦争に転化するかという問題にはふれていない。しかしこれなくしては共産党の戦略論としての意味はない。この問題が一九三八年十月十二日にひらかれた中国共産党第六回全体会議における論争の焦点となったのは当然のことである。

この会議では毛沢東と陳紹禹の意見が真向から対立した。この論争の模様は公表されていないので知るよしもないが、すくなくとも毛沢東のこの

ときの演説の口うらから考えられることは、陳紹禹が統一戦線を真の民族統一戦線にして、国民党が共産党の拡大を心配することなく日本軍と戦うことができるような形とすべきだと主張したらしい（註 これはスターリンの考え方であった）。

毛沢東の方は、この抗日戦争の最終段階では、国民の政治意識がたかまり、軍隊ばかりでなく全国民が武器をとって戦争に参加し、広汎な農民戦争が展開されるにちがいないから、その指導権をとるために統一戦線を利用して共産党の勢力を拡大しなければならぬと主張した。かれのこの主張の一部が次にのべる論文である。

④ 一九三八年十一月五日「統一戦線中的独立自主問題」

これには上述の主張、すなわち抗日戦争を階級戦争としなければならぬという主張が次のように要約されている。

「長期合作によって長期戦争を支持すること、これは階級闘争を今日の抗日民族闘争に服従させることである。これがすなわち統一戦線の根本原則だ。この原則の下においては党派と階級の独立性を保存し、統一戦線のなかに独立自主を保存し、合作と統一のために党派と階級の必要権利を犠牲にせず、その反対に党派と階級のある程度の権利を堅持する。これによって合作は有利となりほんとの所謂合作になるのである。さもなければ合作は混一となり、必然的に統一戦線を犠牲にする。民族闘争のなかにあっては階級闘争は民族闘争の形式で出現する。この形式は両者の一致性を表現する。即ち一方では階級の政治経済の要求は一定の歴史時期においては合作をやぶらないことを条件とし、また他方ではあらゆる階級闘争の要求はすべて民族闘争の需要（抗日のための）を出発点としなければならない。このようにして、統一戦

線のなかにおける統一性と独立性、民族闘争と階級闘争が一致するのである。⁽⁷⁾

この毛沢東の演説はペインが新段階論とよんでいるもので、かれはそのなかに将来の国共分裂を予測してこういつている。

「この新段階論は持久戦論の議論をさらに発展させているところに一番の意義がある。それは何気ない言葉が語られているが、それが後になって恐るべき意味を持つことになるのである。」⁽⁸⁾

毛沢東は抗日戦争中の統一戦線をかたりながら、つねに一方では階級闘争を、すなわち蒋介石をいかにして打倒するかということを考えていたのである。

⑤ 一九四〇年一月十九日 新民主主義論

抗日戦争の最後の段階において、日本及びそれを支持する中国の地主ブルジョアジーの一部にたいして広汎な農民戦争が展開されるであろうとい

う予想のなかには、その後の中国はどうなるかという問題が当然ふくまれている。新民主主義論の第一章「中国はどこへ行く」は冒頭においてこのべている。

「抗戦以来、全国の人民の間には、欣然として繁栄の道にすすむような発刺たる気運が見られ、すべての人々は活路を見出したもののように、それがため眼をとじ、物思いに沈んだ様子は一掃された。だが近来妥協的な空気が反共的風潮がまたしても急速に世上にひろまり、全国の人民を苦悶の情態におとしいられている。とくに文化人や青年学生は敏感なのでまっさきにそうした情態に当面している。さてそこでどうすればよいか。中国はどこに行くのかということが再び問題となった。」⁽⁹⁾

この問題にたいする答えが第二章の「われわれは新しい中国を建設しなければならぬ」である。新し

い中国とはなにか。それは現在の「封建制度が優勢をしめている社会」を独立自主の民主的社會にするものである。そこでその社會をもたらず革命の性格が次のように規定される。

「この革命は社會性格からいへばブルジョア民主主義革命であつて、プロレタリア社會主義革命ではない。孫中山先生もこのブルジョア革命建設のために努力してきた。しかし中国のブルジョア民主主義革命は、一九一七年のロシア革命以來のあととさきではまったく性格がちがつてきた。以前のそれは古い世界のブルジョア民主主義革命の一環であつたが、現在では世界プロレタリア社會主義革命の一環となつたのだ。すなわち一方では世界の資本主義はすでに腐敗し、植民地に依存しなければ生存しえない時代となつており、他方社會主義國および資本主義國內部のプロレタリアーは、植民地解放運動にたいする援助を公然と声

明している。

かかる時代にはいかなる植民地又は半植民地的國家でも、それが帝國主義反對、國際資本主義反對の革命をおこせば、それはもはやふるいブルジョアの資本主義的世界革命の一環ではなく、新しい世界革命の一環であり、プロレタリア社會主義世界革命の一環である。」⁽¹⁰⁾

かれは抗戰ののち、かならずこのような社會主義世界とむすびつくブルジョア民主主義革命がおこると確信していた。では誰がそれをおこすか。それは日本帝國主義に反對するすべての勢力、すべての階層、すなわち、農民、労働者、都市ブルジョアである。そのなかでも、かれは農民こそその主力となると考えていた。

「現在の抗日は實質的には農民の抗日である。∴抗日の一切、生活の一切は實質的にはすべて農民

のあたるところである。……中国の人口の八〇パーセントが農民であることは小学生でも知っている。それ故農民問題は中国革命の基本問題となっている。農民の力量は中国革命の主要力量だ。」

この言葉のなかにかれの農民にたいする信頼のふかさがよく表現されている。抗日統一戦線は、国民党の「一党専制」ではなく、これら帝国主義に反対する各階層の民主的連合政府が指導してはじめて勝利がえられ、その後世界社会主義とむすびついた新民主主義の時代がつづくとのべている。こうして中国革命は第一の段階において新民主主義が成功し、第二の段階において社会主義に変化する。「しかし第一段階のつづく期間はかなり長くなる。一朝一夕で完成されないことは確かだ。なぜならばわれわれは空想家ではなく、現実の情勢から離れることはできないからだ。」

ここでかたられているものが現在の中共政権の中心思想であることはだれにもわかる。ペインはこの新民主主義論を評してこういつている。⁽¹¹⁾

「ここでは世界は黒か白かにわけられ、中間色はない。これまで中国共産党にたいしてほとんど何の助力もなかったソヴィエト連邦だけが信頼されるべきだといっている。……かれがドグマを、即ち中国とソ連との同盟の不可避を信じて自足したのはこの時たった一度であった。……かれはラジオを聞き、教本を研究していたが、世界の大部分にはなおロシア革命のたどったコースへの苦い失望があることを知らなかった。かれは直接知らない事実についてかたったのはこれ一度であった。」(邦訳一八五頁)

このペインの言葉は毛沢東が世界をしらず、ソヴィエト連邦を知りもしないくせにソヴィエトだ

けが信頼できると考えているといっているのだ。しかし当時この発言に注意するものではなく、まったく黙殺されていた。中ソ論争がはじまったとき、あらためてこの批評のするどさにおどろいたものはあながち筆者だけではないであろう。

毛沢東の理論にはたしかに政治家独特の「簡略化」がめだっている。それ故かれの所論はつねにすじ道がとおり、論旨が一貫し、迫力にみちている。

その反面、その基礎となる世界の客観的分析も簡略化され図式化されているといわれているが、若干そのきらいがあることは認めらるべきである。

⑥ 一九四五年四月二十四日 連合政府論

抗日戦争が次第に中国の有利に展開し、終局の見透しがついてくると、国民党も共産党もその後にくる問題についてはげしく闘争するようになった。両者は日本軍を前にして各地で流血の惨事をひきおこした。この年の四月二十四日、中国共産

党七全大会が延安に召集されたが、その席上毛沢東は国民党はじめ各党各派にたいして「民主的、臨時的連合政府」をつくって民主的改革を實行し、全中国の国民を統一戦線に動員しなければならぬと主張した。それが本著の内容である。もちろんそれは新民主主義論の結論を具体化させようとしたものである。

かれがそこできくりかえしのべていることは統一戦線は国民党ではなく国民によって支配されなければならぬということである。かれはいう。

「人民こそ支配すべきものである。人民を除外した支配というものは存在しない。人民の望むものを見出し、かれらを満足させなければならぬ。」

この要請は国民党員にたいするよりもむしろ共産党員にたいしてなされているかのようだ。

「すべての同志はわれわれのすべての行動や声明の最高規範は、それらがもつとも広汎な大衆の最高利害に対応しているやいなや、また、それが最も広汎な大衆に支持されているやいなやにあることを理解すべきである。すべての同志は、われわれが人民を信頼し、また人民の限らない創造力を確信するかぎり、われわれはあらゆる困難にうちかち、いかように重大な事柄も、またいかなる敵もわれわれを挫くことなく、われわれに挫かれるであらう。」

このやや神託めいた論調には「人民による人民のための人民の政府」のようなひびきもあるが、ここで一番重要な「人民とはなにか」「人民の意思をなにかによってきめるか」という本質的な問題には全くふれていない。かれはただ人民大衆の意思が絶対的であることを承認しているにすぎない。実は毛沢東

のこの考え方のなかに今日の毛沢東政權の性格が形づくられているのだ。

人民大衆の意思は絶対的であり、人民こそ支配するというのが、人民各自が政治をとることは技術的に不可能であるから誰かが人民から依託をうけて政治をとらなければならない。西欧のデモクラシーでは人民の投票によって最大多数の賛成をえたものが政治をとるのが常例である。中共も、人民が支配し、政府がその人民の意思を代表して政治をとるという立て前としている。だがこの「人民」という言葉にはわれわれには理解できない、中共独特の意味をもたせていることを忘れてはならない。それについて中共に非常に好意をよせ、その革命を是認しているジャック・ベルデンさえこういつている。

「中国共産党員の『人民』という言葉のつかい方は、西欧人の耳にはやや神秘的なひびきをもっている。中国の皇帝は自分自身を『天の子』とよん

でいたが、現在中国共産党員はかれら自身のことを「人民の子たち」とよんでいる。言葉をかえていえば人民が天（註 原文は神^{ゴッド}）にかわり、共産党員が皇帝にかわつたのだ。皇帝は天の命をおびて支配していたが、共産党員は人民の命をもって支配する。旧い中国では人民は死者の専制政治の下に生き、かれらの祖宗は礼拝しなければならなかった。今や共産党員は人民は祖宗であり、かれらの前に礼拝すべきであるといっている。これを西欧の言葉でいえば、主権者、皇帝は主権者人民におきかえられ、神の意思が全般の意思におきかえられたということである。

もしもすべての意思が至上意思に従わなければならぬとすれば、個人もまた人民に叩頭しなければならぬということになる。そしてある場合にはこれはほんとうにその通りなのだ。大衆大会におくられて来た人々は、ときには全会衆に向つて

叩頭しなければならなかった。これは「大衆への謝罪」とよばれている。すなわち主権者の前にひれふすことである。

庶民の権力の宣言において毛沢東の追随者の多くは、マルクシズムよりも中世紀によくあるような教条をつくり出す。かれらはいく「大衆にしたがえ」と、そして人民はつねに正しくまちがわな⁽¹³⁾いと宣言する。こうしてかれらは絶対主義に道をひらく。なぜならばもしも人民が決してまちがわ⁽¹³⁾ないならば、その人民を代表する権力もまた決してまちがわ⁽¹³⁾ないことになるからだ。」

唯にベルデンばかりでなく、西欧のデモクラシーを知っているものは、すべて「人民の意思」の問題を重視している。ペインもまたこういっている。

「毛沢東は他のところでこう書いている。『指導者の主なる任務は地に耳をつけることである』。

かれはこのようにして人民の意志を理解した。だが人民大衆の意志が、解放日報の呪文めいた論説とは全然ちがったものかも知らぬという危険は常にあるのだ。」

中国の儒教的伝統では、皇帝は天命をうけて皇位につき、天命が去るとともに皇位からも去ることになつてゐる。だが、天命が皇帝から去つたということはいかにしてわかるのか。それは「民の声」に表現されるという。民の声に天命の去つたことがあら

われるとしても、それを素直にうけとつて皇位を去る皇帝などはひとりもいなかった。また皇帝の勢いのつよいときはたとえその政治が民意に反しても人民は皇帝の武力を前にしてそれを素直に表明しえない。民意が反対を素直に表明しえないかぎり、その王朝にくだつていた天命はまだ去つていないといふことになる。毛沢東のこの論文も「人民の意志がど

こにあるかをいかにしてするか」、「人民の意志が共産党に反対した場合にはどうするか」というような点にはまったく答えていない。

だが当時国民党の抗戦政策が民衆の参加をきらい、民衆動員をおそれていたという情況のもとにおいて、この論文はこれだけで十分効果をあげている。国民はこれによって共産党は国民党よりもはるかに人民の利益を顧慮しているという印象をあたえられたのである。

第十一章 世紀の農民戦争

一 抗日戦争から農民戦争への転化

前章の最後にあげた論文が発表された一九四五年のはじめには、抗日戦争の諸戦線は膠着状態だった。国民党軍には反撃の力がなく、連合軍にたよって戦争のおわるのを手をこまぬいて待っていた。これに反して共産党軍はその支配地域の拡大のために日本軍と積極的なたたかっていた。当時筆者は上海にいたが、この国際都市ではつぎのような言葉がはやっていた。

Communists' fighting for victory,

共産党は勝利のために戦い、

Nationalists' waiting for victory,

国民党軍は勝利をまち、

Japanese' dreaming for victory.

日本軍は勝利を夢みている。

情勢はまさにこの通りだった。

この年の八月原子爆弾が広島に投下され、間もなく日本の無条件降伏は決定的となった。と同時に共産党がつづけていた支配地域拡大運動に加速度がくわわった。国民党はあきらかに苦境にたつた。かれらは日本軍にたいして戦線を維持するのがやっとだから、華北に出兵して共産軍を食いとめる用意はなかった。中国の国民大衆もまた抗日戦争がようやく終わったところにまた国内戦争がおこることに絶対反対だった。このような情勢のもとに、終戦後まもなく(八月二十八日)蒋介石と毛沢東の和平会談がアメリカの仲介で重慶で行われたのは当然のなりゆきである。両者の間の和平条約が暫定的性質のものであることはいうまでもない。蒋介石には戦闘の準備期間が、毛沢東には勢力均衡好転までの期間が必要だった。勢力均衡というのはたんに武力だけのことではない。国民の精神的支持についていえば、抗

日戦終了当時の蒋介石の声望は毛沢東をはるかにしのぐものがあつた。もしも国民党があのような腐敗を露呈せずに、アメリカの援助でまがりなりにも戦後の復興ととりくむことができたならば、中国共産党が政権にちかづく機会にはるかあとのことになっていたであろう。どんな場合にも敵にたいして十分な勝算がたつまでは決戦にでないのが毛沢東の主義である。それ故かれは辛棒づよくその時期の到来をまっていたのだ。

抗戦後蒋介石の決断を要する問題は山積していたが、そのなかでもとくに緊急を要するものはやはり土地問題だった。抗戦中地主の多くが戦禍をさけて大都会に逃げこんでしまった地区では、その土地を耕していたものはそこを離れては食うことのできな小作農だった。かれらは抗戦期間中地代をおさめず事実上の自作農となっていた。かようなところに来終戦と同時に地主達が国民党軍とともにかえって来

て、農民に土地の返還や抗戦期間中の滞納地代の集積に利子を加えて要求したとすれば、そこにどんな事態がおこるかは容易に想像できる。共産党はこの情勢を利用して土地改革を推進させたが、これにたいする蒋介石は一九二七年から四五年の間に国民がいかにかわつたかをほとんど知らなかったようである。

抗戦中蒋介石は「抗戦は一切より高し」のスローガンのもとに、土地改革などの難問題はすべて「勝利ののちに」なんとかしなければならぬ問題として棚上げしてしまった。ところが土地問題はこの抗戦中に、国民党ではどうにも解決できない状態になっていた。抗戦中米国が国民党への軍事援助のために提供した物資や弗資金は国民党官僚の経営する事業をこやし、都会には畸形的な繁栄がつくり出された。こうして都会に集積した富はこの国の伝統的な貯蓄ルートにのって土地購入に投下された。ここに

当時の四川省の農村における土地占有状態をかいた一文がある。

「今日四川の農地が少数人の手に集中される程度はすでに最高度に達している。とくに川西平原の九〇パーセントはごく少数の地主によって占有された。かれらは自分では耕作せず、収益の大部分をえて数千の農民をいながらに剝取しつつある。

……抗戦期における川西平原の土地所有関係の變化については、まだ信用における材料はないが、戦争中金陵大学が華陽県、彭県の農村経済を調査した結果によると、民国二十六年（註 一九三七年）の秋から三十年（一九四一年）までに、華陽県で田を買ったものは軍人政治家三四パーセント、商人二八パーセント、旧地主一五パーセント、彭県で田を買ったものは旧地主六七パーセント、地主兼商人一四パーセントである。ここで注意すべきは、いわゆる「旧地主」とは軍閥と官

僚、地主のことなのである。(1)

四川の成都平原では抗日戦争前は全人口の二〇パーセントの地主が、全耕地の五〇パーセントを占有していたが、抗戦後は全人口の僅か八パーセントにたらない地主が八〇パーセントの土地を所有するようになった。重慶で戦前の地主の比率は成都とほぼ同じだったが、戦後はわずか人口の二パーセントの地主が耕地の九五パーセントを占有してしまった。常時四川人は「普天の下王土に非ざるなし」という言葉をもじって「普天の下蔣土に非ざるなし」といつていた。

耕地がこのように少数人の手に独占されてしまうと、土地をかりようとする小作人の競争がはげしくなり、地租は年々増加していった。甘英という学者が四川の或る県の小作農家二十六ケースについて調査した数字(2)によるとその増加率の大たいがわかる。

米国の軍事経済援助政策は中国のデモクラシーを

助長するために行われたといわれているが、実際に

年度	地租指数
1938年	100
1939	106.8
1940	106.8
1941	120.4
1942	127.3
1943	165.9
1944	181.4

はかえってこの国の封建的地主勢力を助長することによって耕作農民をくらしめ農村における階級闘争を激化

させる結果となっている。抗日戦争の末期、国内戦争の取材をしながら前線をとびまわっていたアメリカの記者ジャック・ベルデンもこの事実をよく観察している。

「戦争のおわり頃は中小地主、いな大地主さえも蒋介石の土地をむさぶる官僚や漢奸の圧力を感じはじめた。農民によって放棄された土地は数百万エーカーにもなった。土地占有熱は疫病のようにひろがり、農民達は搾取的地租制度のもとにお

いてはもはや生きられなかったのだ。小作農民の土地は非常にすくなくなってしまったので、収穫の一〇〇パーセント、九〇パーセント、八〇パーセントの地代はおろか、従来の五〇パーセントの地代さえ支払いきれなかった。地代はかれの余剰労働をいくつすばかりでなく、かれを生かしておくに必要な労働力にさえくいこんだ。人々はこれまで「いつ日本人を駆逐することができるだろうか」とかたりあっていたが、抗日戦争がおわると、また新しい戦争がはじまったのだ。農民は蒋介石の新しい農村官僚が、日本人や古い地主よりもかれらにたいして一層敵意をもっていることを発見し、口々に不平をいだした。そしてかれらは不平から匪賊へと走った。八路軍地区のちかくではともに戦う同盟者を求めはじめたのである。」⁽³⁾

こうして抗日戦争は毛沢東の予言したように、そ

の最後の段階には全国的な農民戦争に転化してしまつたのだ。

二 戦争の数学

一九四六年における国民党と共産軍の勢力比を簡単にしめすと、下記のような表ができる。

このうち国民党側の人口三億四千万人は国民党の力にはなりそうもない。その大部分は武器をとらせれば共産党にはしる可能性さえあった。これに反し共産党側の人口一億一千は、ときには軍夫となり、予備兵としてきたいすることのできる、みんな衆である。正規軍の四百万と百二十万の兵力差は非常に大きいようだが、中共は江西ソヴィエト時代にはもつと兵力のちがう国民党軍と戦ってしばしば勝利をえている。そのうえ共産党の地盤とする農村は、全国的に土地革命の気運がたかまっているので、最も

得意とする運動戦を展開する場面はひろがった。国民党軍は一時的には農村に侵入することができて、生活の基礎をそこにもたないかれらは農村にな

	人口	正規軍	不正規軍
国民党側	340,000,000 ^人	4,000,000	1,000,000
共産党側	110,000,000	1,200,000	1,500,000

がく駐在することはできない。結局国民党軍の勢力のおよぶところは、かつての日本軍と同じように点と線（註 都会と交通線）にかぎられ、しかも地上の交通線はつねに断絶の危険にさらされていった。しかしやがてはそれもとどざされて、アメリカ空軍の力をかりて都会と都会の連絡を辛うじてたもつような状態がつづき、結局各地区の軍団がばらばらにされ、各箇撃破されてしまったのだ。

毛沢東が味方の勢力関係の異動をいかによく計算していたかは、

かれが一九四八年十一月十四日に新華社に発表した次の談話をみればよくわかる。

「中国の軍事情勢はいまやあたらしい転局面にはいった。すなわち戦争の双方の力関係が根本的に変わったのである。人民解放軍はもとから質の上では優勢であったが、いまや数の上でも優勢をしめるにいたった。これは中国革命の成功と全国的平和の実現がすでに目の前にせまってきたしるしである。

国民党の軍隊は戦争の第二年のおわり、すなわちことしの六月末には総数約三百六十万人であった。この数は一九四六年七月国民党が全国的内戦をおこした当時の四百三十万人からいえば、六十五万人の減少である。二カ年間の戦闘で殲滅されたり、捕虜となったりして失われた国民党軍は約三百九万人、(うち戦死者と捕虜は二百六十四万人)である。しかしこの期間に二百四十四万人を

補充し、それでやっと六十五万人の減少ですんでいた。ところが最近一つの突然変化がおこった。

戦争第三年の四カ月目つまり今年の七月一日から十一月二日の瀋陽解放戦によって国民党軍は百万人をうしなした。四カ月間の国民党軍隊の補充の模様はまだしらべていないが、たとえ三十万人補充できたとしてもまだ七十万人の減少である。それゆえ国民党軍は、すべての陸海空軍、正規軍、不正規軍、作戦部隊、後勤機関なにかもふくめて現在二百九十万人である。人民解放軍は一九四六年六月当時の百二十万人から、四八年六月には二百八十万人に増加し、現在では三百余万人になっている。このような情勢は、国民党軍がながいあいだ占めていた数量上の優勢をして急速に劣勢に転化せしめた。これはこの四カ月間に人民解放軍が全国の各戦場で勇敢に戦った結果で、とくに南方戦線の予東戦役、済南戦役、北方戦線の錦

州、長春、遼西、瀋陽諸戦役の結果である。国民党正規軍はそのなかにできるだけ多くの不正規軍を編入し、今年の六月末にはそれでもまだ二百八十五師団の番号があったが、この四カ月間に人民解放軍は營以上の部隊合計八十三個師団を殲滅した。そのなかには完全な師団が六十個師団ふくまれている。

このようにして、われわれがはじめ予定していた戦争過程は大いに短縮された。以前は一九四六年七月から大たい五年ぐらいの時日が必要で、この期間があれば国民党反動政府をだいたい打倒できると考えていたが、現在の情勢からすれば、もう一年ぐらいの時日があれば、国民党反動政府を根本的に打倒することができるであろう。全国のあらゆる地方の反動勢力を消滅し、人民解放を完成するにはなお相当の時日が必要であろう。」

かれのこの見透しがいかに正確であったかは間もなく事実によって実証された。毛沢東がここでのべている諸戦役の勝利によって勢いにのった共産軍は南京をめざして南下した。それをばばむものは楊子江の天險以外にはなかった。共産党にはタンクや重砲をわたす船舶がなく、国民党軍にはその渡河をばばむ海軍があり航空機があった。そして蔣介石はこの一戦に最後の期待をかけていた。渡河作戦は一九四九年四月二十日からはじまった。だが国民党の海軍も空軍もほとんど抵抗らしい抵抗をせず、共産軍の渡河は演習のような気安さでおこなわれた。かれらは上陸後最初の一週間で一日三つの割合で都市を占領してゆき、四月二十八日陳毅の指揮する「人民解放軍」はついに首都南京に入城した。これは国民党政府の事実上の崩壊である。革命の勝利は毛沢東の予言した時日よりさらに半カ年以上短縮されたわけである。

三 中国人はなぜ共産党を支持したか

国民党軍の士気はなぜこのようにくずれさったのか。それを一言でこたえれば、蒋介石は共産軍に追放されるまえに、国民によって追放されてしまったからである。国民は決して共産主義の理論にかたむいたわけでもなく、共産党の政策がかれらの声明通りのものであるとも信じていなかった。中国人一般の思想をいえば政治はいかなる時代においても一種のあきらめであった。かれらにはできるならばどんな政治からも遠ざかっていたかった。しかしどちらかといえばこれまでともかくもそこにあった蒋介石に身近かな親近感をもっていたことは事実である。だがこの当時、かれらは蒋介石の政治のもとでは金持ち以外には生きられないという現実⁽⁵⁾に直面し、この国民党にかわって民生を安定させてくれる政府なら

ば、共産党であろうとなんであろうとかまいったことではないという心境になっていた。今筆者の許にある一九四七年九月二十七日付の中央社電は当時の上海の物価についてこうのべている。

「上海市の九月分の生計指数について二十七日上海市政府より左のごとく発表されている。一九三六年の平均指数にたいして労働者の生計費は三万四千百倍、職員のは三万八百倍」

ところがこの指数はそれからさらにひきつづき直線的に上昇するばかりで、内戦地帯から一千哩もへだたった華南の米どころでも米の値段が数日間に一ピクル一千八百万から三千六百万元にあがった。これは米一粒が十五元にあたる計算で、十五元といえは一九三六年における女工の一カ月の給料に等しいのである。サラリーマンが給料をうけとつても、その日のうちに物にかえておかなければ、翌日には

その価値が半減し、月末には無にひとしくなるのであるから仕事などは手につかない。換物は金や米俵が第一の対象になるが、それらは一般の人民には手がでないので、食糧、煙草、マッチその他どんなものでも対象となった。万人が争って物を買ひ、しかもその生産がないから貨幣価値はますます下落するばかりだった。それは物資の来源をにぎっているごく少数の資本家所謂「官僚資本主義」のもとに必然的に社会の富がつまれていく過程である。この事実を人民は各自の生活を通じて切実に思いしらされた。

一九四八年に蒋介石は貨幣価値を安定させるためと称して「金円券」を発行して法幣にかえ、国民のもっている金、銀、外国通貨を強制的に中央銀行に提出させ金円券にかえさせた。こうしておいてからまた金円券を乱発したから、金円券はふたたび下落をはじめ、物価もそれにつれて急騰した。人々はおも

はや、国民党の発行するいかなる貨幣をも信用しなくなり、商人は物々交換以外にはものを売らなくなってしまうた。こうして大多数の官吏、軍人、一般サラリーマン等俸給生活者、その他ほとんどの民衆は国民党の下では生活できないと思うようになっていたのだ。こういう民衆に向って国民党が共産主義者の世界になれば言論、出版の自由もなく投票の自由もないと警告しても、国民は国民党のもとでは富者の搾取の自由と貧者の餓死の自由があつて生きのこる自由はないと答えるだけであろう。これこそ中国人がこの時点にたつて国民党の自由政治よりも共産党の専制政治をえらんだほんとの理由なのだ。

他方共産党地区では民衆の大部分が生産にたずさわる農民であつたから共産党の発行する人民券には物資のうらづけがあり、貨幣価値は比較的安定していた。そのうえ農民は一九四六年に発表された土地改革令で、自作農になつたものがおおく、その生産

意欲は旺盛だった。土地改革令は地主出身の共産党員の家庭にも公平に適用された。一例をあげると、蘇皖辺区政府の民政政庁長陳蔭南の家も大地主であるが、自家用耕地として六十畝をのぞき、のこり一千百三十三畝を全部農民に分配している。⁽⁶⁾

地主から土地をわけてもらった農民たちは地主や国民党から中共の共同正犯とみられ、国民党軍がくれば土地をうばわれたうえ、生命までもあぶないから、心から共産党の勝利をねがっている。一九四六年百二十万人にすぎなかった人民解放軍が二年後の四八年に三百万人ちかくに増加しているのは、ねがえた国民党軍ばかりでなく、このような農民が多数参加したからである。

土地改革が国民党軍の兵士にあたえた精神的影響は非常に大きかった。かれらの大部分はもともと貧農の家からむりやりに徴用されてきたものであるから、だれよりもかれら自身土地をほしがっていた。

かれらがもしも解放軍にねがえるならば、土地の分配をうけることができるわかつたとき、その機会をのがすはずはない。この頃共産地区にいて土地改革の実際をみているベルデンは、それが国民党軍に及ぼした作用を次のように要約している。

「土地改革は実質的に農村中国を蔣介石からそむかせた。中国の生活における都市の比重は非常にひくいから、これは蔣介石の軍隊を次第に中国の生活の主要な潮流から孤立させたことを意味している。中国共産党が、軍隊は魚であり、人民は水であるといっていることが、ここに非常によくあらわてはまる。土地革命は共産主義者がそのなかに生きることできる要因をつくりあげたばかりでなく、蔣介石の軍隊から人民をきりはなし、その軍隊を社会的真空状態のなかに窒息するがままにしたのである。」

四 中華人民共和国の生誕と性格

こうして蒋介石は中国大陸からおわれ、一九四九年十月一日北京に、毛沢東を主席とする「中華人民共和国」の政府が誕生した。この政権の性格は「プロレタリア、農民、小ブルジョア、民族資本家の連合政権で、労働連盟を基礎とし、プロレタリアが領導する人民専制政治」と規定されている。プロレタリアが領導するといってもプロレタリア全体が直接指導にあたることは不可能であるから、実際はプロレタリアの政党——共産党による指導ということになる。つまりそれには中国共産党がプロレタリア政党であることが絶対に必要なのだ。だがすでにふれておいたように、中国共産党がプロレタリア政党であるかどうかは疑問であり、またプロレタリア指導を共産党指導にかえることにも問題がある。第五章

で引用したソ連の老ボルシェビキ、ターシネンはこれについてはつきりこう指摘している。

「劉少奇は中共第八回全体会における報告のなかで『中華人民共和国の建国とともに、中国共産党は政治権力を指導する党となり、人民の民主主義的独裁は事実上プロレタリアート独裁の形態のひとつとなった』と強調した。ここでは事実上プロレタリアートの指導と独裁が共産党の指導的地位と同一視されている。これは正しいか、いやあまりである。」

中国共産党が一九三一年頃からプロレタリア的基盤をはなれてしまったことは否定できない。既出のシュウォルツは「レーニンの著作全体を通じて、共産党がプロレタリア的基盤をはなれても実体として存在しうるという示唆は、どこにも見出せないのである」といっている。この点はトロツキー派によっ

てしばしば批判されており、中共にとってもコミンテルンにとっても頭の痛い問題であった。中国共産党は、もちろん党が共産主義指導者によって支配されているのだから（その構成分子の大部分がインテリと農民であつても）プロレタリアート党だといひわけしてきた。だがその党が実際プロレタリア的基盤の上にたつていない場合、そしてその共産主義者の指導団が、もし非プロレタリア的政策をとつた場合、その政策を正しい階級政策にもどす下からのつきあげを、その党自身のなかに期待することはむずかしい。眞の共産党活動は、ゲオルグ・ルカッチがいつているように「プロレタリア階級を代表する活動ではなく、プロレタリア階級そのものの活動の集中なのである」。だから党の政策が一時的に階級的基盤をはなれることがあつても長くそのままではいられない。それ故にこそ共産党はプロレタリアとつねに具体的な、有機的な関係をもつていなければ

ならないのである。さもないければ共産党は容易に共産党の実体を失ふことになる。共産党がブルジョア政党にたいして終局的に勝利をうるという確信の科学的根拠は、プロレタリアートがブルジョア社会を变革する歴史的必然性をもっているということであり、共産党はその階級の政治的にもつとも自覚した部分であるというところにある。少数の共産主義者の指導団がプロレタリア的基盤をもたない政党を組織しても同じようにプロレタリアート階級の歴史的使命をはたし歴史的变革をおこすことができるというのならば、シェウオルツも指摘しているように、それは科学的社会主義者の考え方ではなく、ユートピア社会主義者の考え方なのである。

この両者の相違はこうである。ユートピア社会主義者はプロレタリア階級のみが資本主義社会を变革するといふ考えを否定し、人道主義的考えをもつた小グループの人々でも方法如何によって資本主義社

会を理想的社会に変革することができると信じているところにある。それについてシエウォルツはこう
いつている。

「勿論マルクスもレーニンも自分達がそうであつたように、非プロレタリアート出身の善意の人々がプロレタリアートと一体となりうることを否定してはいない。しかし両者とも、かれらがプロレタリアートとなら實際上のむすびつきを持たない場合にも、ただ信念を持った行動だけでプロレタリアートと同一化しようという説を唱えるものがあれば強くこれに反対したであろう。プロレタリアートの前衛はその背後に主力を持たなくても存在しようということを信ずるのは、マルクス・レーニン主義が認めることのできない人間歴史上の役割を、政治権力に与えることになるからである。」

毛沢東が中国共産党を徐々にプロレタリア的基盤の上のせようとしていることは認められるが、現在の時点における中国共産党は党員の階級構成からいっても、その指導イデオロギーたる毛沢東思想からいってもプロレタリアートの代表党とはいきされないものがある。すでに知っているように毛沢東自身、中国共産党はプロレタリアートではなく全人民を代表する党と考えている。かれは中国の歴代の専制君主が天の意志によって政治を行うように新しい中国は人民の意志によって支配され、その委託をうけた政党が政治をとるべきだと考えている。

中国では人民が共産党に反対の意志表示をおこなうことは許されない。人民の意志は絶対でありあまりはない。いな、たとえ誤りがあつてもそれを自ら訂正する意志と能力をもっており、共産党はその人民の代表であるから、それに反対するものはもはや人民ではなく、人民の敵だと考えられる。ここに

党の専制が人民の名においてジャスティファイされている。

中国には共産党以外の政党もあるということを描いても共産党の専制は否定できない。それらは人民の政党ならばという前提のもとにおいてのみ存在を許されている。ということは、人民を代表する共産党に絶対服従するという条件のもとにのみ存在を許されているのだ。このようなロジック——それは開国以来この国におこった多くの事実によって証明済みであるが——から中華人民共和国の人民専政の実態は共産党の専制政治ということになる。そして共産党は中央委員会の決定によって動かされ、中央委は政治局の決定に、政治局は毛沢東の決断によって動かされているという現情においては、この国の政治の性格もおのずからあきらかになる。それは一言でいえば、一生懸命対外的にはマルクス主義の教義通りの世界革命を行ない、対内的には共産主義の

理想にいたる政策を追求してはいるが、本質的には幅のひろい有能な顧問団とその政策を忠実に実行する全国的組織をもつ毛沢東個人専制政治なのだ。

中国の伝統的な皇帝は「民の父母」といわれ、そのように行動することが政治のモットーとなっていたが、毛沢東はこの意味ではもっとも近代的でもっとも有能な「中国皇帝」ともいえる。中国がこのような「近代の皇帝」をいたくようになつたのは、この国の農村社会の「非近代性」もっと具体的にいえば、人民が「餓死の自由」からさえ解放されるならば「言論集会の自由」とか「投票の自由」などというせいたく自由はどうでもよいと考えるような環境におかれていたことに原因があるのだ。

儒教の毛沢東における影響

一 共産主義と儒教

毛沢東が儒教にかわる民族道徳の基準として、共産主義を国民にうけいれさせようとしていることはいうまでもない。では彼はその思想の根底にある儒教的伝統を、自ら清算して国民に卒先示範するつもりであろうか。いったい現在の中国において、儒教と共産主義はいかなる関係にたっているのか。筆者はこのテーマのなかに中国共産党の性格をみいだすかぎがあると信ずるので、ここではそれをほりさげてみたい。この過程においてこれまでの章でのべたところと若干重複するところのあることを前もっておことわりしておく。

林語堂は「共産主義と孔子」という論文のなかで「共産主義者はキリスト教を無産者のアヘンであるとかんがえたように、孔子や老子の思想は民衆にと

って毒素であるとかんがえている。孔子に関する書物は禁止されてはいないが、無視され、古い書物はすべて害毒の書とみられ、学生用の歴史書は計画的に書きかえられている」とのべている。

反共的中共批判者とみられている林語堂は、それを中共当事者の口から立証させるために、中国共産党副主席故孫文夫人宋慶齡のつぎの言葉をあげている。

「共産主義本来の教義こそ最善のものであり、孔子の教は徹底的に封建的であり、専制的である。そして孔子の影響が今日の美術にも文学にも、社会科学にも道徳にも奥深くしみこんでいることをさとらねばならない。私達は私達の生活や思想のすみずみから孔子の思想を根こそぎひきぬくようにしなければならぬ。」⁽¹⁾

儒教文化を中国近代化の最大の障碍としてそれを

徹底的に消滅することが中国近代化の第一歩であるという考え方は、五・四運動前後における中国思想界においては支配的であった。五・四運動に結集した中国青年達の共通の目標は旧政治の打倒であったから、その支柱となってきた儒教に攻撃があつたのは当然である。かれらの孔子にたいする考えかたは、この運動の思想的核心となった雑誌「新青年」の主幹陳独秀のつぎの言葉に代表されている。

「われらは孔教には反対だが、孔子個人には反対しない。またかれ（孔子）は古代社会にあつては無価値ではなかつた。ただかれは現代の人心を支配する現代の潮流に適合しないものである。」（陳独秀「孔教研究」）

「孔子は封建制時代に生長したので、その提唱する道徳も封建制時代の道徳であり、垂示する礼教と生活状態も、封建制時代の礼教と生活状態であり、その主張する政治も封建時代の政治である。」

（同「孔子之道与現代生活」）

かれらは決して孔子および儒教の価値を否定してはいない。ただそれは封建的道徳であるから反対だといふのである。中国のルネサンス運動で活躍したのはこの陳独秀をはじめ、李大釗、胡適、魯迅、錢玄同らである。そのなかで「南陳北李」と称された陳独秀、李大釗が中国共産党創立の核心となり、五・四運動の青年達をその下にあつめた。したがって中国共産党が儒教文化の撲滅を中国近代化のひとつテーマとしてとりあげたとしてもなんらの不思議はない。

しかし儒教が悠久の年代のなかで中国人のあらゆる思想領域に根をおろして、一つの偉大な道徳的な力となつてこの民族を統一してきたことは、これらの反対論者も否定してはいない。またこの点は旧くから多くのシノローグの是認するところである。たと

えば有名なアーサー・エッチ・スミスは、中国人が「諸国民の衰退滅亡という普遍的法則にたいする例外の観があるのは何故であるか」と自問し、「この問題を深く研究して人々は申し合せたように、この結果のよってくるゆえんは、他の諸国民が肉体的力に依存したに反し、中国人は道徳力に依存してきたからである」といっている」と、その名著「支那の性格」で自答している。スミスのいう道徳的力が儒教をさすことはいうまでもない。

同時にまた儒教文化が中国に浸入してくる異種族の文化を吸収し、かれらを中華民族のなかに同化してしまう積極的作用をもっていることも広く内外の承認をうけている。ペンギン文庫に採択されている「中国、新しい時代と新しい外観 China New Age and New Outlook」の著者ジャンチャー・クオ博士は、それについてこういっている。

「昔の遊牧種族、匈奴、鮮卑、吐蕃、突厥、契

丹、党項、女真が中国と接触すると、中国の文化はこれらの侵入者にたいして浸触的影響を及ぼした。その結果、中国のおちついた農業社会の孔子イデオロギーは、原始的遊牧民の精悍な軍事力を克服して、かれらを中国の偉大な垣塙のなかに同化してしまった。」⁽²⁾

儒教文化のもつこのようなつよいエネルギーが中国の民族精神の内容をなしていることもほぼ異論はない。⁽³⁾

中国の民族精神の内容が儒教文化であるならば、民族統一をもつとも必要としている現在の中共が、なぜ儒教文化を頭から否定し、その影響の根絶をはかるのか。中共は事実そのような行動をとっているのか、それとも儒教文化の或る影響は否定し、或る影響を保存するというのか。とすればなにが消え、なにがのこされたか、それはいかなる基準による

か。また儒教文化が過去において異質の文化を吸収し、同化する作用があったとすれば、それはいま共産主義にたいしていかに作用しているか。もしそれが共産主義の前で無力であるならば、それはいかなる原理によるか、これらの疑問は当然あきらかにされなければならぬ。

二 「先王の道」

中国の民族統一を、単純に儒教文化の力によるとみないシノログもある。ハーバード・アリン・チャイルスは、その著「中国文明」のなかで、「中国がその人心を相互に結びつけ、崩壊への歩みをふせぐに役立ったのは儒教である」ことを認めながらも、それだけでは不十分だとし、「あらゆる中国の制度を通じて息吹き、人々を結合して、すべての形式の圧迫に抵抗させている個人的な自由の精神を相

当たかく考慮に入れないならば完全なものとはいえない」といつている。しかしこの「個人的な自由の精神」が儒教によって養われていることは否定してない。そして孟子が湯武放伐を是認していることから「中国人は悪しき統治者を死刑にしうる自分達の権利を主張する」として、「中国が国家として永く存続する真の秘密を見いだすうえにおいて記憶すべきもつとも重要な点は、民主主義と自由の方向に指示される。」⁽⁵⁾といつている。

儒教が一方では「封建的」とか「専制的」とかいわれ、他方では「民主主義と自由の方向」とむすびいつているといわれるゆえんは一考にあたいする。孔子の生れたのは西暦紀元前五二二年で、中国の古典時代「春秋」（前七七〇—前四〇三年）の半頃にあたる。

春秋時代は民族国家の土地国有制の下に、民族奴

隸が働いていた西周時代がすでににおわり、大夫（士族）と庶人（耕作農民）の階級関係が生れていた。

それは氏族国家間の闘争、氏族国家内部における貴族同志の権力争奪戦がはげしくおこっていた、孔子のいわゆる「天下無道」の時代である。そこでは土地所有の多寡が人間の社会的地位を決定したので、土地兼併の風がおこり、「臣、君を弑し、子、父を弑し、下、上を犯かし、大、小を併す」という現象が⁽⁷⁾つねにおこっていた。

このような時代の苦悶をうけた当時の知識階級——その多くは下級貴族の地主士族、いわゆる君子である——が、過去の平和な民族社会の「よき時代、よき支配者」の政治にあこがれをよせるのはきわめて自然のことである。伝説にのこっているこれらの支配者は堯、舜、禹であるから、これらの人々の行跡が理想化され、「聖王の道」または「先王の道」⁽⁸⁾として政治の指針と考えられるようになったの

も無理はない。孔子自身も自分になにも新しい教義をのべるのではない、ただ先王の道をのべるにすぎないといっている。（子曰く、述べて作らず信じて古を好む）論語「述而」したがって論語のなかに堯舜禹をたたえた言葉が随所にでてくる。

「爾舜、天の曆数は爾の躬に在り、允に其の中を執れ。四海困窮せば、天禄永く終えんと。舜も亦た禹に命ず、曰く——朕が躬罪有らば万方を以てすること無からん。万方罪あらば罪は朕が躬に在らんと。……百姓過有らば予一人に有らん」（堯曰く）

この内容は「説苑君道」には次のように平易化されてゐる。

「堯心を天下に存し、一民の饑ゆるあらば、則ち曰く、これ我これを饑えしめたるなり。一民の寒ゆるものあらば、則ち曰く、これ我これを寒えしめたるなり、一民罪あらば則ち曰く、我これを陥

れたるなりと。」

以上にのべられている先王の言行は、原始共产制氏族社会の族長の言行としてみればきわめて自然のものとなる。原始共产制氏族社会は「土に肥穰なく人に勤惰なく天下を一家となし、私に耕し私に織るものなく、共にその寒を寒とし、共にその餓えを餓えとす」（尉繚子、治本）とする時代であったから、氏族のなかにひとりでも饑寒に苦しむものがあれば、生産消費の指導者たる氏族長が責任を感じるのは当然のことだ。古典時代の知識階級は、この氏族長のあり方をさらに自分達のイメージによって理想化し、無私にして民主的な理想的君主像をつくりあげ、これを当時の専制的貴族政治に対比させようとした。孔子然り、墨子然りである。それ故彼らの反対派韓非子は、「孔子、墨子俱に堯舜を道うも取舍同じからず、皆もに自ら謂う、真の堯舜なり」と『顯

學』』といている。従って論語のなかには原始共产制氏族社会の実父長的徳治主義や族民の平等主義を思わせる言葉は少ない。

「己を修めて以て百姓を安んずるは堯舜もそれ猶諸を病めり」（憲問）

「子貢曰く、如し博く民に施してよく衆を濟う」と有らば如何、仁というべきかと。子曰く、何ぞ仁に事らん、必ずや聖か、堯舜も其れ独諸を病めり。（雍也）「丘や聞く、国を有ち家を有つ者は寡きを思えず均しからざるを患う。貧しきを患えず安からざるを患う。蓋し均しくば貧しきことなく、和せば寡きことなく、安くば傾くことなし。（季氏）

孔子の「先王の道」は孟子というよき祖述者を得て、中国における政治道徳の基準として発展して行った。孟子も孔子と同じく諸国を旅行し、諸侯に会

えは必ず説くに先王の道を以てした（孟子性善を道い、曾えは堯舜を称す）。この間に原始共産主義制氏族社会の平等主義は理想化された井田制による民生主義となり、家父長的君主は「民の父母」たることを目標とする民主的専制君主として表現されるようになった。それと同時に「民の父母」たることをおこたつた暴君は君主としての資格がないものとして倒されるべきである、という革命の原理が生れた。孟子は殷の湯王をたすけて夏王桀を倒した賢者伊尹の言葉に托してそれを次のようにのべている。

「我（われ）の言（ことば）の中に処（あ）り是れに由りて以て堯舜の道を樂（たの）まんよりは吾（われ）豈（た）是（こゝ）の君（み）（湯王）をして堯舜の君たらしむるに若（ごと）かんや。吾（われ）豈（た）吾（われ）が身に於て親しく之を見るに若（ごと）かんやと。

天の此民を生ずるや、先知をして後知を覺（め）さしめ、先覺をして後覺を覺（め）さしむるなり。予は將（まさ）さず斯の道を以て斯の民を覺（め）さんとするなり、予之

を覺（め）すに非ずして誰ぞやと。天下の民、匹夫匹婦も堯舜の沢を被らざるもの有れば己（おの）推して之を溝中に内（い）るが若（ごと）しと思えり、其の自ら任ずるに天下の重を以てすること此（かく）の如し。故に湯に就きて之を説くに夏を伐ち民を救う以てす。」（「万章上」）

即ちある時代の「先知先覺」換言すれば、知識階級は時の支配者の政治が先王の道からはずれているのを見れば——世論をつくり出して——その支配者を倒さなければ、天の意志にそむくと考えられた。

かくして原始共産制氏族社会の特徴から生れた上述の二つの原理は、時代のゆがみをただす政治の基準として、またその基準にたがう君主を倒すこととして用いられるようになったのである。

三 官僚学としての孔子学

儒教が革命の原理を内包するにかかわらず、漢の武帝のとき董仲舒の進言によって、国学となった理由の一つは孔子学が完璧にちかい官僚学だったからである。孔子は君主をたすけて先王の道を踏ませることが君子の道であるとおしえ、その方向に人つくりをおこなってきた。こうしてつくられた人材は単に君主につかえる用人ではなく、君主をかりて自分の理想を実現しようとする積極性をもっていた。この立場からいえば臣は臣でなく、「分身の君」である。臣のいであつて君に事えるのは天下万民のためであつて、君主一姓のためではない。君主の命令と雖も、その道に非ざれば従つてはならないのである（清朝初期の黄宗羲の説）。それ故賢君にめぐりあわない君子は一生を浪人でくらすなければならな

った。孔子自身もそのひとりで、かれはその弟子、子由に向つて、「道行われず、椀いかにに乗りて海に浮ばん。我に従うものはそれ由か」（「公治長」）とたわむれている。君子の道はこのようにけわしいものであるから、日常生活において勤儉耐乏の習慣を養つておかないと、まさかのときに節を屈することになる。孔子が「士道に志ざして悪衣悪食を恥じるものは未だともに識るに足らざるなり」といい、君子にたいしてつねに「道を憂えて貧を憂えず」という姿勢を持つることを要請していたのはこのためである。

君子が君主をたすけて政を行うといつてもその手段は自らおさをおさめて相手を徳化することにつきる。「子曰く、苟くも其の身を正しくせば政に従うにおいて何か有らん」で、それ以外の要請はあまりない。「無為にして治まるものはそれ舜なるか。夫れ何をなすや、己を恭しくして正しく南面するのみ

「憲問」で、一にも二にも修身といふことにな
る。孔子がこの観点から弟子達に、あらゆる人間関
係のありかたを教えた「論語」は、人間味のあふれた
実践倫理の教科書である。それにしばしばくりかえ
されていることは、道をつらぬくために刻苦奮闘す
る苦行僧的日常生活をつづけねばならぬということ
である。「君子は食飽くことを求むることなく、居
安きを求むることなく、事に敏にして言に慎しみ、
有道につきて正す。学を好むと謂うべきのみ。「学
而」しかし孔子は決して富貴を否定しているわけ
ではない。よき君主の官僚となつて、共に先王の道
を行ふとき、その地位における富貴は肯定される。孔
子は「邦道ありて貧しく且賤しきは恥なり」とい
ている。当時はまだ富貴の来源、即ち封建的搾取関
係が少しも意識にのぼらない時代であつたから、君
子達は満腔の正義感をもつて君主につかえ、富貴を
えつつ道にはげむことができた。孔子が養成の対象

としたのはこのような君主連で、「弟子三千人、身
六芸に通ずるもの七十余人」が学にはげんだのは、
一面かような「富貴」即ち名利をのぞんだからであ
る。論語にもそれを示唆するものとして「子張、禄
を干むることを学ぶ」「為政」とか、「学ぶや禄其
の中に在り」「衛靈公」などがある。孔子が「三年
学びて穀に至らざるを得易すからざるなり」「泰
伯」といつているのは、門人の大多数の志が那边
にあつたかをしめすものである。

孔子はかように君主とその官僚の座につくエリ
トだけを対象としていたので、小人（庶民即ち耕作
農民）や処士（官僚にならない士族）が政治を談ず
ることに反対した。「その位にあらずして其の政
を謀らず」（憲問）とくに庶民の政治批判は孔子が
もつともにくんだ、ところで彼ははつきりと「下流
に居て上を訕る者を惡む」といつている。「陽貨」
ここに孔子学の官僚学たる所以があつたのだ。

四 革命の原理としての儒教

現実の政治が「先王の道」からはずれている場合、孔子学ではそれを先知先覚して、与論をつくるものは庶民であってはならないのである。これは先王の道を信じ現実の政治に不満をもつ庶民や処士にはたえられないことである。工匠出身の儒学者墨子（墨澗、前五〜四世紀）が別に一派を開いた理由はここにある。かれは堯舜を崇拜しているが、さらにその上に天という宇宙の主宰者を考え、その下においては堯舜をふくめてすべての人間は平等無差別であるとした（「人は長幼貴賤なくみな天の臣なり」）。その平等のなかからいかにして先王が生れたか、これについて墨子の説明はこうだ。人には善と不善があり、善は賞をうけ、不善は罰をうける。これを「下情」とよぶ。下情は君主関係の基礎となる。即

ち下のものは善をみれば上に報告し、不善をみれば上に報告する。上のものがその報告にもとづいて正しく賞罰を与えれば、上下相和し相通ずる（「上下情誼為通」）。そうするためには「賢者を選択し立て天子となす」ことが必要である。賢い天子が立って賞罰を正せば「衆情」にそうから、大衆はその天子を心から愛敬する。かくして聖王（先王）が生れたのだという。これは一種の宗教民主論的社會契約説で、衆情にそわない不正の暴君にたいしては契約は破棄され、国民が君主を処罰する権利をもつようになるのである。墨子はこの観点から当時の政治をこう批判する。

「今の王公大人、その富むるところ、その貴きところ、みな王公大人骨肉の親もて故なくして富貴、面目美好なるもの也」（「尙賢」）

王公貴族はこのように親族関係によって富貴をう

けているが、これにたいし士族は「富貴を欲し貧賤を惡み」その地位を手に入れようと學問にはげんでいるにかかわらず、名族出身でなければ用いられない。王公貴族は學問をしなくとも地位につけるから賢者である必要はない。従つて賞罰が正しく行われず、人々は善を行おうとせず、賢者は野にかくれ、財は一カ所に集まる。「かくして則ち飢者食を得ず、寒者衣を得ず、乱者治をえず」という現状になつたのだと結論する。

このような墨子の思想が当時の庶民や失意の士族に深い感銘をあたえたことは想像にかたくない。それは中国の古典のなかで発見された最も尖鋭な意識的貴族政治反対論であり、陳勝の「王侯なんぞ種あらんや」と同じく、貴族の圧力に反発する古代庶民の心にひそむ人間的感情に適切な表現をあたえたものだ。

墨子は孔子が神様あつかひした先王をただの人間

にすることによって、儒教の異端者となつた。しかし彼の學説は、孔子の後継者孟子につよい影響をあたえた。孟子は墨子の「先王の道」を反駁しつつ、しらずしらず後者の「社会契約説」的要素を儒教にとりいれざるをえなかつたのだ。もちろん彼においては聖王の「神格」をくずさないで、それを次のようになしとげている。

「孟子曰く、規矩は方員いたりの至いたりなり。聖人は人倫の至いたりなり。君たらんと欲せば、君の道を尽し、臣たらんと欲せば臣の道を尽す。二つの者皆な堯舜に法のつとるのみ。舜の堯に事まかする所以を以て君に事えざるは其の君を敬せざるものなり。堯の民を治むる所以を以て民を治めざるは其の民を賊する者なり。」〔離婁〕

こうして中国では、國民にたいしてその生活を保証するといふ条件のもとにおいてのみ専制君主が許

され、その条件をみたくない専制君主は「民を暴すること甚だしければ、身弑せられ、国亡ぶ」という革命の原理が生れたのである。

五 改革のて、こととしての儒教

中国の革命には一定の周期があるといわれている。或る王朝がその最盛期をおわり、権威がおとろえてくると、官僚の腐敗がひどくなり、財政が混乱し、かれらのすべてを養っている農民の負担が過重となる。農民がそれにたえきれなくなると農民暴動をおこす。ときには、自然の災害がそれをはやめることもある。その場合農民は徴税吏や、その地方の官吏など、自分の直接頭にあたり地主官僚とは戦うが、国家というものに表現されただけ封建支配の全機構とたたかう決意をもつにいたらない。農民暴動を全国的なレベルにたかめるには、もっと知識のすす

んだ全般的見透しをもった階級の指導を必要とする。農民のこの弱点は往々にして、支配階級出身の野心家に利用され、農民は暴動の指導権をかれらに渡してしまふ。かれらはそれを利用して王朝をたおすと同時に、自分らの王朝を樹立し、再び農民の上に君臨する。しかし新王朝ができた当座はある程度農民の生活を保証する社会改革（多くの場合土地の均分制）が行われ、王朝は平和な発展をたどる。その間に王朝はまた地主官僚に包囲され、かれらに不利な社会改革の実施はうやむやとなり、ふたたび官僚の腐敗、国費の乱費、農民の負担過重、そして農民暴動へというコースをたどる。

このような過程において旧王朝をたおす革命派の口実は、ときの皇帝が「民の父母」たる天職をはたさず、天命すであらたまったということであり、新王朝成立直後、または旧王朝改革のさいに提案される社会改革案の多くは、土地均分政策による民生

主義であった。たとえば前漢武帝に提出された董仲舒の「限田制」、新王朝王莽の改革における「王田制」、西晋武帝の「占田制」、北魏および隨の「均田制」、唐の「班田制」これらは名称も内容も若干ちがっているが、いずれも孟子の理想化した井田制のアイデアにもとづくものである。

このながい期間にわたって儒教の理想が中国社会のなかにいきっていたということは、中国社会の発展停滞性だけでは説明しきれないものがある。それは中国史が近代にはいってからおこった太平天国（一八五〇—一八六四年）の天王、洪秀全の土地改革が、やはり均分主義であったという事実によって一層その感をふかめる。かれは土地を肥沃度に応じて九級に区分し、最高級の土地一畝は、最低級の土地三畝にあたる計算で、一家の世帯数に応じて土地を均分している。太平天国ではこれを「天朝田畝制度」とよんだ。洪秀全はキリスト教の教義を学んだといわ

れているが、聖書をよんだわけではなく、ただロンドン佈道会発行の「勸世良言」という華文パンフレットをよんだにすぎない。かれは十六才から科挙試験に四回も失敗しているので、その試験勉強を通じ儒教の古典の上に半生をついやしている。かれの行動の原動力がどこにあるかはかれの次の言葉をみればよくわかる。

「凡そ天下の田は天下の人同じく耕す。此処不足すれば則ち彼処に遷し、彼処不足すれば則ち此処に遷す。凡そ天下の田は豊荒相通じ、此処荒れば則ち豊処に遷し、以てこの荒処を賑わす。彼処荒なれば此の豊処に移し、以て彼の荒処を賑わす。つとめて天下をして共に天父皇上帝の大福を享けしめん。田あれば共に耕やし、飯あれば同に食い、衣あれば同に穿ち、銭あれば同に使ひ、処にして均しからざるなく、人にして飽腹せざるなからしめん」。

ここには堯舜のそれを想起せしむるものがあり、彼のみいだした天国が「先王の道」の投射にすぎないことがわかる。

清朝側にとってこの王朝の改革をはかった康有為、梁啓超一派が「先王の道」に新しい展開をあたえ、それを改革の足場としようとしたことはわれわれの記憶にあたらしい。かれは孔子が述べたといわれる礼記礼運篇にある「大同」の世界を理想境とし、それにいたる段階として清朝を立憲君主制としようとしたのである。礼記にある大同の世界とは――

「大道の行わるるや、天下を公となし、賢と能とを選び、信を講じ、睦を脩む、故に人独り其の親を親とせず、独り其の子を子とせず、老は終る所あり、壮は用うる所あり、幼は長ずる所あり、矜寡孤獨癯疾の者、皆な養う所あり、男は分あり、女は婦あり、貨は其の地に棄てらるるを惡めども

必ずしも己の爲めにせず、是故に謀は閉じて興らず、盜竊亂賊はすなわち作らず、故に外戸して閉じず、是を大同と謂う。……」

このなかの「賢と能を選び」とか「独りその親を親とせず、独り其の子を子とせず」とかいう文句に墨子の尚賢論や博愛論の影響が見えるので後世の作であって、孔子の言葉ではないといわれているが、いずれにせよこの内容が原始共産制氏族社会をモデルにした先王の世界であることはいうまでもあるまい。

康有為に反対し、清朝を倒そうとした孫文も大同の世界を理想としたことは彼自らが書いたといわれる中華民国国歌に「以建民国、以進大同」とあり、その主張に「平均地権」があることによって明瞭であろう。かれは共和制をもって、康有為の立憲君主制のように、大同の世界に発展する一段階と考えて

いたのである。孫文は西歐デモクラシーの教育を通じて、その影響をつよくうけているように謂われてゐるが、その主張する民権主義は孟子の暴君追放論を根拠として、人民に政治権力をあたえることであつて、デモクラシーではない。民主主義はすなわち孟子の民主主義である。かれは現段階では——民族が自由になるまでは——個人の自由を認めることはできないといつてゐる。のみならず人間は生れながらにして平等ではなく、平等は人為であり、天賦は不平等であるとし、孔子が「上知と下愚は移らず」と考へたように、人間には先天的に指導者の素質のあるものと、そうでないものがあると考へた。しかしさすがに毅然と二種類に分けることは遠慮してか、次の三通りに分けてゐる。

- 1 先知先覺—革命者
- 2 後知後覺—宣傳者
- 3 不知不覺—実行者

これは孟子の「天の此の民を生ずるや、先知をして後知を覺らしめ、先覺をして後覺を覺らしむ」からとつてゐることは明らかで、「不知不覺」などは、事実上ありえないから、基本的には君子と庶民、治者と被治者を先天的に分ける中国の読書階級、リテラテの伝統的な考へかたである。それ故、故鈴江言一は孫文を評して、「彼の民主主義は主観的民主主義である。殿様の平民主義は、殿様が平民に対する場合にのみ平民的であり、平民が殿様に対して平民的であることは逆鱗にふれる。孫文の民主主義は、すなわちこの殿様の一方的民主主義であり、そこには絶対的専制の下にあらゆる自由をうばいさつた民主主義のみが残る」といつてゐる。

孫文は儒教が中国人の思想にうがつたみ、その深さをよく知つていたので、そのなかに自分の思想をながすのでなければ大衆をつかむことはむずかしいと考へていたにちがいない。とすれば孫文よりもさら

に高度の大衆政治家と考えられている毛沢東が、どうしてそのみぞを利用しようと思わず、儒教文化を否定したのであろうか。

六 毛沢東と儒教

毛沢東自ら語るところによると、かれは小学校で四書五経を読んだ。いな無理やり読まされたのである。したがって彼は儒教にたいして決してよい印象はもっていなかった。彼はいう。

「私は八歳の頃から孔子が嫌いだった。村には孔子の堂があり、わたしはいつもそれを焼き払いたいと思っていた。はじめは孔子を教える先生が嫌いだったのと、父がわたしに孔子の言葉をひいてきかせたためだった。後になってようやくわたしは、どうして自分が孔子を憎むのかわかった。」

(ロバート・ペイン「毛沢東」邦訳書三一頁)

彼が孔子を憎んだわけは、実は、儒教文化の上にあぐらをかいている旧社会——教師や自分の父をふくめて——が憎かったのである。この心理はかれの世代（すなわち五・四運動の青年達）に共通なものだった。それは必ずしも彼が孔子から何の影響も受けなかったということではない。彼の伝記作家ロバート・ペインはそれについてこう述べている。

「論語と四書、これらの驚嘆すべき書物は、細心のヒューマニズムによってかかれており、毛自身は認めているよりも、はるかに深刻な影響をかれにあたえたのである。……このような読書から毛の心にさまざまな政治権力に関する孔子の概念、「大同」の観念、それに孔子の語った多くの格言が残った。それらの格言を毛はおどろくべき機智と正確さをもって日常に応用した。」⁽¹⁰⁾

毛沢東は十六才のとき湘郷にでて、その第一師範に入塾した。この学校生活中、かれははじめて康有為の本をよみ、生きた孔子哲学にふれたのである。そのときの感激をエドガー・スノーにこうのべている。

「私は従兄が送ってくれた康有為の革命運動を書いた二冊の本を読みました。一つは『新民叢報』とよばれ、梁啓超によって編集されたものでした。私は暗誦できるまで何回となくよみました。私は康有為と梁啓超を崇拜していましたので、私の従兄弟に非常に感謝しました⁽¹⁾（エドガー・スノー著「中国の赤い星」邦訳では九四頁）。

毛沢東がもしこのように儒教の内包する革命の原理から深刻な影響をうけていたとすれば、中共政権が中国人の「生活や思想のすみずみから孔子の思想を根こそぎひき抜いた」とは考えられない。だが、

宋慶齡は言葉はそれをはっきり断言しているし、林語堂はさらに、中共が儒教にたいしてヴァンダリックな政策をとった例として、次のような事実さえのべている。

「共産主義者が村の長老たちにとって代り、それまで村民から尊敬されていた長老や、組織の才能をもっていたものはすべて有力な反対派、またはその指導者の焼印をおされ、事実無根であるとかわかっていても、そのような立場にあるだけで肅清された。これをさせたのは共産主義イデオロギーの必然性なのである。……共産主義者はまず、家族制度を破壊して、孔子の教えの核心を骨抜きにする必要があるとかんがえ、十三歳か十四歳の子供が自分の親を告発することさえ奨励している。」

中共にはたしかにこのような事実があった。だがそれは別の角度から説明できる。周知のように中共

が政権をとったのは、国民が共産主義を理解し、支持したためではなく、国民の大部分が国民党の腐敗にあいそをつかして、その唯一の有力反対党たる共産党を支持したからである。したがって中共は政権をとったものの、社会革命がおこなわれた結果ではない。これは旧社会の下層階級を基盤とする中共にとって極めて不安心な情態である。当時中共の民衆組織を担当していた党中央委鄧子恢は「われわれの革命は基本的には成功したが、社会の基層は決して変化していない。これは実に危険なことだ」といっていた。⁽¹²⁾ その結果中共は急激かつ人工的に社会革命をおこすことを決意し、社会の下層階級に上層階級を敵視させ、「自発的」に上下を顛倒させる運動を広汎に国民の間におこしたのである。この間に若干の行きすぎもあり、林語堂ののべているような事実もあった。それは儒教に反対する「共産主義の必然性」であるよりも、むしろ「社会革命の必然性」と

して説明せられるべきものである。もちろん中共は孔子学のすべてを是認したわけではない。「その位に在らずして其の政を謀らず」とか、「民は由らしむべし之を知らしむべからず」（泰伯）とかいうような学者、官僚の政治独占を支持するものには当然反対であるが、孔子の社会改革の意図は高く評価されている。郭沫若はこういつている「彼（孔子）は大体人民の利益を代表する側に立って、積極的に文化の力を利用し、人民の幸福を増進することを非常に欲していた。過去の文化を部分的に整理し、接受し、また部分的に批判改造し、一つの新しい体系を建て、⁽¹³⁾ 新しい封建社会の韜帯としようとしたのである。」

七 中国共産主義政権の性格

これまでも少数ではあったが、中国の共産主義政

治を単純にプロレタリア独裁の専制政治と見ることの危険を指摘した学者はあった。既出のビン・チャーコ博士も中共政権の性格について「諸事実の複雑性を詳しくみないと誰でもそれを一つの単純な専制政治と見やすいが、かような見解は決して正確ではない。……この政権の絶対主義は単純なものではなく、われわれが新家長主義 *new paternalism* とよぶことのできるものを一生懸命適用させようとしている」といっている。かれのいう新家長主義とは、政府が家父長のような思いやりで国民に福祉をあたえる具体的措置を講じ、それによって国民の間に政府支持の情熱をつくり、国家の統一をはかり、国内の対立を解消し、調和してゆくことであるという。そしてこれは中国共産党がはじめてつくりだしたのではなく、儒教の伝統によるものだとしている。

「中国史の全過程には家父長主義のつよい基調が

ながれていた。古典によれば「仁慈なる君主は『民の父母』でなければならぬ」のである。この言葉は二つの意味をもっている。一つは天子とその学者、官僚のエリート政治は、かれらが人民の利益について親が我が子を世話するように配慮するという暗黙の理解の下にのみ許されるということ、もう一つはこの家父長的配慮の約束の下においてはエリーートの権力はなんらの支障なく行使されるということである。」

中共反対者のなかにも中共が政権をとって間もなく、官吏の執務能率がたかまりインフレがおさまり、物価が安定し、都会が清潔になり、工業の進展、鉄道の延長が着々と実行された事実をみとめているものはすくなくない。中共が開国当初から国民生活の安定になみなみならぬ注意をはらってきたことはみとめられてよい。それはまた中共がその専制

政治にたいして人民の声による承認をうることにいかに熱心であるかをしめすものである。中共政権はかような「民主」の基礎の上におかれた「専制」なのである。それ故かれらは自らの政体を「民主集中」即ち「民主の基礎の上の集中、集中の指導の下の民主」といつている。集中とは中央集権化、すなわち専制のことであるからそれは「民主の基礎の上の専制——専制の指導の下の民主」ということになる。この「民主」が西欧デモクラシーでないことは明瞭であろう。中共で西欧の議会にあたる人民代表大会の人民代表の選挙においては、党が前もって指名したものがつねに満票で当選するし、また人民代表大会が党の提案や報告を満場一致で承認しない例は一度もない。いうならば中共の政治は「民主」とは自称するものの、人民の下からのイニシアチブで進められるのではなく、支配者の上からイニシアチブで決定されるのである。もちろん人民の下からの

イニシアチブが党の政策に反映することもあるが、最終的決定者はつねに人民ではなく、支配者たる党なのである。啓蒙専制政治の代表者フリードリッヒ大王が、「余は国家最高の公僕である」といつても、プロシア国民が国家の主人公ではなかったと同様、中国の人民は「國家の主人翁」といわれていて、この国の主権は人民ではなく、共産党の手にあることを誰でも知っている。共産党いつても政策のイニシアチブを握るものは人民のなかに生活する黨員大衆ではない。組織理論からいえば黨員大会から選出され、黨員大会に責任をおう党中央委員会が政策立案者であるが、その実際の立案者は党中央委から選出される中央政治局である。しかし政治局の実際の指導権は政治的常任委員、即ち毛沢東以下少数の「党首脳部」がにぎっている。這般の事情はソ連共産党のそれとはほぼ同じである。ソ連もこの制度を「社会民主主義」と呼んでいる。だが中共の

「民主」はやや内容を異にしている。中共ではあらゆる決定は、結局毛沢東の決断によってきまるのだ。これは制度ではないが、これまでのあらゆる徴候がそれを証明している。

一九五七年二月毛沢東は「人民の矛盾の正しい取扱い」という論文を発表した。そこでかれは中国は現在二つの矛盾に当面している。一つは社会主義建設を支持する人民とそれを破壊しようとする人民の敵との間の矛盾、もう一つは人民同志の間における矛盾であるといった。そして幸にも第一の矛盾の大部分はすでに解決されてしまっており、今あるのは大体人民間の矛盾、味方同志の間の矛盾であるから、その取扱いは慎重にしなければならぬ。「すなわち扱うに融和をもつてし、強制を加えてはならぬ。圧迫ではなく保護をもつて、命令ではなく教化をもつて、専断ではなく相互理解をもつて、専制的方法ではなく民主的方法をもつてしなければなら

ぬ」といつている。事実同じ共產主義でも中国では、ソ連のように党内矛盾が流血によって処理された例はほとんどない（スターリン治下のソ連では、それらはすべて「国家の敵」として流血で処理されている）。また資本家と労働者の間の矛盾も「中国の実際状態のなかでは『敵対的』矛盾ではない」ので、平和的方法で処理され、民族資本家は国家に売り渡した企業の代償を利子の形でうけとって生活している。これらは明らかに中共のねらいが——もちろん土地改革その他一連の社会革命を終った後の——国民の間の階級調和にあったことを示している。孔子の理想が人間諸関係における調和にあったことはすでにのべた通りであるが、その社会調和は「君君たり、臣臣たり、親親たり、子子たり」という国家、社会、家族の秩序と権威の基礎の上にたてられた調和でなければならなかった。毛沢東の主張する社会調和——民主的専制もまたこれと同じような約

東の下におかれるものである。彼はいう。

「われわれ人民の階級間では民主は集中と、自由は秩序とともにある。それらは一つの全体の相争う二つの面であり、対立的であると同時に統一的である。われわれはその一つだけを一方的に強調し、他方を否定すべきではない。人民の権利とは、政治的には自由と民主的権利を意味する。しかしこの自由は指導された自由である。この民主は集中的指導の下における民主である。無秩序ではない。無秩序は人民の利益、要求に合致しない。」

中共における原始共産制氏族社会のもう一つの特徴、平等主義、均分主義の最初の表現は土地改革であった。これは太平天国の土地政策や、孫文の「耕者有其田」政策の精神をつぐものであると同時に、中国近代化の前提条件たる封建的搾取状態の廃止が

主要なねらいであった。人民公社運動も直接的には労働員の必要からおこったものであるが、同時にそこに内包されている「原始公社」（中国語では原始共産制社会をこうよんでいる）的性格をみおとしてはならない。毛沢東がこの運動で国民に一人でも饑えるものなく、寒えるものなからしめようとしていたことは否定できない。李井泉は人民公社の性格を次のように説明している。「人民公社化いご実施された食糧の現物給与制はまさしく国家と農業生産協同組合がずっと実施してきた社会保険と集団的相互援助の方法をうけつぎ、これを発展させたものであり、しかもそれを制度として確定したものにほかならない。この制度によって農民は食の問題について保証を得、広汎な農民、なかでも第一に貧しい農民は『年中食うことに追われる』という重い負担がとりのぞかれ、のびのびとした気持で労働に従事できるようになった。」

中共の賃銀制度にも均分主義の影響は非常に強い。この国の最高給は最低給の二・三倍から三・二倍にすぎない。⁽¹⁴⁾これはソ連の最高級が最低給の「八十倍から百倍」⁽¹⁵⁾に達するのと比較すれば、中共の均分主義が一層はつきりする。中共も社会主義の賃銀法則たる「労働に応じた分配」(「按勞分配」)はいちおう認めてはいるが、均分主義のためにこの法則の適用には大きな制限がくわえられている。

「按勞分配」制度は、生産に物質的インセンティブをあたえ、多く労働すれば、それだけ多くの物質的報酬をうけることであるが、その通りにやれば「均分主義」がくずれるので、中共では物質的インセンティブよりも精神的インセンティブの方を重視している。精神的インセンティブとは思想教育であり、「われは人のために、人はわれのために」働く共産主義的風格を養成することである。それ故中共は「按勞分配」制度は「政治をはなれ、一方的に個人の物質

的インセンティブを強調するならば必然的に人々をして『現金主義』にし、個人の利益、眼前の利益をこまかく追求させ、全体の利益、将来の利益を等閑視させ、いわゆる現金第一主義(鈔票掛帥)を実行させる」といっている。⁽¹⁶⁾

八 中共政權と人民

上来のべきたったように中共の人民は貧しくはあるが、最低限の生活を保証されており、社会保障制度、福利施設も着々とそなわってきている。ヨーロッパの啓蒙専制主義が、福利国家であったように、中共政府もまた専制主義ではあるが、つねに人民の幸福を考えている。しかしながらそれらは人民の下からのイニシアチブではなく、支配者共産党の上からのイニシアチブによってあたえられるものだ。この国の現状では人民が西欧的デモクラシーによって

自らを組織し、自らのイニシアチブで貧困から抜け出すことはむずかしい。したがって上からのイニシアチブでどしどし人民の福利をすすめてゆく必要がある。ここにこの国の専制主義のヂャスティフケイションがある。と、同時に人民はその代償として、いわゆる「自由」を犠牲にしなければならぬ。だが中国の人民はいつまでもこの「あたえられた考え方」「あたえられた幸福」に満足していられるであらうか。すでに中共の人民の間には「あたえられた考え方」に満足しない多くの青年が現われている。これらの青年の声のいくつかは批判の対象として「中国青年」に掲載されているから、その一例をあげておこう。

一九六〇年「中国青年」五号において、肖文という湖北の女性幹部は、自分の理想は円満で物質的にややめぐまれた小家庭をもつことだと宣言したところ、周囲から批判的とされた彼女はこれに抗議し

てこう反駁している。

「われわれの革命の目的は幸福な生活をおくるためではありませんか。……革命の先輩たちの努力のおかげで建国以来すでに十年、各事業は飛躍的に発展し、大衆の生活は基本的に改善されました。この状況の下においては、一方では建設を行ないながら、一方では幸福な生活をおくってさしつかえあるまいと思います。われわれ共産主義者は苦行僧ではありません。革命と建設とはすべて将来のためであるとともに、また現在のためでもあります。労働、建設、創造も必要ですが、同時に労働が創造した成果を享受することも必要であります。もし社会主義、共産主義の建設が、自分のためのものでなく、他の人のためのものであるとあって、共産主義者はその毎日を、ただ労働と学習だけにおくり、無味乾燥な生活をつづけるというのならば、一体なんのために社会主義、共産主

義を建設する必要があるのでしょうか。⁽¹⁷⁾

中共は現在これら一切の懐疑的な考えかたをみな「ブルジョア思想」または「フルシチョフ的現代修正主義思想」として、すなわち「反人民的」なものとして葬っているが、このような疑問は人類歴史発展の必然性からでている極めて自然なものであるから、いつまでおさえきれものではない。

共産主義の専制政体は、「国家は共産主義の実現とともに消滅する」という学説に反して、自ら解体する傾向はなく、ますますかたく凝結する傾向をしめしている。そしてその原理もすでに「新しい階級」の著者ミロバン・ジラスによって明らかにされている。かれは専制主義の存在理由を共産主義学説のなかにもとめ、「現代共産主義が唯一絶対のものでないまでも、弁証法的唯物論を基礎とする最高の科学であると自負すること自体に専制主義の種子が

ひめられている⁽¹⁸⁾」といっている。共産主義のなかに専制主義の存在理由が内包されるとすれば、中国の専制主義は一層強固な基礎の上におかれているわけである。なんとなればこの国では儒教文化が中国人の心の中にきざみこんだ民主的専制君主制の型のなかに、共産主義の理論がおさまり、いわば学説と伝説の両面からは認されてかたく凝結してしまっているからである。しかしこの専制主義の下において人民の最低限の生活が保証されその安定感の上に徐々に生活が向上しつづつあるとすれば、やがてかれらの精神的活動はもっと活発となり、今までのように「あたえられた考え方」に満足しなくなり、政治を自らのイニシアチブで運営したいという要求がますますたかまることも必然的である。それ故、中共において「民主」と「専制」の間がいつまでも現在のようにしつくり行くとはい到底考えられない。

孫子の毛沢東における影響

中ソ間にイデオロギー論争がさかんに行われていたころ、純粋なマルクス・レーニン主義からいえば毛沢東が正当派で、フルシチョフが修正派だというようなことがよくいわれていた。今でもそう信じているひとは決してすくなくない。だがこの場合「純粋なマルクス・レーニン主義から」という観点は、判定の基準としてどれだけの価値をもちうるであろうか。実在のマルクス主義はそれを信じている集団、とくにその集団指導者の、その民族の歴史や民族性、またはその時代にその民族がおかれた立場にたいする反応によって、マルクス・レーニン主義の解釈や理解のしかた、または重点のおきかたが非常にちがってくる。したがってマルクス主義はいわゆる「純粋な形」では存在することなく、つねにマルクス・レーニン主義プラスXの形で存在しているといえよう。このXが非常に大きい場合にはその人が

意識的には「純粋なマルクス・レーニン主義」の立場から情勢を分析し政策をたてたとしても、実はそれがその指導者のもっているXに、すなわちその民族の文化や民族の思想形式、その民族の歴史的背景や民族的要求により多くみちびかれていることも大いにありうるわけだ。

そこで毛沢東のプラスX、すなわちマルクス・レーニン主義の教義がいの思考決定要素が、なんであるかがあらためて問題となっている。欧米ではそのようなものの一つとして孫子の兵法に多大の注意をむけているようだ。たとえばフォリンニウス・サーヴィスのチャーレス・T・フェンヴェシは、「孫子の兵法は中国文明研究の基礎的文獻としてばかりでなく、毛沢東の考え方をとく鍵としてひろく認められている」といっている。もっとも欧米人のなかにもロバート・ペインのように、孫子のかれにおける影響をみとめながらも、その過大評価を戒し

めているひともある。かれは、毛は軍事講義の際たえず孫子を引用しているが「必ずしも孫子に従っていたわけではなかった。」(ペイン邦訳一〇七頁)といっている。そこで孫子の毛沢東における影響は、果たしてどの程度であったかを、かれの著作や実際の動きからしらべてみる必要がある。

毛沢東選集第一巻の「中国革命戦争の戦略問題」(一九三六年十二月)はその第一章において戦争研究の方法についてのべているが、そのなかでかれはソ連の革命戦争の法則を学ぶ必要だけを主張している人々にたいして、その上に中華民族の革命戦争の法則をしらなければ戦争には勝てないことを強調している。

「かれらはいう。ソ連の法則と軍事条例は、ソ連の内戦とソ連の紅軍の特殊性を包含しているから、われわれはただそれにならって行動すればよい、それからのいかなる変更もゆるされないと。

もしそうなれば足をけずって靴に合わせるようなもので、それはかならず失敗することを彼らはしっていないのだ。これらの人々の理由とするところは、ソ連の戦争は革命戦争であり、われわれの戦争も革命戦争であり、そしてソ連は勝利をえたのであるから、われわれにはそれ以上取捨選択する余地はないはずだというのである。かれらは全くわかっていない。われわれは勿論ソ連の戦争経験を尊重しなければならない。それはもともと近代的な革命戦争の経験であり、レーニン、スターリンの指導の下に獲得したものであるからだ。ただし、われわれはその上に中国革命戦争の経験を尊重しなければならないのである。なんとなれば中国革命と中国紅軍はさらに多くの特殊情況をもっているからである。」

毛沢東はさらに戦争の性格その他の相違によって

も戦争指導法則がちがうことをのべ、それぞれの場合の戦争の特徴を研究しなければならぬといっている。

「戦争の性質についてみれば、革命戦争と反革命戦争にはそれぞれちがう特徴があり、その戦争の規律にもそれぞれの特徴があるから、やたらに彼我をとりちがえて応用することはできない。地域 conditions についてみるに、それぞれの国家、それぞれの民族、特に大国家、大民族はそれぞれ特徴をもっている。それ故戦争の規律もまたおのおのその特点をもっており、勝手に転用することはできない。われわれはそれぞれちがう歴史段階、それぞれちがった性格、ちがった地域と民族の戦争の指導規律を研究し、その特点とその発展に着眼し、戦争問題の機械論に反対しなければならぬ。」

以上をみれば中共が中・ソのイデオロギー論争に

おいて戦争一般を云々し、正義の戦争、不正義の戦争を区別しようとしないう連の立場をばげしく攻撃した理由がよくわかる。面白いことに二千五百年の時代をへだてた孫子もまた、戦争を正義の戦争と不正義の戦争にわけたことをなによりも重要視していた。即ち孫子は第一章「始計第一」で、まず戦争は国家の存亡がかかっていることであるから、慎重に相互の諸要素を十分研究し、比較してからかからなければいけない（孫子曰く、兵は国の大事、死生の道、存亡の道、察せざるべからず）と言っている。かれのいう諸要素とは次の五つ、すなわち「一に曰く道、二に曰く天、三に曰く地、四に曰く将、五に曰く法なり」である。これを説明すれば――

① 冒頭にあげられた「道」とは、いずれが正義の戦争かということである。孫子はその理由を説明し、戦争が正義の戦争であれば国民が上下一致団結し、死んでも悔なしという気持になるから、戦

争は味方に有利であるといっている。これを孫子の言葉でいえばつぎのようになる。「道は民をして上と意を同じくし、之とともに死すべく、之とともに生くべく、畏れ危あやましめざるものなり。」

ついで他の諸要素を説明しておこう

② 天とは時勢ということで、戦争が時の勢にのっているかどうかということ。

③ 地とは作戦の一般的地形であり、これがいずれに有利であるかということ。

④ 将とはどちらの指揮者が智、信、仁、勇、嚴においてまさっているかということである。智を第一にかかっていることに注意を要する。指揮者に要求される第一の徳性は聡明ということだった。孫子の註釈者杜牧も「先王の道は仁を以て首となすも、兵家者流は智を第一とするものなり」といっている。

⑤ 法とは兵士を適材適所において使う方法、軍隊の規律、軍の糧食、兵器の取扱、補給方法がどちら側で厳格におこなわれているかということ。

孫子はこの五つの要素を比較研究すれば、勝敗始めから明らかだと、つぎのようにいっている。

「凡そ、この五者、将之を聞かざる勿れ。之を知るは勝ち、知らざるは勝たず、故に之を校ぶるに計を以てし、その情を索む。曰く主いずれか道ある。将いずれか能ある。天地いずれか得たる。法令いずれか行なわる。兵衆いずれか強き、士卒いずれか練れたる。賞罰いずれか明らかなる。吾れ之を以て勝負を知る。」

毛沢東は孫子が「戦争は国家の大事、存亡の道」というところを「戦争——これこそ人類が相互に残殺し合う怪物である」といっている。だが、かれは孫子と同様戦争一般に反対する反戦論者ではない。

かれは戦争を消滅する唯一つの方法は戦争を以てすること、具体的にいえば反革命戦争は革命戦争をもって、民族反革命戦争は民族革命戦争をもって、階級反革命戦争は階級革命戦争をもって消滅することであり、要するに不正義戦争を正義の戦争をもって消滅させ、戦争を永久に人類社会からなくすことが、人類社会を發展させる唯一の道であると主張している。

それだけにかれは各段階、各性格によって戦争の諸法則を研究することを真剣に考えていた。勿論マルクス主義者の毛沢東として戦争の諸法則も他の諸法則と同じように客観的実在——この場合には敵味方双方のすべて——の反映だと信じている。彼はいう。

「軍事の法則はその他の事物の法則と同様、客観的実在のわれわれの頭脳にたいする反映である。

われわれの頭脳以外はすべて客観的実在のもので

ある。それ故学習および認識の対象は敵味方の両方面を包含する。この両方面はすべて研究の対象とみななければならぬ。ただわれわれの頭脳（思想）のみが研究の主体である。或る人はおのれを知るに明るいがかれを知るに暗い。またある人はかれを知るに明るいが己を知るに暗い。このような人々はすべて戦争法則の学習と応用問題を解決することはできない。中国古代の大軍事学者孫子の「彼を知り己を知る、百戦殆（た）からず」といった言葉は、戦争法則の学習と応用の両段階を包括していったものである。客観的実在のなかの發展法則を認識し、その法則にてらして自己の行動を決定し、当面の敵を克服することを包括してのべたものである。われわれはこの言葉の意味を軽視してはいけない。」

これをみれば毛沢東がいかに深く孫子をよみ、か

つ傾倒していたかがよくわかる。同時にかれは孫子時代の戦争が封建君主間の戦争であって、孫子の学説を無条件に現代の階級戦争にあてはめてはならないこともしっていた。このことは、かれが、戦争の法則が時代によって、歴史段階によって、また戦争の階級的性格によって、それぞれことなることを説いていることからみて、きわめて明瞭であろう。

毛沢東が孫子を研究したのは一九二七年九月西湖秋収暴動で失敗したあげく、井崗山にたてこもったころだといわれる（史誠之著、「論中共的軍事発展」一五頁）。かれはそれまでの戦闘の経過について深く反省し、ここでえられた比較的安全な時間を利用してよく勉強した。かれの読んだのは孫子ばかりでなく、クラウゼヴィッツの「戦争論」やソ連内戦史もあったが、かれにおいては孫子の印象が一番深刻だったようだ。その結果生れたものが、有名な紅軍作戦の四原則である。

敵進めば我れ退く

敵退けば我れ追う

敵駐まれば我れ擾す

敵疲れば我れ打つ

ここにいう敵とは味方よりも数において、武器においてはるかに優勢な軍隊を指している。当時、紅軍は「敵進めば我れ退き、敵退けば我れ追う」というように、強大な敵との正面衝突をさけつつ、これと一定の距離をおいて密着し、つねに神経戦を展開していた。そして敵が駐まれば襲撃して攪乱し、敵がつかれいらだって、味方に十分勝算ありとみたとき、はじめて積極的に出撃した。

毛沢東のこの戦術を、孫子のつぎの言葉と対象してみれば、その間あまり共通点の多いことにおどろくであろう。

「乱して之を取り、実ならば（敵が充実していれば）之に備え、強ならば之を避け、怒らして之を

抛し、卑うして之を驅らしめ、佚すれば（十分休養をとっていれば）之を勞し、親しまば之を離し（敵軍に人の和があればそれを離間し）、その備なきを攻め、その不意に出ず。」（孫子「始計第一」）

毛沢東は退却から反攻に転ずる第一戦は、必勝の条件を把握したときのみ行なえと言っている。

それは敵情、地形、人民等の諸条件がすべて我が軍に有利で、敵に不利であるという確信をもったときはじめて戦うのである。そうでないときはむしろ退却して時機を待て、機会はいつかは必ずくるものであるから、あわてて戦うことはないというのだ。

孫子も敵と味方の諸要素を比較し味方が敵にたいして絶対に優勢でなければ攻撃するなといひ、いろいろな場合における攻撃の方法をつぎのようにのべている。

「故に兵を用うるの法、十ならば之を囲み（敵一人にたいして味方が十倍ならば、これを囲み、その自滅をはかる）、五ならばこれを攻め、倍ならば之を分ち（味方を二手にわけて挟撃する）、敵しければ能く之と戦い、少なければ能く之を逃れ（味方が少なければその場からうまく逃げ出し）、若かされば能く之を避く。」

このようによく兵を用いる將軍は、絶対に優勢の場合だけ戦うのであるから、つねに戦わぬさきに敵に勝っているようなものである。すなわち、

「古の所謂よく戦う者は、勝ち易きに勝つなり、故に善く戦う者の勝つや智名なく、勇功なし（註 それをむしる当然のことである）。故にその戦、勝つこと忒わず、忒わざるはその勝を措くところ既に敗るるに勝てばなり。（敵が戦わずしてすでに敗れている）」（孫子「軍形第四」）という

ことである。

毛沢東の遊撃戦法が、味方に勝算ができるまで敵との衝突をさけ、敵に乗ずべき隙^{すき}ができ、味方に勝算ができたときのみ出撃したことは周知の事実だ。

江西根拠地時代の毛沢東は作戰の四原則をさらに発展させ「敵を誘うて深く入れる」という戦略退却の方針をうちだした。これは蔣介石の軍隊が押しよせてくるときは、紅軍はわざと衝突をさけてかれらを根拠地深く浸入させ、相手に弱点がみえたときに反撃して殲滅する方法である。

この戦術は党内の一部から「機會主義的單純防禦路線」という批判がでたが、毛沢東はそれをはねつけて、この正しさをこう説明している。紅軍が根拠地の奥深く退却すれば、紅軍にとっていろいろと有利な条件が生れてくる。第一に紅軍は積極的に援助してくれる人民のなかで戦うことができる。二、

作戰に有利な陣地による可能性が多くなる。また三、紅軍は主力を集中することができ、四、敵の薄弱な部分がよくわかり、五、敵軍の疲労沮喪度が多くなる。さらに六、敵軍が誤謬をおかす機会が多くなり、それを見いだす可能性もでてくる。これら諸条件によって「退却軍はよく自分の欲する有利な陣地を選択することができ、攻撃軍をして我方のペースにのらざるをえなくする。これは内戦作戰の優良な一条件だ。弱い軍隊が強い軍隊に戦勝するには陣地の条件は絶対に必要である。しかし、この条件だけでは不十分で、それに他の条件が加わる必要がある。それにはまず第一に人民の条件がある。その上敵の打ちやすいこと、たとえば敵が疲労していたり、眼ちをおかしたり、又は侵入してきた敵軍の戦闘力が比較的脆弱なことである。これらの諸条件がそなわらなければ、たとえ優良な陣地があってもそれをかえりみず、自分の欲する条件に達す

るまでひきつづき退却しなければならぬ。」敵はわが根拠地内に深く進入するにつれて苦痛がまし、兵力は疲労し、士気は沮喪し、弱点を暴露する。これに反し我が方は鋭気をやしない。逸をもって労を待つかたちになり、敵と我が軍の条件の相違がだんだんせばまり、いつかは我が軍の方が敵より優勢にたつことになる。」このとき反撃すればかならず勝つというのだ。

毛沢東は事実この方法によって三回にわたる江西の匪剿に大打撃をあたえて撃退している。かれは第三次の匪剿戦を回顧しながら「中国革命戦争の戦略問題」のなかでこういつている。

「江西で第三次『匪剿』とたたかったとき、紅軍は一種極端な退却戦法を実行した（紅軍は根拠地の後部に集中した）。こうしなければ敵にたいして戦勝をおさめることはできなかった。当時敵軍の数は紅軍の十倍以上をこえていたからであ

る。孫子のいう『其の鋭気を避けてその惰帰を撃つ』（註）孫子の言葉、朝は勇んで鋭気があり、昼は疲れて惰気があり、暮には家にかえて休みたいと思うから、敵が鋭気にみちているうちはこれを避けて、昼、暮の惰気まんまんのときにこれを打つ」とは敵を疲労させ、沮喪せしめ、其の優勢を滅殺させることを指すのだ。

退却戦術の最終の希望は敵の過失をつくりだし、またこれを発見することである。いかに聡明な敵軍指揮官でも相当長い時間の間には全然過失をおかさなないということは不可能である。それ故われわれが敵の隙に乘ずる機会は結局やってくる。敵もちやうどわれわれ自身が間違つて敵に乗ずる機会をあたえることがあるように、間違いをおかすことがある。またわれわれは人工的に敵の過失をつくり出すこともできる。たとえば孫子の所謂『形を示す』の類い（東に形を示して西を撃

つこと、すなわち所謂東と云って西をうつこと)がそれだ。かようにすれば、退却の終点がある一地区に限定することはない。あるときはある地域からさらに退却してもなお敵に乘すべき隙がなければふたたび退却して、敵に乘すべき隙の生ずるまで待たなければいけない。」

孫子は「善く敵を動かすものは之に形すれば(敵にたいしてこちらがその陣形をとれば)敵之に従う、之にあたられば敵必ず之を取る。利を以て之を動かす、本を以て之を待つ(利を以て敵を動かす、味方の本隊を以て敵を待つ)といい、また「善く戦うものは人を致して人に致されず(つねに自分が先制してイニシアチブをとる)」と言っている。

毛沢東はおそらくこの言葉から「誘敵深入」策のヒントをえたものであろう。

アメリカ軍部の中国共産軍研究家ロバート・B・

リッグ中佐はその著「中国紅軍」Red China's Fighting Hordes, by Lieut. Colonel Robert B. Rigg. のなかで、紅軍の戦術がアメリカのそれと全くちがっていること。とくにかれらが僅か十カ条の軍事条例しかもっていないことを、ナポレオンでさえ百十一カ条の軍事教典をもっていたことと對比させてひどく驚嘆している(同書百八十頁)。周知のようにこの紅軍の十カ条はすべて毛沢東の「中国革命戦争における戦略問題」からでてくるものであり、そして、それがまた孫子に源をはっているのだ。とすれば朝鮮戦争において大いにアメリカ軍をなやましたのは二千五百年前の孫子の兵法というわけである。

毛沢東が第三次囲剿を粉砕したころ(一九三二年一月以後)中共内部に李立三を中心とする一派が勢力をうるようになり、かれの「誘敵深入」方策は敗北主義として排撃されるようになった。それにかわ

って党を支配したのは「全線出撃」とか「一を以て十にあたり、十を以て百にあたり勇猛果敢、勝ちに乘じて直追せよ」とか「敵を国門の外にふせげ」とかいう勇ましいスローガンだった。毛沢東はこれらを小ブルジョアジーの狂燥性の表現であり、「戦略守勢の作戦はすべて不利な決戦をさけて有利な情況にいたってはじめて決戦をもとめるべきである」という内外戦争理論家の定説に反するものだときめつけた。毛沢東は戦闘は相手方の意志を屈服させる手段であると考えていたので、かならずしも敵を殲滅させることを重視していなかった。この観点はかれ自身「持久戦論」のなかでこういつている。

「戦争の目的はほかではない『自己を保存し敵を消滅させることである』（敵を消滅させるといっても敵の武装を解除すること）。すなわち『敵の抵抗力を剝奪すること』であって、完全にその肉体を消滅させることではない。古代の戦争は矛を

用い、盾を用いた。矛は攻撃的であり、敵を消滅するためのものである。盾は防禦的であり、自己を保存するためのものである。今日の武器もなおこの二者の継続である。爆撃機、機関銃、遠距離砲、毒瓦斯は矛の発展であり、防空壕、鉄カブト、セメント工事、防毒マスクは盾の発展であり、戦車はこの二者を結合して一つにしたものである。……

自己を保存し、敵を消滅するこの戦争目的は戦争の本質であり、一切の戦争行動の拠りどころであり、戦闘行動から戦略行動まですべてにこの本質が貫徹している。戦争目的は戦争の基本原則であり、一切の技術的、戦術的、戦役的、戦略的原理原則はこれから少しも離れないものである。たとえば射撃原則の『身体をかくして火力を発揚せよ』というのはなんのためか。身体をかくすのは自己保存のためであり、火力を発揚するのは敵を

消滅するために外ならぬ。……」

この考え方もおそらく孫子からきているものであろう。孫子には「百たび戦って百たび勝つは善の善なるものにあらず、戦わずして人の兵を屈するは善の善なるものなり」の言葉がある。かれもまた武力による敵の殲滅をあまりたかく評価せず、最高の戦争形式は戦わずして敵の意志を屈することだとかんがえていたのだ。それ故「善く兵を用いる者は人の兵を屈して戦うに非るなり、人の城を抜きて攻むるに非るなり、人の国を殴りて久しきに非るなり（良将は敵の兵をみればそれを屈することを主として、戦うことを主とせず。敵の城をみればこれを陥れることを主とし、武力で攻めることを主としない。人の国に侵入するにも長い時間はかけない）」となり、こうして「自己を保存し、敵を消滅する」から、その結果として「かならず全きをもって天下に争う。

故に兵頼らずして利全うすべし。これ謀攻（註敵に戦略的打撃をあたえる）の法なり」（孫子、「謀攻第三」）という結論になるのである。

戦争の目的が敵の戦闘意志をくじくことであり、肉体的に殲滅させることでないということから、当然敵軍捕虜の優遇という政策が生れてくる。孫子には「作戦第二」のなかに、「車は雑えてこれに乗らせ、卒は善みして之を養う。これを敵に勝ちてその強を益すという」という言葉があるが、これは分捕った車は味方の列にまじえ、捕虜は好遇して味方のなかで養う。こうすれば敵に勝ちつつ益々武力をますということである。

毛沢東が国内戦争において蔣軍捕虜を優遇したことは有名な話だ。当時紅軍が敵の兵士を俘虜にすると、まずその俘虜にたいして紅軍についての意見をきき、そして紅軍にとどまりたいというものと、国民党側に帰りたいというものに分けて、後者には旅

費をあたえて釈放してやった。釈放にあたって紅軍兵士はかれらのために「新兄弟歓送会」を開いて盛大に送りだしてやった。だから国民党兵士のなかには、この歓送会の親しげな空気にひきずられて紅軍にのこりたいといひだす者もあった。これを毛沢東は俘虜にたいする「攻心戦」とよんでいた。この攻心戦は国民党側には手痛い戦術だった。国民党は共產党軍に兵士がつかまればみな殺しになるといつて逃亡をふせいでいたが、紅軍から釈放された兵士がそのデマであることを明らかにしたので、国民党からねがえりをうつ兵士が次第に増加していったのである。

紅軍はこうして敵から補充兵をえて戦力を増加していったのだ。毛沢東の俘虜優待政策は現代世界の風潮からみてそれほど不思議ではないが、孫子がいまから二千五百年前、残酷な俘虜監殺が一般に行なわれていた周末戦国時代に、これをとらえたことは

全く特記に価する。毛沢東はおそらくこのことから深い感銘をうけたにちがいない。

一九三四年十一月、毛沢東の紅軍本隊は江西の根拠地を脱出して、有名な「長征」の途についた。当時江西にとどまっていたとすれば結局は全滅の運命をまぬかれなかった紅軍は、この大冒険の前途にどんな危険がまっていようと、それ以外にとる道はなかった。だがそれにしても毛沢東はこの遠征にたいして、はじめから確信をもっていたことはおどろくべきことである。一体かれのこの信念はどこから来たのであろうか。もちろん彼には信頼する情報網もあったであろう。(ペインは、毛沢東が情報網について、孫子の「用間」にあげている五種のスパイを尽くつかったことをのべ「かれは偵察の概念では全く孫子に従っていた」といっている。(邦訳一〇七頁)だがそれにしてもかれの情報網が二万五千里をカバーしていたとは考えられない。ただ一つ確実な

ことは孫子を熟読していた彼がつぎの言葉を玩味していたということである。

「凡そ客たるの道深く入れば専らにして主人克たず」(客とは侵入軍のこと、敵地に深く侵入した軍隊は士卒が専心戦う気持になるから、侵入された方が敗れる。)それはなぜか。「死焉んぞ得ざらん。士人力を盡く、兵卒甚だ陥れば懼れず。往く所なければ固く、入ること深ければ拘す、己むをえざれば戦う」からである。

孫子は敵地区に深く侵入した孤立無援の軍隊のこの精神的団結の發揮する力を、非常に高く評価していた。そしてそのような軍隊の指揮者のとるべき行動についてつぎのように教えている。

「饑野に掠めて三軍食を足し、謹み養つて勞する勿れ、氣を合せ力を積み、兵をめぐらして計謀し、測るべからざることを為し、之を征くところなきに投ずれば死すとも北げじ。」(敵地の豊かな

地方で掠奪して大軍が糧食を十分にとりよく衛生に注意して十分に休養をとれ、上下が氣を合せ協力一致し、兵を巧みに離合集散させ、計面をめぐらし、敵の意表をつけ。士卒をどこにもゆけないところに導いてゆけば彼等はもはや死んでも逃亡しないであろう。)

「この故にその兵修めずして戒しめ、求めずして得、約せずして親しみ、令せずして信あり。」(それ故兵卒は修練をしなくとも自ら戒しめ、将校から要求しなくとも、その要求通りに動き、誓約せずとも上下の氣持が通じ合い、敵命しなくとも命令に服する。)

孫子がこのようにうたっている、絶対絶命の境地にたった将卒の不思議な親和力、毛沢東はこのなかに、敵地深く「长征」する紅軍將士の姿を思いうかべていたにちがいない。长征は紅軍が死中に活をも

とめた快挙、それは正に「之を亡地に投じて然る後に存し、之を死地に陥れて然る後生ず（九地第十一）」であつたのだ。

これでもわかるように孫子の兵法は種々な場合における人間心理の動きを軸として回転する一種の心理作戦である。たとえば「利を敵にたえて戦わせる」とか、味方の兵にことさら心理的苦痛をあたえて死戦せざるをえないような情態にする、というような方法がとられる。

前出のチャーレス・T・フェニヴェシも「孫子も毛沢東も心理的戦争の形に焦点をあてている。両者がしばしばくりかえしているのは、戦争の目的は敵のモラルをくずすことだということだ。そのかわり軍隊の動きや、武力衝突その論理はあまり注意されていない」といっている。（一九六三・七月十八日英文毎日）両者とも後者に注意しないわけではないが、前者に非常な重点がおかれていることはたしか

だ。

心理作戦は単に戦争ばかりでなく、凡そ人間心理の衝突するあらゆる場面に適用される。毛沢東が孫子から学んだものが、彼が戦った、そして今尚戦いつつあるこの国内外の政治闘争にもつねに応用されていることは疑うべくもない。

第一章

- (1) 蕭子璋は、毛沢東が十六才のとき湘潭県の学校にいったときからの友人で、蕭家の三男であったところから蕭三とよばれていた。長男は「毛沢東と私は乞食だった」の著者蕭瑜である。蕭三はソ連でニミ・シヤオの筆名で中国詩の露訳者として多少知られている。
- (2) エドガー・スノー著「中国の赤い星」邦訳筑摩書房版 九六頁。
- (3) スノー著前掲書 一〇一頁、毛沢東は外国語は全然よめないで、かれのよんだ外国書の大半は蔽復の翻譯である。蔽復は自分がいちいち原文を対照して訳したのではなく、弟子に大意をよませ、それを自分の文章で書きあらためたものである。その文章は「古典的完璧」をそなえ、すこしも翻譯のおいを感じさせない。その上蔽復はしばしば儒教の教義にもとづいて原文に注釈さえ加えている。それ故毛沢東のよんだというアダム・スミスの「国富論」、ダーウインの「種の起源」、スペンサーの「社会学原理」、モンテスキューの「法の精神」等はすべて蔽復によって理解され中国的に表現されたものなのである。毛沢東は蔽復を非常にたかく評価し「西欧的立場から真実を追求した四人の人物」(註 洪秀全、康有為、蔽復、孫逸仙)の一人としてかんがえている。
- (4) スノー著前掲書 九一頁。このなかで彼は「小説の内容を分析した」といっているがスノーは毛沢東がしばしば普通の会話のなかで分析などというむずかしい言葉を多少おどけた意味でつかうことを指摘

している。

(5) 福本和夫著「人間毛沢東」 二四頁。この著者の「分析」によると、洪秀全、孫文、毛沢東のえらぎを評定する基準が、少年時代によんだ小説のなかに農民が登場せず、英雄豪傑ばかりでてくることを発見したかいなかにあるかのようなものである。

(6) 貝塚茂樹著「毛沢東伝」岩波書店発行 二三頁。

(7) スノー著前掲書 九四頁。「仮洋鬼子」とは「仮の洋鬼子」ということ。この人は日本留学生で、べん髪を切つて西洋人風の頭にしていたが、中国にかえつてから、かつらのべん髪をつけていたのでこりよばれていた。

(8) ロバート・ペイン著「毛沢東」邦訳、東和社版 三一頁。

(9) ペイン著上掲書 六四頁。

(10) ペイン著前掲書 三七頁。

(11) スノー著前掲書 九六頁。

(12) 佐藤慎一郎著「中ソ論争にあらわれた中国人の性格」拓殖大学「海外事情」一九六四年一月号。

(13) スノー著上掲書 一〇一頁。

(14) 蕭瑜著「毛沢東と私は乞食だった」邦訳 弘文堂版 二一九頁。

(15) 蕭瑜著上掲書 二二〇頁。

第二章

- (1) 蕭瑜著前掲書 二五二頁。
- (2) ペイン著前掲書 七九頁。
- (3) 一九二〇年のコミンテルン第二回大会におけるレーニンの演説は植民地国及び半植民地国におけるブルジョア・デモクラシー運動と民族革命運動を区別することを強調している。そして前者は帝国主義と妥協する可能性が多いが、後者は帝国主義にたいする闘争において全国民を統合するといっている。
- (4) フリンの言葉は「中国革命 The Tragedy of the Chinese Revolution, by Harold Isaacs, published in 1938. の悲劇の著者、ハロルド・アイザックスが一九三五年アムステルダムでマリントン会談したときのノートによる。同書 六一頁。
- (5) 一九二〇年十月九日「イズベスチャ」アイザック著前掲書 六四頁。
- (6) 一九二六年三月二十日、蔣介石は黄埔近くに停泊した中山艦が、共産党員に指導されて叛乱を企てているというデマを信じて、——もしくは信じたとみせかけて——国民党左派及び共産党員にたいするクーデターを行なった事件である。
- (7) 孫文の右腕で国民党左派の代表者、右派によって暗殺された。現在の中共要人廖承志の父君。
- (8) ペイン著前掲書 八一頁。

第三章

- (1) 小島裕馬著「中国の革命思想」 三八頁。清朝初期の学者黄宗羲の臣道論。
 (2) 蕭瑜著前掲書 四三頁。
 (3) // // 二四四頁。
 (4) 福本和夫著「人間毛沢東」 六三頁。この話はスノーやペインの本にはない。この著者も出所は明示していない。
 (5) 吉田東祐著「新中国史」二五四頁。胡華の「中国新民主主義革命史」(初稿)「一般に当時の産業労働者は一千二百万人の多きにのぼっていたと推定されている」。
 (6) 毛沢東著「矛盾論実践論」邦訳、岩波版 三二頁。
 (7) ペイン著前掲書 七九頁。
 (8) // // 八四頁。
 (9) スノー著前掲書 一一三頁。
 (10) 湖南の農民運動について都会における評価は一九二六年七年九日の「大公報」の次の報道をみればよくわかる。「湖南における農民及び労働者の跋扈は、本年一二月頃にはじまり、国民党中央執行委員会がまだ漢口に移転してこない前からその萌芽を現わした。而して湖南省党部が、土豪劣紳懲治条例を制定

し、特別法廷をひらくに及んで、社会不安の景象が全省をおおりにわたった。該条例は甚だ不完全なもので、唯罪名を列挙するにとどまり、逮捕審判処罰の手續に關してはなんら規定するところがなかった。いわゆる恐怖時代はまったくこの点からおこったものである。その証拠には、農民運動はかつて広東、広西にも行われたが、しかも湖南ほどの惨状を呈するに到らなかつた。」

(1) 一九五一年十月人民出版社発行、陳伯達著「読『湖南農民運動考察報告』」九頁、このなかでのべられている陳独秀のいわゆる「メンシエヴィキ」的態度は実はスターリンの指令にもとづくものである。トロツキーはそれ故スターリン、コミンテルン、陳独秀ラインをメンシエヴィキ的と批判していた。

第四章

(1) アイザックス著前掲書 二五三頁。

(2) これはアイザックスの前掲書一三〇頁にある引用文から筆者が訳したものであるが、中央公論社版、トロツキー著「中国革命」の巻末にも訳出されてある。

(3) トロツキー著前掲書邦訳 三三〇頁。

(4) 青幫、紅幫は中国に昔からあつた暴力組織の秘密結社、青幫のおこりは運河の運糧の荷役組織であり、紅幫は青幫から分派したものである。長野朗著「支那の社会組織」一九二頁。「青紅幫の範圍は支那二十二省にわたる所に行きわたつていて、あらゆる強劫、暗殺等にはみな關係をもっている。」

- (5) トロツキー著前掲書 一四頁。
- (6) // 三四頁。
- (7) アイザックス著前掲書 一二八頁。アイザックスは華崗著「中国大革命」第四章第四節より引用。出所は「嚮導」(週刊党機関紙)発表の数字である。
- (8) スノー著前掲書 一一五頁。
- (9) 橋樑著「中国革命史論」二二三頁。
- (10) トロツキー著前掲書 九三頁。
- (11) // 九七頁。

第五章

- (1) トロツキー著前掲書 三四五頁。
- (2) // 一四六頁。
- (3) ジョン・ウィルソン・ルイス著「毛沢東体制と中国」、世界週報一九六四年五月十二日号 六三頁。
- (4) // //
- (5) スノー著前掲書 一一六頁。
- (6) 胡萃編「中国新民主主義革命史」四一頁。

- (7) 『嚮導』第一九五号(一九二七年五月八日) 橋樑著前掲書 一一四頁。
- (8) B・I・シュワルツ著邦訳「中国共産主義と毛の勃興」 一二四頁。
- (9) スノー著前掲書 一一八頁。
- (10) 吉田東祐著「中国革命の百八人」 四〇頁。甘友蘭著「毛沢東及某集団」 八一頁。
- (11) スノー著前掲書 一二〇頁。
- (12) スノー著前掲書 一二二頁。
- (13) 一九六四年五月十九日モスクワ放送 RP。
- (14) スノー著前掲書 一二八頁。
- (15) // // 一二九頁。

第六章

- (1) スノー著「ワンドム・ノイツ・オン・レッド・チャイナ」邦訳「中共雑記」 一三〇頁。
- (2) 毛沢東選集第一卷 五三頁。
- (3) // // 六一頁。
- (4) アイザックス著前掲書 三一二頁。出所は汪精衛著「党が大衆運動を指導しなければならない」一九

二七年七月八日。

- (5) アイザックス著前掲書 三四一頁。
 (6) " " " 三七八頁。
 (7) " " " 三八八頁。
 (8) " " " 三九〇頁。出所は党文書「湖北代表会職報告書」一九二七年七月十二日号。
 (9) " " " "
 (10) 日本語の「たわけ」たことは「田分け」によって一家の各自が貧困化する馬鹿馬鹿しさからきてい
 る。
 (11) アイザックス著前掲書 四〇七頁。

第七章

- (1) 甘友蘭著「毛沢東及其集團」 二二〇頁。
 (2) 「新華月報」第四卷第三期 五六三頁。
 (3) 石川忠雄著「中国共産党史研究」 二〇三頁。
 (4) " " " 二一四頁。
 (5) 周鯨文著「風暴十年」 八七頁。
 (6) 村松祐次著「中共の土地改革」 七頁。同氏もソヴィエト区における土地改革の生産に及ぼす効果

をあまりたかく評価していない。

- (7) アイザックス著前掲書 四一七頁。
" 四一四頁。
(9) Teng Yen-Tsao "Examination of the struggle for Strengthening the proletariat" 一九三三
年二月四日「闘争」アイザックスより引用。
(10) アイザックス著 四二二頁。

第八章

- (1) シュウォルツ著前掲書 二二五頁。
(2) スノー著前掲書 一三二頁。
" 一三八頁。
(3) 岡本隆三著「長征」 七頁。
(4) スノー著前掲書 一八六頁。
(5) 毛沢東選集第一卷 一四三頁。
(6) " 一四四頁。
(7) " 一五三頁。
(8) " 一五三頁。

- (9) 毛沢東選集第一卷 一五六頁。
//
// 一四七頁。

第九章

- (1) スノー著前掲書 一五九頁。
(2) 蔣介石著「蘇俄在中國」七四頁。
(3) 吉田東祐著「上海無邊——一つの中國現代史」中央公論社版 一七頁。
(4) この当時の北京駐在武官今井武夫著「支那事変の回想」四三頁に「その頃劉少奇は表面北京大学図書館に勤務しながら、實際は中國共產黨北方總局第一書記として全權を握り、専ら華北の地下工作を指導していたことは戦後明かになったことである。」が、実は一九三七年に筆者はある關係から北方局に劉少奇のいることを知っていた。
(5) 筆者は一九四二年陳友仁一家とも香港から上海に来て、爾來三年間一九四四年陳友仁氏の亡くなられるまで同氏に日語秘書の形でほとんど毎日接近していた。その間に同氏から中國大革命の實際事情や、孫文、蔣介石、汪精衛にたいする同氏の印象についてきくことができた。吉田東祐著「二つの国にかける橋」八九頁参照。
(6) スノー著前掲書 三一三頁。

- (7) 吉田東祐著「上海無辺」七五頁。
- (8) 世界週報、第三五卷第二五号苗劍秋著「周恩來の人と外交」四六～四七頁。
- (9) スノー著前掲書 三〇六頁。
- (10) 蔣介石著「蘇俄在中國」 七五頁。
- (11) スノー著「中国の赤い星」邦訳では六五頁であるが、この箇所は文意がややおかしいので筆者は原著から訳しておいた。
- (12) 筆者はこの原文をみていない。石川忠雄著「中国共産党史研究」二二八頁から引用。
- (13) 吉田東祐著「上海無辺」八六～八七頁。
- (14) 蔣介石著前掲書 八七頁。
- (15) 毛沢東選集第一卷 二五二頁。
- (16) 毛沢東選集第二卷 三五八頁。

第十章

- (1) 甘友蘭著前掲書 二四五頁。
- (2) スノー著前掲書 一二七頁。
- (3) ペイン著前掲書 一四六頁。

- (4) 甘友蘭著前掲書 二四八頁。
- (5) 劉紹唐著「紅色中国的判徒」七二頁。
- (6) ペイン著前掲書 一七七頁。
- (7) 毛沢東選集第二卷 五〇三頁。
- (8) ペイン著前掲書 一八一頁。
- (9) 毛沢東選集第二卷 六三三頁。
- (10) // 六三九頁。
- (11) ペイン著前掲書 一八五頁。
- (12) 毛沢東選集第三卷 一一二〇頁。
- (13) ジャックバルデン著原書「中国は世界を震撼す」五〇五頁。China Shakes the World, by Jack Belden 1951, page 505.
- (14) ペイン著前掲書二〇〇頁。

第十一章

- (1) 「觀察」第五卷第四期、一五頁「透視川西的農地與農村」。
- (2) 「理論與現實叢刊」第二輯、狄超白著「中国土地剝削關係底激化與農業生產力底衰退」。

- (3) ベルデン著前掲書 一五七頁。
- (4) 毛沢東選集第四卷 一三六四頁。
- (5) 吉田東祐著「新中国史」三三一頁。
- (6) 羅賓遜著「蘇北直相」。
- (7) シュウォールツ著前掲書 二三四頁。

儒教の毛沢東における影響

- (1) これは宋慶齡著「為新中国奮闘」八〇頁「儒教と現在中国」と同じ内容、ただしそこでは儒教に代替せられるものが共産主義ではなく三民主義となつてゐる。
- (2) China, New Age and New Outlook by Pincha Kuo. page 116
- (3) 「孫文においては中国の民族精神とは漢人の民族精神であり、それは儒教的な政治思想の精神に他ならぬ」東亜人文学報第三巻第三号 出口勇蔵著「孫文の民族主義について」
- (4) 殷の湯王は夏の桀王を、周の武王は殷の紂王を殺した、それぞれその主君にあたるものを殺しているが、孟子はこれを次のように是認している。「仁をそのうもの、これを賊という。義をそのうもの、これを残という。残賊の人これを一夫という。一夫の紂を誅するを聞く。いまだ君を誅するを聞かざるなり。孟子「梁惠王章句下」。

- (5) The Civilization of China 邦訳「支那文明史話」 一三六頁。
- (6) 侯外蘆著「中国古代社会史論」 一九七頁。
- (7) 呂振羽著「簡明中国通史」一〇一頁。
- (8) 先王とは或る王朝の祖先の王をいう。殷周には先王を崇拜し、これを祭る風習があつた。孔子はこの先王崇拜をかりて先王に伝説の名君堯舜をあててこれを理想的な君主としてえがきだしたものである。
- (9) 東亜人文学報第一巻第四号清田研三著、「儒家思想における家より国家天下への展開についての一考察」 三三〇頁。
- (10) ベイン著前掲書 三二頁。
- (11) スノー著邦訳「中国の赤い星」 九四頁。
- (12) "Now I can tell" by Quentin K. Y. Huang 吉田東祐訳「今こそ私は語る」訳者ノート三頁。
- (13) 郭沫若著「十批判書」八四頁。
- (14) 一九六三年十二月「大陸問題」拙著「中ソ貨銀制の相違」。
- (15) 林語堂著「ソビエト革命と人間性」創元社版 一四三頁。
- (16) 一九六〇年一月十九日人民日報社論「毛沢東思想を学習し、十分に自覚的能動性を発揮せよ」。
- (17) これに類する読者の人間的な訴えは「中国青年」のなかにしばしば現われている。詳細は一九六四年五月、六月「大陸問題」拙著「中共における人づくりの問題」
- (18) ミロバン・ジフス著「新しい階級」 邦訳五頁。

か し ま そ う じ ろ う
鹿島 宗二郎

1964年6日13月生。1927年3月 東京
商科大学卒業。1928年4月 巣鴨
高等商業学校教授。1941年より上海
申報社顧問兼論説委員、同時に日本
陸軍特務機関顧問として 重慶政権
との直接和平工作に従事。1946年3
月 帰国。1948年10月より愛知大学
(豊橋市) 理事兼同大学国際問題研
究所中国部長。1956年9月より国士
館大学教授、経済史、国際経済を担
当し、現在は同大学院教授、近代中
国研究担当。主な著書「日本の反省
と中国の革新」及び「日華全面和平
の爲めに」華上海申報社。「一つの
中国現代史—上海無辺—」中央公論
社。「中国革命の百八人」元々社。
「二つの国にかける橋」東京ライフ
社) (以上は「吉田東祐」のペンネ
ームによる。

現住所 東京都杉並区馬橋4



毛沢東における人間学

昭和40年5月10日 初版発行 ￥380

著者 鹿島 宗二郎

発行者 下村 亮一

発行所 経済往来社

東京都中央区京橋3～11

電話(561)5048 振替東京129521

印刷 株式会社 上野印刷所

製本

★落丁・乱丁本はお取替いたします★